者一統に代り最後の謝辭を述べ會頭スコット氏日已に暮る興未だ盡きざれども豫定の發車時已に迫れり尙ほ再會を期して別を告ぐと述べ拍手の内に衆皆な立ち來れる時の如く樂隊に導かれて停車場に到り別仕立汽車に乘込み莫斯科停車場に着く次で鐵道馬車に乘りてモスコウに歸る時已に九時なりき歸路ルニン氏曰く余明日を以て「ペーテルスブルグ」へ歸る由て余の跡を襲て「ホテル、コンチネンタール」へ轉宿しては如何と余等數日間「ワン公」の爲め一睡も取る能はず爲に疲勞甚きのみならず精神さへ甚だ快ならず今にして一睡を快く取るにあらずんば演說を爲すに甚だ困難なり由て直に意を決し明朝轉宿することとなし其夜はルニン氏に招かれて留別の爲め同「ホテル」にて晩餐を取り後ち歸宿最後の決戰を「ワン公」と試みしも大敗を取りて瞬時も眠る能はざりし

二十四日　早朝主婦に告げて曰く余等本日出發すべしと主婦余等が連夜ワン公と戰ふて眠る能はざりしを知れるを以つて甚だ不面目の顏色を爲し且つ出發にあらずして轉宿するを覺れる者の如し然れども余等は友人ハウドリング氏の周旋したる家族なりしを以て敢て其然らざるを語り厚く禮を述べて去り直に「ホテル、コンチネンタール」に投宿し小なる一室を兩人にて使用する事となしぬ斯くて午前九時會場に出席す此日ボルドチ府のモーレー氏ウキイン府のハーエック氏は化膿性鼻竇炎の診斷及療法に就ての抄錄及自家の實驗に就て演說し一二の討論あり次で伯林のヤンゼン氏鼻側竇性化膿性炎の根治療法と題して上顎竇或は前顎竇前外壁を廣く整除するの法を述べ其成績を述べしに多くの反對論者出で余の如きも該法の根治的なるは是認すべきも治癒の點に到りては甚だ覺束なしと述べ置けり十二時教會近傍の料理店にて中食を取り一時再び會場に到る此時常任會頭ステファノヴ氏余を引きて中央高き處即ち名譽會頭の席に就かしむ余一旦之を辭せしも許されず已を得ず其席に就き先づ會員に向つて宣告して曰く余不敏且つ各國の語に通ぜず然るに今ま會頭の懇請に由り此名譽なる位置に立つ諸君之を諒せよと會員拍手余を歡迎せり於是余は開會の鈴を振り次で常任會頭ステファノー氏を呼んで一二の事務上報告を爲さしめグラスゴーのメシンチア氏及ニユヨルク府のモントブレア氏の鼻喉科に於けるレントゲン氏光線の應用と題したる演說ある筈にて同氏ンストラチチン」あり次で伯林マツキス、シユライエル氏發聲言語の生理に向つてレントゲン氏寫眞術應用に就ての演說及「デモの姓名を呼びしも同氏席にあらず仍てレントゲン光線應用に就ての討論發言を望む者ありやと問ひしに一人も之を望む者なし於是次の演說に讓り伯林ローゼンベルヒ氏を呼べり同氏は慢性纖維素性喉頭炎に就ての演說をなし且つ臨床的顯微鏡的圖畫標本を示して之を說けり終て討論者の有無を質せしにウキーンのヒヤリー氏發言を求む即ち同氏はロー氏の所說は喉頭天疱瘡と同一の現症なりと說き次で英國の某氏（姓名を忘る）發言を求め即ち同氏はロー氏と同一の症狀を經驗したりとて之を詳述す於是最早他に發言者なきを以て再びロー氏を呼び結論をなさしめたりき午時午後四時日程已に盡きたるを以て余は閉會の宣告を下したり以上余は英佛の語に通ぜざるが爲め常に獨語を以て辯說せしも會員の多數は佛語若くは英語を以て語りしを以て一時甚だ不便を畫へ閉口せしも余の左右に列せるヒヤリー氏及ステファ

で於にーロスキ年十三治明

ノー氏は常に余の爲め通譯の勞を取られ幸に無事其任を盡すを得たりき閉會後余等は「ホテル」に歸り休息す是れより先き余は來會の同邦人と會合せん事を望む事切なりき然れども何れも部門を異にし殊に緒方高木兩氏は衞生學部に鈴木芳賀臼井の三氏は軍陣醫學部にスタリバ佐藤兩氏は外科部に藤浪氏は病理學部に余は耳科及鼻咽喉部に毎日出席し而して各部互に相隔離せるを以て余等互に對顏する事甚だ稀なりし仍て今夜を期し「ホテル、コンチネンタール」食堂に於て會合するを約し午後六時上記八名の同邦人と余の同行者たるローセンベルグ氏と合せて九名相會し久振りにて互に胸襟を開き邦語を以て快談し共に此際に於ける手柄やら失策やらを語り興盡くるに及んで共に杯を擧げて日本天皇陛下及日本國の萬歲を祝し抔して午後八時に及べり斯くて余等は本夕九時莫斯科市公民の儀しに係る紳士倶樂部に於ける大舞踏會に招待を受け居りしが爲め當時已に禮服を着し居れる人々は直に我會を去りて彼會に赴けり然れども余は當時未だ禮服を着せず且つ舊來の疲勞甚しが爲め衣服を更へ出席するの勇氣なし唯だ舞踏所前に到り貴女紳士の美を競ふて集れる樓會場の數千の電燈を以て照せる樣抔を見たるのみにて入場券を用ゐずして去り更に高木藤浪兩氏と共に閑靜なる公園内を散歩し十分新鮮なる空氣を呼吸し別れて歸室せり歸ればロー氏余を迎へ共に今夜を以て初て「ホテル」に安眠し得るを喜び寢に就きしに此夜こそ幾もワン公の攻擊を蒙らず前後も知らず安眠したりき

二十五日　此日々程は第二番に余の姓名を掲げたり余は昨夜安眠せしを以て朝來大に爽快天未だ全く余を捨てずと喜び標本圖畫抔を携へ九時會場に到る會場は已に聽衆を以て充され會頭は余の到るを俟てり余は直に會頭の座圖に從ひ標本を鏡下に照せり卽ち余は本來二十餘臺の顯微鏡を要する筈にて標本を悉く携へ來りしも會場狹隘にして之れを爲す能はず已を得ず顯微鏡三臺を列ね之れに鼻茸上胞細胞全粘液化標本一鼻茸囊腫の「コロイード」變成標本一及鼻茸囊腫の粘液腺より發生せるものと組織間隙より發生せしものとを示せる標本一を照し其準備の整頓せるとき本日の名譽會頭ボルドウ府のプロフエツソール モーレ氏余の名を呼べり仍て余は演壇に上り先づ鼻茸の病理を解き余が昨年來伯林フレンケル氏の許に於て爲したる研究成績に徴し鼻茸の新成物にあらずして炎性產物なるを證し且つ其變化は上皮細胞にも來るべく腺組織にも來るべく血管にも來るべく結締織にも來るべきを告げ而して其變化中には從來未だ報告のなきものも多ければ之を圖畫になし或は標本を照して供覽に供すとの意味にて成規通り三十分時間にして局を結びたり次で會頭は討論者の有無を質せしに一人もなし卽ち議論の病理に亘り普通實地家の餘り注意せざる點なるを以て一人も之れに向つて異說を逃ぶる者なく反てヒヤリー、ユーラス、ハイマン等の諸氏は余が好標本を得たるを賞したるのみなりき次でベーテルスブルグ府ヤコツブソン氏ネアベルのプロフエツソールコツリノー氏閉會の辭を述べ互に拍手散會したり散會後二三の友人と共に中食に出掛け三時歸宿す此日炎天燒がごとく午後は外出せずロー氏と共に室内に在りて手紙などを書きて休息せり午後六時共に禮服を着し本日の耳科及咽喉科懇親會料理店「エリミターセ」（會費五

ルーブル）に赴く此の日眼科懇親會も亦た同處の別席に催されぬ他の名ある料理店に於ては自他各部の懇親會あり隨て市中何となく賑はし而して余等の懇親會には前日來數々會合せし知人百余名會合し先づ例の如く冷肉「ジュナップス」にて胃を刺戟し以て着席數回の溫肉と數杯の「シャンパン」を傾け、旺なるとき咽喉科會頭ステファノォ氏立て曰く不肖生の如きものが徒らに此大任を負ふたるが爲め不都合の點甚だ多かりしなり然るに同僚諸君の熱心なる助力に由り幸に滿足なる經過を取る を得たり由て余は別後諸君の無事歸國を祈ると同時に日來名譽會頭の任を取られし同僚諸君の爲め杯を擧ぐと次で耳科會頭フォン、スタイン氏立て滑稽的に獨語を以て謝辭を述べ且つ次回巴里に於ても再會するを望んで杯を擧げ次で外國會員總代として伯林プロフェッソールクラウゼ氏 ウキーンのホノツェル氏共に極て簡單なる謝辭を述べ後は互に杯を衝て個人的に或は學術談をなし或は世間話を爲して七時散會したり歸路余はヤンセン夫婦ローゼンベルグ及他二三の露國同僚と共に料理店「ベルリン」に立寄り冷かなる「ビール」を飲む斯る處へプロフェッソールスクリバ氏單身來る余奇遇を稱へ互に無事を喜び杯を擧げぬ然れども余には同行者多かりしを以て已を得ず再會を約して同氏に別れ再び同行者の中に加はり又十二時歸宿此夜又安眠せり

二十六日　此日ローゼンベルグ氏はヤンセン夫婦と共にモスコーを發しカウカーザスに赴く是より先き余は伯林を發するの前ロー氏及ヤン氏と共にカウカーザス地方を漫遊し各處の耳科及喉頭科の「クリニック」を歴問するを約す然るに此日に到り突然約を破り同行せざるを以てロー氏及ヤン氏は共に余の同行せざるを怪み且つ其の何の故なるやを詰問す、然るに余の同行し能はざるの原因は一に旅費の不足に在りて即ち自費にて來れるが爲め處詮前途大旅行の企て難きを豫想せるに在り然るに諸氏は余の僅少の旅費に差支へるを信ぜず且つ兄若し目下之を有せざれば伯林にて拂へば可なり余等兄の爲め之を辨ずべしと云ふに到りては余は心中に於て甚だ困めり何者諸氏の厚意之を受けざるは甚だ本意に背くと雖ども然れども今まにして五六百「ルーブル」を借入して旅行を企つも他日伯林に於て支便するに到りては殆んど其方法なし仍て如何ぞ遵辭を設けて以て之を避けんと百方考案の後遂に勇を鼓して曰く數日の炎熱既に余の健康の幾分を害へり加ふるにワン公の攻擊に連夜の不眠甚だ疲勞を覺ゆ余今にして尚ほ此大旅行を企てるときは恐くは臍を噛むとも及ばざるの悔あらんと諸氏之を聞て强ゆる能はず頗に不滿の色を現せども最早是非なきことゝ斷念し互に握手前途の健康を祈り再會を期して別れたり斯くて余は諸氏を停車場に送り後ち歸路中央事務所「マネーゼ」に立寄り書類の分配を受け次で食堂に到りしに芳賀高木臼井藤浪佐藤の四氏既に同所にありて中食を取りつゝあれり余も亦た之れに伍して中食を取り終りて余等相共に寶石商「ジルウキンスキー」を訪ひ余も諸氏の驅歴に從ひ記念の爲め一二廉價なる「ジビリア」石を求め直に去りて午後二時を期し帝國大劇場に赴き本日の最終總會に出席す劇場は極めて壯大にして三方に五階の棧敷を繞らし二階の中央に皇帝の玉座を設く五千人の會員をして自由に着席せしむるを得べし余等到れるとき既に滿場立錐の餘地なく余は同行の諸氏と別れて豫定の二階棧敷に到る此時既にチューリンのプロフェッソール、ロンブロソー氏精神病療法に就ての佛語演說中なり氏の音聲甚だ高かく語辭大に美にして五千の聽衆良く之を聽くを得たり然れども余は未だ十分の佛語演說を解するの域に達せず甚だ殘念の思を爲したりき次で現はれしは伯林のプロフェッソール、ライデン氏にして結核療法現時の程度及社會の之れに對する注意と題する平凡の演說にて余等之を解する答なれども氏の音聲短く且つ全く朗讀的なりしを以て多數の人特に獨逸人すらも多くは之を解するを得ざりし斯くて後ち ベーテルスブルグのロイキャノー氏の演說ありて閉會式を擧ぐる日程なりしも余は四時未だ中食を取らざるが爲め空腹に堪へず遺憾ながら去りて「ホテル」に歸り食餌を取り後ち當地有名の耳鼻咽喉科新築「クリニック」に到る然るに時已に五時當に主任教授フォン、スタイン氏不在のみならず余の知れる助手は一人もある事なし已を得ず歸宅す時に學士高木君は行李を運ばしめて余の室に在り是れ同氏も亦た前日來或る開業女醫の宅に下宿せしもワン公の爲めに攻擊を蒙り毫も眠る能はざりしが爲め余の許に移りロー氏の後を襲て宿せんと欲せしに由るなり余於是同邦人と同宿するの却て甚だ愉快なるを喜び少時散歩を共にし且つ共に夕食を取り其夜は共に安眠したり

二十七日　此日「コングレス」も已に終りを告げしを以て緒方氏と同行各「クリニック」を參觀す初め先づ車を飛ばして耳鼻咽喉科新築の「クリニック」に到る是れ金持家バヂノー嬢の遺產數十萬「ルーブル」にて新築せる全歐中二となき模範的「クリニック」にして五階の獨立家屋より成れり院長フォン、スタイン氏は當時莫斯科府に於て第一流の專門家にして耳疾患に於ける重點異變若くは耳疾患に於ける遠心力作用等の論文を以て名ある人にして余は特に同氏の愛する處となり爲めに同氏の著せる業蹟別册を數多惠與せらるゝの榮を得たりき此日院長不在なりしが爲め助手某獨語を解せず僅だ佛語を以て說明するのみ余等を導き先づ外來診察處に到る數十の電氣耳喉檢査燈を都合良く配置して學生の檢査用に供し各種の塗付藥を盛れる瓶、患者の咯痰を取るべき器等悉く各電燈の傍らに供へ五六十の學生を して毫も混雜なく同時に實地診療を爲すを得せしむ室の四壁には腦髓局處解剖圖、內耳中耳の解剖圖、健病鼓膜圖、鼻咽喉科解剖圖等を掲げ其用意の周密なる余曾て米國紐育府の耳鼻咽喉科「クリニック」を見て其完全なるに驚きしが今此バヂノー嬢「クリニック」を觀て處詮ニユーヨルク「クリニック」の及ぶ處にあらざるを證したりき次で導かれて器械室に到りしに喉頭科及び耳科に於ける各種の「プアントトーム」耳科檢査用各種の音叉及數千種の治療上の器械等硝子製戸棚に整置し余は一々之を戸棚より出さしめて其良否を調べ若くは批評を加へ去りて音學室に到りしに耳科の蘊奧を研究せんが爲めに用ゆる數般の樂器并に發音器、蓄音器等悉く備はらざるなく又次で消毒室に到りしに嚥近防腐外科に適せる最進の 置をなし特に耳鏡鼻鏡又咽喉鏡の各學生等より使用さるゝに臨んで豫め良く熟性消毒法を施され得るの裝置あるを見て余は其歐米各國に於て之れに比すべき者なきを說き大に之を稱贊したりき次で手術室に到りしに是れ亦た清潔

且つ防腐的にして其光線は實だ傍窓より逕られ一般外科手術には或は不足の點なきにあらずと雖ども耳科と喉頭科の手術には毫も間然する處なかりし次で到れる圖書室には英獨佛露各國語の斯學に關係せる「リテラツール」を殆んど悉く蒐集し二階三階の病室には今ま休業中にて一人も患者を見ずと雖ども臥床の配置溫平法の注意等皆な新奇ならざるなし最後に地下の賄處及洗濯處等をも悉く通覽し且つ終りて院長スタイン氏の創意に係る遠心器を一覽し同院の一覽表を得て同處を辭し去り凡そ半町計り歩して外科「クリニツク」に到る門前に古色蒼然たる一大銅像あり是れなん有名なる露醫ピロゴツフ氏の像なり「クリニツク」は餘り新ならずと雖も三階の大家屋にして一見其盛大なるを想ふに足れり余の到れるとき主任教授ブポローフ氏不在なれども助手某は乗て余を伯林ベルグマン氏の「クリニツク」に於て知れりとの故を以て特に余と親み好し同氏先づ余等を導きて病室に到りしに室は階上と階下に在りて皆清潔にして且つ大なり一室概ね十人内外を入るべし當時晝中休業なりしが爲め入院の患者甚だ少かりしと雖ども助手は余等に膈髓肉腫患者（一回手術して再發し今將に近日を期し再手術を施さんとせる者　又肺「エヒノコツクス」患者（已に施術して殆んど全治せる者）等を示し且つ局所を檢せしめたり各病室に連りて繃帶交換處あり其室には總ての繃帶料醫療器械并に二三の患者運搬用手術臺等を供へ附近病室に在る患者の繃帶交換は悉く此室に於て施さる（多くの「クリニツク」に於ては手術室に於て繃帶交換を施さんと雖ども余は輓今外科に於ては手術と繃帶交換室とを異にせるの甚だ良なるを評せり）次で到れる手術場は甚だ清潔にして且つ整理せり光線は三側方及上方より來り學生の席は術者及助者の頭上にありて學生をして手術を直下に觀るを得べくなせり余等手術室を觀察せるとき曾て日本へ渡來されたる余等の知人たる伯林の教授ヒルシユベルグ氏一助手に導かれて其處に來れる由で余等は同氏と共に繃帶料消毒室、内臓手術室等を通覽したれども此等の家に於ける裝置は敢て珍奇とする者なかりき余等は直ちに諸氏と再會を期して別れ緒方氏の案内にて其近傍に在る衞生學教室に到る余等到れるとき主任教授ブポノフ氏其處に在りて先づ余等を主任室に導き卷煙草を與へられ懇談す是れブポノフ氏は緒方氏と共にミユンヘン府ペツテンコーフエル氏の門下に在りて同學の親友たりしに由る談笑數刻緒方氏と專門學的にモスコウ市の衞生に就ての談を交へ余は一助手の導きにて教室内の各實驗室講室標本室器械室等を通覽し後主任室に再び歸り緒方氏等と曾し麥酒の饗應を受け午後一時再會を約し辭し去り又余は直に馬車を命じて「ホテル」に歸りしに高木氏已に室に在りて余の歸りを待てり即ち二人食堂に入りて極めて單純なる中食を取り後ち直に室に歸り燕尾服に改め馬車に同乘してモスコー府大主公アレキサンドロウキツツ殿下及同御息女よりの招待に應じ帝國「アレキサンデル」宮「ネスクツユノエ」庭園に赴く午後二時半同處に達す門前には數百の警官門衛卒嚴重に警戒をなし余等到れば彼等の多くは馬車前に近づき先づ馭者の御門通券を有するや否やを檢す余等は豫め宮中より配付し呉れたる通行券を馭者の帽上に掲げしめたるを以て警官等は之れを視て余等に敬禮を施し馭者に進行を命ず門を越え一鞭高く數十町を驅りて宮殿に達す該宮殿はモスコウ府大主公の離宮にして差まで宏大ならずと雖も其美麗清潔なる得て名狀すべからず余等は玄關前にて車を下り玄關内に入れば多くの美裝せる武官は脱劍して廊下の兩側に整列せるを見たり余等は此廊下を過ぎて庭園前に到れるに多くの貴婦人を擁へたる美人の佛語を以て余等を迎へて極めて懇ろに握手の禮を與ふる者あり是れなん大主公殿下御息女にして余等も亦た最敬禮を施したりき後余等は接待官吏の命に從ひ庭園内に出て知人の群に加はり園内を徜徉せしに園には花園あり築山あり又樹木陰々たるあり小池魚の泳ぐあり而して花園の前、築山の下、森の中、池の側等の諸處に音樂隊を配置し皆時を異にして奏樂し又た樂隊のある處に小屋掛けの立食處を設けありて夥多の美肴佳肉山の如く盛り「シヤンパン」葡萄酒茶珈琲等を其傍らに備へ余等をして思ふが儘に飽くまで之を取らしむ此日招待を受けたるは全會員なれども時已に學會終了後なりしを以て會員の過半數はモスコウを去りてペーテルスブルグに赴きたる爲め此盛宴に列したるもの甚だ少く余の目算に因れば本日の出席者は五六百人内外なりしなるべし去れば庭は廣く立食處は多く毫も混雜なく余等に取りては實に無有き好都合なりき此日日本人にして出席せしは緒方高木の兩氏と余とにしてプロフエツソールスクリバ氏も亦た集處に在りしが爲め余は久振にて同氏と快談を交へ例の笑顔にて舊友の間に愛嬌を振蒔くを目擊したり緒方氏は故ありて先づ去り余と高木氏は夕七時を期し共に辭し去らんと欲し宮殿に上りしは將に殿下及御息女も亦た宴終りて歸館されんとするの時なりき仍て余等は玄關車寄の傍らに立て最敬禮を施し殿下の馬車の先づ進むを待ちて余等も亦た乘車ホテルに向つて歸り來れり此夜共に安眠す

二十八日此日は余等がペーテルスブルグに向つて出發せんと欲する豫定の日なりき即ち余は早朝中央事務處に到りモスコウよりペーテルスブルグ、ペーテルスブルグより露國境エイトクーネン迄の無賃乘車券を請求し直に之れを得たれば殘れる時間を市中見物に用ゐんとて先づ「クレーメル」王宮に到る是れモスコウ市中央に在る有名の宮殿にして歴代露帝の藏冠室にして宏大美麗なる得て名狀すべからず凡そ二時間を費して之を通覽し次で王宮内寺院兵器陳列場も一覽し午後一時歸宿し高木氏と共に「ホテル」に於て中食を取りて行李を調べたるに出發には尚ほ時刻早かりしを以て萬國醫學會參列者寫眞帖の豫約を爲さんが爲め馬車を驅りて其寫眞店に到り「六ルーブル」を拂て之を豫約し且つ余等自らをも寫さしめ簡單なる傳記を與へ置き又後余は告別の爲め一二の友人を訪問せんと欲せしも時已に發車時に近づきければ已を得ず一書を遺して禮を述べ午後七時を期して「ホテル」を出て「ペーテルス」停車場へと赴きぬ今此夕該停車場に於ける混雜の一班を記さんに余等が乘らんと欲するは午後九時發の別仕立汽車なり然るに余等は前日來毎夕の大混雜を傳聞して今又之と等しき大群集せる旅客凡そ三四百人一列に整列して長さ六七間の人壁を築けり余等其後に立ち前列の進むに隨つて靄々乎として一歩づゝ進む何者改札處役員は線密に無賃乘車券を改め一一之れに檢印を捺し且つ帳簿に記入するを以て一人に付き平均二三十秒時餘を費やさゞるを得ざ

ればなり然れば余等は凡そ一時間計りの困苦を嘗めて漸くにして改札を終り「プラットホーム」内に入る事を得直に列車内に席を定めたり然るに緒方氏は單身余等より遲く來り先づ手荷物を停車場付人夫に渡し例の如く帽子番號を記憶し置き次で余等の如く群集の列に加り改札處を經て「プラットホーム」に入れり而して同氏は「プラットホーム」に於て前に荷物を渡したる人夫を尋ねたるに其處にあらず余も亦同氏に力を併せて之を探ぐるに終に發見するを得ず遂に已を得ず之を停車場長に訴へしに場長は直に人夫番號及出來事を掲板に掲示せしに數分時にして其人夫忽然として出現し來り物品は已に列車内に運び了すと辯明す然れども余等未だ之を受取らざるを以て大に其不都合を責め且つ直に受取るべく余等を案内せよと命じ列車内に到りしに彼は其物品を何の處に置きしやを知らず即ち同人の指示せる一列車内に入りて燭を採つて各室を尋ねしにあらず次で第二第三第四列車を尋ねしも尚ほ右せず於茲車内の各國醫師車外の巡査及學會役員皆余等の爲めに同情を表し吳れ一時は絶掛りとなりて之を探りたれども時は徒らに進で發車に近けるのみにて緒方氏の手荷物は一も發見されず緒方氏と余とは大に周章し去らんか手荷物のなきを如何せんと未だ之を決する能はざる瞬間車掌は一聲の汽笛を合圖に發車を催し汽鑵車は一聲の汽笛を以て之に應じ將に直ちに進行を初めんとせり此時緒方氏は最前の一列車内に在りて漸くにして自分の物品を發見し且つ其處に着席し余は之れを知らず且つ緒方氏を失ひしが爲め車外に飛び出で緒方君！と大聲疾呼せば同氏已に欣然として窓外に頭を出し君心を安ぜよ余物品と共に已に此處に着席すと於茲疾走自席に歸り高木氏と隣して座す時に車は已に煙を吐いて數町以外を走れり而して露國鐵道疾車は一區四人宛の定めにして即ち余と高木氏とは一區の一側を占め之れに對する一側は露國女醫と男爵某とより占めらる凡そ一時間許四方山の談話を交へ後ち何れも寢に就きしが予半夜渴甚くして眠る能はず已を得ず車掌に命じて麥酒を運ばしめ之を高木氏と共に飲んで初めて眠る事を得たり

## 五、留學下半期の研究

かうして第十二回萬國醫學會に出席して、堂々世界の碩學大家の間に伍して日頃の蘊蓄研究を公表し、或はその專門部會の名譽會頭に推され、將又世界の各權威者と交つて親交を結ぶ等々、身に餘る光榮と多大の收穫を得て、意氣も軒昂として、先生は、ベテルスブルグに廻つて九月、義兄緒方正規教授倶も共伯林に歸つてきたのであつたが、一方十一月の上旬に歸朝する緒方博士の相手をして、その間諸處を遊覽見學せる合間に、モスコーで公開發表せる第一のアルバイトを整理清書して、之をフレンケル寶函に投じ、更に來年四月頃迄に完結の豫定で第二のアルバイトにかゝられたのであつた。

明治三十年九月伯林に於て

左より先生、高木友枝、緒方正規、日高昂、寺田幾尾の諸氏

かうして、フレンケルの教室に於ては渡歐以來既に一ケ年半あつて專ら鼻咽喉科を修め、已にアルバイトも一つ書き終り、更に第二のものに着手中であつたが、その十一月より開かれる冬學期には、更らにトラウトマン教授の許に助手となつて專ら耳科の研究に意を注ぐことゝし、第二のアルバイトが終り次第ハルレーその他の地に轉學される豫定であつた。

かうした多忙な研究生活の中に、また英國倫敦から發行されてゐる「萬國鼻咽喉科中央雜誌」(Internationales Centralblatt für Laryngologie Rhinologie) からそのミットアルバイターとならむことを求められ、該誌の一八九八年（明治三十一年）の一月號より、先生の名が世界各國の斯界に於ける權威、教授等の間に伍して、日本國側代表としてその表紙に掲載さるゝに至つたのである。先生の得意や又想うべきであらう。

その間の事情に就ては金杉氏宛ての手紙に詳しいから、それを次に掲げておくことゝする。

愈〻御多祉奉賀候其後ハ御無沙汰ニ打過ギ申譯ナク候處學兄益々清適御勉强奉賀候二ニ生モ幸ニ頑健奔走致居候間乍憚御安心被下度候偖テ生儀爾來ルーツエ氏ノ「クリニツク」ニ在ル事一年フレンケル氏ノ「クリニツク」及「ポリクリニツク」ニ在ル事一年餘ニシテ今ヤ已ニ其大體ヲ終メ候ニ付目下專ラトラウトマン氏ノ無給助手トナリ同氏ノ長處ニ就テ研究中ニ候實ニ耳科ト云ヒ喉頭科ト云ヒ共ニ各專門家各說ヲ異ニシ隨テ治療上ノ方針ノ如キモ往々氷炭相容レザルノ觀有之候ハ學兄ノ夙ニ知了セラルゝ處ニ候由テ生ハ各專門家ヲ歷門且ツ一定時間其專門ニ在リテ以テ專ラ其長ノミヲ選修シ以テ他日之ヲ本邦「クリニツク」

ノ方針ニ供シ度考ヘニ候即チ生ハルーツエ氏ノ「クリニツク」ニ在リテハ專同氏ノ「ドルツクゾンデ」ノ用法同氏ノ聽力檢定法其他種々ナル療法等ヲ實驗シ傍ラヤンゼン氏ト交際ヲ深クシ根治的手術法ハ腦膿瘍、極寶「トロンボーゼ」ノ手術等ヲ助手シ然シテ他ト異ナル處ヲ知リ今トラウトマン氏自家特長ノ解剖的知識及自家改良ノ根治療法ヲ研究シ終ツテハハルレーノシユワルツエ氏 ミユンヘンノベツオルド氏ウキーンノポリツエル氏等ノ許ニ到リ何レモ一定期間宛其「クリニツク」ニ在リテ其長處ヲ選修スル積リニ候生ハ已ニポリツエル氏ヒヤリー氏ウルバンナツチユ氏シユワルツエ氏グルーネルト氏等ト面語スルノ榮ヲ得タレバ其節他日其「クリニツク」ニ於テ「アルバイテン」スルヲ約シ置キ候本年露國莫斯科「コングレス」ノ景況ハ已ニ生ノ醫事新誌上ニ於ル紀行及 Internationales Centralblatt für Laryngologie, Rhinologie 上ニ墺國ノヒヤリー氏ノ記シタル報告等ニ由テ已ニ御承知ノ事ト拜察候實ニ該「コングレス」ノ學術上我學科ニ於ケル成績ハ格別ノ事ナク候得共生ニ取リテハ各大家ト交際スルノ榮ヲ得タルト各地方ニ於ケル「クリニツク」(特ニ價値アリシハモスコウ新築「クリニツク」)ヲ通覽シタルトハ誠ニ得難キ好都合ニ有之候何レ其内各「クリニツク」ノ景況并ニ耳科及喉頭科會ノ記事等御入用ナレバ詳記シテ差上可申候而シテ生モ開會中兩三回種々ナル演說ヲ致セシガ就中モスコウ耳鼻咽喉病學會々頭スコツト氏ノ催シタル遠足懇親會ノ時ニハ各國ノ耳科家及喉頭科家ヲ招待シテ先ヅ自分會頭タル耳鼻咽喉病學會ノ漸ク此年ニ到リ成立シ尙ホ甚ダ幼稚ナレバ側來諸子ノ盡力ヲ仰グ旨述ベラレタレバ生ハ二三大家ノ演說ノ後ヲ立テ日本ニ於ケル耳鼻咽喉病學會ノ已ニ數年前ヨリ學兄ノ盡力ニ由リ成立シ目下其會報中ニハ中々有益ナル「アルバイト」ノ續出スル事アルヲ報ジ且ツ將來益々勸メテ怠ル事ナクンバ諸君ト共ニ斯學ノ巍推ノ協力者タルノ名譽ヲ擔ヒ得ルニ庶幾カラント述ブ最後ニ謝辭ヲ述ベ杯ヲ擧ゲ喝采ヲ博シタリキ右ハ誰レニモ頼マレタル義ニアラズ又生ハ目下會員タル乎將タ會員タラザル乎ヲモ知ラザルニ係ラズ時ノ勢ヒニ乘ジ越權ニモ學兄ノ統御スル日本耳鼻咽喉科會ノ現狀ヲ列國界ニ紹介シタル次第ニ候不悪御思召被下度候何レ其内成業歸朝スル事ヲ得バ及バズナガラ學兄ノ驥尾ニ付シテ盡力可仕候又生ノ「アルバイト」ハ已ニ一二有之候得共何レ近日其別冊出來次第御送可申候又生儀過日ロンドン府教授フエーリツキス、「ゼモン」氏(是レハゼモン)氏定則ヲ以テ有名ナル人)ト會談スルノ榮ヲ得其時生ハ日本ニ於テモ古來耳鼻咽喉科ノ「アルバイト」トシテ有益ナル者ナキニアラザレドモ皆日本文ニテ報告サレシヲ以テ國際界ニ毫モ知ラレザルナリ其レ甚ダ嘆スベキナリト述ベケレバ同氏生ヲシテ强テ同氏ノ主事出版セル Internationales Centralblatt für Laryngologie Rhinologie ノ Mitarbeiter トナリ日本ノ「アルバイト」ヲ抄錄セシメントシ遂ニ之ヲ諸シ同年正月ヨリ生ノ姓名ヲ公告サレタリ是レ甚ダ迷惑ナレドモ日本醫學ノ爲盡ト思ヘバ何カアラン爾今大ニ盡力スル覺悟ニ候何卒學兄及日本耳鼻咽喉病學會々員ノ斯學ニ關スル論文ノ出ヅル毎ニ必ズ生ノ許マデ送付相成度右懇願ノ到ニ候尤モ醫事新誌及中外醫事新報ハ從來其局ヨリ送付シ呉レ候故此等ノ雜誌ニ出デシ分ハ御送付ニ及バズ候



金杉大人虎皮下

貴局員諸君へ宜敷御傳言ヲ乞フ

かゝる間に先生の待望久しかりし第一のアルバイトの印行漸く成つて、"Beiträge zur Pathologie der sogen untenS chleimpolypen der Nase nebst einigen Bemerkungen über Schleimfärbungen,, (Arch. f. Laryng. Bd. 7. 1898.) (「鼻茸ノ病理追加及粘液染色法ニ就テ」と題して世に公にせられ、鼻茸の病理學的研究上の權威ある一文獻として斯界に寄與することゝなつたのである。

そして、これは我が國に於ても早速邦文となつて、同三十一年七月三十日發行の「東京醫事新誌」(第千六十號)上に『所謂粘液茸腫ノ病理研究及粘液ノ染色ニ關スル二三ノ注意』(第十二回モスコー國際醫學會ニ於ケル演說)と題して掲載され初めたのであつた。

かうして、この第一のアルバイトの出版、公表によつて鼓舞せられた先生は、更に第二のアルバイトに筆を急がれると共にまた「絕對的確實なる喉頭鏡消毒法」と題するアルバイトにも着手されたのであるが、四月に入ると伯林醫制協會に於て、會頭の懇請に應じ、「日本ノ醫制及醫師ト社會ノ關係」と題する講演を行ひ、極めて短時日の中に異常な躍進を遂げて世界の驚異の的となつてゐる日本醫學の歷史的發展の樣相とその現狀とを西歐人の眼前に解說展開して、その渴望を充たし多大の喝采を博され、ためにその講演をも併せて論文にして「法醫及公衆衞生雜誌」(Vierteljahrsschrift für gerichtliche Medicin und öffentliches Sanitätswesen,,) に依つて公にすべく、その原稿整理も急がねばならなかつたのである、そして、これは後に、該誌の第十八卷第一、第二號に "Das japanische Medicinalwesen und die sociaen Verhältnisse der jetzigen Aerzte,, (「日本ノ醫事及日本醫師ノ社會的地位」) と題して掲載され、翌一八九九年(明治三十二年)に別冊となつて出版さ

れたのであつたが、蓋し本書の如きは、當時未だ郭嘉四郎氏の「皇國醫事沿革史」（明治十七年刊）の外、何らみるべき醫學史の現はれざる當時、日本醫學の發生當時より筆を起して、明治三十年代に至る我が醫事、醫制の歴史的狀態を詳述したものとして、彼地に於て好評を博せるも宜べなると共に、歴史的研究業績の僅少なる我が國自身に於ても敢て珍本好文獻と稱す可きものであらう。（本書ハ後岡田清三郎博士ノ邦譯ニテ「黎明期ノ日本醫學」ト題シ昭和十六年東亜公論社ヨリ刊行）

かうして、モスコーより歸られて以來の先生の研究生活は、アルバイトの作製、その整理執筆にいよ〳〵多忙を極め、一つのアイデアは更に他のアイデアを生み、意外に手は擴がつて、豫定通りには仲々進捗せず、限りある留學期限にせかれて少からず焦慮せられたものゝ如く、ハルレー、ミュンヘン、ウキーン等への轉學の期は次ぎ〳〵と延ばさゞるを得なかつたのである。

かゝる中に、五月の二十七、八日の兩日にはウユルツブルグに於て獨逸耳科學會が開かれ、同じく三十日にはハイデルベルヒで南獨逸喉頭科學會が開催されるので、それに臨席の爲め、フキングステンの休暇を利用して五月二十五日、先生は木村孝藏氏と共に南獨逸地方への旅行に出かけられたのであつた。

此の行に於ては、ギッシンゲンの溫泉治療所、ウキースバーデンの浴療所、エムス泉溫の咽喉病治療所等々の南獨逸地方の溫泉療養所を視察し、或はウ[illegible]ルツブルグ、ギーセン、ゲヨッチンゲン等の各大學のクリニックを參觀し、またキルヒネル、サイヘルト、ユーラース、ヲストネル、ビヨルクネル等々の諸大家と懇談、親交を結び、或は石川公一、箕作佳吉氏等二十人近くの我が留學生諸氏と歡談するの機會を惠ぐまれ、就中、マールブルヒに於ては舊師ヂッセ氏と會談するを得て極めて愉快な旅行をされたのであつた。

當時の先生の書翰によると、

「此行日數十四日、旅費凡ソ二百五六十「マルク」ヲ費シタレ共二個ノ專門學會ニ臨ミ有益ナル演說ヲ聞キタルト將來ソノ會員タルノ權利ヲ與ヘラレタルト獨逸各地ノ大家ト交際ヲ結ビタルト沿道各大學ノ耳科喉頭科及外科ノ「クリニツク」ヲ訪ヒ大略其進歩ノ程度ヲ探クルヲ得タルト加之三大溫泉場ニ臨ミ咽喉科ニ必要ナル治療所ヲ顧覽且ツ說明ヲ聞キ加フルニ必要ナル書類ヲ集メル事ヲ得タル等ノ利益有之大ニ滿足致居候」と結論してをられるが、この六月二十八日付の手紙には「目下着手中且ツ已ニ脫稿中ノ論文左ノ如シ」として、その最大且つ價値あるものとされてゐる「耳的小腦膿瘍ノ診斷及療法」と題せるもの以下五篇の題名と說明とが加へられてゐる。

而して、その中、先生の最も力を入れその完成に苦心せられたものは、「一ハ腦體外科ニ關スル者ニテ甚ダ面白ク是レハ都合ニ因レバ博士請求ノ材料ニ致ス積リニ候其二ハ解剖學上人類學ニ關係セル者ニテ是レ亦タ甚ダ高尙ナル者ニ候」とある二者であつて、これらは何れも、實驗室内での仕事は濟んでも、その參考文獻の蒐集、涉獵並にその起草に意外の時日を費ひやして、延引に延引を重ねて年を越し、最初の豫定の轉學、實地專修も容易に果されず、その焦慮は翌三十二年の春頃までの書翰に何れも「アルバイト起草中ニテ寸暇ナシ」の文字となつて現はれてゐるのである。

加之、豫定のハルレー、ミュンヘン、ウキーンへの轉學の希望は、文部省よりウキーンへの轉學は許可すれども、ハルレー、ミュンヘンへの轉學は旅費不足の爲め許可し難しと八月中に却下されたので、重ねて願書を差出し、又翌三十二年倫敦で開かれる萬國耳科學會への出席の件をも當局に許可を求め、留學期間を更らに五六ケ月延期することゝされたのであつた。

かうして、多大の苦心と時日とを費やして完成されたものが、各人種間の比較調査成績としてランゲンベック氏寶函に發表された "Die oto-chirurgische Anatomie des Schläfenbeins,"（顳顬ノ耳科外科的解剖）と耳科學上に一新生面を開いた處の "Die Diagnose und Chirurgie des otogenen Kleinhirnabscesses,"（耳性小腦膿瘍ノ診斷及外科）の二個のアルバイトであつた。

而して、前者は間もなく、我が國に於ても、「頸頷ノ外科學的耳科學解剖ニ就テ」と題し、「左ノ一篇ハ伯林大學校教授「トラウトマン」氏ノ耳科「クリニツク」ニ於テ耳鼻咽喉科研究ノ爲メ留學研鑽セラルヽ岡田醫學士が獨逸外科寶函第五十八卷第四册ニ掲載セラレタルヲ譯出セルモノナリ」として、東京醫事新誌（明治三十二年八月五日、第千百拾三號ヨリ）上に掲載され初めたのであつた。

かうして明治三十二年の最後の冬學期も慌しく過ぎ去つたのであるが、その二月の末には伯林喉頭病學會の創立十週年の祝宴が催され、先生はまた日本の學會の代表者として例の雄辯をふるはれたのであつた。

### 在獨逸岡田醫學士書翰の一節

先月二月二十四日伯林喉頭病學會ハ創立十年ノ祝宴ヲ伯林市新「キユンストレルハウス」ニ於テ催セリ曾テ同學會ハ數ケ月前ノ例會ニ於テ祝宴委員ドクトル、ベーテルゾーン、フラトー、アロンソン等ノ諸氏ヲ選ビ同會幹事ベ、ハイマン、ローゼンベルク氏等ト共ニ準備スル事トナシ當日會長「ゲハイムラート」フレンケル、「プロフエツソール」グルツク、同シユワーバツハ、同ヤコブソン等ヲ初メ内外國ノ喉頭病學者數百名妻君令孃等ト共ニ有名ナル新築美術家集會所ニ會ス九時着席フレンケル氏中央ニ坐シ其坐右ニ各地ノ名家坐ヲ占メ宴中パニシテフレンケル氏中央ニ立チ簡單ニ伯林喉頭病學會ノ盛況ヲ序シ次デ獨逸皇帝陛下ノ萬歲ヲ彙ト共ニ三呼シ彼ノ喉頭病學ニ關スル大著述ヲ以テ名アルベ、ハイマン氏立テ同會十年中ノ經過ヲ報ジ且同會ガ前ニ名譽會員トシテ先輩喉頭病學者トシテ名アルレウキン氏（先年皮膚病梅毒病學者トナリ先年已ニ伯林ニ於テ死セリ）教授ゲルハルト氏（今ヤ内科病學者トシテ伯林ニ於テライデン氏ト共ニ名アリ）教授トボルト氏（今七十ノ高齡ナレドモ尚ホ毎日喉頭鏡ヲ手ニセザル事ナシ）及ビ倫頓ノ唱歌教師ニシテ喉頭鏡發明者トシテ有名ナルガルヤ氏ヲ選當シ今此十年祝宴ニ際シ前ニ例會ニ於テ選定シタル結果トシテ墺國ウヰイン府ノ教授ストヤルク氏英國ロンドン府ノ教授サーセモン氏及伯林當時本會ノ會頭タル教授ベ・フレンケル氏ヲ本會ノ名譽會頭ニ推選スル旨ヲ報ジ次デ同會ノ會報ハ斯業ノ進歩上ニ於テ内外各國ニ於テ甚ダ價値アリト認定サル、旨ヲ報ジ最後ニ伯林喉頭病學會萬歲ヲ三呼シタリ次デ教授ベーテルセン氏ハ本會ノ盛大ナルハ一ニ役員諸氏殊ニ會頭ベ・フレンケル氏、第一幹事ハイマン氏第二幹事ローゼンベルグ氏ノ功勞ニ歸セザルベカラズトテ右諸氏萬歲ヲ祝シ次デ南獨逸喉頭病學會代表者トシテドクトル、フイシエニヒ氏祝詞且ツ本會ノ萬歲ヲ祝シ次デ小生日本喉頭病學會ノ代表者トシテ（是レ專斷ニシテ甚ダ申譯ナケレドモ當地會員ノ懇望ニテ辭シ難ク相成候又當地喉頭病學者ノ日本ニ同一學會ノ存スルヲ知ル者ナキヲ知リシヲ以テ却テ此名ヲ用ヰシ次第ニテ不惡御思召被降度候）先ヅ日本ニ於ケル醫學ノ進歩ヲ序シ次デ喉頭病學ニ論及シ尚ホ甚ダ幼稚ナレドモ吾人ハ獨逸醫學ヲ尊敬スル者ナリ生等ガ此地ニテ見聞シタル事實ハ他日日本ノ實地ニ現ハルル者ナリ爾後益ス本會ト日本喉頭病學者トノ懇親ナラン事ヲ希望シ此精神ヲ以テ生ハ杯ヲ擧ゲ伯林喉頭病學會ノ萬歲ヲ祈ルト述ブレバフレンケル氏初メ殆ンド總テノ大家ハ皆ナ杯ヲ手ニシテ生ノ許ニ來リ生ニ向ツテ謝辭ヲ述ベ加之少シク坐ノ靜マレルヲ見テフレンケル氏再ビ立テ生ノ演說ニ向テ謝辭ヲ述ベテ曰ク日本ノ文明ハ長足ノ進歩ヲ爲シ特ニ醫學ニ於テ然リトス我喉頭病學モ亦タ今ヤ已ニ起リツツアリ他日必ズ余等ノ敬服スベキ「アルバイト」ノ日本喉頭病學會ヨリ出ヅル事アルヲ期ス岡田氏ノ希望ハ余等ノ希望ト同一ナリ仍テ玆ニ其意ヲ表ス述ラレ次デドクトル、アロンソン氏ハ委員トシテ會頭フレンケル氏ノ勞ヲ謝スル爲メ大理石ニテフレンケル氏像ヲ有名ナル彫刻者フーゴー、ラインホルト氏ヲシテ彫刻セシメ已ニ此席ニ備ヘ置ケリ仍テ之レヲ呈ストテ曾テ布ヲ以テ被ハレタル大理石像ヲ示シ其白布ヲ除キ去レバ溫乎タルフ氏ノ容貌一壇高キ處ニ現ハレタリ衆拍手其妙技ヲ賞ス次テローゼンベルグ氏立テ滑稽的ニ演說シテ來賓ノ健康ヲ祈リ斯クテ坐上演說モ終リケレバドクトル、フラトー氏ハ自作ノ唱歌ヲ印刷シテ之ヲ配布シ且ツ之ヲ說明シ終リテ別席ニ移リ會員ノ催シニ係ル素人芝居ヲ一覽シ最後ニ舞踏場ニ移レバ此處ニハ已デニ樂隊樂ヲ奏シテ客ヲ俟チ來レル男女ハ三々伍々隊ヲ爲シテ舞踏ヲ初メタリ干時二十五日午前三時ナリキ余從來舞踏ヲ習ハズ最早余ニ於ケル興味盡キタリト思ヒ直ニ車ヲ驅リテ歸宿セリ翌日ノ新聞紙ハ悉ク其盛況ヲ報ジ特ニ生ノ演說ヲ記セリ仍テ別紙切抜キヲ付シ御報申上候（明治十二年五月三十日、大日本耳鼻咽喉科會々報第五卷第四號第五號合刊）

かうしてまた同じく四月にはカルルスバードに内科學會、五月にはハンブルグに獨逸耳科學會、六月には伯林で結核豫防の萬國學會が夫々催され、また八月にはロンドンに萬國耳科學會が開かれて、先生は夫々それに出席の豫定であつたから、一方にはウキーンその他への轉學、實地研究が控へ、また内にはアルバイトの脫稿を急がねばならず、歸朝の日を漸く目前に控へて、先生の研究生活は禄尾の大多忙を極めるに至つたのである。かくて、先生は、四月九日、栗本東明、田野嘉一郎氏等とカルルスバードに向ひ、十一、十二兩日の學會が終ると、ウキーンに出て同地のポリツエルその他に就て實地を研究されたのであつた。

（前略）……生幸に每に壯健にて先々月伯林に於ける仕事も終決を告しを以て伯林に開會の外科學會の終ると同時に高木、渡邊、鶴田、栗本、瀨尾、增山、松山、田野、平井の九氏と共に墺國「カル、スバード」に於ける內科學會に臨席し後ち「マリエンバード」「ビルゼン」等を經て當維也那に轉學仕候併し生最早歸朝まで餘日少く相成候に付き此地にては「アルバイト」に着手せず專ら「ポリツエル」の耳科診斷治療法「ウルバンチツツス」氏の啞聽力恢復法、「ストチルク」、「シユロツテル」「キヤリー」氏等の鼻喉科實地を學び二三箇月にて直に「ミユンヘン」に轉じ同地にても專ら「ペーツオルド」氏の耳科殊に啞治療法と「シエン」氏鼻喉科實地を學び後ち「ハルレー」に轉じ同氏獨得の耳科外科を學び十一月上旬歸朝の途に上る豫定に候

偖て「カル、スバード」內科學會は土地柄とて中々盛にして同地住人の參向者を優待すること甚だ厚く爲めに生等本邦人の利益を得たること少からざりし栗本氏は本邦より持參の人體腸寄生虫に就ての演說「デモンストラチチン」を爲し大に喝采を博したり而して第三日目午後に於ける大宴會には各地より出席せる名家交る〳〵立て賛詞或は謝辭を述べし（會長クインケー氏に次で伯林「フォン、ライデン」維也納「フォン、シユロエツテル、（ウキースバーデン）、シエッフエル、（フランクルト）モーリス、シユミツト」及び「カル、スバード」市々長等）を以て本邦人總代として拙者簡單なる謝辭を述べしに是に就て先づ伯林の「ゼナートル」氏立て次回「ウキースバーデン」に於ける內科學會にも今日の如く獨墺及日本より續々多數の出席あらんことを希望し又維也納の「ノートナーゲル」氏も立て特に拙者の謝辭に就て語を開き曉近日本醫學の進步に論及し次回の萬國醫學會は必ず日本に於て開かんことを希望す吾等は頸を延して其招待を俟つと述べられ滿場喝采を以て迎へられたり後ち演說終りければ生等は「ノートナーゲル」氏の許に到り更に同氏の演說に向つて謝辭を述べ且つ早晩日本に於ても萬國醫學會を催すこと吾人の最も熱心に望む處なれども如何せん道遠く且つ之を催すの要件未だ全く備はらず拙者一箇人の考にては次回の萬國醫學會を日本に於て催すことは處詮覺束なかるべしと答へ置き畧之を要するに歐洲の大家は多少御世辭的に之を唱ふるに似たりと雖も前に「ブレスラウ」府に於て「ミクリツチユ」氏の言はれし言今「ノートナーゲル」氏が此公會に於て語られたる言に徵するも往々熱心に日本を萬國醫學會の開會を期して一見せんと欲する名家なきにあらず去れば本邦醫學者たる者今にして萬國醫學會開會の利害に就て十分考慮を要して可然と存候尤も生等は夙に尙早說を抱き前日其意見を醫科大學長、陸海軍衞生會長に差出し置きたる次第に候得共何時迄も日本は尙ほ幼なり到底中間入りは出來難しと自ら覺り花々敷「アルバイト」も出さず各自小成に安んずるは邦家の爲不利益渉からずと存候に付今より覺悟して一方に於ては社會一般の改良を計り同時に病院教室等の整頓を期し一方に於ては益す學術研究の「インテレツセ」を起し以て他日歐米各國より熱心なる醫學者を我國へ招待するも毫も遺憾なからんことを期せざるべからず今日の儘に過ぎ行けば十年や廿年を經るとも到底之を催すの域に進み難かるべし云々……（下略）

於維也那　岡田和一郎

## 五月四日

（東京醫事新誌第千百六號明治三十二年六月十七日號）

かうして、ウキーンでは順天堂の佐藤達次郎氏、皮膚病の岡村龍彥氏等と同宿して六週間滯在し、有名な耳科の大家ポリツエル氏初め、ストオルク氏、キヤーリー氏等、同地に於ける臨床諸大家の實地を專ら研修し、五月二十日には再びウキーンを出發して伯林に歸り、五月二十四日から開かれる萬國結核撲滅會議に出席されたのであつた。

このコングレスは、先生の恩師フレンケル教授の創立に關はるもので、獨逸のヴキクトリア皇后陛下を總裁に戴き、獨逸國總理大臣ホーヘンローヘ公を名譽會頭として、世界各國よりその代表者が招待また派遣せられたいであつたが、その第二日目の五月二十五日の第二部會に於ては先生は再び世界各國の權威大家と相伍して、その光榮ある名譽會頭の一人に選定されたのであつた。當時の會況は、先生自身の東京醫事新誌に寄せられたレポートにあるから、それを次に掲げておかう。

## 伯林に於ける万國結核撲滅會議概況

維也那に於て　岡田和一郎報

專唱喉の結核病の如きは往々局處療法のみにて治癒することあるは最早之を疑ふ者なかるべし、又た外皮若くは關節の如き身體末梢に限局せる結核病の多數は外科的療法のみにて治癒することあるは是れ亦た敢ふべからざるの事實なり、獨り肺結核若くは全身に蔓延せる結核病に到りては大に其趣きを異にし從來之れに使用されたる諸般の藥石概れ其効を奏すること少く世界中何れの鄕市を問はず一般に死亡者の最多數は肺結核に占めらるゝは夙に世人の良く認知する處なり、去れば獨逸の諸先輩が之が撲滅策を講ぜんとて學者は學術の研究と學理の普及の爲め將に寢食をすら忘れんとし富める庶民は竭ふて千萬の巨金を擲ち以て其實行を助く是れ決して謂れなきにあらざるなり、コツホが發明したる新舊「ツベルクリン」未だ其全効を奏せざるの現時に在りては結核を治療するに今を去る凡五十年前プレーメル

が創意に係る新鮮なる空氣健康なる滋養を應用するに如くはなし是れ創意者がシュレージェン縣下「ゲヨルヤルスドルフ」なる氣清く森深き一勝地をトし千八百五十四年創めて結核病者療養處を設け後ち多くの患者を集め以て自ら之を證明したるが爲め然るにあらず爾來彼が遺業に基き獨逸各聯邦の各地方に於て類似の療養處を設け以て大に實驗を重ねたるデットワイレル、スペンゲレル、フォン、チームセン、フォン、ライデン、ゲルハルト等の如き當時有名なる實地醫家の共に大に同意を表したるが爲め然るなり、看よ獨逸國に到る所として富める患者の集まれる私立療養處と貧き患者の集まれる慈善的療養處の設け有らざるなし今試みに伯林に於ける慈善的療養所を記せんに伯林には千八百九十六年來前後三個の慈善的結核患者療養處を得たり其先づ起れる者は赤十字社の設備に係り伯林市を距る約一時汽車程の「グラボーゼー」湖畔に樹蓊蒼たる處に在り冬期は固定病室に八十人夏期は之れに戰時用移動室を合して百六十人の無資產にして保健權を所有せる肺結核患者を收容することとなし、ゲハイムラート、ゲルハルト氏其顧問醫長たり、軍醫看病婦其處に常任して戰時に振ふべきの手腕と用ゆべき技量とを平時に於て應用し以て一は他日事ある時の準備とし一は赤十字の神髓たる慈善を事とす次で起れる者は伯林市肺結核患者療養所にして即ち女子療養處を「ブランケンフェルド」に男子療養所を「マルショー」に設け共に市外人家を距る遠く大氣世塵を含まざる樹木繁茂四時氣候の劇變なきの地を選べり而して之に收容すべき患者は三大市立病院の治療に適せざる貧しき肺結核患者にして女子は六十四人男子は八十八人を限れり、最後に起れる者は、ゲハイムラート、アルトツフ、スピノーラー、フォン、ライデン及びペ、フレンケル諸氏が四年來頻りに計畫したる伯林ブランデンブルグ縣結核患者療養處創立會の設備に係る者にして是れ亦た伯林を距る遠からざるベルチヒと稱する勝地に在り建築未だ成らずと雖も伯林市及ブランデンブルグ縣下の貧き肺結核患者九十三人を收容し得るの計畫なり、而して如斯療養所は概れ皆な市の負擔に係るものにあらずんば慈善的私立事業にして數十萬金を費したる建築も尙ほ是れよりも多かるべき維持費も皆學者の計畫を成功せしめんとの熱心なる善男善女の義捐金に因らざるはなし豈に盛ならずや而して獨逸に未だ結核患者を離隔するの制度を頒布するに到らずと雖も如斯計畫し來れる民間の事業は已に病める者には最も滿足なる且つ最も愉快なる治癒的方便を與へ、未だ病まざる者には彼の最も危險なる傳染病と認定されたる結核病者を暗暗裏に其身邊より遠ざけ以て極めて安全なる位置を作らんとせり、然れども結核病は全世界に蔓延せる庶民病なり又た國家病なり之を撲滅するの策決して如斯單一の業にあらざるなり、去れば獨逸結核病者療養處設立中央委員會に最も熱心なる委員の一人ゲハイムラート、ペ、フレンケル氏（余の恩師喉頭病學者）の建議を容れ全會一致を以て本年五月を期し伯林に於て萬國結核病撲滅會を開き一は以て現今發達せる學術上の成績を集め一は以て其實行を奬勵せんと決議し數國の準備會議を經て遂に最も慈善に涉せらるゝ獨逸皇后アウグステー、ウヰクトリア陛下を總裁に戴き奉り獨逸國總理大臣ホーヘンローヘ公を名譽會頭に仰ぎ爾他內務大臣ボザドウスキー伯バイエルン大使ラルヘンフェルド伯、文部大臣ドクトル、ボッセ氏陸軍



々醫總監フォン、コーレル氏を會頭格に選び而して本會專務委員には會長ラチボール公副會長ゲハイムラート、フォン、ライデン氏會計長ゲハイムラート、フォン、メンデルソーン氏總書記長陸軍一等軍醫パンウヰツツ氏就任し、五箇に區分されたる各部は當時世界に於て最も名あり且つ其部門に於ける學術に効勞且つ經歷ある學者二人宛を擧げて其部長と定め豫定の日程印刷物と招待券とは忽ちにして獨逸國駐在各國大使館及公使館各病院各保險會社、會社銀行及び各大工場及び各市町村の役場に到る迄隈なく配付され次で世界中の各親交國政府に向つても亦代表者派遣を請求せり、於是五月上旬に到り各國政府、各地團體、大工場、會社銀行若くは市町村等の代表者として臨席を申込める者三百餘名、個人的會員として二十「マルク」を納め入會せる者三千餘人に達し、開會に先だち日程準備の印刷物は郵便に付して會員に分たれたり、余は當時墺國維也那に在學中なりしも本會の創立者はゲハイムラート、ペ、フレンケル氏なるを以て余も亦他の門下生と共に此會に臨み以てライデン、ゲルハルト諸氏の門生が師の爲めに盡さゝる可らざる義務あると又結核病の治療と撲滅は喉頭病學者の大に協力翼贊せざる可らざる問題なるとに由り豫め「廿マルク」を納め通常會員となりしを以て開會に先づる二日即五月廿日旅裝を整へ再び伯林に向て出發せり廿一日午前「フキリツプ」街舊寓居に着し內務省代表者たる高木技師及び同宿の渡邊雷、鳥山南壽次郎の兩學士と相會し次で海軍省の代表者たる鈴木大監、文部省の代表者たゞ中西學士等と接し開會中日本出身者の爲すべき準備に就き相談じ其結果として若し開會中各國代表者視詞若は謝詞を述ぶる機會ある時は開會式の時は鈴木海軍代表者第二日目伯林市招待の祝宴の席上に於ては高木內務省代表者又第四日目會員懇親會席上に於ては中西文部省代表者之を受持ち何れも獨語を以て簡單に祝詞若くは謝詞を述ぶることを豫約し相別れたり五月二十三日は開會の前日にして來着の會員一場に相會して以て互に自分を紹介するの日なり、此日會場は豫め「チールガルテン」公園內新劇場「フロル」園と定められしも本年は例に似ず晴曇常ならず天候の豫知し難き爲めに園內の會合を中止して更に帝國國會議事堂內に參集する事とはなりぬ午後七時を期して其處に參集する男女の會員踵を接す會長ラチボール公、副會長フォン、ライデン氏部長チームセン、ペ、フレンケル、デットワイレル、ゲルハルト等の諸氏を初めウキルヒヨウ、ワルダイエル、ルブネル、ホイブネル、ゼナトール等各大學教授と婦人委員長ホーヘンローヘ公孃赤十字社庶民療養所設立會婦人部名譽會員フォン、ボエッチツヘル夫人、同社同會家族救護部々長フォン、クネースベツク夫人、同社同會職業周旋部々長スタウド夫人其他委員たる各高等官吏、紳商、大學教授等の夫人令孃等集會の中樞となり知れる人には互に久濶を語り初めて接する人には互に姓名を披露して相知るを喜び或は佛語を聞き或は英語を話し極めて陽氣なる會合なりき余等日本人の此日出席せる者は以上三名の政府代表者の他三輪、桂、田代、瀨尾、鶴田、渡邊、北川、鳥山及余の十二名にして會長及婦人委員長は特に余等に握手の禮を與へ且つ懇ろに遠來の勞を謝されたりき而して余の知れる喉頭病學者にして此席に在りし人々即ちペ、フレンケル氏は言ふも更なりトホルト、シユロエ

ツテル、マイエル、ローゼンベルグ、シャイエル、アレキサンデル等を歴問して久濶を謝し或は舊を談じ新を語り時の移るを忘る、十時樓上の陸軍々樂連奏愈よ興深きも樓下の「ブユツフェー」人益す滿ちて酒を得ること難し余等相共に會場を辭して寓に歸れり。

五月二十四日（第一日）開會式、此日は本會總裁　皇后陛下御親臨あらせらるゝ御豫定なるを以て會員は悉く燕尾服（軍人は正服）を着し午前八時前後より會場と定まれる帝國々會議事堂に參集せり千餘の普通會員は議員席及び樓上三方の傍聽席に着席し準備委員及役員は議長席の右側に各國代表者は其左側即ち獨逸聯邦議員席に整坐し（我政府委員鈴木高木及中西の三氏も此席に在り）今日を晴れと胸邊頸圍を飾れる徽章は軍醫服裝の金モールと相伍して其壯觀云はん方なし時恰十時を報ずるの瞬間右側樓上皇室用「ロージ」の戸扉は開かれぬ、此時會員一齊に起立し最敬禮を行へば陛下は徐々として總理大臣ホーヘンローヘ公令孃即ち婦人委員長の御先導にて侍從職長赤十字社長クネーゼベック氏及多くの官女を從へて御親臨あらせられたり陛下の御着席を待ち奉り先づ第一に議長席に現はれたるは内務大臣ボラドウスキ伯なり伯は肺結核患者療養處設立中央委員會々長たるの資格を以て開會の辭を述べて曰く

至尊なる　皇后陛下及び會員諸君、軈近學術の進歩は益々多く未だ世に出現せざる地中の寶物を開發し且つ自然の妙力良く運用するを得たり、而して如斯學術研究の結果は遂に人類の存在に應用され之れをして益々價値あらしめ益々爽快ならしめ御た益々美麗ならしむ而して斯文明的事業の成効を期せんが爲め社會に於ける大工場は學術研究に由りて得たる素質を人類應用の精工品たらしめんことを勸めたりこれ如斯精神及手腕の非常なる努力にて漸くにして達し得たる技術的進歩は數百年前に於て吾人々類の生存社會の安寧を甚しく害したる夥多の危險と豪敵とを減却することを得たり、文明の進歩は一方に如斯浩大なる慈善的働作を爲すと雖も然れども他の一方に於ては吾人は之れに由りて更に他の大なる豪敵の發生に遭遇せり即ち職工生活の如く多數の人類の共同執職若くは或種の職業を實行する技藝上の經驗等は特に一種新たなる病痾の發生を促せり諸君が今此處に會して將に一種の庶民病として熱心なる討議を藝されんとする彼の結核病の如きも亦た其一に外ならず、人若し彼が蔓延の模樣を推究せば忽ちにして其文明生活の副産物にして其蔓延は益々庶民の安寧幸福を害はんとするを覺り得らるべし、而して夫で起るべきは政府、醫師代表者、社會的政事家及一般の慈善家が此慘狀に深き注意を加へ忽ちにして發揚し來るを彼れ惡むべき厭ふ可き病疫こそ撲滅せざる可らず而して之を撲滅するには自ら應用の力を添ふることを辭せず」との觀念是れなり、此等同盟者が從來業に已に吾人に裨益を與へたること決して渺しとせず、而して余は固信す彼等は未來に於ても決して吾人を放棄することなきを、實に社會民度の上昇すると同時に病者若くは弱者を救護する人類の義務的觀念は益々上流人士の間に發揚し來る者なり、それ如斯觀念に驅られて我獨逸の二皇帝（ウヰルヘルム一世及び今帝ならん？）は前に社會的政策法を發布され造次にも邦家の慈父たることを忘れ賜はず撓まず屈せず窮民の保護策を奬勵せり、斯高尚なる法則に基かれ我聖明博愛なる　皇后陛下は賢くも本會に總裁なるの御裁許を下し賜はり其貴顯なる公孃貴婦人等は非常なる熱心を以て本會の事業を贊賛され又吾人は本日此會に於て殆んど全世界中各國の派遣員を相見るの榮を得たるは是れ正に各文明國々民が病者廢者及不幸者の安寧と幸福とを增進するの事業に皆同一觀念を有するを證する者なり、今や和蘭國首都「ハーグ」府に於ては露國皇帝陛下の御創意に係る平和會議が開かれ彼の厭ふべく避くべき戰爭の弊を除き若くは減ぜんとの方法を講じつゝあり而して之れと同時に我獨逸の首都伯林に於ては我　聖明文武なる皇帝及皇后兩陛下の最も御熱心なる御協贊の下に全世界の醫學魁推者及多くの慈善家相會して以て庶民が邦家の爲めに營爲する工作場若くは市場を荒らして益々其猖獗を極めんとする彼の惡むべく厭ふべき結核病を撲滅若くは退治するの方便を索めんとする實に斯二現象は共に他日廿世紀文明史を記する者の好材料にして其史に特筆大書さるゝは余の信じて疑はざる處なり、余は本會が執行する熱心なる討議に次で一般に義務的實行の振起し且つ今回の會合が同一觀念の下に營爲する國際的事業の端緒たらんことを希望す、余は獨逸肺結核患者療養處設立中央委員會々長たるの資格を以て玆に謹んで本會を開く仍て同委員會の決議に基き會長ラチボール公及び副會長プロフェツソール、フォン　ライデンの兩君が此席に就かれ目出度本會を整理されんことを希望す」と壯嚴なる容貌と明晰なる語辭を以て述べ終り直ちに其席をラチボール公に讓りければ伺公は會長席に就きフォン、ライデン氏は其右側の副會長席に就き先づ會長ラチボール公起立述べて曰く、

陛下及會員諸君、余は此席に就き會長たるを得るは余の大なる名譽とする處なり抑も庶民病たる結核病の撲滅策を講ずるに當り之れに參與し深き考案を巡らすのは決して學理を研究さるゝ醫師のみに一任し置くべきものにあらず庶民の各階級挙て之に參與し以て應分の力を添へざるべからず是余が喜んで此位置を瀆す所以なり皇后陛下が皇帝陛下の御協贊を經て本會に總裁たるの榮を下し賜はりたるは本會員の擧て喜ぶ處なり況んや、陛下本日此處に親臨ましまして以て本會の事業に熱心なる御協贊を示し賜はるに於てをや云々と述べ次で各聯邦王國君主各外國政府各團體各市町村等に向つて其同情を表し異れ且つ多數の代表者を派遣されたるを謝し最後に本日此席に在る各紳代表者及會員に向て熱心なる贊同を謝し且つ十分熱血を注いで以て惡疫撲滅の良成績を擧げんことを希望し終りて伯林市長キヨルヒネル氏を呼ぶ

同氏は中央議長席の下に設けある議員演說席に進み出で明快なる辯と溫容ある態度とを以て陛下及會員に向ひ伯林市を代表して本會の當市に開かれたるは當市の大に榮譽とする處なりとの意を述べ最后に伯林市は遠來の各貴賓に謝し大に之を歡迎する旨を述べ次で會長は伯林大學總長ゲハイムラート、ワルダイエル氏を呼ぶ同氏は伯林大學の代表者として祝辭を述べたり其意は本會の營爲する處は大學々者が剌苦經營したる學術的研究の結果を實地に應用するに在り、學理研究と實地應用と相並行せずんば社會の實利上毫も得る處なかるべし余は玆に本會の開會に接し吾人學者が經營する最後の目的將に達するに近づきしを喜ぶと冒ふに在り次で米國合衆國代表軍醫ドクトルボ

イド氏佛國代表者教授ブルカーデル氏英國代表者サー、ジュレンザー、スチワード氏伊國代表者教授マラグリアノー氏墨國代表者フォン、ドユブラーウ氏匈牙利國代表者コラニー氏露國代表者ベルテンゾーン氏等就れも各十分乃至二十分時間英佛獨三國語の中にて祝詞を述べ且つ各國政府皆な大に同情を表し熱心に本會の成效を望む旨を述らる（此場合に於て日本代表者鈴木大藍も祝詞を述ぶる筈なりしも伯林に大使館を設けある諸大國代表者のみ祝詞を述ぶることと内定したるを以て終に之を果す能はず遺憾！　次で會長は副會長フォン、ラィデン氏を呼ぶ

同氏は本會學術部の主働者たり且つ整理者たりされば本會の攻究すべき學術的問題に論及して曰く「本會の攻究すべき問題は彼の恐るべく厭ふべき庶民病たる結核に對して如何なる方法を運せば良く我可憐なる下等人民が其來襲を免かれ得べき乎に在り而して之を討究するに當り其全體を五部に分ち其各部門は現時内外諸國に於て其部專門を以て名ある諸大家を引きて或は部長とし又演者とす然れども結核撲滅は決して獨り學理的の事業のみにあらず必ずや國家的事業として總ての階級に於ける余等國民悉く之れに參與し奮勵以て其實行を期せざるべからず」と次で總書記長パンウキツツ氏の一二報告ありて最後に會長ラチボール公再び會長席に於て起立し先づ開會式の終りたるを告げ且つ今や特に第一日程に進まんとするに臨み先づ玆に陛下の御親臨を拜謝し奉り且陛下の萬歲を祈り奉らんとて全會員一齊に起立し右側樓上に在す陛下に對し三回の「フーラー」を連呼し　陛下には龍顏殊に麗はしく左手に束ねたる薔薇花を把り右手を擧げて御答禮を示され極めて御滿足の有樣にて直に歸人委員長ホーヘンローヘ公爵の御先導にて御退場遊ばされたり、後ち會長ラチボール公は第一部（結核病蔓延）會を開く旨を告げ其會長席を部長獨逸衛生局長ゲハイムラート、ケーレル氏及びストラースブルグのゲハイムラート、クリーゲル氏に讓れり

## 第一部　結核の蔓延

部長帝國衛生局長ゲハイムラート、キヨヘレル氏會長席に「エルザスロートリンゲン」州内務省醫務局長ゲハイムラート、クリーゲル氏副會長席に就き部長は先づ名譽推選の結果を次の如く披露せり

本部に於ける名譽會長　獨逸國ゲハイムラート、ビストール氏。ゲハイムラート、ルブネル氏（伯林）。オーベルメヅチナールラート、フォン、グラツセイ氏（民顔）。縣知事ゲハイムラート、ゲユンテル氏（ドレスデン）。縣知事フォン、ゴスレル氏（ストツトガルト）。オーベルメジチナールラート、ブアイフエル氏（ゲルムスタツト）。市長シユルツ氏（ブレーメン）。

外國　亞米利加合衆國ドクトル、ボイード氏（ワシントン）。ドクトル、ヌヌル氏（桑港）。伯爾義國ドクトル、デスゲインス氏（アントウエルペン）。英國サー、グレンザー　スチワード氏（エヂンブルグ）。佛國プロフエツソール、ブルアールデル氏。巴里市會議長ルチヒア氏（巴里）。伊國プロフエツソール、ドクトル、マラグリアノー氏（羅馬）。和蘭國ドクトル、コークセエール氏　墨國リツテルグーミー、フォン　ドユブラーウ氏（維也那）。ウンガルン國ドクトル、コラニー氏（ブダペスト）。露國ドクトル、ベルテンソーン氏（ペーテルスブルグ）。シユウエーデン國總長ドクトル、リンロート氏。ノルウエーゲン國總長ドクトル、ホルムボヘ氏。「シユワイツ」國總長ドクトル、シユミツト氏（ベルン）。

本部に於ける書記レギールンゲスラート、ドクトル、ショエン氏。プロフエツソール、ドクトル、コツセル氏（伯林）。私講師ドクトルクウィン氏（ストラースブルグ）。私講師ドクトル、ブラウエル氏（ハイデルベルグ）

以上名譽會頭に擧げられたる諸氏は會長の左側に設けある名譽會頭席（開會式の時各國代表者の在りし處）に着き書記も亦た會長の側に設けある書記席に就けり。

後ち其一の講演者たる帝國衛生局長キヨエレル氏は其會長席を副會長に讓り演說席に進み

（第一）庶民病たる結核病の蔓延及影響に就ての概論

と題して全世界上特に獨逸國内に於ける結核病の地理的蔓延を數年來獨逸衛生局に於て非常なる熱心を以て調査したるを極めて精密なる統計表に基づき詳述せり（中略）

右凡そ三十分時極めて明瞭に論述し終り直に會長席に復し第二講演者たる醫務局長クリーゲル氏を呼んで演壇に進ましむ同氏は

（第二）「人體生活に於ける外部の狀態と結核病蔓延との關係」

と題して凡そ二十分時間演說せり（中略）

（第三）可被保險人間に於ける結核の蔓延　　ゲブハルト氏（リユーベツク）

（第四）軍隊に於ける結核蔓延　　軍醫監チエルニンゲ氏（伯林）

（第五）家畜の結核及其人體蔓延に及ぼす關係　　オーベルメヂチナールラート、プロフエツソール、ボルリンゲル氏

右諸氏亦た何れも甲乙なく辯說流るゝ如く極めて熱心に說き去り說き來りて已に本會議の目的たる庶民療養處設立の必要に論及し初めたり會長は右演說の終るを俟ちて直に「ジスクツション」に移る旨を宣告し左の諸氏互に演壇に進み平均五分時宛論述せり。

（一）ドクトル、カチー氏（ブダペスト）「ウンガルン」に於ける結核の蔓延

（二）ドクトル、シユミツト氏（ベルン）「シユワイツ」に於ける結核の蔓延

（三）ドクトル、ブラウエル氏（ハイデルベルグ）煙草業者の結核

（四）ゲオルグ、マイエル氏（伯林）活版職工の結核
（五）ストラットマン氏（チューリンゲン）琢磨職工の結核
（六）區醫モーリツツ氏（チューリンゲン）同上
（七）ゲハイムラート、ペ、フレンケル氏　シユミツト氏の說に就て
（八）ゲハイムラート、ラーツ氏（伯林）市區と結核
（九）ドクトル、フリードレンデル氏（ダンチヒ）西「プロイセン」に於ける結核
（十）ランドラート、ブエーデラート氏（ブリロン）鑛夫結核
（十一）ドクトル、シユミツト氏（ベルン）ペ、フレンケル氏に答ふ

右終りて總書記長起立報して曰く我總裁皇后陛下は我等會員を來る水曜日帝國大劇場へ御招きありし又我名譽會頭總理大臣ホーヘンローヘ公は來る木曜日午後四時自邸内に於て大に園遊會を催し全會員を招待す諸氏奮て御參場あれと滿場拍手滿足を表し以て會長は散會を報ぜり午時午后五時なりき

午后七時伯林市は全會員を市會議事堂に招待し大に饗應す余等も亦た規定通り燕尾服を着し時間を遵へす其處へと赴きぬ、到れば市役處職員及名譽職員等皆燕尾服を着し一定の徽章を胸邊に揭げ樓上樓下都合良き處に整列して先づ互の紹介を終り來會者を樓上の大廣間へと導けり八時頃貴婦人紳士凡そ二千人會場に參集し最早立錐の地を餘さざりし午時市長キルヒネル氏中央高き處に上り伯林市に代り歡迎の意を表し又た市會議長ドクトル、ランゲルハンス氏（病理學者ランゲルハンス氏の父）は伯林市民に代り諸大家の熱心なる參集を謝し后ち陸軍樂隊は樂を奏し初め別室に設けある立食處は益々雜踏を加ふ余も辛ふじて一二片の冷肉と一杯の葡萄酒とを得たれば遙か隔りたる議事堂内に入り之を食ひ且つ飲み此間二三の知人と談話を試み杯して時器十時を報する頃に單身其處を辭せり而て此日々程尙ほ夕十時以後美術館庭園に於ける會合及散步を餘せり然れども余は最早之れに臨むの勇氣なく直に歸寓旅に就けり

## 第二部　結核病の原因

第二日目（五月二十五日）

午前九時會頭ラチボール公開會を報じ先づ二三の祝電を披露し後會員に乞ふて曰く抑も本會の起原は實に本日第二部會長たるゲハイムラート　ペ、フレンケル氏の昨年中央委員會に於て爲したる建議に基く者なり故に余は開會に先だち其謝意を表する爲め諸君一齊に起立せんことを望むと衆之れに應じ起立謝意を表し後ち會頭はフィデン氏は其席をプロフエツソール、フリエッケー氏に讓れり（本年第二部會長ゲハイムラート、コツホ及ペ、フレンケル兩氏の豫定なりしもコツホ氏目下不在なりしを以てフリエッケー氏之れに代る）

會長ペ　フレンケル氏先づ諸氏の厚情を謝し次で演說に先立ち本部に於ける名譽職を以て次の如く推選せりとて之を披露す

名譽會長　獨國　軍醫監ダンツエル氏。プロフエツソール、コルネツト氏　ゲハイムラート、プロフエツソール、エールリヒ氏。ゲハイムラート、プロフエツソール、モスレル氏。プロフエツソール、ゲハイムラート、ビルシユフエルド氏。一等軍醫ドクトル、シユルツエン氏。

外國　フオン、シユリイエツツ氏（亞米利加）。プロフエツソール、デニス氏（伯耳義）。サー、ヘルマン、ウエーベル氏（英國　プロフエツソール、ノカールド氏。プロフエツソール、メツユニコツフ氏（佛國）。岡田和一郎（日本）。プロフエツソール、カンバナー氏（伊國）。プロフエツソール、ワイクセルバウム氏。プロフエツソール、パルタウフ氏。ドクトル、フオン、ワイスマイル氏（墺國）。プロフエツソール、ホトキン氏、ドクトル、ウンテルベルゲル氏（露國）。ドクトル、リンロード氏。ドクトル、ホルムボベ氏（シユウエーデン）。ドクトル、エツゲル氏（シユリイツ）。

名譽書記　一等軍醫「ノイブルゲル」氏。私講師エドムンド、マイエル氏。ザニテーツラート、ドグトル、ウエルツブルグ氏

右披露後以上の諸氏はそれ〳〵一定の場處に着席し（余は敢て其責に當らずと雖も之を辭したる先例なきを以て已を得ず他の諸氏と共に名譽會長席に就けり）會長ペ、フレンケル氏は第一辯者プロフツエツソール、フリエッケー氏（ブレスラウ）

○（第一）結核桿菌と結核病との關係　フリエッケー氏（ブレスラウ）

壯艾なる語調を以て凡そ三十分時間右の要點に就き詳論せり（中略）

○（第二）結核桿菌傳搬の方法　ツエ・フレンケル氏（ハルレー）

同氏は最も明快最も活潑なる辯を以て凡そ四十分時間本題に就き詳說せり（中略）

○（第三）混合感染に就て　プロフエツソール、パイフエル氏　伯林）

○（第四）結核の遺傳抗毒質及素因質に就て　プロフエツソール、リヨフレル氏

右終りて會長は「ザスクツション」を開く旨を宣告し次の諸氏互に演臺に進み何れも熱心に自說を吐けり、

（一）肺結核の初期に就て　ビルシユ、ヒルシユフエルド氏（ブレスラウ）
（二）咽頭扁桃線肥大と結核との關係　私講師ドクトル　ブリーゲル氏（ブレスラウ）
（三）結核の原因に就ての統計　一等軍醫　フオン・ツアンテル氏（伯林）

（四）外傷と結核　ランネロンク氏、アシャール氏（巴里）

右終りて會長は第二部「ザスクツション」を終るを告げ次で結核原因の發明者として一般微菌學の泰斗として又本第二部會長の一人として名ある「ゲハイムラート」ロベルト、コッホ氏今や公務を帶びて伊太利に在り本部は特に同氏に電報を送りて以て敬意を表せんと發議せしに會衆直に拍手之を贊成し直に發電することに決し後其席を會頭ラチボール公に讓る會頭ラチボール公は獨逸皇帝陛下よりの祝電を朗讀し會衆をして起立敬意を表せしめ後散會を宣せり午時正午十二時（下略）

かうして、先生は再び伯林に引き返すと、既に印刷に廻つた第二のアルバイトの校正を急ぎつゝ、またその「最後且ツ最大ノアルバイト」と稱する小腦膿瘍論の脱稿に力を注がれ、傍らロンドンの萬國耳科學會へ出席い文部省よりの許可を心待ちされてをられたのであつた。そして、先生は、その席上、この最も力を靈くされた小腦膿瘍論を演說公表される積りであつたが、その演說申込期間たる五月三十日になるも文部省より何の音沙汰もなく、徒らに時期を失して、六月末に及ぶも許可は下らず漸く八月九日の夕、その八月八日の開會にも間に合はぬ頃に至つて初めて文部省よりの認可の辭令が先生の手許に屆いたのであつた。

これによつて、先生は早速巡廻切符を求め、二日遲れて萬國耳科學會に出席し、それよりパリに出、その地に二三日滯在の上、ベルギーのブリユツセルに廻り、ケルンに廻つて伯林に歸り、最後のアルバイトを仕上げて雜誌社に送り、直にハルレーを經、ミユンヘンに出て同地に一ケ月餘滯在の上、ローマに廻り、次でネーブルに出て、同地より歸朝の途につからられる筈であつた。然し、これも、論文が意外に捗取らず、又伊太利に廻つて歸國の途にいくには徒らに費用の嵩むを慮つて、豫定を變更し、十月二十二三日頃最後のアルバイトを仕上げると、急遽二十五日に伯林を發し倫敦に向つて、同二十八日郵船會社の土佐丸に乘船して歸朝の途に着かれたのである。

尙ほこの獨逸滯在期の先生の活動狀態に就ては、現存する文獻の外には、先生自身の自叙傳の中に、それ等によつて窺ひ知るを得ない機微の事實等も記されてゐるから、それをこゝにも引いておかう。



（横左日野三）生涯の恩人會學科耳國際回六第ッドッロ日一十月八年二十三治明

獨逸に居たのは明治二十九年から三十二年まで足かけ四ヶ年間であつた。その初め伯林に着いたのは五月四日で、私は相變らず伯林に居てもよく他人の世話をしたから逐に獨逸局長などの綽名を頂戴したが、私は伯林に着くと忽々自分の主義として研究以外に更に實地醫學や學制をも視察し見識を擴めることに意を用ひ、後から來た人にも其主義を吹込むで「ライテン」したから私の獨逸生活は極めて多事であつた。研究の方面では先づフレンケルの許に赴いて喉頭科の研究から始めたが、當時フレンケルと對立してクラウスが幅を利かせたからフレンケルに内證で其教室も訪れた。耳科ではやはりルーツエーとトラウトマンが兩々相對峙して互に鎬を削つて居たが、私は初めにルーツエーの教室に往つてヤンセンなどと共に仕事に從事したが、又祕にトラウトマンの教室にも足を運んだ。後日小腦膿瘍の「アルバイト」を仕上げたのは、その門下のトラウトマンの許で作したのであつた。又外科のは佐藤先生の紹介でベルヒマンとも親みを重ね主として腦外科や喉頭摘出に就いて研究した。斯くして蠢に申した通り、一段の修業を了つた後は參觀にも力を盡し Verein für medizinal-wesen にも加入して自分の意見も吐露し、フレンケルの教室の關係からその頃伯林に開かれた萬國結核豫防會に出席した。此會はカイゼルリングを總裁としフオン・ライデンが會頭、フレンケルが副會頭であつて一週間開會せられたが、私はフレンケルから推されて日本代表者として名譽座長の椅子にも座し又祝辭演說も試みた。その他モスコーの第十二回 Internationaler Kongress にも出席し萬國醫學會の專科會長も勸め演說もやり、時には今のレーニングラードから招かれて、その耳鼻科學會でも演說をやつた。明治三十二年にはルーツエー、ヤンセンと共にロンドンへ赴き万國耳科學會 Internationaler otologischer Kongress で Klinihin の Operationsmethode に就て演說をした。斯くして荏苒日月を過ごす間に　日本からは學位論文提出の催促が頻りと來るので、斯かる多忙の裏にルーツエーの教室で Klein-hirna, gass の稿をまとめ、フレンケルの教室で Schleimpolyp の Pathologie の研究を遂げた。斯くして歸朝の期日も迫つたから漫遊に取り掛り、先づミュンヘンにペツオルド及びハウグを訪うて三ヶ月間滯在し、ウキーンにボリツエル、ウルバンチツチ、ハーエツク　ペツク等を訪ね、ライプチヒ等各地の專門家を歴訪して一旦伯林に歸り、ロンドンに赴いて便船を得んとしたが、旅費が足りなかつたので其頃の支店長根津氏の好意で船醫の資格で乘船して歸朝したのが明治三十二年十二月の暮迫る二十日頃であつた。

## 六、獨逸留學時代の先生

この先生の自叙傳に就てみるも明かな如く、獨逸留學時代の先生の全貌を知る上には、その研究生活に於けると同樣、

相變らず衆を率ひては事を圖り、また世話好きにして社交家なりし、その逸話ともいうべき私的生活並にその對社會的な活動にも觸れておかねばならないであらう。況んやその研究生活が留學時代の先生の活動の蓋し一少部分にすぎざるに於てをやである。これに就ては幸ひ、先生自身の「ベルリン時代の回顧」といふ一文にもその一班が窺える。

余は明治廿八年、即ち日清戰役終了の直後文部省留學生として米國を經由して獨逸に留學した。以來ベルリンに四ヶ年滯在したのであるが、今から其の時代を回顧すると感慨無量なものがある。

此の留學は余にとつて重大な時期であつたのである。即ち夫れ迄は約七ヶ年間も外科醫として立つ考へで研究して居り、また醫學雜誌方面に第一人者と自信する位に活動してゐたのであるが、其目的を轉向、僅か三ヶ年間で新しい耳鼻咽喉科を開拓しようとしたのであつて、夫れが成功するか否かは此の留學が分岐點であつた。

而して從來の留學生は唯々研究所又は教室に入り或る問題のみに就て研究し、論文を發表すると云ふやり方であつた。余も從來のやり方よりすれば先輩のそれを踏襲する所であつたが余は生意氣にも其の方法を採らなかつた。

即ち國費を費つて留學する以上學術、技術方面は素より臨床、病院管理、醫政その他各方面に渉り開拓すべきであると考へた。唯々研究所、教室に入つて社會に無關心たるは不本意なのである。余は此の理想の下に恐らく研究には不便なベルリンの一番繁華な所に寓居して臨床、醫政又病院の管理方面や醫術の動き方面の多方面を研究したのである。

新陣代謝、先輩は日本に歸つて行き後輩が又やつて來るが、相手變つて主變らずで余は滯獨四年間重にガイド的に働いてゐた。途には誰言ふとなく、ベルリンに行けば岡田が居ると云ふ樣になり隱分余を頼つてやつて來る。斯る故にか伊藤隼三君は余にベルリン局長のニックネームを奉つたのである。

後輩には下宿の世話、研究所、教室入の世話迄し、人の爲めに時間を費すことを惜しまなかつた。從つて余の所に多數の人が出入する樣になり、遂に木曜會と云ふのを作り、在ベルリン本邦人百餘人が木曜日には必ず余の所に集合して時世を論じ又留學生としての利害得失關係を激論し、夫れは愉快なものであつた。

當時は京大が新設される事になり、教授候補の岡松三太郎、高根義人、井上密の諸君等が留學して來又東大關係よりも小野塚喜平次、山田三郎君や醫學關係では伊藤隼三、鈴木文太郎君、余の同窓では關場不二彥、鶴田禎次郎君等が居り、又陸軍方面では後の大將福田、山梨、大場の諸君、それに宮內省關係の留學生が多數居つた。

當時文部省留學生は月に約二百マルクで之を本邦の金に換算すると約百余圓で宮內、陸軍方面の留學費四五百マルクに比較すると遙に僅少で研究費の外私費にも不足がちで、殊に宮內、陸軍方面の留學生と對等に交際すると非常に不足を感ずるのであつた。夫れで余がリーダーとなり、木曜會で論議の結果、即時三百マルクを支出することを決議し、時の文部大臣蜂須賀侯爵に建議に及び、若し此の決議の容れられぬ時は文部省留學生を即時辭退する氣慨を示した。

幸にも採用され留學生は一躍三百マルクとなり、木曜會決議の目的は貫徹しリーダーの余も面目を施し愉快であつた。

余はそのやうにしてベルリン時代はガイド的に終始したのであるが、若し從來通りの遣方で研究のみに沒頭して居つたならば或はより以上學問界に貢獻することが出來業績を擧げ、立派な著書も出せたかも知れぬものと幾分後悔して居るが、余のベルリン時代の行動は學問界全體よりみて又國家の進展上よりみて其の是非善惡は第三者の判斷に俟つより他はない。

（日本醫事新報昭和十年一月五日　第六百四十四號）

これを以てするも明かな通り、先生の留學研究の對象は單に醫學にあるのみならず、醫術並にそれを現實的に運營する醫政の廣汎な領野にあつて、かゝる見地よりして臨床はもとより、病院管理、醫事行政の各般に亘つて廣く研究視察されたもので、かのアメリカを經由する時に於て、またその獨逸滯在期にあつて、各大學、病院等の視察、參觀に多くの勞をとられ、且つは又前述の如き伯林醫制協會に於ける日本の醫事並に醫師の社會的關係に關する講演の如きに於ても平素の用意、態度の程が窺える筈であるが、かゝる關心、態度といふものも、抑々は先生本來の爲人に根差すものともいふべく、伯林に於ても、その世話好きな社交性は遺憾なく發揮され、渡歐幾何もなくしてフイリップ街に又々梁山泊を現出し、前述の如く在留邦人の世話役、頭領としてその俊腕を縱橫に揮はれ、遂ひには「ベルリン局長」といふニックネームを得られる程の人氣、人望を內に集められたのであつた。

が、また外、外人間の社交場裡にあつても、〃アッシステンツ・プロフェッソール〃の肩書を附した名刺を作つては盛んに之を振り廻し、隨處で大に優遇されたといふ、が、これは、當時留學生中では大學の助教授は初めてであつた丈に、獨逸の大學や學會又は個人間でも大いに珍重されたものであつて、先生の渡歐の年の十一月十八日にはフレンケル教授の在職

二十五年の賀筵に招かれて列席されたのであるが、同夜は文部大臣を初め各大學教授、伯林市長、伯林の社交界數百の名士が夫妻揃つて出席し、盛んなる祝辭、演說の交はされたる中にも、往々にして「本日ノ祝宴ニハ日本ノ珍客教授岡田氏アリ云々」といふ言葉が挿さまれて、遂には先生も是等朝野の貴紳の間に伍して、一席祝辭を述べざるを得ない有樣となつた程であり、その社交性と共にその助教授の肩書も仲々當時は物をいつたものであつた。

かうして先生は、渡歐間もなく、內にあつては留學生並に在留邦人間の人氣者となつて重きをなすと共に、外、獨逸人間にあつても、ベルグマン氏、ルーツエ氏、フレンケル氏等々の彼地の碩學大家の間に可愛がられ、個人的な親交を結ぶと共に、Dr. W. Okada Assistenzprofessor an der Universität zu Tokio の名は獨逸人間にも鳴り響き、內外人の信望を得て、伯林社交界の花形となるに至つたのである。

されば、先生の伯林に至るや、該地の日本人と獨逸人との社交機關たる和獨會の會長となり、それを統率するのみならず、先生の該會長となるや漸次斯會を盛大ならしめて、先生の歸朝前最後のワイナハト、卽ち、三十二年十二月十七日ホテル・フィールヤーレスツアイテンで催した祝宴の如きには、獨逸上流界の貴紳淑孃二百五十有餘名を先生の名で招待するまでに至つて、當夜はウキルヒヨー翁、ゲルハルト翁等も夫々夫人令孃等を伴ひ來りて、幻燈、詩吟、獨逸人素人芝居、日獨混合芝居、獨唱等に打興じ、次で先生主唱の福引をやり、日本名產の漆器、陶器、編物等を景品にして大好評を博し、最後に舞踏會を催して閉ぢせるは翌日の午前四時頃にて、稀有な盛會であり、爲めに翌日の伯林の新聞は皆これを報じたといふ。

また一方、一月元旦、公使館や日本人倶樂部等で催す新年宴會の福引の餘興には、必ず、音樂の理學博士田中正平氏、豪商糸平の二男の田中釜吉氏等と共に先生が文句選定委員に選ばれ、一座を賑はすの慣習であつて、伯林滯在中の先生の內外の社交界に於ける人氣、人望の一斑は之を以てするも窺ひ知るを得るであらう。

當時の廻狀並に學資增額願書草案

かうして、また一方留學生の間にあつては、そのヒューラーとし、又ガイドとなつて、異境に在つて困迷せる者の世話萬端をみ、或は、一黨を糾合しては木曜會を組織し、國事を談じ、天下を論じ、或は留學生に共通の問題を捉へては、公共の爲に力を致す等、公正にして無私なる活動をなし、本邦留學生の爲めに爲す所頗る多かつたのであるが、文部省留學生の留學費値上運動の如きはその尤なるもの丶一つであつたのである。

これより先き、先生が伯林に着いて先づ第一に耳にされたものは、文部省留學生のその留學費の僅少にして、研究費に不足し、時としては私費にすら不足勝ちであつて、宮內、陸軍各省のそれに比するも輕少に失し、對等の交際すら出來ぬといふ不平、嘆訴の聲であつた。そして、先生が伯林の留學生活をなすに於てそれの至當なるが明かにされると共に、又、片山、長岡氏等の去つた後、陸軍の芳賀氏、井上密氏等と同居するに及んで文部省留學生への給與の差甚だしきを痛切に感じられるに至つたのである。

玆に於て、先生は明治二十九年の十一月の末に左の廻狀を廻して、各文部省留學生の同意調印を求められたのであつた。

拜呈　此度同學ノ友相談シテ學資增額願ヲ文部大臣ヘ差出心得ニテ表面上ノ願書ハ別紙ノ如キ單純ノ者ヲ連署ニテ差出シ裏面ニテハ專門學務局長及各關係ノ大學長及總長ヘ向　各ヨリ手紙及理由書ヲ差出シ生等ノ願意ヲ補助セン事ヲ依賴スル事ニ致シ度相談相經リ候間御贊成ニ候得者至急御記名御調印ノ上順次ニ御廻達ヒ成下最後ノ御方ヨリハ小生ヘ御返却成度奉願候也

尤モ御印御持參ナキ方ハ御記名ノ上書印を願度候

岡田和一郎 Philippstr 23 II

一八九

各位

學費增額願

私共儀

從來一箇年英貨百四十五磅ノ割合ヲ以テ學費金支給セラレ候處近來諸物價ノ騰貴ニ因リ生計上頗ル困難ヲ極メ學術研究上不利益不尠候間何分ノ御詮議ヲ以テ一ヶ年英貨百七拾貳磅迄御增給ヒ成下度此段連署ヲ以テ奉願上候也

明治二十九年十一月二十六日普國伯林ニテ

海外留學生　岡田和一郎㊞

かくて、鈴木文太郎、古在由直、大塚保治、土肥慶藏、朝永正三等々、在伯林の文部省留學生諸氏の贊成調印を得たのであつたが、中には「近來諸物價騰貴ニ因リノ文句刪除セラレン事ヲ希望ス」といふ土肥氏の如き修正案も出て、願書形式の訂正の上、十二月十九日之を時の文部大臣蜂須賀茂韶侯宛てに差し出したのであつた。之は翌三十年三月十二日に「目下詮議ニ及ビ難シ」として一旦却下されたが、再度の奇策は効を奏して、爲めに留學生一同その恩惠に浴し、大に先生を德とするに至つたのである。

而して又、翌三十年の十二月には、伯林滯在の醫學生十五名許りが先生の許に會合せるを機に、「爾今毎月一二回相會シテ學術上、醫學上等ニ就テ研究シタル事見聞シタル事ヲ互ニ演說討論シテ以テ之ヲ日本ニ報ズル事」とし、留學生一統の懇親を深めると共にその學術研究上にも盡力する處尠くなかつたのであつた。

從つて、先生は伯林に於ても、學會、宴會その他の會合にあつても、常に在留邦人間の音頭取の地位に就かされると共にまた常に衆に推されて、本邦人を代表し、彼地の貴紳碩學の間に伍して、堂々、祝辭、演說等を述べられるのが常であつた。

かうして、遠き異境の外地にあるも、先生は相變らずその眞面目を遺憾なく發揮して、衆を率ひては事を圖り、或は世話好きな社交性を存分に揮はれたのであつたが、物質上の困窮も亦た依然として同樣であつた。

然し、その寬達な眞面目は依然これらの困苦をも克服して、豪快な活動性を以てよく內外人の耳目を聳動せしめたものであつた。

こゝに芳賀榮次郎博士の回顧談があるから、それを最後に記しておかう。

我輩は明治十九年頃、東京醫學會の件で岡田君と知り合つて、東京醫學會雜誌に抄錄を出して貰つたりしてたのであつたが、何分ともに岡田君は融通の利く男で、事に當つて拘泥せず、物事を万事うまく進行させる人であつた。それで東京醫學會を組織するにも早速大澤謙二先生を引つぱつてくるといつた調子で、辯舌は巧みで、伸々の才物であつた。

明治二十九年の七月、伯林に行つた時には、フイリップ・ストラーセのバレステットの下宿に居つて、岡田氏はその眞中の十二疊かの一番廣い部屋を占領してゐたが、若い時からではあつたが伸々の大人で、我々留學生の世話を實によくして呉れたものである。何分自身では兄貴分の積りでをつたらしい。高木君等は尊敬の意味で「局長」といつてゐたが、我々は「村長」と稱してゐて、新しい留學生がやつて來たり、又は外の方から伯林に遊びに來たりする者があると、直ぐ「村長の處へ顏出しゝて來たか？」等と皆言ひ〳〵したものである。

同君は又「アツシステンツ・プロフェツソール」の名刺を作つて、盛んにふり廻したが、當時は留學生中では初めてゞはあり、外人間でも大に優遇されたものである。

大學の方ではフレンケルに特別の指導を受けて、患者等も自由に連れてきて手術等をやつてゐたが、フレンケルは「三百マルクを出せば俺個人のクリニツクに連れていつてやる」と言つて、三百マルク取つては自分の病家へも連れて行つて有益な手術等をみせてゐたやうである　が、この三百マルクが三月間位ひしか有効でなく、これには岡田君も渝からず困つてゐたやうであつた。當時の下宿代は四十マルクで三百マルクは仲々の重荷であつたことは察せられよう。

## 七、歸朝開講

かくして、先生は、前述の如く、十月二十八日、郵船會社の土佐丸に乘船して、英國ロンドンより印度洋を廻つて歸朝

の途につかれ、明治三十二年十二月十九日の正午横濱に着き、午後六時無事新橋驛頭に迎へられて、三年六ケ月の留學を終つて歸京せられたのであつた。が、これより先、政府は明治三十二年十一月十一日の官報を以て「帝國醫科大學法醫學ノ次ニ耳鼻咽喉科學ノ一講座ヲ設ク」といふ勅令を發布し、次で先生の歸朝を待つことゝなつたのであるが、こゝに於て初めて、我が國の大學に正式に、耳鼻咽喉科學の講座が設けられることゝなつたのである。

明治卅三年一月三日、歸朝早々の誕生日三十七歳
左より令夫人、先生、令孃和子

こゝに於て先生の歸朝と共に、同二十五日先生は醫科大學助教授に復職されると同時に耳鼻咽喉科講座擔任を命ぜられたのであつた。

こゝに當時の世評の報ずる處を再錄しておかう。

**耳鼻咽喉科講座**

舊臘歸朝の東京醫科大學助教授岡田和一郎氏は進つて教授に昇任する由なるが聞く所によれば耳鼻咽喉科講座は創設の事とて諸般の準備調はざるを以て本年三月頃ならでは開講の運びに至らざるべしと而して講場は元と寄宿舍を以て充てられるよしなれど未だ修繕出來ざるを以て不取敢第一醫院内科の外來診察場を以て之に充てらるゝ豫定なりと亦た該科の教授は第三四年生より始めらるゝ筈にて第三年生に學說を四年生に「クリニツク」を教授する都合なりと云ふ（東京醫事新誌明治三十三年一月）

◎耳鼻咽喉科講座　岡田學士歸朝早々講座開設ノ準備ニ暇ナク遑クモ三月ニハ開始セラルヽ豫定ニテ外來診察ハ本月十九日ヨリ開始セラル（大日本耳鼻咽喉科會々報明治三十三年二月二拾五日第五卷第一、二號）

先生の歸朝より開講に至る過程はこゝにこれ以上說明を加へる必要もあるまい。これより先、金杉英五郎氏の主宰せる大日本耳鼻咽喉科會に於ては、三十三年一月の常會を、先生の歸朝歡迎會を兼ねて、同廿三日午後一時上野精養軒に於て開催したが、その席上、先生はその最新の智識を以て「海外耳鼻咽喉科學會ノ概況」なる題下に一場の演說を試みて、歐米に於ける斯學會の發達狀態を報告する處があつた。こゝに佐藤恒夫氏によるその摘錄を揭げて以てその一班を紹介しておかう。

予ハ四五年前歐洲ニ留學ヲ命ゼラルヽ前ニ當リ本會ニ於テ一回演說ヲナシタルコトアリ爾來今日ニ至ル迄異鄕ノ羈客トナリ會員諸君ト一堂ニ會シテ高說ヲ拜聽シ又自己ノ說ヲ述ブルコト能ハザリシハ遺憾ナリトス今回無事歸朝シ本日會員諸君ノ鄕重ナル歡迎ヲ受クルニ當ツテ一場ノ演說ヲナスベキ筈ナレドモ何分歸朝後日尙淺クシテ學問上ノ談話ヲナスコトヲ得ズ又歐羅巴ニテ一二ノ研究シタルコトアレドモ既ニ諸雜誌上ニ於テ發表シタリ他ノ不日之ヲ發表スルコトヽシ本日ハ海外耳鼻咽喉科學會ノ概況ト題シテ聊カ予ガ在歐中見聞シタルモノヲ述ベント欲ス

獨逸ニ於テ現今斯學界ニ於ケル專門家ハ數多ニシテ學會ノ盛ナルハ先ヅ伯林喉頭病學會ナリベ・フレンケル氏之ガ會長タリ予ハ在伯林中每會之ニ出席シ一二回談話ヲ試ミタル事アリ

獨逸ニ於テハ、ハイデルベルヒニ南獨逸喉頭病學會アリユーラツツ氏ヲ主トシモーリツ、シユミツト氏ザイフエルト氏シエヒ氏等皆之ニ會ス其盛ナルコト伯林喉頭病學會ニ次ク其學會ヨリ發表スル業績ノ如キハ寧ロ伯林喉頭病學會モ遜色アラントス予ハ一回此會ニ出席シタルコトアリ

獨逸ニ於ケル喉頭病學會ハ前述ノ二學會ニシテ喉頭專門家ハ一人モ不幾會員ナカルカト云フニ左ニ非ズ彼ノ有名ナルクラウゼ氏ノ如キハ頑然固執シテ入會セズ同氏ハ聲音ノ病及ビ喉頭結核療法ニ就テハ發明スル處アリテ有名ナレドモ學會ニ入ルコトヲ爲サズ從テ各地ノ專門家ト氣脉ヲ通ゼズ、患者　少ク門生ハ來ラズト云フノ狀態ニテ逆境ト云フノ外ナシ

其他墺國、英國、米國等皆專門學會ヲ開ク歐洲ニテハ年々萬有學會ヲ開キ喉頭學會モ亦萬有學會ノ一獨立分科トナリ各地ノ學會々員相集リ遠在ノ諸家一堂ニ於テ熱心ニ談論ス予モ二回此會ニ臨ミタリ昨年ハシエヒ氏ノ紹介ニテミユンヘンニ於テ開カレタルトキ出席スルノ

榮ヲ得タリ。

滿四年ニ一回萬國醫學會ヲ開ク昨年露國モスコー府ニ開カレタル時ハ尚ホ未ダ耳科ト喉頭科ト合シテ一部ヲ形成セシガ次回ノ巴里ニ於テ開カル、會ニハ耳科ト喉頭科ト各別々ニ獨立分科トナルベキ筈ナリ盛ナリト云フベシ同會ハ實ニ世界萬國ノ專門家ニシテ平常書籍又ハ雜誌上ニテ互ニ其名ヲ知レルモノ、相集合シテ專門學會ノ考究ヲ爲ス處ナリ。

喉頭科學會ハ前述ノ如シ耳科學會ハ如何ト云フニ獨逸國ニ於テハ獨逸耳科學會アリ七八年前開設セラレ、現今三四百人ノ會員ヲ有シ日本人ノ名モ亦往々見ル處タリ漸次盛會ニ進ムガ如シ本會ハ昨年ハハンブルヒニ開カレタリ一昨年ウユルツブルヒニ開會ノ時予モ之ニ臨席シタリ。同會員中有名ナルハルーゼ、ケツセル、ザウアー、キヨルネル、ハルトマン等諸氏ニシテ本會モ亦伯林喉頭學會ニ於ケルガ如ク固執シテ入會セザル名士アリハルレノシユワルツエ氏是レナリシユワルツエ氏之ニ出席セズト雖ドモ同氏ノ門下ニ在リテ錚々タル、スタツケ氏、ブルーネルト氏等ハ皆此會ノ會員ニシテシユワルツエ學派ハ決シテ獨逸耳科學會ト遠隔スルコトナシ。

萬國耳科學會アリ是亦英、佛、獨、米、魯、以等ノ諸國ノ專門家互ニ相會合スルモノニシテ昨年ハ英京倫動ニ於テ開カレタリ予モ亦出席者ノ一人ナリキ次回ハ佛國ニ於テスル筈ナリ。此ノ如ク各地ニ於ケル專門學會ハ多シ而シテ伯林、南獨逸、墺國等ノ諸學會ニ於テハ悉ク「デモンストラチヲン」的ニシテ患者ヲ示シテ各自ノ意見ヲ付シ研究ヲ爲ス者ナリ大會ハ之ニ反シ一定ノ宿題ヲ設ケテ之ヲ考究シ異說紛々タルヲ一致セシメントスルノ意ニ出ヅルナリ。

昨年倫動ニ開カレタル萬國耳科學會ノ宿題ハ慢性化膿性中耳炎根治法ノ適應症ニシテ既往四年間ノ記載ヲ抄錄集採シテ以テ何レガ是ニシテ何レガ非ナルヤヲ考究スルナリ本問題抄錄ヲ附托セラレタルハグラスゴーノマスレー氏（腦體外科ヲ以テ名アリ）紐育ノナツプ氏ポリゼル、及佛人ルー氏以上四人ニシテ今氏等ノ意見ヲ約述スレバマスレー氏ハ慢性化膿性中耳炎ハ速ニ根治的手術ヲ要ス何トナレバ複雜ナル空洞ヲ有スル乳嘴突起內ニ化膿性病原アルトキハ單ニ竇ヲ破リ洗滌スルノミニシテハ充分其病原ヲ去ルコト能ハズ吾々ノ外科的技術ヲ要スト云フニアリ。

ポリゼル氏ハ之ニ反シ勿論一定ノ場合ニハ此ノ根治的手術療法ヲ施スベシト雖ドモ慢性化膿性中耳炎ニ悉ク應用スルハ早計ナリ吾人ハ明ニ骨癌ノ存在部分ヲ知ルヲ得ルガ故ニ當該部分ノミヲ除去スルヲ可トス危險症狀ノ發起セザルニ之ヲ應用スルノ適當ナルヲ信ズル能ハズト

予ハポリゼル氏ノ手術ヲ見タルコトアリ氏ハ根治的手術ヲ行ヒ得ル人ニアラザルヲ信セリ氏ノ手術的療法ハヤンセン、トラウトマン等諸氏ノ手術ニ比スレバシユワルセ氏的手術ニシテ根治的手術ト云ヒ難シ。他ノ二氏卽チナツプ、ルーハポリゼルノ說ト稍同意ニシテ危險症狀ナクシテ猥リニ根治的手術ヲ行フベカラズ但シ何時ニテモ施術シ得ルノ準備ヲ怠ル可ベカラズト云フ。

ルーゼ氏ハ別ニ一報告ヲナシテ曰ク余ガ「クリニツク」ニ於ケル十年前ヨリノ統計表ヲ見ルニ三四年來手術數減少セルガ如シ之レ患者ノ減ジタルニアラズ又慢性化膿性中耳炎ナル疾病ノ減却セルニ非ラズ予ハ本病ニ「フオルマリン」液ノ洗滌ヲ行ヒシ以來肉芽、「コレステアトーム」等ノ如キハ大低治スルヲ得タリト。

ケルネル氏スタツケ氏ノ如キ根治的手術急進派ハ出席セザリシガ獨リヤンセン氏ハマスレーノ說ヲ贊シ述ブル處アリシモ終局保守的治療法ニ加擔スルモノ多ク急進派ノ說暴ラズシテ終レリ之ニ次デ必要ナルハミユンヘンニ於テ開キタル萬有學會ノ宿題ナル聾啞教授法ノ革進ニシテ卽チウルバンチツチ氏ベツオルド氏等ハ多クノ啞生ニハ尙殘音ヲ有スルコトヲ發見シ之レニ因リテ啞生ノ聽力ヲ恢復セシメ以テ音ヲ解セシムルノ方法ニ據ルノ可ナルヲ唱ヘタレドモ、各聾啞學校ノ教師ハ直ニ冷評ヲ下シテ耳ヲ傾クルモノナカリキ

予モ亦伯林聾啞學校長ワーテル氏ノ記載セルモノヲ見シニベツオルド氏等ノ說ヲ冷評スルニ止マレリ。

近來ニ至リ耳科醫ノ多クハベツオルド氏等ノ意見ヲ贊シ是レ全ク天然的教育法ナリトシミユンヘンニ於テ聾啞教育者ト耳科醫ト對演シタリシガ幸ニミユンヘンニ於テ殘音應用ノ教育法ニヨリテ好成績ヲ得タル者多カリシカバ耳科醫ノ說ニ決シ之ヲ全國ニ示シ遂ニ聾啞教育ハ耳科醫ノ監督ノ下ニ在ルベシト定メラレタリ是レ實ニ聾啞教育法ノ一大革命ナリトス。

其他萬有學會ニ於テハ喉頭癌腫及ビ喉頭結核ニ就テ考究サレタルモノ多シト雖ドモコハ既ニ諸雜誌ニモ記載セラレタルガ故ニ之ヲ略ス

（拍手）（大日本耳鼻咽喉科會々報明治三十三年二月二拾五日第六卷第一、二號）

## 八、本邦に於ける耳鼻咽喉科學の歷史

歐米に於ける斯學の發達狀況が斯くの如くであるとすれば、先生の歸朝し、我が國に於ける最初の大學開講に至る迄の本邦耳鼻咽喉科學の發達狀況は如何であつたらうか、その歷史的發展の樣相をこゝに瞥見しておくことゝしよう。

富士川游博士の著名な「日本醫學史」に依ると

明治十年相原學而、米醫クロツスノ耳科書ヲ譯シ、之ヲ耳科約說ト題シテ世ニ行ヒシニ次ギテ吉田顯三ノ耳科約說（明治十七年刊）アリ、長町耕平ノ耳科約說（明治十九年）アリ飯高芳康ノ耳科攬要（明治二十二年）アリト雖モ、西洋諸家ノ所說ヲ傳譯セルニ過ギズ。明

治二十五年金杉英五郎、獨逸ヨリ歸リ、耳鼻咽喉科ヲ唱道シ、耳科學及鼻科學ヲ著ハス。我ガ邦ニ斯ク專門科アルコトココニ始マル。次デ賀古鶴所ノ耳科新書アリ、金杉英五郎等ガ耳鼻咽喉科會ヲ興シテ專門雜誌ヲ刊行スルアリ。明治三十三年岡田和一郎、獨逸國ヨリ歸リテ、東京醫科大學教授ニ擧ゲラルルニ及ビテ、我ガ醫科大學ニ始メテ耳鼻咽喉科アリ、耳鼻咽喉科ハコレヨリ益々發達シタリ。

と簡單に概括してあるが、幸にしてこゝに大正元年發行の「東京醫學會創立廿五年祝賀論文」第三輯の中に「東京醫學會ノ創立二十五年祝賀會紀念ノ爲メ我耳鼻咽喉科學ノ此二十五年間ニ本邦ニ於テ爲シ遂ゲタル發達ト沿革トヲ記述シ之ヲ世ニ公ニ」した先生自身の『本邦ニ於ケル耳鼻咽喉科學發達史』があるから、その中より、こゝに該當する前驅期並びに第一期の部分を引用してその詳細を紹介することにする。

## 第一發達史綜論

余ハ便宜上全發達史ヲ前驅期、第一期第二期ニ區分シテ記載セント欲ス。

### 前驅期

余熟ラ耳鼻咽喉科學ノ二十五年前ヲ回顧スルニ歐洲ニ於テハ耳科學及ビ咽喉科學共ニ當時尙ホ未ダ醫科大學ノ正科トシテ採用サレズ隨テ之ヲ擔當セル專門學者ハ尙ヲ未ダ正教授タルノ榮位ヲ得ルニ到ラザリシト雖ドモ其學術ノ進歩ハ既ニ甚ダ顯著ニシテ耳科ニ於テハ解剖生理、病理ニ關スル業蹟ノ豐富ナルハ素ヨリ論ナク診斷學領域ニ於テハ音叉試驗ニ深キ趣味ヲ拂ヒ、治療醫學領域ニ於テハシユワルツエー氏乳嘴突起壓開術ノ實驗的批評ニ熱中シ將ニ現今盛ンニ應用サレツヽアル所謂根治手術ニ移ラントスルノ過渡時期ナリキ、又喉科ニ於テハ等シク解剖、生理、病理ニ關スル研究ノ業ニ已ニ旺盛ノ時期ニ達シ得タルノミナラズ診斷學領域ニ於テハ普國フリードリヒ第一世ノ喉頭癌事件ノアリシ爲メ全歐洲ノ喉頭病學者ガ互ニ研究的ニ此問題ヲ解決センコトヲ計リ爲メニ喉頭癌ト獨他喉頭疾患特ニ粘膜角化肥厚症等トノ類症鑑別ヲ確實ニ爲スコトヲ得、又タ治療學領域ニ於テハ喉頭內手術ノ十分ナル成効ヲ遂ゲ特ニペ、フレンケル氏ノ如キハ喉頭癌ヲモ之レニ由リテ治セシムルコトアルヲ豫言シタル時期ナリキ、然ルニ本邦ニ於テハ管ニ斯科ノ專門家ノ存セザルノミナラズ當時ノ先進者ノ中ニハ世ニ耳科學及喉科學ナル獨立專門科學ノ實在セルヲ識ル者甚ダ少キガ如キ狀況ナリキ、是レヨリ先キ明治九年靜岡ノ柏原學而氏「耳科提綱」ヲ同ク十七年大阪ノ吉田顯三氏「耳科約說」ヲ同ク二十一年讃州ノ長町耕平氏「耳科約說」ヲ同ク二十二年飯高安康氏「喉科覺要」ヲ前後相次デ出版サレタリト雖モ此等トテモ身自ラ專門家トシテ研究ト經驗トヲ盡ネテ之ヲ書キシニアラズシテ唯ダ當時珍奇ヲ好ム



醫課家ノ常態トシテ歐米ニ在リシ一小册子ヲ記述シタルニ過ギザリシヲ以テ其出版ガ歐米諸先進國ニ於テ少クトモ耳科學ノ業ニ已ニ公然一分科トシテ樹立シ居ルヲ公告シタルノ効ハ決シテ沒スベカラザルモノナラント雖モ其學術上及ビ實地醫學上ニ及ボシタル効力ノ如キハ蓋シ皆無ナリシナランハ斷言スルヲ憚ラズ、實ニ此等ノ出版後幾多ノ歲月ヲ經ルモ終ニ世ノ注意ヲ引キ得ザリシノミナラズ又タ世人ヲシテ之ニ因リテ專門的研究ノ必要ヲ認メシメ得ザリキ。又タ戶塚文海氏ハ明治ノ初年ニ於テ喉頭檢査用ノ反射鏡ヲ英國ヨリ購入シテ之ヲ日本ニ於テ初メテ實地ニ使用シ(同氏存生中余ニ口傳セリ)、又タ佐藤佐氏ハ邦人トシテ初メテ墺國維也那大學ノポリーツエル氏耳科「クルズス」ニ參預シ其大體ヲ習得シテ歸朝シタリ(是亦タ同氏ノ口傳)ト言フモ戶塚氏ハ久時海軍ニ奉職シ後チ醫業ヲ廢シタルト佐藤氏ハ歸朝後專ラ內科醫トシテ世ニ立タレタルトニ由リ兩氏共ニ尙ホ未ダ本邦ノ耳鼻咽喉科學發達史ニ著キ影響ヲ爲スコトヲ得ザリキ、然レバ廿五年前ノ我醫學界ニハ尙ホ未ダ獨立專門的ノ耳鼻咽喉科學ノ存在セザリシガ蔽フベカラザル事實トス、余ハ當時恰モ東京醫學部一年學生ナリシガ當時ノ內科ハドクトル、ベルツ氏ニ由リ又タ外科ハドクトル、スクリバ氏ニ由リ講ゼラレタリ又タ耳科ハ外科ノ一部トシテスクリバ氏ニ由リ講ゼラレタル者ナリ、而シテ余ガ三年學生ノ時診斷學ヲ佐々木政吉氏ニ學ビシガ此時暗室內ニテ喉頭鏡ヲ使用スルノ法ヲ授ケラレ、又タスクリバ氏ノ臨床ニ於テハ盛ンニ耳科領域ニ屬スル疾患ニ對シトロルチユ氏反射鏡使用ノ下ニテ耳用瀉斗ヲ用キ、又タ時ニ歐氏管「カテーテル」ヲ使ヒタルヲ又タベルツ氏臨床ニ於テモ亦臨機喉頭鏡ヲ使用シタルヲ記憶セリ、而シテ余ガ四年學生トシテ專ラ臨床實地ヲ研修セシトキハ恰モ良シ內科ニ於テハ靑山胤通氏外科ニ於テハ佐藤三吉氏共ニ多年獨逸ニ於テ修得シタル新進ノ學術ヲ齎シテ歸朝シ任ニ第二醫院ニ於テ就キシ後チナリシテ以テ上記ノベルツ、スクリバ兩氏ノ臨床ノ外第二醫院ノ兩教授ノ臨床ニ於モ亦タ多少耳科ト喉頭科トノ知識ヲ與ヘラレタリ、特ニ佐藤教授ハ耳科的診療ヲ殆ンド遺憾ナク實行サレタルノミナラズ亦タ數バ乳嘴突起ニ向ツテシユワルツエ式乳嘴突起壓開術ヲ然カモ顏面神經及瘻竇靜脈ヲ損傷セザル樣注意シツヽ實行シ又タ稀レニ耳性硬腦膜外膿瘍ヲモ好結果ヲ以テ手術サレタルコトアルヲ記憶セリ、而シテ明治二十二年(余ノ四年學生時代)ニ佐藤教授初メテ喉頭癌ニ喉頭全抽出術ヲ施シタル治驗ヲ東京醫學會雜誌ヲ以テ報告セシコトアリキ、余ハ明治二十二年々末ヲ以テ東京醫科大學ヲ卒業シ直チニ佐藤教授ノ助手トナリ第二醫院外科ニ勤務セシガ當時ノ第二醫院ノ外來患者ニハ外科ニテ耳疾(耳漏ニハ硼酸水洗耳管聽ニハ「カテーテル」通氣)鼻病(鼻茸ニハ鉗子捻斷 扁桃腺肥大症(切斷)等其多數ヲ占メ又タ內科ニテハ喉頭病(特ニ慢性喉頭加答兒、喉頭結核回歸神經麻痺等)決シテ少カラザリシヲ目擊シタリキ、故ニ此時代ニ於テハ耳科モ喉科モ共ニ未ダ獨立的專門科トシテ世ニ立ツヲ得ザリシト雖ドモ上記ノ如ク外科ト內科トニ於テ該時代ノ實用上ノ要求ニ先ツ不十分ナガラモ應ジ得タルヲ確信ス。然レドモ時代ノ進行ハ自ラ他ノ風潮ヲ喚起スルモノニテ即チ明治二十二三年ノ頃ニ到リテハ漸ク他日我醫學界ニ於テ耳鼻咽喉科學ノ獨立的勃興ヲ見ルノ萌芽ガ表ハレタ

リ、而シテ此萠芽ノ種子ヲ我醫學界ニ植付ケタル新時代ノ産兒トハ抑モ誰レナル乎ト問フニ余ハ之ヲ現ニ京都帝國醫科大學教授ノ位置ニ在リテ熱心ニ斯學ノ推輓ニ從事サレツツアル博士和辻春次氏ニ指サント欲スル者ナリ、實ニ同氏ハ余ト同窓ノ學友ニシテ其學生時代明治二十一二年頃）ヨリ夙ニ耳科學ニ對スル趣味ヲ有シ二十二年末余等ト共ニ大學ヲ卒業スヤ余ハ終生外科ヲ以テ世ニ立タンコトヲ期シタルニ似ズ彼ハ直チニ耳科專攻ナル名目ノ下ニテ大學院ニ入學シ席ヲ第二醫院佐藤教授ノ外科ニ置キテ一般外科研修ノ傍ラ特ニ耳科的研究ニ其精力ヲ用ヰタリ、是レ彼レガ在學中報告シタル臨床的業績ノ多クハ耳科的領域ニ屬スルニ徴シテ明カナリ、即チ「インフルエンザア」中耳炎ニ就テ（明治二十四年三月東京醫事雜誌）ナル論文中ニ初期ニ於テ鼓膜切開術ノ效アルヲ說キ、人工鼓膜ニ就テ（同上同年）ナル論文中ニ十回之ヲ使用シテ效アリ特ニ綿花球ニ「グリセリン」或ハ單尼泥硼酸「ワセリン」ヲ浸シテ用ヰタル者ニ於テ有效ナリシヲ擧ゲ、乳嘴突起骨膜炎ニ就テ（同上同年）ノ論文中ニ早期手術即チ鑿開術ノ必要ヲ論シ、シーグル氏濕斗ノ治療上應用（同上二十八年）ノ論文中ニ乾性中耳加答兒症ニ之ヲ用ヰテ鼓膜按摩ヲ施シ效アリシヲ證シタル等是レナリ、然リト雖ドモ彼ハ當時或ル事情ノ爲メ久時此素志ヲ一貫スルヲ得ズシテ一旦中途ニシテ之ヲ廢シ寧ロ純乎タル外科醫トシテ世ニ立タザルヲ得ザルコトヽナリ明治二十五年外科醫長トシテ新潟病院ニ赴任シ次デ臺北病院外科醫長ニ轉ジ後チ明治三十三年京都醫科大學外科ノ助教授ヲ拜命スルニ到リシ者ナルヲ以テ後チ數年官命ニ由リ耳鼻咽喉科專修ノ爲メ歐洲ニ留學シ後チ歸朝シテ現今ノ位置ニ就クヲ得テ初テ二十年前ノ素志ヲ再ビ鼓ニ繼續シ遂ニ其目的ヲ達シ得タル者ナリ、故ニ現時耳喉科專門家トシテ世ニ立テル者ノ中ニテ最モ早ク耳科ニ着眼シ且ツ多少ナリトモ耳科的業績ヲ世ニ公ニシタル者ヲ選ベバ余ハ先ヅ指ヲ和辻春次氏ニ屈スルヲ躊躇セズ、然レドモ和辻氏ハ當時尙ホ外科ノ一部トシテ之ヲ研究シタルニ過ギザリシヲ以テ尙ホ未ダ本邦耳鼻咽喉科創業者タルノ月桂冠ヲ戴クコトヲ得ズ唯ダ現時ノ和辻博士ノ前身ガ既ニ己ニ外科ニ於テ之ヲ爲シタルト又タ其業蹟ガ本邦耳科學史上ニ光輝ヲ放チツヽアルトニ由リ正ニ本邦醫學界ニ耳鼻咽喉科學ノ種子ヲ植付ケ幾分ノ萌芽ヲ出シタル者ト見テ決テ不可ナカラント確信ス、而シテ本邦耳鼻咽喉科創業者タルノ名譽ノ月桂冠ヲ戴ク者ハ明治二十二年歐洲ヨリ歸リ直チニ耳科專門家タルノ旗幟ヲ揭ゲタル賀古鶴所氏及ビ次デ二十五年同ク耳鼻咽喉科專門家トシテ歸朝シ特ニ斯學ノ爲メニ努力サレタル金杉英五郎氏トナサザル可ラズ由リテ余ハ賀古氏歸朝前ヲ本邦耳鼻咽喉科發達史上ノ前驅期トナシソレ以後ヲ其第一期ト定メ記述セント欲スル者ナリ

## 第一期

此期間ハ僅カニ十年未滿ノ短期間ナレドモ本邦耳鼻咽喉科學發達史上蓋シ特筆セザル可カラザルノ必要時期トス、何者此期間ニ於ケル先輩諸士ノ着眼點ト不屈ノ精力トハ現時特ニ大成ニ近カントシツヽアル我耳鼻咽喉科學ナル大厦ニ不動ノ基礎ヲ置キタル者ナリ即チ他日美花ヲ着ケ好果ヲ結ブベキ高樹ノ若芽トシテ萠ヘ出タル者ナリ、此不動ノ基礎ナクンバ焉ゾ能ク此處ニ柱ト石トヲ建ツルコトヲ得ン又タ此萠芽ノ健全ナル發育ナカリセバ焉ゾ能ク花ト實トヲ見ルベキ高樹ノ實在ヲ期スルコトヲ得ンヤ、是レ余ガ此時期ヲ改メテ我發達史ノ第一期トナシ此處ニ特筆スル所以トス

本邦廿四五年前ノ醫學界ニ尙ホ未ダ獨立科學トシテ耳科モ又タ喉科モ共ニ存在セザリシハ上述ノ如ク明カナリ、然ルニ此時期ニ於テ先ヅ第一ニ耳科專門家トシテ我醫學界ニ其旗幟ヲ揭ゲタルノミナラズ嘗テ歐洲ニ於テ專攻シタル學術ヲ盛ンニ世ニ鼓吹シタル者ハ賀古鶴所氏トス、實ニ同氏ハ明治二十一年軍醫在職中山縣元帥ニ隨ツテ歐洲ニ航シ滯歐一ヶ年先ヅ佛國巴里ニ於テドクトル、シャツテリー氏ニ就キ次テ普國伯林ニ於テ敎授ヤコブセン氏ニ就キ耳科學ヲ修メ兼テ實地ヲ研究シ翌二十二年無事着朝スルヤ直チニ陸軍々醫學校教官ニ補セラレ玆ニ初メテ本邦陸軍々醫ニ向ツテノ耳科學講習ガ開始セラレタリ、又タ明治二十四年溢谷日本赤十字社病院內ニ時ノ院長醫學博士橋本綱常氏ト協議ノ上耳科外來診察處ヲ開始セリ是レ本邦ニ於テ耳科診察所ノ第一ニ開カレタル者ナリ、而シテ同氏ハ尙ホ神田小川町ノ自宅ニ私立耳科院ヲ設ケ公務ノ餘暇ヲ民間耳喉科患者ノ診療ニ從事セリ、然ルニ同氏ノ耳喉科診療ハ從來非專門家ノ爲シタルソレト大ニ其趣キヲ異ニシ當時業ニ已ニ十分ノ進況ニ在リシ歐洲ノ最進耳科學ヲ實地ニ就キ修メタル手腕ト精巧ナル舶來ノ器械トヲ以テ實施サレタルニ由リ同氏ノ耳科診療ニ於ケル名聲ハ蓋シ旭日昇天ノ如ク暫時ニシテ興昇シ爲メニ赤十字社病院ノ耳科部モ又タ小川町ノ耳科院モ共ニ忽チニシテ患者蝟集シ門前市ヲ爲スニ到レリ、賀古氏ハ一面ニ於テ如斯夜ヲ日ニ次テ不幸ナル、病者ノ診療ノ爲メ其一身ヲ委ネタリト雖モ又タ他ノ一面ニ於テハ時代相當ノ學術的研究ニ從ハレ且ツ斯學ノ普及ヲ企圖シタリ、即チ明治二十四年東京ニ開カレタル第一回日本醫學會ニ於テ「耳病ニ就テ」ト題シタル演說ナナシ耳病ノ區分、耳病合併症ノ危險ナルコト等ヲ詳述シテ以テ本邦醫學界ニ向ツテ熱心ナル警告ヲ加ヘ、又タ明治二十五年「耳科新書」第一版ヲ著ハシテ之ヲ世ニ公ニセリ、而シテ該書ハ主トシテポリーツエル氏、ハルトマン氏、シユワルツエ氏等ノ耳科書中ヨリ摘錄編纂シタル者ナレドモ就中纂啞ニ關シテハ東京盲啞學校ニ於テ檢査シタル成績ヲ揭ゲ又タ卷末ニ集元方ノ病源候論中耳病ニ關スル全文ヲ轉載シテ以テ讀者ノ參考ニ供セリ、故ニ余ハ之ヲ以テ本邦ニ於テ專門家ノ手ニ成リシ耳科書ノ濫觴トナス、去レバ賀古氏ノ出現ハ本邦醫學界ニ一大反響ヲ與ヘタル者ニテ即チ當時ノ醫學者ヲシテ多少ノ耳科學的趣味ヲ喚起セシメ得タルコト明カナリ、隨テ早晩整然タル耳喉科學ノ勃興向ツテ不動ノ基礎ヲ敷キ或ハ又タ萠芽發生ヲ示シタル者ト爲ス迄モ決シテ不可ナカルベシ、然ルニ賀古氏ト殆ンド同時ニ即チ明治二十五年五月ドクトル、金杉英五郎氏耳鼻咽喉科專門家トシテ歸朝シ爾來盛ンニ斯學ノ進歩ト且ツ普及トヲ企圖サレシニ由リ此他日大ニ勃興スベキ耳鼻咽喉科學ノ萠芽ハ益ス繁茂シ又タ他日大ニ築キ上ゲラルベキ耳鼻咽喉科學ノ基礎ハ愈ヨ確實堅固ヲ加フルコトヲ得タリ

金杉英五郎氏ハ東京大學醫學部別課醫學科卒業後（明治二十年即チ二十五年前）醫學研究ノ爲メ獨逸ニ留學サレ、同二十二年伯林ニ於

テ卒業試驗ニ及第シテ「ドクトル」ノ學位ヲ受領シ後チ直チニ耳鼻咽喉科專門醫タランコトヲ志シ先ヅ伯林ニ於テ耳科教授ルーツニ氏ヤコブソン氏鼻咽喉科教授ベ・フレンケル氏クラウセ氏ニ就キ後チエルランゲンニ於テ鼻喉科教授キーセルバツハ氏及ビフライシエル氏ニ就キ又タウエルツブルグニ於テ耳科教授キルヒネル氏鼻喉科教授ザイフエル氏等ニ就キ其實地ヲ研キ又タ研究ニ從事シ已ニ明治二十四年九月ノ東京醫事新誌上ニ同氏ガウエルツブルグヨリ寄送シタル乳嘴突起鑿開術ノ臨床的實驗ト題シタル論文ヲ揭ゲシメテ以テ手術ノ適應症、手術器械、手術々式等ヲ世ニ公示シタリキ。故ニ金杉氏ノ耳鼻咽喉科專門醫タラントノ決心ニテ之レガ研究ニ從事シタル時ハ殆ンド賀古氏ト同時期ニ在リシコト毫モ疑ヒナシト雖ドモ然レドモ本邦ニ於テ先登第一ニ專門家タルノ旗幟ヲ揭ゲテ其業ニ從事シタル者ハ賀古鶴所氏ト爲サヾル可ラズ、而シテ金杉氏ハ獨リ時期ノ點ヨリ觀ラルレバ正ニ賀古氏ニ於テ第二番ニ專門家トシテ世ニ立チシ者ナリト雖ドモ然レドモ金杉氏ハ在歐數年特ニ耳科ト鼻咽喉科ト兩ツヲ兼修シ得タルト又タ賀古氏ノ陸軍ノ公職ニ從事セザルベカラザルニ似ズ純乎タル一私人トシテ已レノ欲スルガ儘ニ世ニ活動シ得ルノ自由ヲ有シタルトニ由リ同氏ノ歸朝開業ハ我耳鼻咽喉科學發達ニ向ツテ蓋シ前者ニ優リタル特種ノ影響ヲ與ヘタル者ナリ、余ハ是レヨリ金杉氏初年ニ於ケル事蹟ノ大要ヲ序セン

賀古氏ハ初メ赤十字社病院ノ診察處ヲ耳科外來診察所ト名ケ又タ自宅診療處ヲ耳科院ト稱シテ專ラ耳科疾患ノ診療ニ重キヲ置キシガ金杉氏歸朝スルヤ先ヅ耳科ト鼻喉科トヲ合同シテ一科トナサンコトヲ企テ玆ニ耳鼻咽喉科ナル名稱ヲ付シ先ヅ醫學博士高木兼寛氏ノ東京病院內ニ其診療處ヲ開キ傷ラ日本橋區久松町ノ自宅ニ東京耳鼻咽喉科醫院ヲ開キ患者ノ診療ニ從事セリ、而シテ同氏ノ手腕モ亦タ忽チニシテ醫學界及社會ノ等ク認ムル處トナリテ日々數百ノ患者氏ノ許ニ集リ毎ニ門前市ヲ爲スノ盛況ヲ來タセリ、斯クテ金杉氏ハ他ノ一方ニ於テ大ニ意ヲ後進者ノ誘導ト斯學ノ普及トニ注カレ、明治廿六年以降自宅ニ耳鼻咽喉科研究所ヲ開キ先ヅ其門下ニ集リシ者原田貞夫、佐藤信郎、葛目猪太郎ノ三氏ニシテ次チ之レニ加ハリシ者松本貞二郎、酒井好、渡邊藤、和田魚之助ノ四氏トス、而シテ此等ノ諸氏ハ何レモ皆ナ已ニ開業サレタル少壯醫學者ナリシヲ以テ一旦金杉氏ノ研究所ニ入ルヤ忽チニシテ斯學ノ大體ニ通ジ以テ次デ耳喉科ノ臨床的實地ノ研究ヲ積ミテ前後相次テ耳鼻咽喉科專門醫トシテ世ニ分立スル事トナレリ、又タ二十九年十月愛宕下慈惠醫院ニ於テ三ケ月間宛ノ耳鼻咽喉科講習ヲ開始セシガ之レニ來ルモノ亦多カリキ、而シテ此時ニ當リ金杉氏ハ東京耳鼻咽喉科會ナル者ヲ起シ毎月第二及第四木曜日ヲ期シテ上記ノ門下生及市內多數ノ實地醫士ヲ自宅ニ招集シテ盛ンニ或ハ抄錄談或ハ實驗報告等ヲ爲シテ以テ互ニ斯學ノ研究奬勵及ビ普及ヲ企圖サレシガ、爾來此研究所ニ集リ來ル篤志家年ト共ニ增加シ未ダ數年ナラザルニ京濱ヲ初メトシ爾他各地方ニ該研究所ヲ出テタル專門家ノ續々トシテ開業スルコトトナレリ、於之前ノ東京耳鼻咽喉科會ハ此等ノ專門的研究ヲ終リタル金杉氏門下ノ少壯醫家及ビ當時漸ク他ノ方面ニ於テ輩出シ來リタル二三ノ同學者ト及ビ此科ニ趣味ヲ有シタル一般醫師トノ入會ニ因リテ大ニ擴張サレ又タ其會規ガ改メラレテ玆ニ



（二十九年々末）初テ現今尙ホ吾人ニ由リテ經營サレツヽアル大日本耳鼻咽喉科會ト名ヶラレタル學會ノ誕生ヲ見ルニ到レリ、加之金杉氏ハ二十六年十一月以降自家研究所若クハ東京耳鼻咽喉科會若クハ最後ニ大日本耳鼻咽喉科會ノ發展ノ爲メ毎ニ一種ノ機關雜誌ヲ發行シタリ是 初メ耳鼻咽喉科雜誌ト名ヅケ三十年大日本耳鼻咽喉科會々報ト改メタル者ニシテ余之ヲ通覽シテ當時金杉氏ガ如何ニ斯學ノ普及トル輓推ノ爲メ其非凡ノ精力ヲ用ヰテ奮鬪努力シタリシヲ窺ヒ知ルヲ得タリ

今ノ大日本耳鼻咽喉科會ヲ統率シ又タ機關雜誌ヲ發行スルハ全國ニ在ル多數ノ同學者ノ共同的責任ノ下ニ實行サルヽヲ以テ決テ至難ノ業ニアラズト雖ドモ世ニハ惟々僅カニ少數ノ短期講習ヲ終リタル專門家ノミ開業セル此創草時代ニ於テ敢テ屈セズ撓マズ自家一片ノ精力ノミヲ頼ンデ或ハ口舌ニ或ハ墨跡ニ斯科各方面ニ亘レル論說ヲ發表シ以テ斯學會ト斯雜誌トヲ間斷ナク繼續シ得タルハ余ノ大ニ敬服スル處ナリ、而シテ金杉氏モ亦二十六年ニ於テ耳科書ヲ公ニセリ、是レ復タ其大體ニ於テキルヒネル氏等ノ耳科書ニ基キ著述サレタル者ナレトモ就中其總論中ニ於テ乳嘴突起鑿開術ヲ自家ノ經驗ニ基キツヽ最モ詳細ニ記載シ又タ其各論中ニ於テ「外聽道ノ黴菌病」ヲ自家實驗ノ「アスペルギルス」患者ノ病床錄ヲ以テ飾リ又タ「急性中耳加答兒症」、「慢性中耳加答兒症」、「急性中耳炎」等ニモ多數ノ自家實驗例ヲ追記シ以テ實地家ノ參考ニ供シタリ、是レ當時ニ在リテ賀古氏ノ耳科新書ト共ニ醫界ノ雙璧トシテ大ニ稱用サレタル者ナリ、

斯クテ賀古金杉兩氏ハ殆ンド同時期ニ於テ共ニ耳科若クハ耳鼻咽喉科ナル旗幟ヲ飜シテ專門學的働作ヲ開始シ然カモ賀古氏ハ陸軍ニ關繫アル日本赤十字社病院ヲ根據トシテ立チタルト等シク金杉氏ハ海軍ト密接セル慈惠醫院及東京病院ヲ立脚地ニ選ンデ起リ而シテ共ニ日ニ月ニ益々盛運ニ赴キシノミナラズ、兩氏ノ開キシ自宅診療處モ亦愈ヨ繁榮ヲ加ヘ特ニ賀古氏ハ二十九年陳軍々醫監ノ豫備トナリシ後チ自宅全部ヲ病院ニ供シ其全力ヲ耳喉病者ノ診療ニ向ケシトキニ於テ又タ金杉氏ハ二十八年々末駿河臺南甲賀町ニ於ケル新築病院落成ヲ告ゲ之レニ移リテ更ニ設備ヲ改メ規模ヲ擴張シタル時ニ於テ其極ニ達セリ。然リ而シテ此等二先輩ノ如斯成効ハ忽チニシテ世ニ一種ノ風潮ヲ喚起シ卽チ社會人士ヲシテ瀕リニ「耳ト喉トノ病氣ハ宜シク專門醫ノ診療ヲ仰グベシ、然ラザレバ治スベキ者モ治セズ又輕キ者モ重クナルコトアリ」ト絶叫セシムルニ到レリ、去レバ余ハ當時醫科大學第二醫院外科ニ奉職中ニシテ日々多數ノ耳鼻咽喉患者ヲ一般外科的外來患者中ニテ診療シ來リシニ係ラズ此時期以後ニ於テ俄然トシテ其數ノ減少シタルヲ記憶セリ、是レ實ニ兩氏カ喚起シタル新風潮ノ形チノ上ニ現ハレタル現象ニシテ而シテ後チ數年ナラズシテ時ノ政府ガ耳鼻咽喉科專修ノ爲メ特ニ留學生ヲ海外ニ派遣シ其歸朝ヲ俟チテ其講座ヲ新設シ以テ耳科ト鼻喉科トヲ內外科ヨリ分離セシムルノ內議ヲ決定スルニ到リシモ亦タ復タ實ニ兩氏ガ喚起シタル此新風潮ノ影響ニ職由スル者ト余ハ確信ス、故ニ余ハ此點ニ就テハ滿腔ノ熱心ヲ以テ兩氏ニ向ツテ敬意ト謝意トヲ表セント欲スル者ナリ

金杉氏ニ遲ルヽコト二三年ニシテ堀內謙吉氏獨逸ニ於テドクトルノ學位ヲ受領シ尙ホ次デ耳科ト鼻喉科トヲ專修シテ歸朝シ直チニ居ヲ

大阪ニトシ先ヅ緒方病院ニ新設シタル耳鼻咽喉科ノ醫長トシテ就職シ一意專心斯科患者ノ診療ト斯學ノ臨床的研究トニ從ハレタルニ由リ爾後未ダ數年ナラズシテ同氏ノ名聲復タ關西ニ嘖々トシテ傳（ラレ、病者ノ氏ノ許ニ集リ來ル者取テ東京ニ於ケル上記兩氏ニ讓ラザルノ程度ニ達シタリ、而シテ同氏ハ三十二年大阪今橋ニ於ケル堀内耳鼻咽喉科病院ノ新築落成ヲ期シテ緒方病院ヲ辭シ此處ニ獨立ノ旗幟ヲ飜シ益ス熱心ニ斯科ノ發展ニ勤メタリ、去レバ堀内氏ノ歸朝開業ノ本邦耳鼻咽喉科學發達史上ニ多少ノ影響ヲ與ヘタルコト素ヨリ論ナキナリ

又タ是レト殆ンド同時期ニ於テ卽チ廿九年ニドクトル、小此木信六郎氏ノ歸朝シ居ヲ東京ニトシタルニ由リ我東京ノ耳鼻咽喉科界ハ更ニ一明星ヲ加フルコトヲ得タリ、實ニ同氏ハ夙ニ獨逸語學ヲ學ビ其造詣甚ダ深クシテ余等ノ如キモ明治十五六年頃氏ニ獨逸語學ノ爲メ師事シタルコトアリキ而シテ同氏ハ同十九年笈ヲ負フテ獨逸ニ渡航シ主トシテチユービンゲンニ於テ醫學ヲ修メ二十四年醫學全科ヲ卒業シ當時業ニ已ニ他日ノ立脚地ヲ選定シ得タル者ニヤ「梅毒性内耳炎ニ就テ」ナル卒業論文ヲ提出シテ「ドクトル」ノ學位ヲ受領シ、後チ五年間同地耳科教授ワーゲンホイセル氏ノ助手ヲ勤メ以テ實地ヲ磨キ又タ研究ニ從ヒ其正ニ蘊奥ヲ極ムルニ及ンデ歸朝シタル者ナリ、故ニ氏ノ歸朝スルヤ直チニ本郷元町ニ小此木耳科院ヲ開キ盛ンニ病者ノ診療ニ其敏腕ヲ振ハレタルト同時ニ又タ他ノ半面ニ於テ或ハ濟生學舍ニテ耳鼻咽喉科ニ關スル臨床講義ヲ開始シ又ハ自宅ニ多數ノ實地醫ヲ集メテ講習會ヲ開キ抔シテ以テ亦タ斯學ノ進歩ト其普及トニ努力サレタリ

ソレ當時ノ醫界ハ如斯狀況ノ下ニテ少クトモ實地上ノ關係ニ於テハ事實上耳科ヲ外科ヨリ又タ喉科ヲ内科ヨリ殆ンド全然分離シ得タル者ナリ、啻ニ實地上ノ關係ニ於テ分離シ得タルノミナラズ余ノ觀ル處ニ由レバ學問上ノ關係ニ於テモ亦タ漸ク獨立的外觀ヲ與ヘタルノ形式ナキニシモアラザリキ、是レ上記ノ諸氏ガ何レモ自家ノ講習會ヲ設ケ頻リニ斯科專門家ノ訓育ニ努力シタルノミナラズ或ハ口ニ或ハ筆ニ熱心ニ斯科ノ發達ト背及トヲ催進シタルノ事跡ニ徴シテ明カナリ

故ニ諸氏ガ明治二十二年以降約十年間ニ於テ我耳鼻咽喉科ノ發達ノ上ニ致シタル効績ノ偉大ナルハ蓋シ筆紙ノ能ク盡シ得ル處ニアラザルナリ、然リ而シテ諸氏ノ效績ノ偉大ナルハ正ニ偉大ナリト雖ドモ何事モ創業時ノ狀態トシテ歐洲諸家ノ既得學說ノ傳達ト之レガ實地上ノ應用トニ忙殺サレタルガ爲メ其精力ノ幾分ヲ新事實ノ研究ニ向クルノ遑ナカリシト又タ隨テ原著的論文ノ比較的僅微ナリシナ遺憾トスベシ

然リ而シテ諸氏ノ置キタル不動ノ基礎ハ遂ニ成ヲ告ゲタリ又タ諸氏ノ植付ケタル種子ハ前途多望ノ苗芽ヲ出シタリ、於之自然ノ趨勢ハ其基礎ノ上ニ石ト柱ノ建ツ時ガ來レリ、又タ此前途有望ノ苗芽ハ愈々培養サレテ獨立ノ樹木トナルノ期ガ來レリ、卽チ明治二十八年日清戰役ノ結局ヲ結ブヤ時ノ政府ハ又タ留學生ヲ海外ニ派遣スルノ議ヲ決シ、先ヅ其學課ト候補者トヲ選ブニ當リ前來諸氏ニ由リ熱心ニ鼓吹サレタル耳鼻咽喉科學ヲ帝國醫科大學ニ新設セザルベカラザルノ必要ヲ認メ次デ時ノ醫科大學長小金井教授ハ醫科大學教授會ノ決議ナリトヲ當時外科ノ助教授タリシ余ニ向ツテ耳鼻咽喉科學專修ノ爲メ留學スベシトノ内命ヲ傳ヘラレタリ、是レ余ニ取リテハ實ニ晴天ノ霹靂ト一般意外ノ内命ナリシヲ以テ大ニ其決答ニ躊躇シタリキ否ナ余ハ本來終生外科ヲ以テ世ニ立タンコトヲ期シ今マ現ニ外科助教授ノ榮位ヲモ拜受シ居ルヲ以テ敢テ他ヲ望ムノ意ナカリシニ由リ再三之ヲ固辭シタレドモ余ノ尊敬スル先輩諸氏ノ切ナル勸告アリシガ爲メ不才敢テ其選ニ當ラズト雖ドモ强テ之ヲ辭スルハ諸氏ノ厚意ニ報ユルノ道ニアラズト信ジ唯タ倒レテ而シテ後チ止ムノ決心ニテ遂ニ其命ニ從フコトヽナリ、明治二十九年三月出發、先ヅ伯林ニ到リ耳科學ヲ教授ルーツエ、教授トラウトマン及ビ講師ヤンゼン氏等ニ又タ鼻喉科學ヲ教授ベ、フレンケル、同ク、フウセ同イマン、同ローゼンベルグ等諸氏ニ學ビ後チミユンヘンニ轉ジテ教授ベツオルド、同ハウグ兩氏ニ親炙シ後チ更ニ墺國維也那ニ轉ジテ耳科學ヲ教授ポリーツエル及同ウルバンチツツエ兩氏ニ鼻喉科學ヲ教授ストオルク及ビ同ヒヤリー兩氏ニ學ビ三十二年十二月歸朝、直チニ醫科大學助教授ニ復職サレ同時ニ新設耳鼻咽喉科講座ノ擔任ヲ命セラレタリ、於之吾人ハ初メテ東京帝國大學醫科大學ニ耳鼻咽喉科教室ノ設ヲ見ルニ到レリ（下略）

## 九、日本耳鼻咽喉科學の發祥と教室の變遷

かうして、先生は、明治三十二年十二月十九日無事歸朝せられるや、同二十五日醫科大學助教授に復職、同時に耳鼻咽喉科講座擔任を命ぜられて、翌三十三年一月十九日より、切通し通用門内にある舊外國教師館（現今の南門を入つた左手、即ち物療内科の北病室のある箇處）の一棟を使用して、こゝに外來診察所を開かれ、又同時に外來臨床講義をも開始されたのであつた。

これ實に本邦に於ける大學に耳鼻咽喉科の開設せられた最初であつて、この耳鼻咽喉科醫局發祥の明治三十三年といふ年は、日本耳鼻咽喉科學發達史上忘るべからざる年である。

然し、當時、獨墺の大クリニツクに於て勉學研究し、而も英米佛露各國の最新のクリニツクを巡歴して、一大抱負を以て歸朝し、剩さへ最新の知見に加ふるに、萬難を排して三千圓餘の新しき醫療器械と千五百圓有餘の歐米新鋭の著作を携

へ來つて、之をこゝに提供すると共に、又斯學の研究に要する外來診療所と教室並びに斯科所屬の助手、介補及び看護婦等を請求したるに對し、僅かこの狹小の外來診察所と並びに一名の助手、二名の看護婦とのみしか許可されざりし、當時の先生の心中の不滿や蓋し察して尙ほ餘りあるものがあつたらう。

而も尙ほ、先生にあつては俗吏の規定する處、忍び難きを忍んでこゝに本邦最初の教室を開設せられたのであつた。

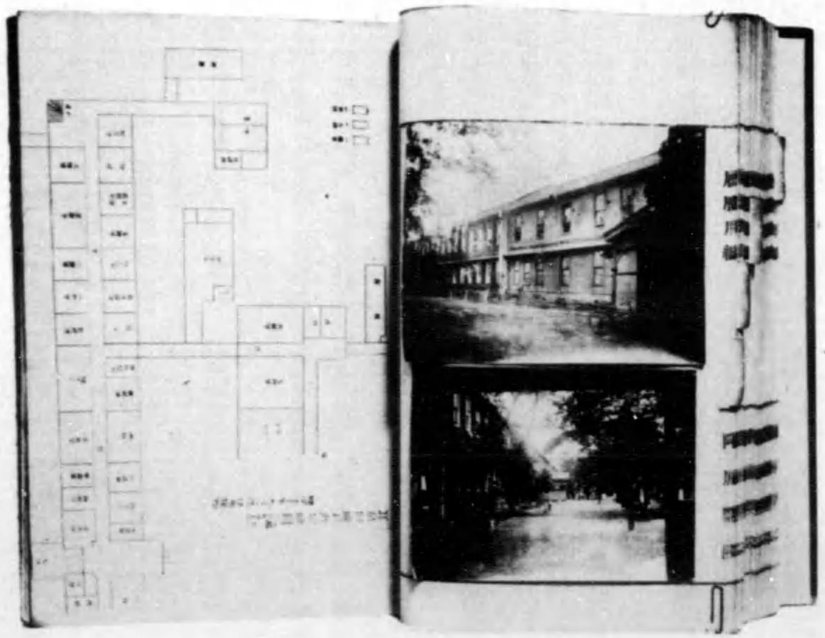
この教室開設當時の狀況は先生自身の自敍傳の中に具體的に記されてゐるから、それをこゝに掲げておかう。

## 第九　教室開設當時

教室の開設は歸朝の翌年卽ち明治三十三年の春であつた。教室は切通しの側の教師館で外來診察丈け始めた。之より義、東京に於ては明治三十一年十一月に耳鼻咽喉科の講座が開設せられ私の歸朝を待つて居た。然し私の不在中の教授會は未だ耳鼻咽喉科の何たるを充分理解して居らなかつたので講座は開設しても斯かる小分科には病室も不要であらうし、指導者は助教授を以て足れりとなし、私は耳鼻咽喉科の助教授には任ぜられたけれど唯々外來診察所丈を與へられたので、その冷遇に耐へ兼ね、歸朝以來西片町の里方に同居しながら青山學長の許に再三足を運び、病室を作り正教授を設ける膝詰談判に數次赴いたのであつた。

此頃小此木信六郎氏の紹介を以て菊池徜一氏が醫局員として來て呉れたので大に助かつた。又福井から大谷則知氏も入局した。然し困つた事には病室がなく手術を要する患者は悉く外科の病室を借りて入院させたが、一番閉口したのは此の秋に外山正一氏が中耳炎に罹つた時で此の際はスクリバ氏の病室に收容し、スクリバ氏は私の手術を見度いといふので指導兼助手といふ役目で立ち合ひ中原德太郎氏も助手をした。初めは乳嘴突起炎の手術をやつたが暫く經過を見て居る間に腦膿瘍の診斷が確實となり、二次的にその手術を行ひ頗る良好の成績を得たけれど、不幸にして手術後一週間に腦膜炎を起して鬼籍に上られたのであつた。斯くして病室がないから患者は方々の病院に分け入院させ、無論第二醫院へも送つたし、私立病院では上野の丸茂病院などにたのんだ。當時の外來は極めて多く其數は二三百人に達したことが有り、無理だとは思つたが幾多の手術を外來で行つた。其頃は殊に乳嘴突起炎の症例が多かつたからどうしても病室がないと手術を充分に行ふ事が不可能であり且つ助教授では講義をしても權威がなく大任を果すことが不適當であるから一時はこんな待遇では其職を辭し度いと上申し、漸く次年度に其實行を見ることになつた。そして此年の暮に之も小此木氏の紹介によつて久保猪之吉氏が教室へ來て呉れるやうになつた。

巷時計臺と舊寄宿舍跡の教室



明治三十四年四月頃時計臺に移り病室に十八人の患者を收容する事になつた。此頃小兒科の弘田教授の記念講習會が有つて屢〻耳鼻咽喉科の小兒科と深い關係にあるので講義をした、又本邦に「アデノイド」が多かつたから私の外來では悉く指頭診斷を勵行した。

かうして、我が國最初の記念すべき耳鼻咽喉科の教室は、岡田助教授の下に、明治三十三年一月十九日を以て、舊教師館の一棟に、長崎醫專出身の菊池循一氏を助手に、また山口縣出身の大谷則知氏を介補として開設せられたのであつたが、開設も間もなくにして、患者の增加著しく、また學生の聽講も愈々熱心の度を加へ、遂に教室の手狹と人手の不足とが感ぜられ、教室の開設間もなく、同三月十日に時計臺に一時移轉し、舊學生寄宿舍跡の一部（現在の綜合建築內科の玄關附近）の修理成るに及んで、同じくその六月十八日そこに移つて、患者十五名を收容し得る病室と不完全ながら手術室、研究室、圖書室、機械室、助教授室、醫員室、看護婦室等を備へた一過的教室の成立をみるに至つたのであつた。が、更らに翌三十四年の四月には、教室を元大學本部であつた時計臺（官長屋から無緣坂口に通ずる處にあつた「鐵門」――現在の精神科と好仁會賄所のある處――の突當り、卽ち現今の外科教室の建築されんとしてゐる處、當時玄關先に大なる百行松一樹あり）に移し、その奥に豫診室、更らにその奥にポリクリの室兼再來診察室を（後ち更らに一室を設けて外科手術室とす）、また教授室、手術室、器械室、看護婦室、研究室、醫局、病室等は之を階上に設け、臨床講義は佐藤外科のクリニックに於て行ひ、爾來八年間こゝにあつて、後ち明治四十三年九月九日再び舊學生寄宿舍跡に移り更らに先生の退職後の大正十五年九月に新築落成せる現今の教室に移つたのである。

而して、その間、明治三十四年一月には久保猪之吉、淺井健吉の兩氏が入局したが、これ學士入局の最初として特記すべき事項であつた。

こゝに於ては、差當り創設時代の教室及び教室內の變遷を先生自身の筆する處に從つて次に展開してみよう。

初メ余ガ外來診察所ヲ開始セントスルヤ當時醫學士ニシテ斯科ヲ希望スル者尙ホ一人モナカリシニ由リ長崎醫學專門學校出身者ニシテ

曾テ青山教授ノ介補ヲ奉職シ小此木ドクトルノ許ニ在リテ耳喉科ヲ實修シタリシ菊池循一氏ヲ小此木氏ノ紹介ニ由リテ助手ニ採用シ又タ山口縣出身ノ大谷則知氏ヲ田村光顯氏ノ紹介ニ由リテ介補ニ採用シ而シテ月水金三日ノ午前ヲ余ノ診察時ト定メ同時ニ學生ニ向ツテ外來患者臨床講義ヲナスコトトナシ又タ他ノ火木土三日ノ午前ヲ再來患者診察時ト定メ余及助手介補之レニ當レリ、後チ數月患者日ニ益ス增加シ學生ノ聽講又タ愈ヨ熱心ヲ加ヘ教室爲メニ人手ノ不足ヲ感ズルニ到リシニ因リ佐藤啓道（現ニ下ノ關市ニ開業）及ビ安井祥四郎（現ニ日本橋區蠣殼町ニ開業）兩氏ヲ介補ニ採用スルコトトナレリ次デ同年六月十八日舊學生寄宿舍ノ一部ニ修繕ヲ加ヘテ此處ニ教室及病室ヲ開始スルコトトナレリ、於之余ハ辛フシテ患者十五人ノ收容ヲ認許サレタルヲ以テ之レニ不完全ナガラモ手術室、研究室、圖書室、機械室、醫局、看護婦室ヲ附屬セシメテ先ヅ一過的教室ノ成立ヲ告ゲタリ、余ハ從來唯タ外來診察所ノミヲ有シタルニ由リ當ニ耳科的外科ノ診療ト研究トニ甚ダ不便ヲ感ジタルノミナラズ殆ンド常ニ責任アル外科ノ遂行ヲ躊躇シタリシニ係ラズ此時以後ハ一週一回（一時間半ノ規定）四年學生ニ向ツテ臨床講義ヲ爲スコトトナシ又タ努メテ種々ノ外科的手術及ビ複雜ナル器械的診療法ヲ供覽シ得ルコトトナリヌ、

（中略）斯クテ初メノ一年ヲ過ギシガ此期間ニ大學ニ於テ診察セシ患者ハ新患者二千四百五十六人再來患者二万三千四百六十八人ニテ病室收容患者ハ百二十四人ナリキ（下略）

明治三十四年余ノ教室ハ此年一月初メテ醫科大學卒業ノ醫學士ニシテ斯科專門ヲ以テ世ニ立タント決シタル篤學者二人ヲ得タリ即チ久保猪之吉及淺井健吉ノ兩氏是レナリ、當時余ノ助手定員僅カニ一人ニシテ而シテ菊池循一氏已ニ其任ニアリシヲ以テ兩氏ハ副手（無給）ノ位置ニ坐セリ、其他中村平輔、長野榮三、齋藤清、川北辰吉、淺川健三ノ諸氏前後相次デ介補トナリ、尙ホ專科生ヲ募リ七名ニ入學ヲ許シ抑シテ我教室モ漸ク發達ノ緒ニ着ケリ、而テ助手菊池氏ハ余ノ創業ニ於テ已ニ小此木「ドクトル」ノ許ニテ修得シタル斯科學上ノ知識ト及ビ斯學ニ對スル非凡ノ趣味トヲ以テ余ヲ援助シタルニ由リ創業雜務ノ爲メ殆ンド忙殺サレントセシノミナラズ局員少キガ爲メ日日病用モ亦益ス繁ヲ加フルノトキニ當リ良ク二三ノ介補ト協力シテ遺憾ナク其任務ヲ全フシ且ツ尙ホ寸暇ヲ窺ツテハ之ヲ研究ニ利用スルコトヲ努メ或ハ屍體ニ就キ或ハ解剖教室貯藏ノ數百ノ日本人頭蓋骨ニ就テ明細ナル觀察ト測定トヲ爲シ就職未ダ年ヲ超ヘザルニ「日本人顳顬骨ノ耳科外科的解剖」ナル業績ヲ完結シ之ヲ此年ノ日本外科學會ニ於テ發表シタリキ而テ同氏ハ此年五月私費ヲ以テ獨逸留學ヲ企テ直チニ助手ヲ辭シテ彼地ニ航シロストツク大學キヨルネル教授ノ許ニテ耳喉科臨床的練習ト及ビ此領域内ニ於ケル學文的研究トニ從フコトトナリヌ

於之副手久保猪之吉氏菊池氏ヲ襲フテ助手ニ任セラレ爾今醫務ト雜用トヲ悉ク統制スルコトトナリヌ、

これによつて、教室創業當初一二年間の變遷狀況は明かであるが、尙ほこゝに當時先生の下に助手として働かれた菊池循一氏並びに淺井健吉氏の當時の思ひ出があるからそれをこゝに揭げておかう。

菊池博士は先生を偲ぶ座談會で次の如く述べておられる。

先生は明治三十三年正月耳鼻科開設のその前年の十二月十九日に御歸朝になりました。その時の旅裝の中から取出した色んな物は總て目新しい物ばかりであつたと思ひます。その新しいといふことを申上げるのは、私はそれ以前に本郷元町の小此木先生のお宅に當時の大學第二醫院の青山先生の所に通ひつゝ御厄介になつてをりました。從つて耳鼻咽喉科として專門家が如何なることをやつてゐるかといふことは大概認識してをつた積りであります。ところが先生の持つてお歸りになつた色々な機械、書物、總て目新しいもの許りであつたので、これが詰り帝大の初めの耳鼻咽喉科教室を開かれるには實に相應しいものであるといふ感じをその際持つたのであります。その約一箇月の間に準備万端整へまして、翌年の一月十九日に店開きをやつた譯であります。其當日から、最初の日が丁度新患者が二十五人來たといふ話だつたと記憶してをります。それはどういふ譯でさういふ風に來たかと申しますると、大學の各教室殊に外科の方で非常にお困りになつてをつたと見えましてあすこからの紹介の患者が大部分であつたやうに思つてゐます。それは一面厄介拂ひしたといふ意味でもありませうが、まあ非常な患者が來まして、もう來る日も〳〵何十人といふ外來がおしかけました。まだ先生は御齡三十七だし、私は丁度その時は二十六でしたか、元氣のいゝ時で、同時に尙ほ佐藤大谷兩君が介補としてをられ、毎日先生の御指導の下に奮闘した譯であります。初めの内の事ですからして、病人も亦長い間放つたらかしておいたものと見えてひどい病人がよく參つてをりました。一二の例を申し上げて見ますと、先生の學位論文である鼻茸の問題は先生非常に興味を持つて居られました。亦病人も今日では見られない程の巨大のポリープに惱むもの多く外鼻孔にはみ出すものがざらにありました。或る時、先生得意のポリープ病理を話しつゝどこをどう絞窄して引出されしものか鼻腔粘膜の大部分を同時に牽出され大出血を起し、これは大變だと言つて途中で一部を切つて其儘おさめ大騒ぎしたやうなことがあります。

それから尙ほ特に私の頭に殘つてをりまするのは外山正一博士（學長か總長）の急性中耳炎の手術であります。この時はまだ外來開設當時でありまして、實は手術室もある譯ではなし病室も無論なし、その時の手術はスクリーバの手術室でおやりになりました。二回或は三回に亘つたと思ひまするが、その結果は不幸遂に外山正一博士が歿くなられたのであります。それで終ひの時の手術の狀態をちよつと申上げてみますと、スクリーバもその時來てをりましたが、青山先生佐藤先生もをられたと思ひます。その外に近藤先生も多分いらしつたのではございませんかと思ひますが、まだ實は耳の手術として頭蓋腔内に及ぶことは、日本に於ては或はなかつたのかも知れぬ位のも

のでありますが、われ〳〵は只びつくりして、まあ無我夢中で見てをつたのであります。唯その時後の方で外山さんのお姉さんか妹さんかでございませう、非常に泣いたり怒鳴つたり大變な罵詈讒謗の言葉を聞いたことがあります。先生もその時は餘程お困りの樣子でありました。で三回目の手術の時の模樣を簡單に申上げますと、先生の有名なる藥績の小膿アブセス手術の進路を探られたのであります。即ち藥液性腦膜炎の狀態であつたらうと思ひます。まあ思ひ切つておやりになるものだと思つてをりましたが、今日から云へばなんでもない事でありまするけれども、その當座は珍らしい手術をやられたものだと感じてをりました。唯その不幸の爲に先生に對する色んな非難攻擊が起りました。其時先生はお得意の名文を以て其いはれなき攻擊を反駁されたのであります。（中略）併し先生は自分の信ずるところに向つては飽迄忠實に學問の爲におやりになつたのでありますから、先生としては別に悔ゐられることもなく、當り前のことをおやりになつたのでありませうが、その當時の空氣といふものは甚だ先生に氣の毒なものであつたのであります。まあ何事でも初めの時には色んな各方面から非難攻擊も起るのは當然でありますが、先生も矢つ張りさういふ受難時代があつたのであります。併しそれが因となつて、中耳炎といふものは遂に生命を奪ふに到るといふことが一般に擴がつて、馬鹿にすべきものでないとの注意を惹いた一番最初の問題ではなかつたかと思ふのであります。丁度それが今から考へると四十一年前のことであります。（日本醫事新報昭和十五年五月第九二四號「岡田和一郎先生を偲ぶ夕」）

こゝにまた久保猪之吉博士と共に學士入局の最初の人として先生の教室に入られた淺井健吉博士の當時の思出の一節を掲げておかう。

先生が歐洲より官費留學を終へて歸朝せられた頃の本邦に於ける耳鼻咽喉科は、實に幼稚の域を脱する能はず、一般は勿論、醫界に於ても斯學を全く善く認識するに至らなかつた。東京帝大が、先生の爲めに新らしく設けた教室は、本郷切通町に面した門の西側で、外國教師の舊舍跡に置かれた。創立の際とは云ひながら、餘りに貧弱なるものであつた。而して、學生の授業も正科的のもので正式の講座と稱す可きもので無かつた。先生は正教授にあらずして助教授であり、醫員も二三人位であつた。夫れに關せず勤勉努力せられたる結果診療を請ふものは、日々に漸次增加し、遂に其の官舍跡が狹隘を告ぐるに至り、彼の時計臺の二階建の洋館に移轉する事となつた。然し其新教室も、先のものよりは室數稍々多くなりたるものの教授室二、醫員室一、看護婦室一、研究室一、病室大小合して三、手術室一で、教授室は約三疊敷大のと、圖書室を兼ねた約八疊敷位ので、机、椅子、書棚を置けば、殘餘の空間は狹小なるものであつた。此の教室に於て、本邦に、之れまで未だ試みられざりし種々の斯學の研究や、手術が續々實行せられた。元來、師は佐藤教授の許で外科學を長らく經驗せられ、續いて耳鼻咽喉科學に轉ぜられたるが故に、獨逸等でトラウトマン、ルーチエ及び其他の學者につき研究せられたけれども、先生の多年の外科的實力と、且つ、其の時代は彼の國に於ても、外科的の耳鼻咽喉科が壯かんに花を開きたる際なれば、一層斯學の最良の手術法等を、本邦に先生の手を經て廣く行はしむるに至つたものかと考へる。實際現今に行ふ殆んど總ての方法は、文獻記錄に無き點まで自から既に實行せられ、吾人を指導せられた、大小腦、三層腦膜、內外頸動靜脈、靜脈洞栓塞、錐體尖端、腦脊髓液等に關する手術處置を適當に行ふ事などを敎へられたのを感謝する。然し一般に當時、耳鼻咽喉の疾患にも往々生命までも危險を及ぼすものあるを、專門家的に確實に知ること稀れなりしを以て、疾患其自身、既に豫後不良なるを、手術家の過失により、生命を奪ふ如く思はれ、師の如き優秀なる專門家も迷惑を招かれたる事ありしは、今日の如く、斯學の智識が全般に割合に知れ渡りたる時期に比して意外の困難に遭遇せられしを想ふ。

獨文で「小腦膿瘍」などの立派なるものを著はされたが、邦文は極分筆まめで且つ能文であつたから、新聞雜誌等に書かれた記事論說は夥多だが、當時我國の何所にも見るを得なんだ數百卷の文庫に備付けられた耳鼻咽喉の書籍は、斯學の新智識を全國に傳播せしめる根元となつたものであらう。余も常に當直醫として好んで教室に宿泊したのは、此の豐富なる圖書を夜中に濫讀し得るのを樂みとしたからである。（「同仁」第十二卷第六號同仁會顧問岡田和一郎先生追悼記念號）

## 十、陸軍軍醫學校並に東京盲啞學校出講

このやうにして、先生の歸朝と共に明治三十三年我が東京帝國大學に最初の教室の開設をみるや、耳鼻咽喉科學は炳乎として天下にその存在權を主張するに至り、また世の視聽が、この新興醫學部門の花々しき勃興と進出とに注がれしことも既述の如くであるが、爾來かくてまた大學以外の各醫育機關、或はその關係各機關に於ても之れを相爭ふて迎へることゝなつたのであつた。

かくて、先生の大學に開講した明治三十三年の四月十日には、先生はまた陸軍省より陸軍軍醫學校に於ける選兵醫學上の耳鼻咽喉科學の講義を囑託せられ、賀古氏辭職後久しく中絕してゐた陸軍々醫に向つての耳喉科的講義と實習とを開始

せられ、また同十二月三十一日には、東京盲唖學校から囑託せられて、聾唖聽力回復講義を始められるに至つたのである。

これより先、陸軍衛生部と大學殊に醫科大學とは、陸軍軍醫寮時代から密接な關係にあつて、明治十四年、小池、森、菊池、賀古、谷口、江口、坂本、伊部氏等新鋭の學士擧を並べて陸軍衛生部に入つてからは一層緊密となつた觀を呈したものゝ、その實際に至つては未ださしたることもなく、以前よりは密接の度を加へたにすぎざる狀態にあつたのであるが、教育に熱心で衛生部の實力增進を旨とせる小池正直氏が三十一年八月醫務局長となるや一段と意を此方面に注ぎ、その又軍醫學校長事務取扱を兼ねるに至るや、先づ最初に岡田先生に軍醫學校の講義を囑託して大學との連鎖を密にすることを圖り、後には更らに現役軍醫を大學教授に就任せしめ得るの道をも開いて、明治四十年五月十六日勅令第百九十四號の發布をみて以來、直接、間接陸軍衛生部の教育に、人材の養成吸收に多大の便益を圖つたものであつて、實に先生の陸軍々醫學校への出講は、その緒を開くの重要な意味をもつものであつた。

而してまた一方、同三十三年末に聾唖聽力回復講義を囑託せられた東京盲唖學校の方は、同校長小西信八氏とは留學中親交をまじへ、同氏の廿九年十二月より三十一年九月に至る歐米視察中、伯林に來られる毎に先生はその世話をよくみ、且つ又、その專門とする聾唖關係の問題に就ても互に意見を交換する處あつたものゝ如くで、先生の留學中の三十一年八月十四日附の書翰の中には次の如き箇所もある。

……盲唖學校長小西氏妻君訪問ノ件正ニ承知致候實ハ小西氏二回伯林ニ來ラレ二回共生ノ許ニ在リテ常ニ通辯ノ勞ヲ取リ特ニ二度目ノ万國盲學校教員會ニ出席ノ節ハ五日間伯林國會議事堂ニテ開カレシ會ニ同行シ其初日開會式ノ際會頭ノ依頼ニテ小西氏日本代表トシテ日本語ニテ演說ヲ爲シ余之ヲ獨逸語ニ通譯シテ以テ大略日本ニ於ケル盲生ノ位置並ニ職業等ヲ歐洲人ニ知ラシメ衆大ニ之ヲ喜ビ拍手喝采ジタリキ去レバ小西氏大ニ滿足サレ已ニ一日前「アントウエルペン」ヨリ日本船ニ乘込ミ歸朝ノ途ニツカレ候……

かくて、又、先生には留學の後期に於て、ミュンヘン、ウキーン等に轉學され、ミュンヘン大學のベツオルド教授、ウキーン大學のウルバンチツチ教授等に親炙して、既述の如く唖生の多くは尙は殘音を有し、それによつてその聽力を恢復せしめて以て音を解せしむべしといふ聾唖教育上の革新的な學說を携へ來つたのであつて、同三十三年九月二十七日には東京盲唖學校に於てその新學說を紹介講演する處あつて、多大の感銘を與へたのであつた。こゝに同校の記錄を轉載してみれば——

九月二十七日　東京帝國大學醫科大學教授醫學博士岡田和一郎を勤務時間外に聘し獨逸國ミュンヘン大學耳科學教授ベツオールド(Dr. Friedrich Bezold 1842—1908)の聾唖聽力回復につき講義を請ひ先づ教員に之を聽かしめ、進て生徒に之を實施せしめんことを期す、抑もベツオールドは耳科教授、耳科醫として當時獨逸國に於ける第一人者にして一八九〇年頃より聾唖の研究を始め、一八九三年ミュンヘン邦立聾唖學校生徒につき聽力檢査をなし等しく聾と稱するも檢査の結果大多數は多少の殘聽力のあることを發見し、此事を教育に利用するの功過に就き考究せり、岡田教授は在學研究中同教授に親炙せり、尤も岡田教授はその以前堺地利國ウキーン大學に學び、同大學耳科教授ウルバンチツチ(Dr. Victor Urbantschitsch 1847—1921)に就き同樣の研究をなす、ウルバンチツチ教授は一八九三年頃よりウキーン大學に於て同地聾唖學校生徒につき聽力を檢査したりしにその大多數卽ち唖生の大多數が殘聽を有することを確め一八九四年斯種研究者の魁としてその研究成績を發表せり、卽ち六十人の唖生に就き檢査するに五オクターヴ半の手風琴を用ひ、大部分聽力あることを知り、後一部は風琴にて練習し他の一部は同オクターヴの母音にて練習し、聽力回復の成績頗る宜しきことを見たり、玆に於て彼は聾唖者の發音教授は只視覺に於て卽ちヴイジブルスピーチに於てするよりも寧ろ聽神經に多少殘れる音覺を利用し之を練習し漸次之を發達せしめ聽神經と發音とを統合的に教授することの益あることを唱ふ、併しその發表は多少誇張に過ぎ、その誇張は却て反感を買ひ聾唖教育家の認容する所とならざりしが、一八九三年に至りベツオールドは連續音又にて音の最高、中、低等各種の音階を純粹に研究し　中音を聽き得る者は耳によつて言語教授を爲すことの利あるを說き聾唖教育家の賛成を得遂に一八九九年五月獨逸政府に對し普く此方法を以て聾唖生に言語教育を行はしむる樣建議せりと云ふ、同國政府も同教授の熱意に動かされ、同年文部大臣が全國聾唖學校に對し耳科醫を顧問とし、聽力回復法を實施することを訓令したりと云ふ。

かうして、先生は所謂聾唖の本質を解明し、從來の謬說を一掃して、殘音を利用することに依つて言語不能とされた唖

生も亦口話の自由を獲られ得るとなし、聽神經と發音とを統合的に教授するの益ある新說を齎らして聽力回復の要を說かれたのであつた。それによつて、同年末、聾唖聽力回復講義を囑託せられ、東京盲唖學校へも出講せられることゝなつたのである。

然し、之は間もなく、先生の大學に於ける職務の多忙の爲めか、翌三十四年の三月末日を以て囑託を解かれてゐるが、後、三十六年同校に教員練習科（後の東京聾唖學校師範部）の設けられるや、再び耳鼻咽喉科學の講師を囑託せられ、爾後、その薨去に及ぶまで、同校の爲め、また聾唖教育の振興、聾唖者の後援等の爲めに盡瘁される處少からざるものがあつたのである。

## 十一、學位授與

かうして、先生は、明治三十三年は歸朝早々のことゝして、極めて多忙な年を迎へられたのであるが、同年四月二十六日には、かねて提出中であつた「鼻茸ノ病理追加及粘液染色法ニ就テ」"Beiträge zur Pathologie der sogenannten Schleimpolypen der Nase nebst einigen Bemerkungen über Schleimfärbungen," 及び「顎顴骨ノ耳科外科的解剖」"Die oto-chirurgische Anatomie des Schläfenbeins," の二論文によつて、醫學博士の學位を授與されたのであつた。

是等の論文はいづれも、前者はフレンケルの教室に於ける、また後者はトラウトマンの教室に於ける、夫々獨逸留學中のアルバイトであることは既述の如くであるが、こゝに翌四月二十七日付の官報第五千四十三號に公示せられた審査要旨を掲げておかう。

**○學位授與** 文部大臣ハ明治三十一年勅令第三百四十四號學位令第二條ニ依リ昨二十六日左記ノ者ニ學位ヲ授與セリ其學位記竝ニ其提出セシ自著論文ニ關シ當該分科大學教授會ニ於テ審査シタル要旨左ノ如シ（文部省）

學位記

愛媛縣平民　正七位　岡田和一郎

右論文ヲ提出シテ學位ヲ請求シ東京帝國大學醫科大學教授會ニ於テ其大學院ニ入リ定規ノ試驗ヲ經タル者ト同等以上ノ學力アリト認メタリ仍テ明治三十一年勅令第三百四十四號學位令第二條ニ依リ玆ニ醫學博士ノ學位ヲ授ク

論文審査ノ要旨

**第一　鼻茸ノ病理追加及粘液染色ニ就テノ注意**（獨逸文）

鼻茸ノ病理ニ就テハ從來諸家ノ唱道スル所區々ニシテ定論ナシ著者ハ二十五人ヨリ摘出シタル鼻茸ノ標本ニ就テ顯微鏡檢査ヲ遂ケ終ニ鼻茸ハ炎性的產物タルコトヲ認定シタリ其他此試驗ニ依リ著者ハ次ニ列擧スル未タ曾テ文獻ニ記載ナキ事實ヲ發見シタリ

鼻茸表皮細胞ニハ變化ナシトハ從來一般ニ唱ヘシ所ナレトモ著者ハ其粘液變成ノ狀態ニ在ルヲ證明シ而シテ其粘液變成ハ全表面ニ亘ルアリ又タ一局部性ナルコトアリ全表面ニ亘ル粘液變性ハ單ニ最上層ノ圓柱細胞ノミニ限ルコトアリ又タ最上層ヨリ最下層マテ一般ニ普及セルコトアリ

一局部性粘液變成ヲ分チテ三トス（一）通常圓柱上皮細胞間ニ存在スヘキ杯然細胞ノ增加（二）表面凹陷部ニ於ケル表皮細胞ノ全部若クハ一部變成（三）肥厚セル上皮內ニ於テ數箇ノ粘液細胞ノ放線狀ニ簇集ス

上皮ノ變化ハ上記ノ粘液性變成ノ他ニ尙ホ往々圓柱細胞ノ扁平細胞ニ化スルコトアリ（是レ已ニ前人ノ記載セシコトアリ）

鼻茸內ニハ腺ノ增殖ヲ來スコトアルハ事實ナリ而シテ其腺ハ主トシテ粘液腺ノ性質ヲ帶フト雖トモ稀レニ漿液腺ノミ現存スルコトナキニ

アラス

粘液腺ト漿液腺トハ別種ノモノナル乎將タ同一ノモノナル乎ハ解剖學上ノ問題ナリトス著者カ檢査ノ成績ニ由レハ是レハ全ク同一ノモノニシテ粘液細胞ノ働ケルト休メルトニ關係スルヲ證シタリ如斯粘液腺ハ數々膨大シテ囊腫狀トナルコトアリ

故ニ鼻耳囊腫ノ內容ハ粘液ヨリ成ルヲ常トス然レトモ稀レニ「コロイード」若クハ「ヒヤリン」體ノ存在スルコトアリ（是レ著者カ初メテ記載セシモノナリ）

腺囊腫ノ他ニ稀レニ囊樣ニ擴大セル結締織間隙アリテ其內ニモ亦タ粘液ヲ充スコトアリ此場合ニハ如斯間隙ト腺囊腫トノ連續カ證明セラル

鼻耳實質ノ結締織ハ粗鬆ニシテ其間隙ハホブマン氏ノ言ノ如ク漿液ヲ以テ充タサル

本論文ハ二十六頁ニ渉ル論文ニシテ檢査周密其結果ハ著者ノ檢索ニ依テ發見セラレタル事項少シトセス蓋シ有益ノ論文ナリ

## 第二　顳顬骨耳科的外科ノ摘要（獨逸文）

チツト・キヨルネル氏創テ人類學上短頭頭蓋ハ長頭頭蓋ニ比シ耳科的外科手術ヲ施スニ當リテ危險ノ虞多キヲ發見シ定則ヲ立テ同ク頭蓋ノ「インデキス」愈々少ナレバ乳嘴突起ヲ豁開スルニ益々前方ニ於テ之ヲ施サヽルヘカラスト後來諸家之ヲ贊シ或ハ之ヲ難シ定論ナシ著者ハ此問題ニ就キワルダイエル氏教室ニ於テ百十一ノ人種及年齢ヲ明記セル且ツ横斷セル頭蓋骨ニ就テ種々ノ方法ニ依テ測定ヲ施シ終ニキヨルネル氏定則ハ價値ナク却テ長頭頭蓋ニ往々危險ナル顳顬骨ヲ有スルコトアリ又タ短頭頭蓋ト雖トモ數々無危險ノ顳顬骨ヲ有スルコト無キニアラズシテ實地上人類學的頭形ヲ以テ顳顬骨ニ施ス外科手術ノ難易ヲ判定セント欲スルノ甚タ不當ナルヲ斷定セリ

キヨルネル氏定則無價値ナルトキハ彼ノ危險性顳顬骨ヲ豫知シ得ル法アルヤ否ヤノ問題ニ就キ更ニ測定ヲ施シテ橫寶底最深部ト乳嘴突起ニ行フ手術部トノ距離ハ小兒ヨリ大人、大人ヨリ老人ト漸々年ヲ追テ此距離ノ增大スルヲ證明シ且ツ各年齢ヲ通シテ右側ニ於テハ左側ニ於ケルヨリモ概シテ此距離カ大ナルコトヲ測定シタリ尙ホ此距離ノ大小ヲ豫メ手術前ニ知ルカ爲メニ種々ノ測定ヲナシ途ニ次ノ如キ事實ヲ發見セリ則チ該距離短小ナルトキハ通常乳嘴突起外面ト外聽道後壁カ形成セル角度ハ鈍角ニシテ長大ナルトキハ角度ハ通常銳角トス又タ婦人頭蓋ニ於テハ稀レナレトモ破格アルヲ以テ銳角ヲ呈スルトキト雖トモ其距離短小ナリト考ヘ又タ男子ニ於テハ鈍角ト雖トモ稀レニ距離ノ大ナルコトアルヲ覺悟スルヲ要ス



技ニ於テ著者ハ該距離ノ短小ナルモノハ十三歳以下ノ小兒ノ顳顬骨ニハ常ニ見ル所ナルヲ以テ如斯危險ナル者ヲ「兒性乳嘴突起」Processus mastoideus infantilis ト名ケタリ

其他トラウトマン氏ノ唱道スル外聽道上棘ノ甚タシク內方ニ偏在セルトキハ顳顬骨ハ危險性ナリトノ說ヲ證明シタリ

又タ乳嘴突起靜脈 missarum ノ位置ヲ測定シテ之ヲ記載セリ則チ該靜脈ノ出口ハ外耳道後壁中央ヨリ後方ニ小兒ニ於テハ二、五仙迷大人ニ在リテハ三、〇糎仙迷ノ所ニ在リ又タ乳嘴突起後緣ヲ明カニ觸知シ得ル場合ニハ同上線ニ沿テ同後緣ヲ後方ニ去ル〇、五乃至一、〇仙迷ノ處ニ存シ又タ乳嘴突起尖端ヨリ後上方ニ去ル小兒ニ於テハ凡ソ二、〇大人ニ於テハ三、〇仙迷ノ處ニ在リ

終リニ至リ著者ハ橫寶內緣ト顳顬骨導水管トノ距離ヲ測定シテ平均右ハ一、一二左ハ一、一六八仙迷ト定メ且ツ此距離ト年齢トノ關係ヲ詳論セリ

本論文ハ九十六頁ニ渉ル論文ニシテ百十一ノ頭蓋ニ就テ種々ノ測量ヲ行ヒ其結果ヲ報告セリ其方法ハ良好ニシテ之ヲ行フ周到ナリ其結果ニ至リテハ或ハ從來諸家ノ唱道スル說ヲ證明シタルアリ又ハ著者ノ測定ニ依テ新ニ啓發サレタル事項尠シトセズ蓋シ耳科的外科學上稗益アル論文ナリ

前後二篇ヽ論文ヲ通覽スルニ前者ハ病理學的檢査ニシテ後者ハ人類學的測定ヲ實地醫學上ニ應用シタルモノニシテ斯道ニ稗益スルコト大ナリ且其方法及論法好ク法ニ適ヒタリ

これ實に本邦の耳鼻咽喉科學に於ける學位授與の嚆矢にして、また明治二十年五月二十日の學位令制定以來第五十一番目の醫學博士であるが、而も從來のその大半は大學評議會の推薦に依るものであつたからして、先生の如き論文提出による者は僅々二十名にすぎず、この時、先生と共に吳秀三氏も同じく學位を授與されたのであつた。

かうして、先生は花々しき歸朝と共に本邦最初の耳鼻咽喉科教室を主宰して之を創設し、更らに相次いでこゝに於ては當時稀有なる學位を授與され、世の榮譽を一身に集めて、長年の刻苦勉勵も遂ひにこゝに酬ゐられ、この年の八月の夏期休暇には文字通り錦衣を纏ふて久々ぶりに鄉里西條に歸鄉せられ、到る處で盛大なる歡迎を受けて九月廿日に歸京された

のであつたが、當時愛媛縣人間にあつて、世に誇る可きものとては、穗積陳重、八束の兩兄弟と志賀泰山並びに回向院の關取朝汐の四人にすぎなかつたのであるが、こゝに先生の歸朝と共に愛媛縣の世に誇るべき名士が一人殖へ、鄕黨の士の歡喜感激もさることながら、先生の得意も亦思ふて尙ほ餘りあるものがあつたらう。こゝに先生の歸朝當時の愛媛縣人士の感激ぶりが眞鍋嘉一郎氏の文章の中によく窺えるから、それを掲げてその一班を示しておかう。

……なほ私が鄕里にあるとき岡田先生の御洋行中のことゝ思ひます、其當時折々西條の醫者のうちへ遊びに行き、かの表紙に頭蓋骨と肢骨とならべた畫のついた東京醫事新誌と云ふ雜誌を見ることがありました、處がその中に岡田和一郎先生の寄稿や記事がありました、丁度岡田先生が洋行中モスコーの耳鼻咽喉學の萬國學會に出席した記事があり、その中に岡田先生が名譽會長になつたと云ふ記事を見まして、和一ッあんが日本でエライ人であるのみならず世界中にもエライのかと云ふ感じを懷き西條に居るときから、ます〳〵尊敬の心が浮んで來ました。

つゐに私も鄕里の中學校を卒へまして上京いたし幸ひ第一高等學校へ入學いたし久保德太郎氏等の跡について御世話になつて居りました、その時岡田先生が西洋から歸られ愛媛縣人が集つて上野公園の花壇の料理屋で歡迎會を催しました、私共が一高の學生で其時出席して最年少者でありました。その時歡迎の辭を述べましたのは確か前の大阪府知事で故人になられた力石雄一郎君でありまして其當時愛媛縣に名物がない、たゞ世に識られて居るのは穗積陳重先生、穗積八束先生の兄弟と志賀泰山先生と回向院では關取の朝潮關の四人で外に名士はなかつたが、この度岡田和一郎先生が歸朝せられて玆に愛媛縣の名士の數を一人增したと云ふ意味で歡迎辭を述べました。その時岡田先生が勢のよい時で勤勉努力すれば世界の人にまけることはないと云ふ樣な意味で答辭を述べられたと思ふて居ります。

かうして、この年にはまた里方の本鄕西片町の榊家より麴町中六番町三十五番地の寓居に移轉され、こゝに久しぶりの妻子三人水入らずの生活に歸られたのであつた。が、更らに翌三十四年には同區內の三番町三十六番地（現今の九段四丁目十五番地）の現在の地に轉居され、こゝに永住の邸宅を構へられたのである。

## 十二、日本聯合醫學會の設立

かうして、榮えある、思出深き、多忙なりし三十三年を送ると、翌三十四年よりは、また先生の對社會的活動を俟つ處のもの漸く多きを加へるに至つたのである。卽ち、日本聯合醫學會の設立、同仁會の創立等々これである。

これより先き、我が醫學並びに醫界の進步發達は、漸くにしてその各個の分立、分散を許さず、その統合的な會合を要請し、遂ひに曩には、獨逸萬有學會に倣ひ明治二十三年四月、石黑忠悳氏等の先驅者を中心とする乙酉會の發起にて第一回日本醫學會を開催し、更らに二十六年四月には、田口和美、小池正直、片山國嘉、緒方正規、榊俶、宇野朗等々、當時の大學を中心とする新鋭學徒の發起にて、その第二回を開いたのであつたが、當時、世の之れに對する毀譽褒貶甚だしく、就中、鷗外の如きは、之を目して、一二老策士の企圖せる反動的行爲となし、「反動祭とは何ぞや。第一回及第二回日本醫學會是なり。」と批評し、

「眞の學會は獨立して自ら主とす。故に自ら規則を立て、自ら事業を行ふ、日本醫學會は當初乙酉會の起すところにして、その「ザクタツウル」Dictatur めきたる創立趣意書といふものを受け、學者輩は受聘者として之に臨み、乙酉會員たる發起人の指圖に從ひて講說し、會員は應募者として之に臨み、乙酉會員たる發起人の指圖に從ひて聽聞したれば、其性質乙酉會の隷屬たるに過ぎざりき。第二回に至りては　學者輩發起人たることを得たりと雖も、開會閉會を行ふ首座の椅子は　猶乙酉會員たる名譽會頭をしてこれに居らしむることを免れざりき。眞の學會は現時の國際的醫學界に於て、與に語るべしと見做さるべき眞學者を以て會員とす。故に其取捨はその已に公にしたる述作を以て之を決す。日本醫學會は第一回に於て學者受聘者となり、第二回に於て學者發起人となりたれども、其會員は前後皆聽

衆のみ、教を受くるものゝみ。」といひ「我醫界の老策士が大日本私立衛生會を以ては世俗を教育し、日本醫學會を以ては醫俗を教育する、固より不可なることなし。然りと雖も、學者輩は第一回に於て人に屈はれたる教師たり　第二回に於て自ら慮めたる教師たることを知らざるべからず。會員は前後かの諸教師の門人弟子たることを知らざるべからず。若し夫れこれを知らずして、おのれが會を立派なる學會と看做し、かの白人なる文部大臣と共に日本國醫學の精華を此間に求むることあらば、余們傍觀者のために笑はれざらんとするも、得べからざるなり。」と痛論し更らには「蓋第一回及第二回日本醫學會は反動祭なり。其祭主を今の日本醫會の老策士となす。老策士がその發起人なり。若くは名譽會頭たる日本醫學會に於て、所謂先哲を祭らせしは、人をして間接に己を尊ましめんとしたるのみ、試に思へ。所謂先哲と今の老策士とは其藥にこそ大小の別あれ、均く是れ傳譯者なり。譯を換へて之を言はんか。今の老策士は、自ら慮めて生き殘りたる先哲たらんとするものなり。會衆をして死し去りたる先哲の前に頭を叩かしむるは、即是れ生き殘りたる先哲の前に膝を屈せしむる所以なり。故に云く。老策士は人をして己を尊ましめんがために所謂先哲を祭らしめたりと。」

その催しに關はる先哲の祭典式に關聯してまでも、筆鋒益々辛辣に論難してゐるが、かうした鷗外を急先鋒とする囂々たるの世論に答へるものゝ如くに、第二回日本醫學會幹事の小池正直氏は「第二回日本醫學會誌」の凡例に於て——

一、第一回日本醫學會ハ美擧ナリ第二回ノ之ヲ繼クモ亦美擧ナリ宜ナル哉全國有士ノ士、皆來テ而シテ之ニ參同シタルヤ然ルニ世、揣摩百端、以テ其會ノ成立ヲ議スル者アリ夫レ人心ノ同カラサルヤ面ノ如シ此擧ヲ圖ル者ト雖、豈其心皆同シト曰ハンヤ若シ忖度シテ而シテ之ヲ議セハ日モ亦將ニ足ラサラントス惟タ君子ハ人ノ美ヲ成シ人ノ惡ヲ攻メス學會其者ニシテ美ナラン乎即チ之ヲ助成シテ可ナリ何ソ訐キテ以テ之ヲ妨クルヲ用ヰンヤ抑モ亦慝ナ修メサルノ罪ノミ

一、來會者千數百、講演者四十有餘、人心ノ歸嚮スル所、其レ知ルベキノミ但タ其講演尚ホ或ハ未タ學會ノ旨　稱ハサルモノアリ高キニ登ルニハ卑キヨリシ遐キニ行クニハ邇キヨリス耕耘稗秕、以テ秋熟ノ時ヲ待テ可ナリ

とは序してゐるが、この乙酉會の發起に始まる日本醫學會は、世評に動かされたものか、この明治二十六年に於ける第二回の開催を以て中絶し、以後また再び開會される處がなかつたのであつた。

然るに今や我が醫學、醫界の向上發展は、新進學徒の輩出を促すと共に、學術の分科進展は各種學會の簇成をみ、漸くにして、日本醫學者のコングレスの開催を求める聲四方に起り、年々開かるべき各種學會の總會を總合し一定期に於て一大聯合醫學會を開く可しとの議、有識者間に唱導され初め、機漸くに熟するに及んで明治三十四年の四月八日、有志者十數名が神田一ツ橋外學士會事務所に集まつて、この社會の要求に應ずべく日本聯合醫學會開催の件に關して協議する處があつた。かくして、五名の起草委員を選び概略の規則を立案せしめて、その草案の成れる時を期して再び協議會を開くことに決し、我が岡田先生を初め、大澤岳太郎、川上元治郎、金杉英五郎、北里柴三郎の五氏を起草委員に選んで散會したのであつた。

處で、性來、同志相擁して談笑し、或は天下を論じ、または衆を率ひて事を爲し、人を會しては國家公共の爲めを圖るを好まれる先生は、既述の如くに、既に弱冠にして東京醫學會の組織の事に當り、又第一回の日本醫學會の開催されんとするに當つてはこれに聲援を送るに吝かならず、その健全なる成長發展を期する處多かつたのであるが、不幸その中途に挫折するや、獨りその復興を劃する處あり、加之、その獨逸留學中に於けるモスコー第十二回萬國醫學會を初めとする彼の地に於ける各學會の盛況を目の邊りに觀ては、美望と共にそれを我邦に移して以て行はんとするの欲求また一方ならぬものゝあつた如くに思はれる。而も、このことたるや獨り先生のみならず、當時その協議會に相會せる海外新智識の保持者親しく彼地の實情を見來つて、均しく之を熱望せる處であつて、就中彼地の諸學會に於て代表演說を試み、或は名譽會頭に推されては議事の進行を圖る等、その身親しくその中にあつて活動し、學會組織の構成に精通せる先生の本學會成立に際して、自身内に期する處のあると共にまた衆望の先生に期待せる處も多大であつたものゝ如く、こゝに推されて起草委員となり、また後ち開會に際しては幹事總代となつて、その創立並に議事進行に多大の寄與をなされたのであつたが、こゝに當時讀賣新聞の報ずる處を揭げて參考に供しておかう。

全國醫者の大會卽ち聯合醫學會が來る四月を以て東京に開かるべき由は既に記したるが、同會は獨り醫者の大會たるに止めずこれを機として從來各地に設けられし多くの醫學會を進歩させて實績を收めしむる計畫なるが如し、聞く處に依ればこの大會は初め十餘名の創立委員に唱道せられ終に二百五十餘名の發起者を得て其の開會を發表するに至れるものにて醫學博士岡田和一郎氏の如きは先年歐洲より歸朝後熱心にこの大會の開設を希望したる人にて今の東京醫學會の如きも博士が未だ學生たりし時唱道したるものに係り博士も發起者の一人として組織されたるなりと言へり、今や歐洲に在る各醫學會は進歩に進歩を重ねていづれも分科組織となり、其會員たるものは殆んど我が大學院に入院したる程の研究をなし得る便ありて、我が醫學會の多くが只醫者の同業者を集め雜誌發行して纔に氣焔を洩らせるものとは日を同うして語るべからず、殊に伯林に起れる結核會議の如きは結核の襲來が一ヶ年中に於ける死亡者總數の十分の七を奪ふて尙且つ飽くなきの猛勢に打勝つべき方法を講する爲めに起りしものにて、其の組織は慈惠醫院の如く又赤十字社の如く、皇后陛下を總裁に仰ぎて總理大臣を名譽會頭とし、結核性の病氣を異名して國民病と稱し、天下の力を擧げ巨万の資本を集めて結核病院を補くるなり、元來この會は初め獨逸一國の企てなりしも列國皆なこれを贊成し終に万國會議となり、岡田博士の如きも日本を代表して之に列席したり、されば續いて英國　伊太利等にも同種の會議あり、我國にもまた之を開かんとの議起りしが之に先だちて起すべきは卽ち全國醫者の大會なりとて、偖こそ第一回聯合醫學會は本年を以て東京に開かれ（第二回以下は大坂、京都以下各地巡設）結核豫防會議は明年を待つて他の地に開會する筈なりといふ　醫者以外の人々もこの有益なる醫者の會合に向つて充分の力を添へ、東京市民の如きは、差當り本年開設の聯合醫學會を歡待せざるべからずとのことなり（明治參拾五年貳月廿七日）

尙又こゝに當時先生自身の立案になる規則草案の一部と覺ぼしきものが殘されてゐるから、それをもこゝに揭げてみよう。

一、日本醫學會ハ四ヶ年一回宛各地便宜ノ地ニ開會シテ醫學全體ノ共同的進歩ヲ謀ルヲ目的トス
一、會合ハ總會及分科會トス
一、會期ハ秋期十月十一月中ノ適當ナル時ヲ選ンテ開會ス
一、會期ハ三日間トス　但シ時宜ニヨリ延期スル事ヲ得

第一日午前總會　發會式演說
　　午後　共同集會

第一回日本聯合醫學會創立の當時先生自筆に成る會則草案

第二日午前共同集會
　　分科會
第三日午前共同集會
　　分科會
　　午後總會演說

一、最終日ノ夜懇親會ヲ開ク
一、總會後規定ノ分科會ヲ續ケ前會ノ各分科會々長ハ次會ノ開會地及會長ヲ選定ス
一、各分科會ハ次回ノ分科會々長ヲ選定ス
一、選定サレタル會長ハ準備委員長及幹事長及幹事四名ヲ選定ス
一、分科會長ハ該當分科ノ幹事三名ヲ選定ス
一、演說ハ全國各專門學者ニ向ツテ勸誘募集ス
一、應募演說ノ內ヨリ五名ヲ會長及ビ分科會長ノ協議ニテ選ビ總會演說ノ候補トス
一、又タ右演說中ヨリ各分科ニ亘ツテ關係セル重要問題ヲ選定シテ關係分科ノ共同集會ヲ催ス
一、共同集會ノアル時刻ハ該當分科會ハ開カザル者トス
一、專門的ノ業績ノミヲ以テ分科會ヲ開ク又共同集會開會中ト雖モ關係ナキ分科會ハ開會スル者トス
一、會誌ハ本來總會及共同集會ノ演說及討論ヲ完全ニ揭ケ分科會ノ演說ハ大要ヲ揭ク
一、準備委員長ハ從來ノ內規ニ從ヒ參觀、材料、宴會、接待、會場及時宜ニ由リ宿所委員會ヲ組織シテ地方ニヨリ適宜ノ準備ヲナスコト

かうして、先生を初め、選ばれたる五名の起草委員は數回の協議會を開ひて規則十二箇條、細則十七箇條の草案を作製し、之を先に集會せる人々に頒つと共に又各學會の關係者中の重なる人々に個人的に參加を求めて、五月十九日午後五

時、九段坂上の富士見軒に第二回の協議會を開いたのであつた。當日の出席者は二十九名で田口和美氏を座長に草案の審議をなしたが、會費の件で衆議決せず、川上元次郎氏の提議で、座長指名の特別委員に之を委託することゝなり、近藤次繁委員長の提議で、之を他日に期して散會。因みに當日指名された特別委員は、大西克知、細野順、佐藤恒久、近藤次繁、三輪太郎の五氏に起草委員たる大澤岳太郎氏並びに先生の七名であつた。かうして六月二十五日には龜島町の偕樂園で更に第三回の協議會を田口和美座長司會の下に續行、川上氏は富士見軒に於ける協議會開催に至る迄の經過を、また近藤氏はその協議會以後特別委員會の經過を夫々報告する處あつて、議事を進行、近藤、岡田先生の二人專ら說明の任に當り、二三修正の後、規則草案の確定をみたのであつた。卽ち左の如くである。

## 日本聯合醫學會規則

### 名稱

第一條　本會ヲ日本聯合醫學會ト稱ス

### 目的

第二條　本會ノ目的ハ醫學ニ關スル各學會ヲ聯合シ及ヒ同學者相會シテ協同一致親睦ヲ厚フシ尙外國ニ於ケル各學會ト氣脈ヲ通シ斯學ノ輓推ヲ謀ルニ在ル

### 組織

第三條　日本聯合醫會ハ總集會及分科會ヨリ成ル

第四條　分科ハ左ノ十六部トス

第一部　解剖學
第二部　生理學、醫化學
第三部　病理學、病理解剖學
第四部　藥物學、藥學
第五部　內科學
第六部　外科學
第七部　眼科學
第八部　產科學　婦人科學
第九部　小兒科學
第十部　消化器病學
第十一部　神經病學、精神病學
第十二部　耳鼻喉喉科學
第十三部　皮膚病學、梅毒病學、泌尿器病學
第十四部　衞生學、細菌學、傳染病學
第十五部　法醫學
第十六部　軍陣醫學

### 集會

第五條　本會は隔年一回四月上旬を以テ便宜ノ地之ヲ開タ

第六條　會期ヲ四日間トシ左ノ順序ヲ以テ擧行ス

第一日　開會式、總集會
第二日　分科會
第三日　分科會
第四日　總集會、閉會式、懇親會

第七條　次回ノ開會地ハ委員會ニ於テ決定ス

### 會員

第八條　本會會員ハ聯合各學會ノ會員及有志ノ醫師ヲ以テ成ル

### 會費

第九條　本會會費ヲ金貳圓五拾錢トス但シ聯合各學會ノ會員ハ金貳圓トス

## 役員

第十條　本會ニ左ノ役員ヲ置ク

| | |
|---|---|
| 會頭 | 一名 |
| 副會頭 | 一名 |
| 幹事 | 若干名 |
| 分科會長 | 各一名 |
| 分科委員 | 各二名 |

第十一條　役員ハ左ノ方法ヲ以テ選擧ス

會頭副會頭ハ分科會長及分科委員ノ協議ヲ以テ開會地在住ノ會員中ヨリ推薦シ出席總會員ノ承認ヲ得ルコト

幹事ハ開會地在住ノ會員中ヨリ會頭指名囑托ス

分科委員及分科會長ハ各分科ニ於テ適宜ノ方法ヲ以テ撰出ス

これ實に今日の日本醫學會の規約の原案にして、かく規則草案の確定せる上は實行方法にとりかゝるべしとて準備委員五十名を撰んで一切の準備事務を之に托することゝなり、五十名中二十五名は直ちに坐長の指名で選擧し、殘りの二十五名はこの二十五名の委員の協議にて推薦することゝなり、坐長田口氏は左の二十五名を指名した。

| | | | |
|---|---|---|---|
| 北里柴三郎 | 大澤岳太郎 | 近藤次繁 | 川上元治郎 |
| 岡田和一郎 | 細野順 | 三輪信太郎 | 岡村龍彦 |
| 入澤達吉 | 金杉英五郎 | 佐藤恒久 | 林曄 |
| 鈴木重道 | 濱田玄達 | 遠山椿吉 | 長與稱吉 |
| 宮本仲 | 鈴木主計 | 富士川游 | 日高昂 |

大西克知　山田鐵藏　穂保三郎　戸塚環海　加藤時次郎

かくて、こゝに選ばれた廿五名の準備委員は早速創立費三圓據出、假幹事五名の選出、事務所の設置、細則の編成、殘餘廿五名の委員推薦、各學會への交渉等々の件を議決し、假幹事に岡田先生を初め、川上元治郎、金杉英五郎、近藤次繁、細野順等々の五氏を選擧した。

かうして七月十九日午後四時九段の富士見軒に創立準備委員會を座長田口和美氏の下に開き、假幹事たる先生並びに川上氏の兩人より準備事務に關する要件を報告し、假幹事側の起草になる細則を承認決定し、更にその撰定による準備委員二十名の推薦を可決、事務所を京橋區宗十郎町の大日本私立衛生會事務所内に設けることゝし、更らに日本聯合醫學會發起人醫學博士田口和美外六十餘名の名を以て府下及び地方在住の有志者に交渉して本會創立發起人たらんことを求め、また、各學會に通牒して斯擧に贊同加盟せんことを請ふたのであつた。

かうして更らに十二月八日には上野精養軒に於て、田口氏を座長に推して委員會を開き、幹事たる先生及び川上氏の兩人より本會創立事務の進行狀況を報告し、次で明治三十五年四月の上旬第一回日本聯合醫學會を東京に開くことを決議し、岡田先生の演說、近藤氏の會場、細野氏の會計、川上氏の庶務、金杉氏の宴會等々、五名の幹事は夫々創立事務の主幹を擔任することゝなり、その日は引續き懇親會を催して府下の醫事新聞社員を夫々招請し、本會の創立に就き斡旋の勞を執られるやう懇囑する處あつた。

かくて、創立準備の既に整ふを以て議定の規則を公にし、又開會の次第に關する廣告を各新聞、雜誌に掲載せんことを依囑して萬端の手筈を整へ、翌三十五年一月二十八日更らに委員會を事務所に於て開き、準備事務につき協議する處あり、次で二月二十四日創立委員幹事會を開き、各學會代表者を會し、各部に假委員を置いて假委員にて各分科の成立を謀ることを決し、各分科の假委員を選定し、また同二十八日には準備委員會を開いて、岡田幹事より準備委員長の選擧を幹事に一任せらるべきや否やを諮り、滿場異議なく通過、こゝに北里柴三郎氏を委員長に推し、更らにその司會の下に假分科會長の選擧に移り、又準備委員の部署をも定めたのであつた。當時選擧せられた假分科會長の氏名左の如くである。

| | | |
|---|---|---|
| 第一部 假分科會長 | 小金井良精 | 第九部 〃 弘田長 |
| 第二部 〃 | 眞川宗雄 | 第十部 〃 長與稱吉 |
| 第三部 〃 | 三浦守治 | 第十一部 〃 三浦謹之助 |
| 第四部 〃 | 長井長義 | 第十二部 〃 岡田和一郎 |
| 第五部 〃 | 青山胤通 | 第十三部 〃 土肥慶藏 |
| 第六部 〃 | 高木兼寛 | 第十四部 〃 緒方正規 |
| 第七部 〃 | 河本重次郎 | 第十五部 〃 片山國嘉 |
| 第八部 〃 | 濱田玄達 | 第十六部 〃 實吉安純 |

かくて三月六日には假分科委員及び準備委員の集會を事務所に開き、會務の準備に就て協議し、準備委員會にあつては事務の統一と進行に便ならしめん爲め、規則により專務委員を設け、また假分科委員會に於ては各分科の成立組織に就て協議し、田口和美氏を會頭に、北里柴三郎氏を副會頭に夫々豫選し更らに十五日には假分科會長及び委員會を開き、會場委員も之に參加して、本會開設の次第書を制定し、廿日には準備委員總會を開いて會期中の各擔任委員の分擔各事項を決定、また廿五日、三十日の兩日幹事會を開いて、二三の事項に關し協議する處あつて、開會準備の事務を完了し、愈々四月二日より五日に至る學會の開會を俟つばかりとなつたのであつたが、これに於ける當時の先生の活動は、その規則起草委員とし、又幹事としてその創立、組成に當つて寄與する處尠からざるものがあつたのである。

# 第六章　醫科大學教授時代

## 一、教授拜命と第一回日本聯合醫學會の開催

かうして、明治三十四年も、我が學界に劃期的な日本聯合醫學會創立の劃策奔走に慌しく暮れ、翌三十五年に入つては、引續き四月二日より五日に亘つて開かる可き同會の開會準備に忙殺されて、後に愈々その開催を俟つばかりとなつた三月三十一日、先生は新しい辭令を受けて、東京帝國大學醫科大學教授に任ぜられ、耳鼻咽喉科學講座擔任を命ぜられたのであつた。

玆に於て初めて日本に於ける耳鼻咽喉科學が大學に於て正教授の下に在る學科となり、次で卒業試驗を要すべき必修科目となつたのであつて、これ實に本邦に於ける大學專門講座の始めである。

時に先生三十九歳の春にして、既にその一兩年前には學位を授與され、こゝに於てはまた正教授の地位をも贏ち得、今又歐州留學中私かに彼地の盛大なる學會の風を模して以て我が邦に移さんとする意圖も着々こゝに成つて、劃期的な第一回日本聯合醫學會の開會も目睫の間に迫り、長年の宿望悉くこゝに達成せられて、坦々たる大道の眼前に展開せるをみては、先生の感慨にはまた一入に深いものがあつたことであらう。

思へば學窓を出てより十四年、その間の刻苦と勉勵の生活は決して短しとしないであらう。然し今や事態は一變して、長年の奮鬪はこゝに酬ひられ、希望と光榮の大道が、荊棘の道に代つて打ち開らかれたのであつた。

かうした限りなき歡喜の裡に、愈々四月二日ともなれば、第一回日本聯合醫學會が長くも小松宮殿下を御迎へして、豫

定の如く、午前八時より上野公園東京音樂學校に於て開會されたのであつた。當日は生憎雨天なるにも拘らず、會衆の定刻までに集まるもの實に一千五百有餘名、爲めに會場立錐の餘地なき盛況にして、先生は先づ開會の劈頭に當つて、幹事總代として登壇、開會報告をされたのであつた。

第一回日本聯合醫學會の會況

私は幹事總代と致しまして簡單に第一回日本聯合醫學會の沿革を述べ、それから又諸君に御承認を經なければならぬ事がありますが、今日の午前九時三十分には小松宮殿下が御臨席になりますから　其前に總ての事を終つて置きたいといふ考でありますからして、唯今から簡單に其事を諸て諸君の事後承諾を得やうと思ふ。

無論この學問の進歩した國　殊に醫學の進歩した國には學會といふものゝ必要を認めて居ることは万國を通じて皆然るのであります、そこで先づ日本も外の學問は知らぬが　醫學を以ては歐羅巴と殆んど近づいて來たといふ域に達しましたからして、どうか此學會の體裁も成る丈け世界で公認して居る方法に隨つて、面白い良い方法に隨つて行くやうにしたいといふことは、先輩諸君　皆さんの考へて居つた所であります、それに依つて日本に於ても大きな一國の專門學者が寄つて　さうして學問を講究するといふ考へで、既に我々の先輩と仰ぐ人は此學會の組織に御盡力になつたのであります、即ち第一回の日本醫學會、第二回の日本醫學會は悉く此趣意を以て成立つたのであります、所が第一回、第二回ともに日本醫學會は極めて盛大に成立つて甚だ好い結果を以て終られたのでありますから　我々は第三回、第四回の日本醫學會は必ずあることゝ思うて居つたのに、遂に其事なくして終つたのは諸君と倶に遺憾と思うて居ることであります、所で第三回以後の日本醫學會は學問の進歩に伴うて少しく方法を變へなければならぬといふことは我々も潛かに考へ居つたことで、恰も好し昨年來府下の有志者の間に斯る企てが起つた、依て一二の學會の人を寄せて相談を致したところが、學會が發起人となつて組織するといふことは出來ぬが、學會に交渉してさうして聯合して成立たすといふことは或は宜いかも知れぬといふので、遂に此聯合醫學會といふことに形が變つて來ました、そこで隨分此やり方が非常に奇妙なので學會を聯合させて、さうして大きな「コングレス」を作るといふ風なことは歐羅巴にも餘り例の無いことであります、隨分非難も出たし、又夫が爲に我々も困難を積みましたけれ共、どうも今日日本の狀態では同じ時に多くの學會が聯合せずして關係なくして方々に立つた時には御互に迷惑するので甲の方が盛んになれば乙の方が必ず衰へて仕舞ふ、或は乙が非常に盛んに勃興すれば甲の方が幾らか勢ひが惡ひといふやうな有樣に陷るかも知れませぬ、それでは倶に一つの目的　一つの醫學といふ目的の學會が不都合ちやから此聯合醫學會の如きものを三年に一度か、四年に一度、日本中の醫者が寄つてやることであるから此會のある時丈けは此學會は皆此會に力を添へて、さうして此會の成立を一意專心に謀る、其間は總ての學會は單獨に成る丈け盛んにして行くことにしたならば一つの目的、醫學の點に於ては一つも損すること無くして得る所は大なる話でありませう、であるから日本の今日の狀態では學會に交渉してやることが最も良い策と考へてやつたのであります、所がナカ〳〵幹事に選ばれた者共の力の及ばぬ爲に世間に此趣意を知らしめることが不充分であつたが爲か、或は色々の事が起つて來ました、併ながら先づ我々の趣意が大體に認められて、日本全國に在るところの數十を以て數へる學會に悉く交渉いたしたところが、大多數の學會は皆此聯合に應ぜられたのであります、一、二、例へば陸軍の軍醫學會の如きは交渉したけれ共それは決議する暇が無い卽圖軍醫長が上京することが出來ぬから決議が出來ぬから待つて吳れといふやうな會もあります、けれ共併なから其外の學會は協議する暇のあつた學會は大抵交渉に應じて聯合して吳れられたのであります、それでツイ昨今になつて一二東京に於て開けた學會が或は否決した學會もあり、或は決議を延期されたのもありますけれ共、併なから此等の學會とても決して我聯合醫學會を惡意を以て迎へるもので無い、兎に角我々は不行屆の計畫であつたに拘らず斯く多數の學會が協同されて斯く多數の會員が御臨席になつたのは實に光榮と存するところである、そこで私共が、發て御廻はし申した、或は新聞等に揭載した規則といふものを拵へたのであります、是は初め大澤岳太郎君、川上元治郎君、金杉英五郎君それから私が起草委員に選ばれて起草致しまして每會協議の結果、發起人會を開いてあの規則を拵へました、であるから總會に付した規則ちやありませぬけれ共、今まで成立つて居ない會で、元と〳〵發起人の會で規則を拵へなければならぬので、兎に角發表いたしましたから無論中には澤山修正するところもありませう、例へば開會の時であります、あの規則には隔年一度卽ち二年後に一度としてありますけれ共斯う云う大きな「コングレツス」を開くであれば二年では多過る、三四年位で開くが宜い徐々と進行することを好むといふ通知をして來た會もありますから此邊は諸君の意見を聞いて修正したいと云ふ考もあります、それで修正することは澤山ありますけれ共此總會に諸君の御意見を聞いて正したならばナカナカ出來ぬことであるから、是は一時諸君の御承認を經てあとで分科會の委員會を開きまして修正したい積りでありますから、どうぞ此規則全部を諸君から事後承諾を私は得たいのであります（拍手喝采）規則全部の承諾を得たならば各分科會から委員といふものを御出しになつて、さうして分科委員會で規則の修正も諸々の事を議するのでありますからして唯今假りに各分科會に於て二名宛分科會員を拵へてあるけれ共、是も矢張り諸君の公選に依つて成立つた委員でありませぬからして、假分科委員といふ名前を附してありますから、どう

ぞ今日以後分科會が成立つたならば、勿論其分科會に於て明かに事を知られて居る委員を諸君の中から御選出になつて第三日の晩に委員會を開き規則修正も致しまするし又次年度の開會地及次年度の會頭副會頭を選擧いたす積りでありますから、それまでに各分科委員を御選出になつて幹事まで御通知あらんことを希望いたします。（拍手喝采）

それから此事務の報告と致しましては、本會は歐羅巴の總ての學會殊に万國醫學會等の體裁に倣つて、日誌發行といふことを目論見て居ります、それで毎日その出來事及其日にやるべき事柄といふものは悉く日誌に記載をいたしてさうして諸君に分配することに致しますから……（中略）

それから尙ほ報告は澤山ありますけれ共、それは時間を要しますから日誌へ揭げて報告いたしますから、御熟讀になれば幹事の報告といふものもありますから、是でよしまして最後に諸君の贊成を得たいことがある、それは實は本會は斯く多數の御賛同を得て成立つたことと存じますから、玆に會頭、副會頭の推選を致すのであります、推選が成立てば本會が成立する次第でありますから我々役員分科委員等の協議に依つて醫學博士田口和美君を會頭に推選いたし、さうして副會頭には醫學博士北里柴三郎君を推選することに致して置きましたから諸君どうぞ御承認あらんことを希望いたします（拍手喝采）

かうして、先生の本會成立の沿革並びにその事務報告及び會頭、副會頭の推薦演說が終ると會頭田口博士並びに副會頭北里博士の就任挨拶が夫々あつて休憩、小松宮殿下の御臨場あつて後ち田口會頭の開會の辭、次で名譽會頭の推薦報告があり、終つて小松宮殿下の令詞を初め、桂内閣總理大臣以下來賓の祝詞が夫々あつて、開會式を終り、午後より、北里柴三郎、山根正次、高峰讓吉、三氏の總會演說があつて第一日を終り、第二日たる四月三日より各分科會が開かれたのであつた。

かくて、その第十二部、耳鼻咽喉科學部は、第三日目の四月四日午前九時を以て先生會長席に就き、久保猪之吉、佐藤信郎兩委員の下に法科大學第三號講堂に於て分科會を開會したのであつた。先生先づ開會の辭を述べて第十二部の成立を告げ、今後之を期として專門家は大合同を爲し益々斯道の發達を期す可きを約し、金杉、小此木、堀内、山上の諸先輩を夫々名譽座長に指名推薦して演說に移つたのであるが、當日は又、先年卽ち明治三十三年アメリカに於てアドレナリンを發明し、國際的な好評を博した高峰讓吉氏も出席し、『自己發明ノ「アドレナリン」ニ就キテ』と題し、同藥に關する報演說をなして頗る盛會を極め、またその夜の懇親會に於て先生は初めて大日本耳鼻咽喉科會々頭に、又副會頭には山上兼輔氏が夫々推薦されたのであつた。

尙又、その第二日目たる四月三日には東京醫學會の第十五回總會が本會との合同の上で行はれ、先生は金杉氏と共に宿題たる「喉頭結核に就て」報告演說される處があつた。

かくて最終日たる四月五日の第二總會に於ては先生は再びその劈頭に於て幹事總代として、分科委員會の決議事項、次回開會地選定成績等を報告し併せて次回會頭、副會頭及幹事等當選者の披露をなし、本會の設立並びに四日間に亘るこの第一回日本聯合醫學會開催の重任を解かれたのであつた。

思へば、明治二十六年以來絶えて久しかりし、かゝる大規模の醫學會の再びこゝに復興をみたことは、一に時勢の然らしむる處とはいへ、又先生等の綴密な企劃並びに精力的な活動斡旋に負ふ處尠しとしないであらう。

これ實に、爾來、回を重ねること十餘回、現時愈々その重要性を增しつゝある日本醫學會の濫觴にして、その身醫界に在る者の等しく、先生を初めとして、當時本會の設立に當つて奔走せる人々一同の勞を多とし、且つ、その恩惠の現今に尙ほ及べるを深く銘じて、愈々それを有効に活用すべき事項の一つであらねばなるまい。

## 二、大日本耳鼻咽喉科會々頭就任

このやうにして、明治三十五年は、その活動的であつた先生の生涯に於ても尙ほ忘る可からざる年の一つであつた。

卽ち、一方に於ては多年の宿望成つて正教授の地位に昇任すると共に又他方には、年來の抱懷達して一大コングレスを設立司會し、またこゝに於ては、それを機として大日本耳鼻咽喉科會の會頭に推され、今や我が國の耳鼻咽喉科學の發

遂は、一つに先生の足下に統合、規制せられて、一方學界に不動の基礎を築くと共に又他方在野の業界にも翼足を延ばすことゝなつて、名實共に斯界に君臨することゝなつたからである。

先にも述べた如く、大日本耳鼻咽喉科會は、四月四日午前九時半より開催された第一回日本聯合醫學會第十二部に合同して總會を開き、同夜は又午後六時半より芝の紅葉館に於て、その第十二部懇親會を開催したのであつたが、その席上、金杉氏より小此木氏の同意を得て大日本耳鼻咽喉科會の規則改正案を提出する處あつて、明治三十年五月十八日以來長らく廢止されてゐた會頭並びに副會頭を置くことゝし、併せて幹事、評議員をも同氏の指名推薦する處となつて、こゝに新に先生が會頭に推され、又副會頭には山上兼輔氏が就任することゝなつたのである。

當夜、推薦された役員は次の如くである。

**會頭** 岡田和一郎　　**副會頭** 山上兼輔

**評議員**（イロハ順）

池谷豐吉　原田貞夫　西山信光　小此木信六郎　大谷則貫
金杉英五郎　河野司馬造　葛目猪太郎　久保猪之吉　山本玄一
淺井健吉　佐藤信郎　酒井好　齋藤清　白木五百松

**幹事**

久保猪之吉　佐藤信郎

かうして、明治二十五年五月、五ケ年の留學を終つて歸朝、本邦に初めて「耳鼻咽喉科」の名稱を創始した金杉英五郎氏が、翌二十六年二月、事務所を日本橋の久松町三十番地に置いて、東京耳鼻咽喉科會を組織し、又同十一月その機關誌として「耳鼻咽喉科會雜誌」を創刊して以來十年、その間斯學の發展普及は學會の組織を擴大し、明治三十年にその名も大日本耳鼻咽喉科會と改め、又機關誌も「大日本耳鼻咽喉科會會報」と改題されるに至つたのであるが、こゝに於てバンドは遂にその創立主宰者たる金杉氏の手より先生の手に移り、東京帝大耳鼻咽喉科教室の諸員一同もこれに入會し、又役員にもなることゝなつて、會務は一切を擧げて東京帝大の同教室に繼承され、機關誌の發行も久保猪之吉氏がその編輯の任に當ることゝなり、事務所は一時本郷區丸山新町二十番地の久保氏方に置かれたのであつたが、後ち久保氏洋行するに及んで大學に移されたのである。

こゝに當時改定せられた本會の規則を掲げると次の如くである。

**大日本耳鼻咽喉科會規則**

**第一條**　**◎名稱及位置**　本會ハ大日本耳鼻咽喉科會ト稱シ假ニ事務所ヲ東京市本郷區丸山新町廿番地久保猪之吉方ニ置ク。

**第二條**　**◎目的**　本會ハ耳科鼻科及ヒ咽喉科ニ關スル學術ヲ研究シ且ツ一般醫學トノ關係ヲ明ニシ其普及ヲ企圖スルニアリ。

**第三條**　**◎組織**　本會ハ斯科專門家及ビ本會ノ目的ヲ贊助スル醫士並ニ篤志家ヲ以テ組成ス。

**第四條**　**◎會員**　會員ヲ別チテ在京會員及ビ地方會員ノ二種トス。

**第五條**　本會々員タラムト欲スル者ハ姓名（假名附）住所。職別（開業。專門若クハ職等）族籍ヲ記入シ會員ノ紹介ヲ得、本會ニ申シ出テ幹事ノ承認ヲ經ベシ。

**第六條**　事故アリテ退會セムト欲スル者ハ其旨本會ニ屆ケ出ズベシ。

**第七條**　會員ニシテ轉居シタルトキハ其部度必ズ本會ニ通報ス可シ

**第八條**　會員ニシテ其義務ヲ怠ルカ或ハ本會ノ體面ヲ毀損スル者ハ決議ノ上除名ス。

**第九條**　**◎役員**　本會ニ會頭一名、副會頭一名、幹事二名、評議員十五名ヲ置キ投票ヲ以テ之ヲ定ム。

但幹事ハ出席評議員ノ互選ヲ以テシソノ他ノ役員ハ出席會員ノ選擧ニヨル若シ投票同數ナルトキハ年長者ニ讓ル。

第十條　役員ハ任期ハ一ヶ年トス滿期再選スルヲ得。

第十一條　出席評議員ハ決議ニヨリ斯科ノ大家ヲ名譽通信員ニ、及ビ本會ニ功勞アルモノヲ贊助員ニ推選ス。

第十二條　會頭ハ本會ヲ統率シ副會頭ハ之ヲ助ケ評議員ハ會務一切ヲ協議シ幹事ハ庶務、會計及編輯ヲ擔當ス。

◎集　會

第十三條　集會ヲ別ヲテ常會及ビ總會ノ二種トス　但シ事宜ニヨリ臨時會ヲ開ク。

第十四條　常會ハ隔月（第三火曜日）開會シ斯學ニ關スル講話、演說及ビ討論ヲナス。

第十五條　總會ハ毎年四月開會シ學會ノ外庶務會計ノ報告及役員ノ改選ヲ行フ。

第十六條　臨時會ハ評議員五名以上又ハ會員十名以上ノ要求ニ依リ開會ス。

◎會　計

第十七條　會員ハ會費トシテ在京地方共ニ一ヶ年金貳圓ヲ前納セラルベシ。（但既納ノ會費ハ一切返附セズ）

第十八條　篤志者ヨリ寄贈セラレタル金員物品等ハ之ヲ領收シ簿册ニ記載シテ永遠ニ保存スベシ。

第十九條　本會ノ雜費ハ會費及寄贈金ヨリ支出シ剩餘アルトキハ貯金局ニ預ケ置クベシ。

第二十條　本會ニ書記二名ヲ置キ幹事之ヲ選出シ相當ノ報酬ヲ給ス

第二十一條　隔月雜誌ヲ發行シ會員ニハ無料之ヲ配附ス。

第二十二條　會員中死亡者アルトキハ本會ノ名儀ヲ以テ弔詞ヲ贈ル。

第二十三條　此規則ハ總會ノ決議ヲ經ザレバ改正變更スルコトヲ得ズ。

かうして、四月四日、先生の會頭就任と共に四月廿日、その事務引繼ぎが行はれ、會務は大學に移されたのであつたが、會報の方は、その第八卷第三號を同年の三月二十日に發行したまゝで一時休刊され、爾後は月刊を隔月發行として、第四、第五號を合刊して、その七月から久保氏の編輯の下に裝を新にして發行され初めたのであつた。

而してその劈頭に當つて、新任の編輯者久保氏が「任に就きて志を言ふ」といふ一文を載せてゐるから、參考までにこゝに掲げておかう。

今の時、相爭ふの時ならむや。私情を以て相望むの日ならむや。私情は挾むべからず、障壁は設けらるべからず。吾耳鼻咽喉科の學科、日本の地に移植せられて幾何もあらず、否、世界の學界に萌芽してよりすら尙久しとせむや。吾科の研究領地は茫々として橫り、その材料も亦累々として連る。研究の歩、一歩を進むるに從つて趣味深く、無限の疑問は學者を驅つて底止する所をしらず。蠶つて此小區域が人身の全體に關與する事の大なるは益明著となりぬ。若夫、耳性漏洞、鼻性喘息、等の如きに至つては神の工の厘毛を寫ひえしに過ぎざらむ、嗚呼、醫官の機能、喉官の解明等何れの日、如何なる人を待つて解決せらるべきぞ。然らば吾耳鼻咽喉科の如き、尙開拓せらるべき沃野森々たる有望の一學科にあらずや。」

しかるに吾邦の狀態、今如何　全國を通じて七つの醫學專門學校ありといへども、耳鼻咽喉科の獨立せる者はあらざる也。否外科の內容に混ぜらるゝのみ。東西の病院大小を合して幾百ならむ、而して吾科の分立せるものは寥々たる五指を屈するにも足らじ。夫の山間の庸醫、僻地の俗人に至りては、未だ耳鼻咽喉科の何たるをも解せざらむとす。全國の中吾科の「クリニツク」を有するは獨り吾醫科大學の一教室あるのみ。それすらも二年の歲月を經るに過ぎずして、研究に志す人少し。耳科、喉頭科の分擔を見る、何の時なるをしらず、外にありては、僅に金杉、小此木二家の門より種子繁殖の面かげをみるのみ。現狀誠に悲しからずや。」

如何にして專門攻究の士を多からしむべきか、又如何にして斯科の智識を普及せしむべきかは焦眉の問題也。吾徒、豈、私情に縛せられ、小利に迫はれて眼前の事業を忘らるべしや。宜なり、金杉博士は八年の間、私財を擲て維持し來りし會を、忘れたるが如く吾人の手に委ね、一意その發達と隆盛とを悅ぶものの如し。岡田博士は又教室を率ゐて新に會を組織せむとの考ありしが門下を擧げて大日本耳鼻咽喉科會の會員たらしめ、かつ既刊の會報を跳を追つて繼續する事と定めつ、此間に在つて小此木ドクトル斡旋する所あり。吾人は始めて悅ぶべき共同を得たり。大の爲めには小を忘れ、公の前には私無かるべし、學問は私有物にあらず、眞理は共通なり。われ幸にして此間に生れ、まさに羊腸の山腹を踏んで、山巔に朝陽を迎ふるの感あり。先進諸家の驥尾に附いで盡瘁するを樂みと思はむ。任に就くに臨んで、事の順序を遞ぶるをえ禁ぜざりき。そは小人の徒、俗士の輩、先進諸家の餘意を誤解し、吾人の團欒を傷害せむことをおそれてなり。」

明治三十五年七月

この久保氏の卷頭の辭によるも分るであらうやうに、何分斯學の發達普及の爲めに私財を擲つて、本會の設立經營に十年の間苦心主宰せられた金杉氏のことゝて、その一切を擧げて大學に移すに就ては多少の紆餘曲折のあつたであらうこと

も窺知するに難くないが、然し、金杉氏は能く大乘的見地より、小此木氏の斡旋もあつて、一切を先生に一任されることゝなつたのであつた。

かくて、先生は、昭和十三年その薨去に至るまで、爾來三十有七年、大學に於ける研究の傍ら、本會の會頭としては本邦の專門學會をよく統率し、斯界の爲めに盡瘁せられたのであつた。而して、先生の會頭就任當時は、會員僅か三百二十名、機關誌たる大日本耳鼻咽喉科會會報もまた菊判五十頁内外の小冊子にすぎなかつたが、先生の晩年に於ては會員數も約二千、會報も四六倍判にて年通計二千有餘頁の老大なものとなるの盛況を呈するに至り、また地方會の設立せらるゝもの内地各大學所在地は勿論、臺灣、朝鮮等の外地及滿洲國に至るまでその數十五の多數に達し、蔚然たる一大學會を成すに至つたのであつて、これ一つに世の趨勢の然らしむる處であるとはいへ、尙且つその間に處して、會頭としての指導宜しきを得た先生の力に負ふ處尠しとしないであらう。

## 三、同仁會の創立

このやうにして、明治三十四年より三十五年にかけての先生は、一方に開設早々の教室の整備、指導に倥偬たる日々を送られると共に又他方對醫界の問題としては日本聯合醫學會の設立に奔走せられたのであつたが、またこゝに於ては、國家的對外策として、同仁會の創立に參與し、その誘掖指導に盡瘁されたのであつた。

恰もよし、今や本邦醫界内外諸般の事業は先生の掌握下にあり、更らに翼足延ばすべくんば東亞廣大の天地を措いて外にあらず。また今や清國を壓倒せる新進日本の關心、遠く朝鮮半島を越へて、支那大陸を周る東亞の新天地にかゝれり、既に明治三十二年十一月近衞篤麿公を主長とする東亞同文會の結成せられるをみる。而して又我が日新醫學の向上發展は、之れに伴ひ、之に歩調を一にして、遠く海を踰へて大陸に伸長せざるべからず、東亞十億の民衆は今や一視同仁、醫學を通じての善隣和協、實踐の秋は遂に來たれり、同仁會の創立また先生の活動に負ふ處あらざるべからず。此處に「同仁會三十年史」の錄する處に從つて、その創立當時の狀況を概觀しておかう。

抑も、「同仁會の目的とする所は、支那其他亞細亞諸國に對し、醫學、藥學及び之れに附隨する技術を普及し、依て以て衆庶の健康を保護し、病苦を救濟し併せて彼我の交誼を敦うし、進んでは是等諸國の文化に貢獻せんとするにあるので、其の具體的施設としては、先づ病院を開設し最新の醫療を施與し、醫學校を興して卒業の醫士を各地に分布するを主要なる事業とし、更に進んで前記諸國の衞生及藥品に關する調査を爲す事、並開業せんとする醫士、藥劑士に對し便宜を與ふる事、醫學生の留學を勸誘並に保護指導をなす事、及び適切なる醫學、藥學に關する圖書刊行をなす事等にあるのであるが、此の事は既に遠く明治二十七八年戰役前後から一部邦人間に提唱せられ盛に論議せられ其の結果、明治三十四年夏季の頃より着々同志の糾合に努め、故公爵近衞篤麿氏の主宰せられた東亞同文公司（東亞同文會の前身）關係の人士を中心とし、此れに醫界關係の人々即ち片山國嘉、北里柴三郎、岸田吟香等の諸氏並子爵長岡護美氏等も關係し、翌三十五年初頭東亞同文醫會なるものを組織し、有志に檄を發したのであつた。

此れより先き明治二十七、八年戰役後、我が日本帝國は、諸外國との國際關係漸く多きを加ふるに至り、米、露、佛等の列强と通商航海條約の締結に始まり、漸次進展して遂に同三十五年一月に至り、日英同盟の成立するあり、我が帝國は世界の一等國として東亞に於ける責任漸く重きを加ふるに及んで、隣邦諸國の爲めに力を効すは蓋し當然の任務たるを認識するに至り遂に明治三十四年の末頃から、清韓諸國に對する醫學的啓發を目的として新たに一團體を組織するの議起り、同三十五年一月十七日北里柴三郎、藤井兼一、高木友枝、日高埠、金杉英一郎、細野順、園田宗義、片山國嘉、酒井榮次、川上昌保、永坂周二氏其他二十餘名日本橋龜島町の偕樂園に會し、尙永井久一郎氏等も參加して有志の醫師を支那に送り、支那文化の開發の端緒となす事とし、協議の上前述の同文醫會の組織を擴張して亞細亞醫會を設立し、川上昌保、藤井兼一、川上元次郎の三氏に規程草案の起草を托した。其後同年二月四日大日本私立衞生會に於て協議會を開き、川上昌保、藤井兼一氏等より起草の規程草案の說明をなしたる上協議し、先づ起草委員川上元治郎、藤井兼一、川上昌保の三氏に日高埠、宮本仲、石川清忠、細野順の四氏を加へ、七名の委員にて該草案を原案として更に調査の上追て發起人會を開催する事とした。此の會には前回の出席者の外、岡田和一郎、入澤達吉、山根正次等の諸氏も出席し總數三十餘名に達した。其後同年二月十三日神田雉子町宮本仲氏宅に於て草案起草委員會を開催し、更に同年三月十七日、大日本私立衞生會に於て協議會を開催した。此の會に於て我が國醫界の重なる人々並有志の人々が隣邦支那並朝鮮其他の亞細亞諸國の醫事、衞生の啓發につき具體的施設をなす爲め、蒙昧、明確なる方法

を講ずるの急務なる事に意見の一致を見、玆に從來の東亞同文醫會と亞細亞醫會との合同に依り、新たに同仁會なる名稱の下に創立を議する事となつたのである。斯くして成立したる同仁會は其の協議會に於て、創立總會準備委員として北里柴三郎氏等二十餘名選任され、公爵近衛篤麿、子爵長岡護美、北里柴三郎、岸田吟香、片山國嘉、其他三十餘氏來會し、十一章十八條より成る規則草案を討議せられた。其後同年三月二十八日、第二回創立協議會を開き、引續き同年四月二十六日及び四月二十八日發起人準備會を開催し、同志として各方面の有力者を勸說し、愈々方針の確立を得同年六月十六日を以て創立總會を華族會館に於て開いた。當日は外務大臣小村壽太郎、清國公使蔡鈞氏等も臨席され、午後一時開會先づ發起人總代として片山國嘉氏は創立趣旨書を朗讀し、更に其の趣意を敷衍說明する所あり、次て長岡子爵は日清國交の上から我が醫學を對岸に扶植する事の必要を論じ、蔡公使亦本會の趣旨に贊同の意を表明し、印度人ダルマパラ氏亦英語を以て東亞の全局より觀て本會の切要なる所以を說き、更に山根正次、岡田和一郎諸氏の祝辭、演說有り、會則の議事に入り千家男爵座長席に着き、北里柴三郎氏の動議川上元治郎氏の該動議に對する修正意見あり、結局會起草案の一部を逐條審議し、他は評議員に托して調査起草せしむる事とし、川上氏、石川等より相當議論が出たが、大體に於て原案通り可決し、引續き役員の選擧に入り、會長に長岡護美氏副會長に片山國嘉氏、評議員に北里柴三郎氏以下二十名、理事長に岡田和一郎氏、理事に日高昇、石川清忠、藤井秉一、細野順、園田宗義、足立忠八郎、川上昌保の諸氏を選任し、更に岡田理事長の推薦各理事の贊同に依り、園田孝吉氏を會計理事に擧げ、同氏の快諾を得て玆に全く本會の成立を告ぐるに至つたのである。

玆に附記すべきことは右役員選擧に當り、片山、園田等の諸氏は、本會が一面國交にも大關係あることに鑑み、當時我が國並對外各方面に信望厚き公爵近衛篤麿氏を會長に推薦し、大に同氏の勢力に期待し其の目的を達せんとして就任方を懇請したのであつたが、同氏は既に東亞同文公司の會長として其の關係深く且つ一面政治的方面にも關與せられ居る爲め、同氏と同主義のもとに常に行動せられて居る子爵長岡護美氏を推擧せられ、內部的に本會の爲めに援助する事を約せられたのであつた。」

このやうにして、六月十六日の創立總會に於て、先生は推されてその理事長の地位に就き、會務を掌握し、こゝにまた同仁會の事業を統率すること、なつたのであるが、先生はその協力者として十五銀行頭取園田孝吉氏を擧げてその會計理事に推し、後顧の憂をなからしめて以てその創業に献身されることゝなつたのである。

かうして、長岡子爵を會長に戴き、先生を理事長として成立した同仁會は、その七月十九日、神田一ッ橋帝國教育會內に事務所を置き、活動を開始したのであつたが、その事業開始と共に先づ第一に着手せねばならなかつたことは、廣く同志を天下に求める事にあつて、會員の募集及び寄附金の勸誘を第一とし、汎く新聞雜誌に廣告して內外の協贊を求め、或は檄を飛ばして、日支有力者の協同を促すと共に、又他方に於ては、會の幹部は各自分擔して個人的に又は團體的に交涉して以て有志者の贊助を得たのであつたが、また當時清國政府の要路に在りし劉坤一、張之洞、袁世凱等の大官連には特に書を裁して本會の趣旨を傳へ、或は毓朗、吳汝綸、榮勳、紹英等の諸名士來朝するあれば、之を訪問し或は招待して、その了解と助力とを求めたのであつた。

かうして、同三十五年の夏季休暇には、その公暇を利用して、片山博士は東北地方に、北里、金杉兩博士は靑森及函館地方に、岡田先生は東海道、京阪並に北陸地方に、栗本庸勝氏は福岡、熊本地方に夫々出張して、事業の宣傳、寄附勸誘等、會勢の擴張に努めたのである。

かうして、その各地の遊說は大に効を奏し、同年八月末日には、會員二千名を超ゆるに至つたのであるが、こゝに先生の當時の遊說日程豫定表とも覺ばしきものがあるから、それを次に揭げておかう。

八月十四日　午后出發
〃十五日　靜岡市　一泊
〃十六日　名古屋市　着
〃十七日　同地方遊說
〃十八日　同地方遊說
〃十九日　京都　着
〃二十日
〃二十一日　同地方遊說
〃二十二日
〃二十三日　大阪市　着
〃二十四日
〃二十五日　同地方遊說
〃二十六日
〃二十七日　神戸市　一泊
〃二十八日　須磨　一泊
〃二十九日　姫路市　着
〃三十日　同地方遊說
〃三十一日　福井市　着
九月一日　同地方遊說
〃二日　金澤市　着
〃三日　同地方遊說
〃四日
〃五日　富山市　着
〃六日　同地方遊說
〃七日
〃八日　歸路ニ着ク

かうして、遠大の理想を旨とする同仁會も、その創業當初に於ては、その活動の基本とする會員と資金の獲得の爲めに、先生を初め役員一同は手辨當式の奮闘を續けて東奔西走し、寸暇を得ては諸方に遊説を之れ努め世の協賛を求めたのであつた。就中、先生にあつては、その創立者の一人とし、殊にも自ら理事長の要衝に當つて、資金乏しき草創期に處したゞけに、その原動力たる同志の糾合並びに資金の蒐集等、その苦心と努力とには一方ならぬものがあつたものゝ如く、機會ある毎に諸方に遊説されたものゝやうである。

このやうにして、草創の事業は、先生を初め役員一同の努力によつて着々となり、三十五年の秋には早くも會の組織を變更し、財團法人にせんとする議が起り、その十一月二十八日の臨時總會に於て滿場一致之を可決し、翌三十六年二月四日を以て認可され、こゝに東亞の文化事業に對し大なる抱負を以て生れたる本會の骨格は愈々完成されることゝなつたのであつた。

そして、こゝに於ては、先生は常務理事とし、庶務監督の重任に就き、園田常務理事又會計監督の要衝に當つて、愈々會勢の擴大、會務の强化に努められたのである。

こゝに、當時發表された本會創立の主旨書、綱領並に役員氏名等の一部を參考までに掲げておかう。

## 主旨書

幸福は人生唯一の希望なり、此の希望や人類の健展によつて初めて之を求むべし。我が醫學の因つて起りし以來、驚嘆すべき近世醫學の進歩を招致せしもの一に玆に存す、而かも地球上斯學普及の恩澤に浴せさるの地今尙甚だ少しとせざるは、人文發達を誇るの現代社會に在つて正に一大缺陷たるの感無くんは非らず。我東洋の諸友邦の如き比々是れにして彼等が依然たる舊醫學は、啻つて日進醫學に觸接せざりし數十年以前の我國狀に比し劣るとも勝るなきもの皆然り。此れ、曩彼等友邦人衆の不幸のみとせんや。交通の今日の如きに在りては、彼地に居留する列國人衆の不幸たるは勿論、其病毒傳播の關係より、又直に世界人衆の不幸たるを免れじ。蓋し我東洋諸友邦の爾かく現代に後るゝは、斯學發達の趨勢之れを西より東に致せしめしに因る。唯幸にして此間獨り我國の存するあり、夙に斯學を吸收消化し今や東洋唯一の代表者として雄を世界の學壇に顯ふに至れり。則ち我國の先づ玆に得たる所を取つて、彼友邦の缺けたるを救ふは當に東洋啓發を以て天職とする我國の責任にして、又醫學本來の目的に添ふべき神聖なる斯學者の義務といふべし。此趣旨に基き玆に一種の人道事業として清韓其他我東洋の各友邦に對し、我日進醫學を基礎とせる醫事衛生上一切の智識を注入普及せしめ、以て與に共に人類の幸福を分たんとするもの、實に本會の起れる所以なり。而かも固是れ困難なる一大事業に屬す。其の克く之れが遂行を期するには、我醫學上の智識以外更に多大の資金と能力を要すべきこと勿論にして、而て如斯は汎く天下の協力を得て初めて之を望むべきなり。願ふらくは天下仁義の士幸に此の博愛仁慈の主旨に賛し來りて共に本會に戮力せられんことを。

## 綱領

清韓及び其他東洋諸國に我日進醫學を注入し、其人衆をして均しく斯學の恩澤に浴せしむ。

右等諸國に於ける醫事衛生上一般の改善を助成す。

右に關し必要なる一切の方法を討究し且つ實行を期す。以上

理事(會長) 子爵 長岡護美　　理事 石川清忠

理事 醫學博士 佐藤進　　理事 山根正次

理事(會計監督) 園田孝吉　　理事(常務理事) 吉田迂一

理事 藥學博士 丹波敬三　　理事 醫學博士 青山胤通

理事 清水彥五郎　　理事 嘉納治五郎

理事(副會長) 醫學博士 片山國嘉　　理事(常務理事) 足立忠八郎

理事(庶務監督) 醫學博士 岡田和一郎

理事 森田茂吉

理事 山座圓次郎

理事 永井久一郎

理事 醫學博士 北里柴三郎

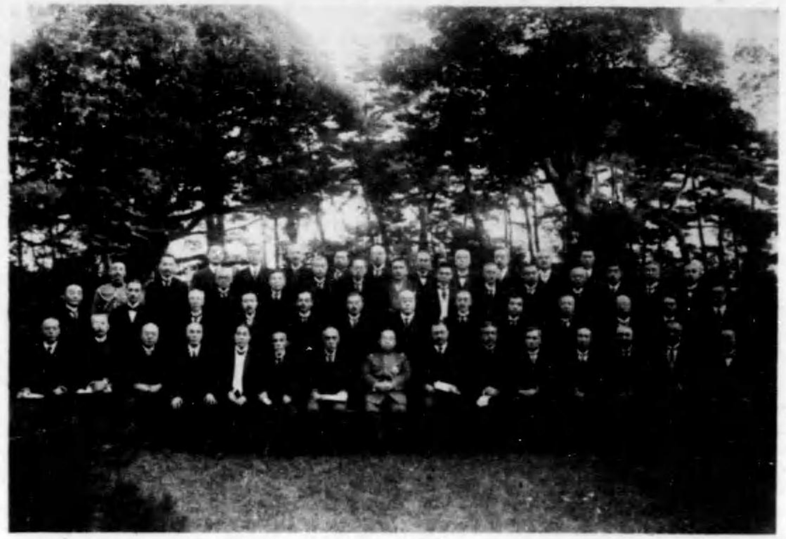
かうして、先生等は一方に、專ら同志を募り資金を集めて着々その基礎を固めると共に、又他方には、幾何かの餘裕を見出しては、遠くは遥羅國からの要求に應じて醫師藤井氏を派遣して、日本醫學の名聲を海外に發揚し、或は、清國に對しては、同じく近藤氏を泉州へ、太平氏を沙市へ、島谷部氏を蘇州へ等々、大陸の各地に夫々紹介派遣せるのみならず、又朝鮮地方には京城、平壤、大邱その他各地に亘り有力なる醫師を派遣する等、同會本來の目的に向つて指を染め、着々所世の理想に向つて貢献する處あつたのである。

かうして、本會の基礎は創立幾何もなくして整備の緒についたのであつたが、明治三十七年八月二日會長長岡子爵が一身上の都合に依り辭任したので、先生を初め、青山胤通博士、佐藤進博士等は鳩首相談の上、その事業の使命に鑑み、內外に信望ある活動的な知名の士を會長に推薦することゝして、先生と青山博士との兩人は、その最適任者として、大隈重信伯を早稲田に訪ねて懇請し、遂にその快諾を得、同年八月三日、第二次會長の就任をみることゝなつたのである。

當時大隈伯は既に世界的偉人を以て目され、その一言一行は中外に反響を及ぼし、而して居常東西文化の融合を以て日本の大なる使命となし、絶えず之れを力說强調する處あつたが、又我が同仁會にあつても、東亞の先進國たる日本として、隣邊後進の諸邦に新らしき文化を光被せしめんとする高邁なる理想の上に立てる世界的事業を目圖してゐたのであつたからして、蓋し斯人にして斯會に會長たるは洵に適處適材といふべきであつた。

而して大隈伯は、大正十一年春その薨去に至るまで其任にあり、その地位と名望とに加ふるに該博なる智識と絶大の活動を以て本會の爲めに盡瘁せられ、その華々しき活躍ぶりを發揮して高邁なる識見を以てその事業に精神を附與し、その雄辯宏辭を以てその事業を天下に宣傳し、更らに進んでは多忙の身を以て瑣末なる會務に至るまで鞅掌の勞を執るを厭はなかつたのであつて、こゝに於てか、先生の理事一統を率ゐてその補佐に怠らざると共に又こゝに天下の知己を得て自由濶達、八面六臂の奮鬪を恣まにするを得て、遂に同會をして今日の大に爲さしむるの基礎を致したのであつた。

卽ち、伯の會長となるや、就任尙日淺きに拘らず、明治三十七年十一月、早稲田の自宅に於て第一回大會を開催し、朝野の名士、海外の貴紳を招いて、本會の趣旨を中外に宣明する事に力め、先生の開會の辭に次いで大隈會長の熱辯を以てせる挨拶あり、非常に有意義にして盛況裡に閉會したのであつたが、その効果の著大なるに鑑み年々大會を開催して本會の宣傳、會務の結束を强うすることゝし、明治三十九年十一月には第二回を、また同四十一年十一月には第三回を、更らに四十二年十一月には第四回の大會を開く等、いづれも朝野の名士貴紳の來賓數千名乃至二三千名の參集



同仁會と先生

を得て盛大に行ひ、或は又、その總裁に久邇宮邦彦王殿下を推戴し奉つては全國各地の總會に扈從し奉つて、大に本會の伸長を内外に圖つたのであつた。

これより先、先生ばまた支那留學生の爲に醫育機關の設立を必要なりとして、明治三十九年二月、牛込に同仁會醫藥學校を興し、自らその校長となつて、その維持經營に辛酸を嘗められる等、昭和十三年その顧問に推されるまで、實に三十有七年、終始理事として同會の發展に力を盡くされたのであつて、今日同會が我が國策遂行上の重要なる一機關として、その對支文化工作上に不可缺な緊要性をもち、また更らには東亞共榮圏の確保をめざす我が對外策の一翼としていよ〳〵重きを加へつゝある際、その創立に、又その育成發展に多大の寄與を致せる先生の達見と努力とは、國家的にも永久的に忘却さるまじきものであらう。

幸こゝに、「同仁會三十年史」（昭和七年九月發行）に寄せられた、先生自身の筆になる當時の回想があるから、それを次に掲げておかう。

## 同仁會事業の初期時代を回顧して

岡田和一郎

我同仁會が本年創立滿三十年に達し、然かも其事業は友邦中華民國に於ては北平、漢口、青島、濟南の四要地に病院を開設して醫員及び從業員諸氏の獻身的不斷の努力に依り着々所期の目的に向つての道程を歩みつゝあるのみでなく、今將に國際都市なる上海をトして更に一大醫院を新設して、尙ほ將來の伸展に向つて一大畫策を謀らんとしつつあり、又内地に於ては、會長副會長を初め理事主事等皆協力して、外務省當局の信頼と援助とを受けつゝ眞面目に其の研究と實行とを怠らざるの域に到達したので、今にして、我同仁會事業の將來の運命に就て考察するなれば、爾今尙ほ幾多の難關に遭遇する事もあらん、又極度の忍耐を要する事もあらんが、然し必ずや或る時期に於て其使命の達成に依つて、東亞共通的文化の伸展と友邦彼我の福祉增進とに向つて一大貢獻を遂げ得るに到る事あるを毫も疑はないのである。それ故に余は理事の一人として然かも會を三十年前に創立したる一人として、又第一回會長長岡子爵時代と第二回會長大隈侯爵

時代に亘りて理事長として本會の實務に當りたる一人として、當今の役員諸氏に對して此機會に於て滿腔の謝意と敬意とを表さずんば居られないのである。玆に現會長並に常任理事等の諸氏に對して、謹て敬謝の意を表します。而て余按するに同仁會のこの成功若くは近き將來に於ての大成功は蓋し其成るの日に於て忽然として成つたのではなくして必ずや過去三十年間の前驅的時代があつて漸くにして事此所に到つたのであると信ずるので今此機會に於て此前驅期即ち第一期長岡子爵時代と第二期大隈侯爵時代の同仁會事業として主として努力を拂はれたる方面の大意と、及び登場されたる諸氏の芳名とを記述して其當時を偲びつゝ、此等諸氏に對しても亦敬謝の意を表するを以て、余の責任且つ義務の一つであると信ずるので、次に其大略を記述する事とする。

第一期子爵長岡護美氏の會長時代　此時代は副會長として創立者たる片山國嘉博士、會計理事として男爵園田孝吉氏が就任され、理事長として不肖白ら其位置を汚し、新潟縣より特に本會事業の進展に力を致さんとして上京されたる田代亮介氏に囑托するに庶務主任を以てして事に當りしが、當時は朝鮮及支那に醫學及び藥學の普及を謀り、延て東亞友邦の文化促進を企つべき理想の下に、相當の努力を拂はれたのであつたが、併し國庫の補助は尙ほ毫もなく加之民間に於ても尙ほ未だ巨額の寄附を申出づる者一人もなかりし時代であつたので、會長初め當事者は何れも皆分擔區域を定めて遠近各地方に勸誘遊說する事となし、會長と園田會計理事とは專ら東京に在つて種々の機會に於て在京實業家等の間に運動し特に會長は濱町の自邸に招待會を催して賛成者勸誘に盡力された事も二三回あつた。又片山副會長と余とは遠隔地方を分担して片山副會長は福島、仙臺、盛岡、青森等に行き余は靜岡、名古屋、福井、金澤、富山、新潟、姫路、京都、大阪、神戸等に遊說して同仁主義の宣傳と基金募集とに盡力して相當の効果を擧げたのであつて、此等の基金の範圍内に於て實行されたる事業としては先づ朝鮮の京城、平壤、大邱、龍山其他の數ヶ所に醫師を派遣し或は在來の本邦人經營の醫院又は開業醫と連絡を取りつゝ同仁主義の次で支那に向つても北京、漢口、天津、上海等に或は醫師を派遣し或は醫學の派遣を要求して來たので是れ又東亞の一部と發展に向つて一歩々々進出せん事を計つたのであつた、又當時『ジヤム』國よりも本邦醫の派遣を要求して來たので是れ又東亞の一部と見做して之れに應ずる事とし、當時本會に所屬して居られた藤井氏を送りて、同國首都に於て醫業に從事せしめ、大に成功した事もあつたのである。然るに會長長岡子爵は在職三ヶ年に達せずして殘念ながら他界されたので、其後約三ヶ年間副會長片山國嘉氏が會長事務を代行する事となつたが、此時期にも不相變長岡會長時代の事業を踏襲して專ら基金募集と開業醫の派遣保護とに努めたのみであつた、而て此時期には男爵園田孝吉氏は本職多忙其任に堪へ難いとの故を以て、會計主任を辭されたので代つて理事後藤節藏氏が會計主任の位置に就かれ、又庶務主任として田代亮介氏辭退して山田烈盛氏就任されたので隨つて色々執務上の方針等に改良を加へて奮勵努力されたのであつたが、基金は尙ほ不相變豫期通りに集らないので大に閉口したが併しそれでも此當時已に醫學を支那に普及せしむるには支那青年に醫學を敎授するに如くものがないと考へたので、地を東京市牛込區西五軒町に卜し、或る適當なる家屋を借りて同仁會醫學校を開設し、支那各省より留學生を募集して約百名に近き入學生を得たので、余自ら校長となり足立忠八郎、四宮憲章氏等に請ふて日語を敎へ且つ通譯の術に當つて貰ひ帝大醫學部解剖學及生理學敎室主任に請ふて適當なる敎授の派遣を計り、他の一面には同所に醫院を開き當直醫看護婦等を配置して各科臨床科の診療の開始をなしたのであつたが、當時基金募集意の如くならず隨つて醫學校經費の如きは全然余等の私財を投じて維持する計りであつたので、到底永續の見込なき事を認識し、已むを得ず留學生を千葉、金澤、長崎等の醫科大學に轉學收容を乞ひ、幸に希望が容られたが爲め、本會經營の醫學校は約一ヶ年にして遺憾ながら閉校する事となつたのであるが、併し本會より各醫科大學に轉學したる諸學生は幸に其大部分は何れも其大學を卒業歸國して、中華民國の醫事衛生の要職に就いたり又は醫育機關の敎職に就て我同仁主義の伸展に向つて、間接の援助をなしつゝあるので、是れ又決して無益の努力でなかつた事を信ずるのである。

第二期大隈重信侯爵の會長時代　片山副會長の會長代行期中に理事間に於てこの東亞の文化的大事業の遂行を期する同仁會の會長には是非共大隈重信侯の屈望と及び其指導とに待たねばならないと衆議一決したので、同侯に最も深き關係にあつた青山胤通博士の引率にて、片山副會長及び余等打揃つて侯爵を早稻田邸に訪ふて就任方を懇願したるに、初めは政治上及び社會事業上從來餘り多くの關係あるを以て何としても此上同仁會々長の職に就く事が出來ないとして固辭して止まなかつたので、一回は侯爵の再考を願つて同邸を辭し、後ち數日を經て再び青山博士と同道にて侯爵を訪ひ尙ほ一層熱心に就任を懇願して玆に初めて同侯の快諾を得たので、爰に久しく缺員であつた會長に大隈重信侯を戴く事となり、次で副會長は二人を置く事となつて居るので、片山國嘉博士の外に青山胤通博士を副會長に推薦し、何れも就任されたので玆に威容大に革まり、更に大々的に會員募集と資金充實とに努力する事となり、侯爵就任後毎年一回位早稻田邸に於て總會の爲めに園遊會を開催し、其會毎に會長自らが其尖端に立たれて同仁主義の宣傳に向つて例の長廣舌を振はれ、又た好機會を捉へては横濱、名古屋、大阪、京都等に余等を引率して會員募集寄附金勸誘の爲めに自ら出馬され、到る所皆な其地方有力者を多數に集めて大演說を試みられたのであつた。それ以來本會は大に面目を改めて、愈〻社會一般より大に注目さるゝ所となり、會員も漸く增加して大阪、京都、名古屋、横濱、金澤等の都市に支部を設置するの運びとなつて來た。於之會長侯爵の發意にて本會事業は東亞文化の啓發に對する最も重大なる使命を抱擁せる者であるから、是非共皇族殿下を總裁に奉戴すべきであると主張され、衆議直に一決會長侯爵より本會の主旨目的等を具して、久邇宮殿下に言上し、次で勅許を得て遂に殿下を本會總裁に奉戴する事となつた。隨つて余等當事者の本會に對する責任の愈〻重且つ大となれるを痛感せずには居られなくなつた。而て此間に於て本會の事業としては其當時朝鮮國併合が行はれ、伊藤博文公が初めての總督に就任されたので、會長侯爵は前後二回特に同仁會事業の爲めに伊藤公と會見され、爾今朝鮮統治に臨ん

では朝鮮の醫事衛生の伸展を謀るべきであり、隨つて京城に模範的大醫院を開設すると同時に、其他の地方に於ては同仁會が前年來經營し來りたる事業を繼承して益〻其發展を謀るべきである事を力說され、伊藤公も大に之れに贊意を表したので、同公統治の初めに於て已に京城に總督府醫院を大々的に開設し、且つ其院長には特に本會顧問たりし佐藤進博士を推擧就任せしめたのであつた。於之本會事業としては、朝鮮は已に一段落を告げたので爾來專ら其力を支那內地の醫學及び藥學の普及に盡力すべきであるとなし、其實行に向つて奮勵する事となつたが此期間に於て副會長片山博士は眼病に罹られたるの故を以て辭職され、丹波藥學博士其後を襲ふて副會長の職に就かれた。又青山副會長は不幸にして病の爲めに他界されたが、其補缺は暫く缺員の儘にて置く事となして、會務の伸展を計つたのであるが、其結果として北京に同仁會醫院を開設し、次で漢口にも亦同仁會醫院を開設するに到つたが、これと前後して獨逸で建設したる青島醫院と本邦軍政府に於て建設したる濟南醫院とを本會の事業中に移す事となつたので本會は此時期に於て漸く友邦內地に於ても初めて事業らしい事業に着手し得る事となつたのである。が併し其資金は不相變尙ほ十分でないので大隈會長が外務大臣たりしときにも又總理大臣たりしときにも又寺內伯が總理大臣たりしときにも現會長內田伯が外務大臣たりしときにも、國庫補助に就ての斡旋を願つたのである。これ等の努力が漸く酬いられて會は外務省文化事業部の支配の下に巨額の補助金が下附さるゝ事となつて現時の盛況を迎へる事となつたのである。而て今會長內田伯、副會長入澤達吉博士及び江口定條氏並に常務理事小野得一郎氏及び其他の主事等諸氏の不斷の努力に依つて此盛況を見るに到つて然かも今創立滿三十年の記念日を迎へるに當り、過去三十年間の準備時代に大に奮鬪して下さつた方々の內にても申すも恐れ多い事ではあるが、久邇宮總裁殿下を初め奉り、長岡子爵、大隈侯爵の兩會長、片山、丹波、青山の三副會長も、園田男、後藤節藏の兩會計理事も、最初の朝鮮總督府醫院長として本會と連絡を保ちつゝ赴任されたる佐藤進男も又庶務主任として難局に當られたる山田烈盛氏も皆この盛況を見るに先だつて他界されたのは誠に此上もなき恨事として甚だ今昔の感に堪へない次第である。玆に此機會に於て此等の方々の靈に對して滿腔の敬意と謝意とを表し、此稿を終る事とする。

## 四、ガルシヤ氏喉頭鏡發明五十年祝賀會と日露戰役前後

このやうにして、明治三十二年歸朝早々にして先生は、翌三十三年、本邦最初の耳鼻咽喉科教室を開設し、また同三十五年には正教授の任に就かれ、その間にはまた學位もとられる等、順風に帆をあぐるが如き榮進を續けられると共に、また對社會的には、三十四、五年にかけて、日本聯合醫學會の設立、同仁會の創立經營、或は大日本耳鼻咽喉科會の主宰等々、華々しき活動をつゞけて、歸朝以來席の溫まる暇もないやうな大多忙を極められたのであつたが、また內に教室の方を顧みるも、草創期の多忙に加へて醫局員の異動は頻繁に、患者また殺倒するの繁忙を加へて、三十四年時計臺に移つた教室も爲めに狹隘を加へ、剩さへ、大日本耳鼻咽喉科會の會務をも繼承するに於ては、先生の內外は共に多事多端を極めるに至つたのであつた。

而も、かゝる間にあつて、風雲の漸く急を告ぐるに至れる日露兩國の間には、三十七年二月愈々戰火を交へ、こゝに未曾有の局面を東亞の天地に展開することゝなつたのである。

こゝに暫し眼を轉じて、この間に於ける我が教室の內外を顧みてみよう。

こゝに先づ先生自身の筆に成る處を抄錄してみれば——

三十五年、此年春余ハ教授ニ任ゼラレ於之初メテ日本耳鼻咽喉科學ガ大學ニ於テ正教授ノ下ニ在ル學科トナリ次テ卒業試驗ヲナスベキ必修科目トナレリ、此年余ガ教室ハ新醫學士河野司馬造、山本玄一兩氏ノ副手ニ任命サレタルト陸軍一等軍醫醫學士小池作三氏前年來陸軍省ノ命ニ因リ研究生トシテ我醫務ニ從事サレタルト飯田新氏千葉醫學專門學校助手ヨリ轉シテ介補ニ任セラレ寒水守人氏モ亦タ入リテ介補トナリタルニ由リ一方ニ於テ醫員ノ增加ヲ來シタルガ次テ介補齋藤清氏下總佐原町ニ介補川北辰吉氏ハ加州金澤市ニ介補長野榮三氏ハ宇都宮市ニ介補中村平輔氏ハ鹿兒島市ニ何レモ皆ナ斯科專門ヲ以テ開業サレタルニ因リ先ヅ平均ヲ保テリ、而シテ此年春助手定員二人トナリシニ由リ淺井健吉氏助手ニ就任セシカ後チ同氏ハ十月京都醫科大學講師ニ任セラレ、同大學醫院耳鼻咽喉科主任ヲ命ゼラレ赴任セシニ由リ玆ニ初メテ京都醫科大學耳鼻咽喉科ノ成立ヲ見ルコトヲ得タリ、而シテ助手後任者トシテ副手河野司馬造氏其任ニ就キ又タ陸軍省派遣ノ小池作三氏滿一ケ年ノ期滿チタルトキ陸軍現役ニ復職シテ任ニ鄕路ニ就キ次テ陸軍省ハ更ニ一等軍醫醫學士岩田一氏ニ大學院入學ヲ命ジ余ノ許ニテ耳鼻咽喉科ヲ專攻セシムルコトトナシ又タ二等軍醫岡本隆一氏ニ研究生トシテ一ケ年間余ノ許ニ於テ斯科ヲ研究セシムルコトトナシヌ、而シテ此時副手山本玄一氏職ヲ辭シ大阪結方病院耳鼻咽喉科醫長ニ就職シ前任者尾關才吉氏大阪市ニ開業セリ

三十六年、此年助手河野司馬造氏職ヲ辭シ福岡市ニ斯科專門ヲ以テ開業シタレバ新ニ入リタル醫學士小池重（當時木村）氏助手ニ同ク吉井丑三郎氏副手ニ任セラレ、選科卒業生杉原正壽、仙臺專門學校卒業生齋藤傳六、長崎專門學校卒業生久保壽獲ノ三氏介補ニ就職シ介補飯田新氏ハ豐橋ニ介補寒水守人氏ハ唐津ニ專門ヲ以テ開業セラル、次テ愛知醫學專門學校長ハ同校卒業生中村豐氏ヲ他日同校耳鼻咽喉科教諭候補者トシテ東京ニ留學セシメシニ由リ余ハ同氏ヲ介補ニ採用シ其他同醫學校卒業生横井良次金澤醫學專門學校卒業生加納景成ノ兩氏モ亦タ來リテ介補トナレリ

此年特筆スベキ事アリ政府ハ近キ將來ニ於テ福岡醫科大學ヲ新設スルノ國是ヲ決定セシガ爲メ先ヅ各科教授候補者ヲ選定スルニ當リ我科ニ於テハ助手久保猪之吉氏ヲ其候補者ニ採用シ五月二十七日ヲ以テ獨逸國留學ヲ命ジ六月二十七日ヲ以テ出發セシメタルコト是レナリ而シテ副手吉井丑三郎氏助手トナレリ

三十七年、此年日露戰役開始ノ爲メ我耳鼻咽喉科界モ亦タ多少ノ影響ヲ蒙ラザルヲ得ザリキ我東京臨床ニ於テハ大學院學生トシテ研究中ナリシ岩田一等軍醫研究生トシテ入學シタリシ二等軍醫學士坂井清及介補豫備三等軍醫久保壽獲ノ三氏ハ招集サレテ或ハ戰地ニ重要任務ヲ帶ビ或ハ內地勤務ニ從ヘリ而シテ余ハ助手若クハ副手ヲ伴フテ戶山豫備病院ノ耳鼻咽喉科患者ヲ診療スルコトトナリ爲メニ多數ノ興味アル銃砲負傷者ヲ實驗スルコトヲ得タリキ、而テ此年新來ノ醫學士ハ先ヅ寺田豐作、多屋昌三郎、加藤亨、野原又三ノ四氏アリ後チ近藤千代吉氏アリシガ助手小池重氏平塚杏雲堂病院分院長ニ聘セラレ同處ニ於テ特ニ喉頭結核ノ研究ニ從事サルヽコトトナリシニ由リ寺田氏助手ニ任セラレ、他ハ皆副手トナレリ、大學以外ニ於テハ賀古鶴所氏ハ當時豫備一等軍醫正ナリシヲ以テ招集ニ應シテ出征シ、ドクトル菊池猶一氏ハ豫備二等軍醫ナリシヲ以テ又招集サレテ廣尾病院ニ勤務スルコトトナレリ

此年秋英京ロンドン在住ノ音樂教師マヌエル、ガルシヤ氏カ喉頭鏡發明後滿五十年ニ相當シテ而シテ同時ニ同氏ハ正ニ百歲ノ高齡ニ達シテ尙ホ矍鑠タルヲ祝センガ爲メ余等ハ十一月二十七日上野精養軒ニ於テ其記念祝賀會ヲ催セシ事　皇后陛下ノ叡聞ニ達シ左ノ御沙汰書

御沙汰書

喉頭鏡發明者英國ガールシヤ氏第百回誕辰ニ付大日本耳鼻咽喉科會ニ於テ祝賀會相開候趣

皇后陛下被聞召以御思召金百圓下賜候事

ト共ニ金百圓御下賜ノ恩命ニ接シ何時モナカラ我國母陛下ノ學術御奬勵ト學者御優待トニ御心ヲ注カセラルヽノ深キニ余等感涙ヲ流シタリキ、而シテ此會ハ非常ニ盛大ニ擧行セラレ宴中パニシテ在ロンドン市ノガルチヤ翁ニ向ツテ電報ヲ以テ祝意ヲ表シタルニ翁ハ之レニ對シテ熱心ナル謝意ヲ表シ來リタルノミナラズ次テロンドン市ニ於テ開催サレタル万國聯合祝賀會ニハ本邦ハ之レニ代表者ヲ特派スルノ運ビニ到ラザリシニ係ラズ當事者ハ席上余等カ前　送リタル電報ヲ朗讀シテ本邦ノ之レニ聯合セルノ實ヲ明カニシ呉レタルニ由リ余等ハ大ニ面目ヲ保ツコトヲ得タリキ

三十八年、此年上半期ハ日露戰役尙ホ酣ニシテ我耳鼻咽喉科家モ亦尙ホ續テ相應ノ力ヲ致シツヽアル時ナリキ、去レバ市內開業ノ實地家ノ內ニテモ池谷豐吉氏ノ如キハ篤志ヲ以テ豫備病院勤務ヲナセリ

我教室ニ於テハ副手多屋昌三郎氏ハ大阪市ニ專門的醫院ヲ開キ開業スルコトトナリ、副手野原又三氏陸軍見習醫官トシテ入營サレ介補中村豐氏去リテ愛知醫學專門學校耳鼻咽喉科主任ニ就職サレ、介補清水孟三氏ハ鄕里高松市ニ於テ開業サレ、又選科卒業生森川恭太郎氏ハ四日市市ニ於テ開業サレタレドモ代リテ新醫學士木村彬、杉村可宗ノ兩氏副手ニ就任セリ、此年和辻春次氏ハ在歐三年殊ニ伯林ニ於テカツツ教授等ニ就キ耳科ト鼻喉科トヲ專修シ特ニ病理組織學上ノ研究ヲ終リテ無事歸朝サレタルニ由リ直ニ京都醫科大學教授ニ任セラレ同大學耳鼻咽喉科講座擔任ヲ命セラレタリ、於之講師淺井健吉氏ハ後チ暫ク和辻氏ヲ助ケテ尙ホ職ニ在リシガ遂ニ職ヲ辭シ十一月研究ノ爲メ獨逸國ニ向ツテ出發シタリ

三十九年、此年醫學士千葉貫一、靜岡省三ノ兩氏入リテ副手トナリ、岩田一氏日露間ノ平和克復ノ後再ビ來リテ大學院ニ入リ前ニ着手シタル問題ニ就テ研究ヲ繼クルコトトナリ又タ坂井清氏モ次テ再ビ研究生トシテ入學セリ、而シテ助手吉井丑三郎氏斯學研究ノ爲メ十月渡歐ノ途ニ上リバーゼル大學ジーベルマン教授ノ下ニテ研究スルコトトナリシニ由リ加藤亨氏代リテ助手トナリ次テ同氏ハ大阪府立高等醫學校教諭ニ任セラレ同校醫院耳鼻咽喉科醫長トナリテ赴任セシニ由リ副手木村彬氏助手トナリ、津田終吉、和田昌訓兩氏介補トナリ介補杉原正壽氏ハ神田ニ齋藤傳六氏ハ山形縣下ニ横井良治氏ハ名古屋市ニ加納景成氏ハ富山市ニ何レモ前後相次テ開業サレタリ

かうして、この間に於て特筆すべきことは、學士入局の最初の者として、先生の愛弟子たる淺井健吉並に久保猪之吉の兩氏が、前者は京都醫科大學に、後者は福岡醫科大學に夫々開設さるべき耳鼻咽喉科教室の講師及び教授候補に擧げられて退局した事と、大日本耳鼻咽喉科會に於てガルシヤ五十年祭を催し、對外的な活動を始めた事どもであらう。

これより先き、明治三十七年（一九〇四年）は、一八〇五年三月十八日西班牙のマドリッドに生れ、一八五五年、ロン

ドン學士會々報第七卷第十三冊に「人間音聲の生理的考察」(Physiological observation on the human voice)といふ、自家發明の喉頭鏡による研究成果を發表したロンドン音樂學校教授マヌエル・ガルシヤ氏の喉頭鏡發明五十週年に當り、また同翁百歳の誕辰に當るを以て地許の英國ロンドン喉頭病學會を初め全世界の關係各學會が盛大なる祝賀會を開催することゝなり、同三月十八日伯林喉頭病學會に於てはベー・ハイマン氏の發議によつて、同九月を以て喉頭鏡發明五十週年に相當する爲め同發明者の百歳の誕辰を賀すると同時に五十年祝賀式を伯林に於て開催することゝなり、此の報に接したる我が大日本耳鼻咽喉科會に於ても亦その擧に倣ひ、同十一月二十七日の日曜日を期して上野精養軒に於て盛大な祝賀會を開催することゝなつたのである。

**●ガルシア氏喉頭鏡發明五十年祝賀會次第** 明治三十七年十一月二十七日、日曜日、午後一時
上野公園精養軒に於て開會

**●第一部、祝賀式** 午後一時卅分迄に會員着席
午後一時四十分來賓着席

**(一) 開會の辭** 男爵 石黒忠悳君

**(二) 祝・辭(イロハ順)**

醫學博士男爵 橋本綱常君
醫學博士男爵 高木兼寛君
文部大臣 久保田讓君
總長理學博士 山川健次郎君
學長醫學博士 青山胤通君
ドクトル 富士川游君
醫學博士 金杉英五郎君
ドクトル 小此木信六郎君
醫學博士 岡田和一郎君

**(三) 演說**

○喉翹及喉科
○喉頭鏡の歴史
○喉頭鏡發明者ガルシア氏の略傳
○喉頭鏡發明が醫界に及ぼしたる影響

**(四) 協議**

電報或は其他の方法にて來會者一統より在ロンドン市ガルシア氏に謝辭と祝詞とを送るの件

**●第二部 宴會** 午後五時開始

(一) 席上來賓及會員諸君に祝賀會紀念品を分配す
(二) 餘興として軍樂隊の奏樂あり

**●第三部 喉頭科展覽會** 午後一時より開く

(一) 内外古今の書籍及圖譜等
(二) 内外古今の喉頭科器械
(三) 標本類

當日のプログラムは右の如くであるが、本擧式に當つては特に國母陛下より先きに記せる如き御沙汰書並びに思召金百圓の御下賜があつて、會頭たる岡田先生を初め、會員一同の恐懼措く能はざるものがあつた。尚は又同日は英國公使が來臨の上祝辭を述べる筈であつたが、止むなき要用の爲めに臨席中止となつたのである。こゝに當時の光景を記錄によつて記してみよう。

會場たる上野精養軒正門にはガルシア氏喉頭鏡發明五十年祝賀會なる標札を掲げ其上には日章旗と英國旗とを相交叉せり、門内に入れば數千の球燈と萬國々旗を以て裝飾至らざるなきに庭内の紅葉今を盛りに錦繡を彩り其美觀云ふ許りなかりき、又一隅には三共商店及水倉、酒井等の器械店より藥品、器械を陳列せるあり、又本會の企てたる圖書標本器械模型等の陳列あり、此方の天幕の下には鬱嘹なる陸軍音樂隊の奏樂勇ましきに彼方の天幕内には木村順吉氏の紹介により寄贈されたる札幌ビール會社の「ビーヤホール」あり、會員の隨時飲用するに任せり。

式場と定められたる樓上の室内は一般に万國々旗と球燈を以て飾られ、正面の演壇には大なる花瓶を置き馥郁たる菊花と他の花卉を滿

栖せり、階下の室は一般に會員休憩所に充て、玄關には接待係會計係各其任務を取り而て來會者には紀念品として扇子及印刷物を分配することゝせり。

午後一時頃に至れば會員三々五々來集し既に定刻少し過ぐる頃には來會者二百有餘名と註せられたり、戀て午後二時號鈴一番開會を報じ軍樂隊の奏樂に伴はれて會員一同樓上に臨めり。

かうして會員着席、奏樂後會頭たる先生は謹嚴なる語調を以て開會の辭を述べられたのであつた。

當時の皇后陛下よりの御沙汰書

ガルシア先生の喉頭鏡發明ありてより玆に三十年に及ぶ今其の祝賀會を開くに當り時局柄にも關す此の如く多數に來會せられたるは深く謝する所なり。

先生が喉頭鏡に於ける發明は世上幾多の發明に比して或は一小些事に過ぎざらんか然れとも喉頭病學全般に關し之れが發達をして長大の進歩をなさしめたるは一に此の喉頭鏡の發明に歸せざるべからず。故に今その祝賀會を催すは必ずしも排斥すべき事にもあらざるべし況んや今年三月十九日を以て氏の齡百歳に達し而も猶ほ矍鑠として龍動の音樂學校に教鞭をとり一方に顚たると開く豈に目出度き限りにあらずや、時局我國未曾有の戰鋒を交ゆるの時國民一同之れが後援に盡すべきに際し祝賀會の如きは些か躊躇すべきものならんも恐れ多くも我叡聖文武なる　天皇陛下は此の軍事多端の際なるに拘らず義に我帝國大學卒業式に御臨幸あらせられ添けなくも軍國多事の際と雖も教育の事忽にすべからずとの勅語を賜はりたる次第なるが故に吾人は他の一面には平和の事業として益々教育學術に努力せざるべからず今我が喉頭鏡の祖たる學者をは追想し學に從ふては此の如き名譽ある効績をなさんと期するは蓋し教育發展の上に稗益する事少からざるべし先生はもと醫學者にあらずして龍動の音樂家なり即ち醫學界以外の人にして此光輝ある發明をなし醫界に多大なる進歩を促がしたるなり先生はもと西班牙に生れ巴里を經て英國龍動に至り音樂學校の教授たりしが人聲研究の際遂に之れを發明せり史を閲するに之れより前リストン、パビントン等其他の諸氏之れにつきて研究せるが何れも成功を見ずガルシア先生に至り初めて發明せるなり、併しリストン、パビントン何れも英國人なり故に何れにしても此發明は英國と密接の關係を有すべしと云ふべきか、今や我國軍國多端の時に當り英國は我が同盟國として我に同情を表し除に陽に我れを扶けんとす今吾人がロンドン在住のガルシア先生に對し祝賀の會を催うすは至當の事なるべく又我等一同が同氏に向つて感謝の意を表するは一般英國人及彼先生を出したる西國人の共に嘉納する所ならんか諸氏希くは此の意を以て此半日を此處に樂しく費され以て先生に向つて祝賀の意を表せられん事を

次で、久保田文相以下の祝詞、また富士川游氏以下の會員の演說が豫定の如くに終ると協議會に移り、先生は高木男爵の筆になるガルシア氏宛ての祝電

Manuel Garcia

Many congraturations to the inventor of Laryngoscope on his century age.

Okada president. prof. Dr. Imperial university, Tokyo, Nippon

を朗讀し滿場の拍手を得て直に之れを電送したのであつた。

最後に先生は最も嚴肅な態度にて長くも我叡聖なる　皇后陛下の本會の擧を聞召され金員御下賜の恩典に浴したる事を報告し、次で一同起立して遙かにガルシア氏に向つて祝意を表したのである。次でその瞬間忽ちに起る洋々たる君が代の奏樂の下に橋本男爵の發聲で　天皇陛下の萬歳を三唱し、次で英國々歌の奏樂に伴つて岩佐侍醫の音頭で英國皇帝陛下の萬歳を三唱し、終つて先生の發聲で發明者ガルシヤ氏の萬歳を三呼し玆に目出度く式を終つて宴會に移つたのであつた。

「式後會員一同中庭に出づれば夕陽將に沈まんと欲して晩鐘池畔を蹈め颯々たる秋風遙に吹々たる奏樂を送りて快云ふ可からず或は陳列場に臨み或は「ビーヤホール」に入り、或は餘興として設けられたる西洋手品を觀覽する中、宴會場の整頓成り會員は階上階下の二個處に分れて立食の宴に就けり宴酣なる頃には歡呼談笑の犀堂に滿ち或は麥酒に便々たる腹を撫するあり、或は菊花を胸間に挿みて得々たるあり、或は大に膳間を斡旋するあり或は「プロジット」を行ふ「ハイカラ」あり其盛觀實に名狀すべからず、會終りて一同廊路に就きし

は午後八時過ぐる頃なりき。」と當時の記者は記してゐるが、尙ほ此擧に對し橋本綱常男は左の詩を寄せられ、當日紀念品として配られた扇子に印刷されたのであつた。

橋本綱常男の寄稿

英國唱歌博士駕爾茶氏距今五十年
前創製一鏡得照唱喉內景於是乎唱
喉病之療法一變其面目竟至今日之
大成其功偉矣博士齡已過百歲猶
矍鑠唱歌之聲日々無止云今玆內
外博士學士將相集開祝蒐于東京
遙頌博士之德因賦
喉鏡頼君新製成　頌功聲和唱歌聲
宵人天祐齡踰百　竹帛併垂長壽名

橋本綱常　稿

甲辰秋日七十五翁　青木脩書

このやうにして、本祝賀會は、久保田文相を始めとして、石黑男爵、橋本男爵、高木男爵、佐々木（政吉）博士、青山學長、河本、片山、隈川、入澤、近藤、吳、大澤等の諸教授、窪田衞生局長、濱田博士等々、その他知名の士十數名を來賓に迎へて極めて盛大に行はれ、殊に當時の陸軍々醫總監男爵たる石黑忠悳並びに橋本綱常の兩氏の如きは、その祝辭に於て各々自家の見聞、經驗せる喉頭鏡の歷史を敍べて興味津々たるものがあり、和氣靄々裡に進行したのであつたが偶々會員演說に於て、金杉英五郎氏が「喉頭鏡の歷史」に就て語るに際し、喉頭鏡發明の功はガルシヤに歸せらるべきに非ずして、寧ろそれを利用し實用化したるチュルク、ツェルマック兩氏にこそ歸せらるべしと橫槍を入れたので、こゝに端なくも先生との間に大論爭を捲き起こし、時の醫局員加藤亨氏は醫局へ車を飛ばして膨大なる文獻類を運び込んで、喉頭檢査は成る程臨床的にはチュルク、ツェルマックの兩氏が使用したかは知らぬが、そのイデエはガルシアに在つて、ガルシヤが喉頭鏡を使用しなかつたならば、チュルクもツェルマックも出て來ない。殊にガルシヤは今日滿百歲ゝ長壽を保ち鬘鑠としてゐるを祝賀するに何の不可あらんやと大氣焰を吐かれたのであつた。

こゝに當日の、先生の演說を揭げておかう。

## 喉頭鏡發明が醫界に及ぼしたる影響

醫學博士　岡田和一郎

閣下及諸君、余は本日此席に於て喉頭鏡發明が醫界に及ぼしたる影響に就て卑見を述ぶるの名譽を擔ひます、凡て一科學の獨立的に樹立せんには必ず長き歲月の間多くの學者が獻身的に貢獻する處あらればならないのは素より明かであるから我喉頭病學の如きも其今日あるは世界各國を通じて甚た多くの先輩諸大家か各方面に部署を定めて百折不撓の精神を以て研究されたる結果の賜と云ふの外ないのである、然しながら此先輩諸大家が喉頭病學發達の上に貢獻する處あらんとするに到つたのは畢竟ガルシヤ先生か五十年前に於て喉頭鏡を發明されたるに源因したのである、であるから其泉源に溯りて考へたならば喉頭病學の今日あるは五十年前ガルシア先生の喉頭鏡發明に由來せりと爲すも敢て不可ないのである、是れ他の科學と其趣きを異にする點である、世に在る科學の種類甚た多いけれども唯だ一個の比較的簡單なる器械の發明が此の複雜なる科學界に獨立して然かも他に比して決して劣る處なき一科學卽ち喉頭病學の起源を見るに到りたる如きは決して他に多く其比を見ることの出來ないものである、噫喉頭鏡の發明、事甚た小なるに似て居るけれども其結果、其影響の甚た大なる處に就て考へたならば此發明決して小なるものでない。

そこで、余が喉頭鏡の醫界に及ぼしたる影響を精細に述べようとしたならば、勢い現時の喉頭病學を全然此處に講述せなければならないだろう、少くとも喉頭鏡使用の下に於て研究されたる喉頭の生理や病理や及び諸般の診斷と治療とを悉く述べねばならないだろう、偖し是れは煩に堪へないのに又た普通の書籍に明記されて居るとに由りて此處に述べないこととして余は唯た簡單に重要なる點に就てのみ述べて見ようと思ひます。

此影響を直接の影響と間接の影響との二つに區別して述べんに直接影響とは喉頭鏡の應用其ものが直に喉頭內の觀察や喉頭病の診療やに及ぼしたる影響であつて蓋し是れが我喉頭病學の神髓をなし

たのである、今此影響の順序を明かにせんには勢ひ喉頭病學の歴史（喉頭鏡の歴史でない）を參考に供さねばならない、ガルシア先生は千八百五十四年九月喉頭鏡を用ゐて初めて人の生體喉頭の觀察を遂げ翌千八百五十五年三月英京ロンドン學士會院に其論文を提出して世に之を公にしたのが喉頭鏡發明の起原であるが當時先生は醫者でないから未だ今日の如く廣く診療用に供せられ得るやの考をも又自ら之を研究しやうとの欲望をも持つて居なかつたのであるが、此發明の事實が後ち二年千八百五十七年ブダペストの生理學者ツエルマーク氏の手に移て行きて一面に於ては同氏の研究に由り又方法の改良に由り初めて廣く喉頭病の診療に供せられ得る事が證明されて或は學會の演說となり、或は雜誌上の論文となりて其事實が世に紹介されたるのみでなく千八百五十九年より千八百六十二年に掛けて歐洲各都市を廻遊して自ら其方法を示しつゝ之を教授したに由り又他の一面に於ては維也那のツエルク氏はツエルマーク氏の第一報告を見て大に驚き或は論說に或は論文に自家と喉頭鏡使用との關係を明かにせんが爲めガルシア先生に關係なく喉頭鏡使用を初めたとやら、喉頭鏡をして可成一般使用され得べき醫療具たらしめんとて多くの屍體や患者やに就て之を試み終に成功したとのとやら、次て種々の實驗報告やらを公にするに到りて右兩氏の論爭愈よ甚しきを加へ、此論爭の愈よ甚しきを加ふるに到りて世の注意を引くと益す深きを加ふる次第となりたるに由つて未だ數年ならざるに全歐洲を通じて諸大家の翌出を見るに到つたのである、是れ喉頭鏡の醫界に及ぼしたる直接影響の主要點であるが尙ほ之を精く言ふならば此喉頭鏡の應用の爲め喉頭病の診斷と其局處的療法が一大革新を爲して今では喉頭の結核も又た癌腫も初期診斷と初期手術とを鏡下に於て實行さるゝ樣になつた位であるから局處炎症や良性腫瘍等に局處的藥物療法や手術的療法を施すことは極めて容易の事となつたのである。

次に間接影響とは喉頭鏡發明の原理を應用して他方面の診斷治療法を改良又たは創意せしめた事を云ふのでありて是れ亦決して少くない、今に其主なる者を擧げて見れば千八百五十九年ツエルマーク氏に由りて後鼻檢査法（Rhinoscopia posterior）の發明さるたのは發明者がガルシア鏡を用ゐて喉頭檢査を研究せる際最小の喉頭鏡を咽腔より前上方に照して鼻咽腔と鼻腔後部とを觀察し得るを證明したるに由る、又食道鏡の發明は本來ツエルク氏の高弟、維也那喉頭病學者たるストオルク氏やロンドンの喉頭病學者たるマツケンザー氏やが初め喉頭鏡使用の下に於て種々の器械を食道内に挿入して檢したのに由來せしものである勿論今では後鼻檢査法も大に進歩して之れに使用する鏡は喉頭を視る鏡とは大に其趣きを異にして居る又た食道鏡もローゼンハイム氏等の器械に到りて大に其形を改めたるが爲め之れには喉頭鏡使用の必要なきに到つて居る、然れども是れは幾多の沿革を經て此處に到つたのであるから畢竟ガルシア先生の喉頭鏡發明より間接に來りたる影響と見做して敢て差支なからんと余は信ずる。

そこで此直接及び間接に影響のありたるガルシア氏喉頭鏡が向後其價値を失ふとある乎と問ふに余は先づ當分決して之れなかるべしと確信する。數年前伯林のキルスタイン氏が直達檢喉法（Autoscopie）なる者を發明した即ち患者の身體の上半部を少く前屈せしめ顔面を可成上向せしめてそうして口を開かし一個の强き舌押子樣の器械を以て舌根と會厭軟骨との間を强く前下方に壓しつゝ直ちに上下齒列間より喉頭を視るの法を報告したが當時醫界の大評判となりて余等も大に前途の望みを囑して居つたが此好評は只一時的でありて今では殆んど之を顧みる者もない、又た同氏は之れに次て混合檢喉法（Combinirte Laryngoscopie）と名けて上記の法にて口を開かしめつゝガルシア氏喉頭鏡を喉腔内へ挿入して檢するときは一層良好なりとのことを報じた是れは余と雖ども數ば小兒喉頭を檢するに當りて有効的に使用したことあるけれども此場合には矢張喉頭鏡の使用を棄つることが出來ないのである、又近來キリアン氏が氣管鏡及氣管支鏡（Tracheos opie Bronchoscopie）を發明して其臨床上の應用將に大に擴張されんとしつゝあるが是れ素と輓近の食道鏡の原理に基きたる者であるのみでなく其使用の部位も目的も異りて居るから是れとても決して喉頭鏡の價値を減殺するものでないと信ずる。

音樂者たるガルシア先生が單に發聲器の生理を研究せんが爲め使用したる檢査法が今では上記の如く各方面に亘りて大影響を及ぼして遂に之を主として使用する學科を喉頭病學として獨立せしむるに到つたのであるから之を近時に於ける他方面の出來事に比すれば丁度ウルツブルグの物理學者レントゲン氏が偶然發明したるX光線が暫時にして醫學者の手に移り行きて遂に診斷治療上殆んど欠くべからざるの要具となりたると殆んど其趣きを一にして居る、されば光線を使用する人は每にレントゲン氏なる發明者の名譽ある姓名を想はないものがないと同樣に喉頭鏡を使用する人或は其恩澤に浴する人は每に喉頭鏡發明者たる名譽なる月桂冠を戴きつゝ百歲の高齡に達して今日尙ほ英京ロンドン市に常住せらるゝマヌエル、ガルシア先生の德を頌し又感謝の意を表さねばならないと信ずる。

かうして、尙ほ、翌三十八年には「大日本耳鼻咽喉科會々報」第拾壹卷第貳第參合刊號に、この喉頭鏡發明五十年祭並に同發明者マヌエル、ガルシア先生百歲誕辰祝賀會記事を載せ、ガルシヤ特輯號とでもいふべきものを發刊したのであつたが、これより先、同三十八年（一九〇五年）三月十七日のガルシヤ翁の誕生日には英京ロンドンを初め歐米各國の關係學會に於ては盛大なる翁の祝賀會が催され、就中、ゼモン氏の主宰に關はるロンドン喉頭病學會の發企になる祝賀會には、全世界關係各學會は夫々代表を送り、或は謝恩祝詞を寄せたのであるが、先きに昨秋我が大日本耳鼻咽喉科會主宰の祝賀會より發せられた祝電もその席上に於て報讀せられ、代表者を送れると同一に見做されて各國代表者の好意ある歡迎を受け、且つ我が學會の存在を世界的に公認せしめ且つは注目せしめる基をなすの國際的榮譽を贏ち得たのであつた。こゝに

その當時の報導を參考までに掲げておかう。

○昨秋本會發起となり喉頭鏡發明の五十年紀念を擧行するや同日會衆の決議により同發明者ガルシア先生に打電して遙に其の發明の名譽を頌し併せて百歳の壽を賀せり今や近着の獨逸中央雜誌上英京「ロンドン市」に於ける同先生誕辰祝賀會の狀況を記載せるあり就て通電するに同委員長サー、セモン氏は各國より蒐集せる祝電を報讀せる一段吾人の祝電に至り特に之に附言し曰く日本は今や露國と戰鋒を啓き軍國多事の際なるにも拘らず學問上名譽の表彰に向つては毫も躊躇する所なく其の本國にありては盛大なる祝賀會を催し該祝電を送れり吾人は日本の厚意に對して一層の謝意を表せざるべからずと滿場拍手喝裡に歡迎する所となれり讀んで此の條下に至るや吾人は再讀三誦本懷に耐へざるものあり昨夏至尊の吾が東京帝國大學卒業式に行事し賜ふや詔して教育の大綱を諭し徐ろに吾人の方針を示し賜ふ、外には連戰連勝の功績を收め內愈々として其の分を盡す武威文化兩ながら問きを得て國家泰し學問の事固より國際の關係を有せずと雖ども又以て國家の名を揚ぐるとなしとせず（大日本耳鼻咽喉科會々報第十一卷第二號第三號　三十八年七月發行）

○歐人の目に影する我學會　フレンケル氏の厚意によりて會頭岡田博士に贈られたる一新紙によりて本會の主唱して開きし「ガルシヤ」祭が動機となり我學會が獨國學者の注意する所となるに至りしを知るは吾人の愉快とする所なり、我國耳鼻咽喉科の歷史及び現況が久保醫學士の筆によりて彼國醫學雜誌に紹介せらるゝや同國學者間に渺からざる注意を惹き起したるものの如しゥオルフ氏は伯林每日新聞に寄書して未曾有の大戰爭に當て我が學會の「ガルシア」祭の開催せし學者的行動に向つて讃辭を與へて我國耳鼻咽喉科の歷史的及び現況を記し日本人が凡べての方面に於ける進歩と共に耳鼻咽喉科の迅速なる進歩も亦驚くへくその進歩や獨り他動的なるのみならず自動的なることを賞讃せり而して「ガルシヤ」祭に於ける石黑男の演說を引きて日本人は自己の自動的發達に向つて語るべき權利を有するにも拘はらず己を持するに謙讓にして深く歐洲人の德とする雅量を有することは大なる名譽に値すと云へり、吾人は千里の外に知己を得たるの感あると同時に自から顧みて慚愧の情なき能はざるなり（大日本耳鼻咽喉科會々報第十一卷第四號第五號第六號　三十八年十二月發行）

かうして、これを機に該學會は、その國際的地歩を昂めると共に漸く歐洲各國の學會並に關係諸方面との交渉が頻りと始まるに至つたのであつた。

これより先、前述の如く、明治三十七年二月を以て戰火を交ゆるに至つた日露の戰役は、我國曠古の大戰爭として、世界最大の陸軍を誇れる露國に對抗し、國家の全力を傾倒して之れに當つたのであつたから、作戰の規模の宏大なりしことは前古未曾有のもので出征人員、日清戰役の十八萬人に對し百萬人を算するのみならず、戰鬪死傷者數の如きも、前者の四千九百五十名に對し、實にその約四十倍の二十萬四十六名の多きに達したのである。

かくて、開戰後戰地に於ける衞生部員不足の報一度び傳はるや、醫科大學教授以下有志醫家の陸軍傷病兵の治療を援助せんとするの聲漸くに高く、また府下醫事雜誌方面に於ても盛に之れが論議されたのであつた。

かくて、醫家の熱望は默し難く、こゝにその誠意を容れ、また各專門家の協力を得るを利として、同三十七年十月二十二日陸軍大臣に於ては衞生勤務幇助の規定を公布して、各醫科大學、醫學專門學校等の教授、助教授、教諭、助教諭、助手、副手等の希望者を幇助員に、また學識經驗ある一般醫家を篤志醫員として、各地豫備病院の治療を幇助せしめることゝし、又翌三十八年二月以降には宮內大臣、陸軍大臣協議の上、侍醫局長以下侍醫、侍醫局醫員も亦東京豫備病院に勤務して幇助することゝなつたのである。

こゝに於て、兼ねて幇助志願中の先生にも許可されて幇助員として戸山學校內豫備病院の耳鼻咽喉科患者の診療に從事されることゝなつたのであつた。

かうして先生は翌三十八年の二月以來、助手加藤亨氏を初めとし、次いでは吉井丑三郎氏、更らには寺田豐作、木村彬の兩氏等を夫々交代に率ひて、同十月廿一日その勤務を解かれる迄戸山豫備病院の診療に從事され、後ちその功により勳五等瑞寶章を授けられたのであつた。

因みに當時の幇助勤務者の數は次の如くであつた。

| | |
|---|---|
| 傳醫局 | 三三名 |
| 幇助員 | 一七九名 |
| 篤志醫員 | 五二名 |

その間また先生は、四月藝備醫學會の開催されるを機に、京阪地方の遊覽を兼ねて御家族御同伴にて、同三日、十日間の豫定で西下されたのであるが、また六月には養育院醫長補助を命ぜられ、同院醫長三浦助教授の出張不在中、毎週一回、同院へ出張されることゝなり、この年また高等官三等に陞敍されたのである。

## 五、東京同仁醫藥學校の設立

これより先、明治三十五年六月を以て成立したる同仁會は、既述の如く、その後、會員並びに資金の應募着々となり、一方に財團法人としてその形態を整へると共にまた會長に政界在野の雄たる大隈伯を迎へて、天下に東亞文化圏の確保を企圖すべき大事業を喧傳し、大いに會勢の擴張を圖つて、積極的な活動を開始するに至つたのであるが、當時草創の際、會勢未だ緒に就くに及ばずして、日露の戰役勃發し、上下の人心擧つて時局に傾注せしを以て自らその影響を蒙り、その發達の遲々たりしは亦止むを得ざるの勢なりしが、素と同會の事業たるや、時局と相關する處頗る多く、加之、戰後に於ける我が帝國の地位は滿鮮各地に對し更に一段の緊密を加ふるものゝあつて、此の時運の進轉に伴ひ、着々經營の歩を進めて病院を設け、或は醫員を派して、以て醫學醫術上より新領土の啓發に靈瘁する處頗る多く、爲めに識者の注意を惹く處尠なからざるものがあつたのである。

かうして、創立以來玆に四年、明治三十九年の初頭に於ては、支部を設くる事、國内に九箇所、清國に二箇所の計十一箇所、醫員を派すること、韓國へ四十八名、清國へ三十五名、暹羅及濠洲木曜島へ各一名の總數八十五名にして、内病院組織を爲し得たるもの數者あり、又既に醫學教育を開始せるものもあつて良好の成績を擧げ、また病院の設立並に調査企畫中のもの十數ケ處あり、韓國大邱病院は五千圓の建設費に更らに二千圓を追加增額して日夕工事を進捗、また軍政署の經營に係はる營口病院及安東縣病院等はいづれもその軍政の徹廢と共に同仁會に於て之を繼承擴充し、韓國に於ける平壤同仁病院と共に之等も近く開院すべく、その他、京城の官立施療所たる廣濟院の如き、或は將に新設せられんとする大韓病院の如き、同會の副會長たる佐藤博士を始めとして、細大とも同會の協力を要すべきもの多々あり、或は南清樞要の地たる漢口には既に同仁會派遣醫員の設立せる同仁病院ありて、更にその規模を擴大して以て一大病院となすの準備にかゝる等、その他清韓兩國に病院設立の候補地として調査中なるもの、前者の奉天、遼陽、後者の兼二浦、新義州、龍山等々、五指を屈するも未だ足らざる盛況にあり、其他清韓兩國に對せる醫事衛生機關の設備等に關しても貢献する處尠からず、その結果する處は湖北省に軍醫學堂の創立となり、或は廣東省の將辨學堂醫員及醫學堂總教習以下の招聘依頼となつて、各々適當の醫員、教習を夫々推薦派遣して之に協力、助成し、又は清韓兩國の種痘施設の完備を圖る等々、着々として所期の事業に着手し、その具體的施設としての清韓兩國を始めとする東亞諸國への醫師の派遣、病院の開設等、醫療弘布の事業は漸く顯著盛大ならんとする趨勢にあつたが、然し尙ほ一方未だその標傍せる醫學校を興して以てその卒業の醫師を各地に分布する迄には至らなかつたのである。

然し乍ら、遠大の抱負を懷き、格勤努力の資を以て、本會に理事長たるの地位に推されたる先生は、これを以て一日も忽せにするを許さずとなし、日露の戰塵、漸く沈靜せる三十八年末、當時未だ尙ほ財政豐かならざるも遂に意を決して、先づ東京の地に、清國留學生の爲めに、將來支那に於ける醫師、軍醫、藥劑官、藥劑師等を養成するの目的を以て、醫藥學校を創立し、自ら理事としてその經營に當り、又校長となつてそれを主宰せんことを企圖せられたのであつた。

即ち、明治三十九年二月、早稲田大學内に假教室を設けて創始せられた東京同仁醫藥學校の設立これである。

こゝに當時先生の東京帝大總長への伺書があるから、それを左に揭げておかう。

私立醫學校長就任願

今般同仁會々長伯爵大隈重信ノ推薦ニ依リ牛込區早稻田に新設セラレタル東京同仁醫學校校長トシテ私儀御用ノ餘暇ヲ以テ無報酬ニテ就任仕度候間御許可被成下度此段奉願候也

明治三十八年十二月廿日　東京帝國大學醫科大學教授　岡田和一郎㊞

東京帝國大學總長　濱尾新殿

かうして、創立當初は、校舍新築の日まで、同校は早稻田大學内に開校せられたのであつたが、生徒數は日に增加し、漸次盛大に赴いて、教室の狹隘を告ぐるに至つたので、同四十年九月に牛込區西五軒町に移轉したのであつたが、更らに四十一年の夏には、同校の規模を大いに擴張し、日本人の學生をも收容することゝなし、九月に入つては斯界の權威者四十有餘名を增聘し、また同年に入つて新築落成したその附屬早稻田同仁醫院もその秋より診療を開始して、諸般の整備着々となり、また三十九年九月、清韓國派遣志望の醫師、藥劑師、產婆、看護婦等、その他一般清韓國に於て事業に從はんとする者の爲めに開設せられたる清韓語學研究會もその附屬事業として功を奏しつゝあつて、先生に於ても大いに爲す所あらんとして深く期する處があつたのである。然しかやうな事業の擴充はまた多大の資金を要し、その經營維持には、先生はその私財を擲つて腐心せられたのであつたが、資金の窮乏は經營の困難を伴ひ、私財を投ずるも力及ばずして遂に明治四十四年に至り、廢校閉院の止むなきに立到つたのであつた。

こゝに至つてはさすがの先生も、その全てを觀念し、在留學生を夫々各地の官立醫學專門學校に紹介し、その轉學の便を圖つて以てその殘務整理に萬遺漏なきを期せられたのであるが、その業を卒へたるものゝ多くは、いづれも歸國の後、醫院を設け診療に從事せるものも尠からざるを以て、先生の學校經營も亦徒爾ではなかつたのである。」

こゝに同校の學則、職員の主なるものを揭げると次の如くである。

1. 學則　豫科一年、本科醫學科三年、藥學科二年
2. 職員　理事　醫學博士　岡田和一郎（校長）
　　足立忠八郎（主事）　栗本庸勝　山田烈盛　田代亮介
3. 顧問　男爵　前島密　醫學博士　佐藤進
　　男爵　石黑忠悳　法學博士　鳩山和夫
　　法學博士　高田早苗　法學博士　天野爲之
　　醫學博士　片山國嘉　藥學博士　丹波敬三

清韓語學研究會

木野村政德（陸軍教授）、本田存（東京外語教授）、岡本正文　同上）、足立忠八郎（高商教授）、四宮憲章（前外語教授）の諸氏

早稻田同仁醫院

院長　平野光太郎、副院長　鵜飼二郎

## 六、根岸養生院の經營

このやうにして、日露の戰塵收まるや、先生はまた東京同仁醫藥學校の創立經營を初め、根岸養生院の設立經營、或は三井慈善病院建設への參與、または日本癌研究會創設への參劃、將又東京地方會の設立等々、一方に教職漸く繁忙を加へると共に又對社會的な活動に於ても亦々寧日なき多忙に追はれることゝなつたのである。

抑も、下谷區中根岸三十六番地の養生院を開設せし處は、素と、根岸岡埜菓司舗の所有に係はり、汁粉屋として大流行を極め、當時又轉じては料理屋として贅を盡くして東都人士の踵を列ねしめて繁昌したものであつたが、後漸く衰退に趨

いて收支相償はず、借金に借金を重ねて、當時家屋敷とも五萬圓の抵當に入れ、當主また歿して、その家屋の將に借財のかたに取られんとするを家族厭ひ、偶々岡田家出入の醫師にして、同家の書生なりしもの、先生の許に來りて事情を訴へ、買取方を先生に慫慂嘆願せるに由り、先生は御家族連れにて檢分し、當時二萬千圓かにて買取りしものといふ。時に明治三十八年の九月のことである。

時に偶々九月五日にはポーツマス媾和條約成り、平和の克復と共に戰地に從軍せる人々の除隊となつて續々と歸り來り、いづれも手空きにて、先生に其處に病院を開かれんことを求めたといふ。

これより先、當時大學の患者はまた極めて多く、午前五時半乃至六時の患者受付時間には患者は開門前から門外に詰めかけ、いざ開門ともなると我れ先きにと受付に殺到したものであつて、爲めに鐵門附近の龍岡町より無緣坂一帶の宿屋、下宿屋は大繁昌を極め、また數軒の木札預り屋も亦繁昌せるが如き盛況を呈し、また入院患者の收容等にも病室間に合はず、築地の田村病院、或は聖路加病院等々、先生の傳手を求めて處置され如何にか始末をつけてをられたのであつたが、大學にして既にこの有樣であつたからして、先生の自宅にも常に百人以上の患者が押しかけて麴町自邸の十疊、六疊、四疊半の三間一杯に詰め寄せ、當時官吏服務規律で自宅診療は喧しく言はれて氣兼ねするにも拘らず、教授の如きも大學を辭して開業した程であつたといふが、事情かくの如くにして、先生は、一方に門弟の慫慂も默し難く、また他方にこの窮狀をも默止する能はず、こゝに兩々相俟つて遂に意を決して、愛弟子菊池循一氏を院長に、自らは顧問となつて、明治三十九年三月十六日こゝに根岸養生院の開設となつたものである。

明治三十九年頃年頃(四十三歳頃)根岸養生院
廣前の先生

こゝに開院當時の職員、病室收容數等を示すと次の如くである。

**明治三十九年三月十六日開院**

**職員**

| | | | |
|---|---|---|---|
| 院長 | 醫學博士 | 岡田和一郎 | |
| 醫員 | ドクトル メヂチーネ 三名 | 菊池循一 | 看護婦 六名 |
| 醫員囑託 | 醫學士 | 杉村可宗 | 看護婦長 林 |
| 醫員 | 〃 | 村山政之助 | 〃 滝野 |
| 〃 | 〃 | 大久保丹次郎 | 〃 神崎 |
| 藥劑師 | 二名 | 小村六三郎 | 事務員 一名 小使 一名 |

**病室數**

| | | |
|---|---|---|
| 特等室 | 三箇 | 三名 |
| 壹等室 | 五箇 | 五名 |
| 貳等室 | 四箇 | 六名 |
| 參等室 | 十二箇 | 男十名 女六名 |
| 隔離室 | 一箇 | 三名 |

**收容數** 三十三名

その他、醫員としては、開設當時は、右の外、平野治太郎、上野啓造、石井格二、久芳久等々の諸氏が次々と勤務した

といふが、この内、院長菊池氏は火木土の、また副院長格たる杉村氏は日水金の午後零時より六時までいづれも出勤し、顧問たる先生は、大學を濟ませてから、月水金の午後四時か五時頃より來院され、遲くは夜の十一時から十二時頃まで、早くも八時頃まで診療に從事せられて、夕食も攝らず歸宅されてゐたのであつた。

かうして、本院開設の抑もの動機が、既述のやうに、大學へ患者の殺倒するも收容出來ず、その苦痛を見るに忍び難く、多忙なる身にも拘らず開院をみたのであつたからして、こゝに於ては、最初は專ら入院患者を取扱ひ、大學や自宅で診療せし者の入院手術を要する者の處置をなすを旨として、入院患者は、二階の五十疊に一杯詰まり、ベットは藁蒲團で、患者の增減に從ひ伸縮自在にとつて、豫定收容數を常に超過して、數十名を容れる盛況にあつたが、然しいづれの病室も宏濶なる庭に面せることゝて快適なりしといふ。かくして、最初の中は入院患者の手術を主とし、外來は目的でなく、偶々あれば大久保氏が之を擔當されたのであつたが、これも年を追ふて激增するに至つたのである。

こゝにその開院當初の入院並に外來患者數の總計があるからこゝに掲げておかう。

| | |
|---|---|
| 開院 | 明治三十九年三月十六日 |
| 收容患者 | 二百三十名 |
| 全治退院 | 二百二十四名 |
| 死亡 | 六名 |
| 外來患者 | 二百四十三名 |

かうして、根岸養生院は開設以來、病室の空いたことなしといふ大流行を極め、收入又莫大にして、明治四十三年九月には、當時人の嫌やがる喉頭結核患者の爲めに、先生は率先して、結核病棟を設け、また大正三年には手術室を增設し、更らに大正五年にはレントゲンの設備をなす等、その規模設備の擴充を圖られたのであつたが、更らに大正七八年より十年前後に至る神尾院長時代の好況期には病室狹隘を告げて、大正九年上下八室の特別室を新築して、翌十年の大繁忙期に

根岸養生院

大正五年六月二十日根岸養生院に於て歐米出張記念として撮影

間に合つたのである。かくて大正七年の入院患者の延人員の如きは實に八千六百九十三名といふ盛況を示し、同十年頃がその最高潮期であつたといふ。

かうして院長の代を變へること五代、昭和七年七月三十一日、先生は、第五代目の院長醫學博士伊藤應逢氏の辭するに及んで院長となり、丸山龜久治氏を副院長としてその薨去に至るまで本院を經營され、その歿後大男斷を以て閉院されたのであつたが、その間實に三十三ケ年、教授時代は大學の歸途、多忙なる中をも顧みず人力車により、後には自動車によつて通はれ、喉頭癌等の大手術を初め、その他各般の診療によく從事されたものであつた。

こゝに各代の院長の氏名とその就任年次及びその前後の醫員氏名を表示すると次の如くである。

| | | | |
|---|---|---|---|
| **明治三十九年三月十六日** | 顧問 | 岡田和一郎氏 | 醫員 杉村可宗氏 |
| | 院長 | 菊池循一氏 | 〃 村山政之助氏 |
| | | | 〃 大久保丹次郎氏 |
| **明治四十五年三月三日** | 顧問 | 岡田和一郎氏 | 醫員 三村圓慶氏 |
| | 院長 | 神尾友修氏 | 〃 田口喜代作氏 |
| | | | 〃 飯沼四郎氏 |
| **大正十年六月十五日** | 顧問 | 岡田和一郎氏 | 醫員 内田英富氏 |
| | 院長 | 下平軍平氏 | 〃 大宮司義一氏 |
| | | | 〃 輕部修一氏 |
| **大正十四年四月二十一日** | 顧問 | 岡田和一郎氏 | 醫員 内田英富氏 |
| | 院長 | 林舜氏 | 〃 萩原六郎氏 |

大正十五年六月
顧問　岡田和一郎氏
院長　伊藤應龍氏

昭和七年七月三十一日
院長　岡田和一郎氏
副院長　丸山龜久治氏

醫員　内田英富氏
〃　逸見銀三郎氏
〃　大久保松代氏

醫員　大久保福信氏
〃　浦尾正直氏
〃　瀬戸信作氏

當時又入院患者中の有名なるものとしては、菊池院長時代には、力士の梅ケ谷、玉椿、或は、喉頭結核で明治四十年以來僅か二年間の中に八回の大手術を行つて當時喧傳された福馬久米吉氏等が數へられ、また神尾院長時代には、歌人の長塚節を初め、田口卯吉、俳人の碧梧桐、詩人の土井晚翠、作家の生田葵山、或は琉球の殿樣等々が敎へられるが、長塚氏の如きは後ち、九大の久保猪之吉氏の許に赴ひて逝去されたもので、これは相當有名な話柄でもあらう。

## 七、三井（泉橋）慈善病院の設立と癌研究會の創立及コツホ歡迎會

かうして、日露戰爭直後の先生は、一方に愈々繁忙多きを加へる大學の敎室並に大日本耳鼻咽喉科會の會務を統べると共に、早稻田の方には東京同仁醫藥學校を主宰し、また根岸の方には養生院の經營に當り、文字通り東奔西走するの狀態にあつたが、またこの三十九年には、三井家に於て大施療病院設置の議ありて、その設立委員として、入澤達吉氏、土肥慶藏氏等と共に之に囑託せられ、その設立に參劃することゝなり、またその間、翌四十年には、癌研究會創立協議會に委員に推されて、その創立のことに協力することゝなり、こゝに八面六臂の大活動をされたのであつた。

卽ち、明治三十九年、三井家に於ては、時勢の趨勢に鑑みる處あつて、貧困にして醫藥の資を得るなき病者を施療するの目的を以て、東京市内に施療機關を設くるの急務たるを認め、こゝに百萬圓を寄附して財團法人組織の慈善病院を設立することに決し、三井家同族會事務局議長、三井家總代男爵三井八郎右衞門氏は、三井家同族會事務局管理部副部長益田孝氏を推してその設立委員長とし、またその設立委員には東京帝國大學醫科大學敎授土肥慶藏氏初め、岡田先生並に入澤達吉の兩敎授及び三井家同族會事務局管理部理事朝吹英二の四氏を囑託して、財團法人三井慈善病院設立の寄附行爲證書草案並びにその設立計畫に着手したのであつた。

かうして、同年十月三日財團法人三井慈善病院設立の認可が下りると共に、地を元帝國大學第二醫院跡、卽ち現在の東京市神田區和泉町一番地に卜して直に建築に着手し、その翌々年の四十一年末、十二月に工事竣成し、四十二年春、三月廿一日に開院式を擧行、翌廿二日から診療を開始したのであるが、その財團法人の成立と共に、先生等設立委員は直に評議員に推され、その評議員會長には當時の東京帝國大學醫科大學々長青山胤通氏を選任し、院長としては同東京帝國大學敎授醫學博士田代義德氏が囑託せられたのであつた。

而して、開院當初は、內科と外科のみであつたが、四月には眼科、産婦人科の開設をみ、また五月には、小兒科、耳鼻咽喉科の兩科が開設せられて、耳鼻咽喉科部長には、當時歸朝早々の先生の愛弟子吉井丑三郎氏を推し、大正三年九月吉井氏の辭任と共に同田所喜久馬氏がその後任を襲つたのであつた。

因みに創立當初の役員及職員は左の如くである。

一、役員

評議員會長　東京帝國大學醫科大學敎授　醫學博士　青山胤通
〃　〃　土肥慶藏
〃　〃　〃　岡田和一郎
〃　〃　〃　入澤達吉
評議員　〃　〃　佐藤三吉

| | | | |
|---|---|---|---|
| 〃 | 男爵 | 三井八郎右衛門 | |
| 〃 | 〃 | 三井八郎次郎 | 〃 理事 朝吹英二 |
| 〃 | 〃 | 三井三郎助 | 〃 〃 益田孝 |
| 〃 | 〃 | 三井高保 | 〃 〃 朝吹英二 |
| 〃 | 〃 | 三井高生 | 〃 〃 田中文藏 |
| 〃 | 〃 | 益田孝 | 〃 監事 有賀長文 |
| | | | 〃 〃 成瀬隆藏 |

二、職員

| | | | |
|---|---|---|---|
| 院長兼外科醫長 | 東京帝國大學醫科大學教授 | 醫學博士 | 田代義德 |
| 內科醫長 | 東京帝國大學醫科大學講師 | 醫學博士 | 木村德衛 |
| 眼科醫長 | 東京帝國大學醫科大學講師 | 醫學士 | 中泉行德 |
| 耳鼻咽喉科醫長 | 東京帝國大學醫科大學講師 | 醫學士 | 吉井丑三郎 |
| 皮膚病科醫長 | 東京帝國大學醫科大學副手 | 醫學士 | 伊藤徹太 |

かうして、先生は、明治三十九年十月十日、その評議員に就任以來、昭和十三年五月卅日その薨去の日まで、その間三十三年間よくその任に當つて、此の三井家の慈善病院の健全なる發展の爲めに靈瘁貢獻されたのであつた。

これより先、明治四十年には、獨逸中央癌調査會より、我が國に癌研究會若くは調査會を設立して國際癌研究會に加盟し、その共同研究に協力せんことを切望する旨通牒し來り、依つて、その十二月十三日、芳賀榮次郎、本多忠夫、岡玄卿、高木兼寛、長與稱吉、栗本東明、山極勝三郎、北里柴三郎、青山胤通、佐藤三吉、佐藤達次郎、木下正中、平井政直の諸氏十三名が首唱して、日本橋偕樂園に日本癌研究會創立協議會を開き、この主唱者十三名に更らに、岡田先生を初として、近藤次繁、宮島幹之助、志賀潔、秋山鍊造、鶴田禎次郎、田代義德、朝倉文三、林曄、西山信光等の諸氏十名を加へて之を委員とし、同會規則草案を審議して、翌四十一年四月にその發會式を東京に開くことにしたのである。

かうして、翌四十一年三月九日、學士會事務所に於て開かれたる委員會に於て、同會規則の制定をみ、同四月二日に東京帝大醫科大學病理學教室に於て同會の發會式を擧行し、兼ねて第一回の該會學術集談會を開催することゝなつたのであるが、この第一回學術集談會に於ては、先生も講演の交渉を受け、「上氣道癌ニ對スル外科ノ價値」なる演說をされることになつたのであつた。

當時の發會式擧行の次第は次の如くである。

**癌研究會發會式擧行順序**

一 會場 東京帝國大學醫科大學病理學教室

一 時日 明治四十一年四月四日（木曜日）午後一時

第一 座長推薦

第二 本會設立ノ經過報告

第三 規則議事

第四 正副會頭選擧

第五 評議員選擧

會頭着席

第六 開會之辭 會頭

第七 祝辭

| | | |
|---|---|---|
| 內務大臣 | 男爵 牧野伸顯 | 君 |
| 文部大臣 | 男爵 尾崎新 | 君 |
| 帝國大學總長 | 男爵 濱ホーフラート・プロフェッソール・ドクトル | オン・ベルツ 君 |
| 傳染病研究所長醫學博士 | 北里柴三郎 | 君 |

第八　閉會之辭　　副會頭　男爵澁澤榮一君

第九　標本展覽

休憩（茶菓）

**第一回學術集談會**

○余ガ癌腫觀　醫學博士山極勝三郎君
○上氣道癌ニ對スル外科ノ價値　醫學博士岡田和一郎君
○癌免疫試驗ノ近況　醫學博士佐多愛彦君
○演題未定　醫學博士長與稱吉君
○癌腫研究と比較病理學　醫學博士藤浪鑑君
○癌ノ「スペートレチダーフ」ニ就テ　醫學博士本多忠夫君
○趨人科的癌腫統計的報告　醫學博士木下正中君
○癌ノ歴史　ドクトル富士川游君

かくて、この日、青山胤通、本多忠夫の兩氏が夫々その正、副會頭に當選し、また長與稱吉氏同理事長に任ぜられて、岡田先生またその評議員に推されたのであつた。

かうして、五月に入り國際癌研究會が獨逸伯林に開催されるや、該會は在獨會員佐藤恒丸、雨宮量七郎、秦佐八郎の三氏に代表參列を囑託し、またこゝに正式に國際癌研究會に加盟するに至つたのである。

かうして、先生はまたその薨去に至るまで、同會の評議員として斯會の發展向上に貢献する處頗る多く、また大正十三年、その職を大學に辭するに當つては、同會に金參百圓を寄附して、その基本金の資に供する等、今日の財團法人癌研究會の大を致すに就ても尠からざる寄與をなしたのであつた。

かうして又この四十一年には、三月の下旬に我が近代醫學の開祖とも稱すべき細菌學の世界的泰斗ローベルト・コッホ氏、七月上旬に我が國を訪づれる旨、北里博士の許迄報じ來つたので、我が朝野は俄然色めき立ち　醫界は擧げてその歡迎準備にとりかゝることゝなつたのである。かうして、東京醫學會を初め、全日本三十有餘の各學會はこゝに聯合して發起者となり「古弗歡迎會」を開くことゝなつたのであつたが、先生も亦、大日本耳鼻咽喉科會を代表し、該會より佐藤信郎、木村彬の兩委員を率ひて之に參劃することゝなり、五月六日の歡迎委員總會に於てその餘興委員に選定され、專ら六月十六日に擧行さるべき該歡迎會の準備に當られたのであつた。

かくて、六月十二日コッホ氏無事來朝、入京するあれば、同十六日には、午後二時より上野の音樂學校に於て我が學術界未曾有の盛大なる歡迎會が開かれ、西園寺首相、板垣伯、桂侯等々、朝野の貴紳淑女を初め、來會者は、この世界的偉人の謦咳に接せんものと式場に滿ち溢れるの盛況を呈し、獨逸國歌の奏樂裡に主賓コッホ氏、石黒委員長の先導にて入場すれば、會員一同は起立して之を迎へ、委員長石黒男爵の紹介の辭を以て開會され、各學會總代東京醫學會々頭一浦博士の歡迎の辭、また來賓牧野文相、原内相等々の祝辭が述べられ、次で委員の一人なる高木男爵がコッホ氏結核菌發見第二十五年を祝する意味にて昨年秋獨逸國に於て企劃せられた結核豫防撲滅基金の寄附に來會者一同の賛同を求め、コッホ氏これに次いで謝辭を述べ、併せて本日の講演「睡眠病ニ就テ」を一時間餘に渉つて論説し、終つて青山博士の謝辭を以て閉會し、引續き午後七時より歌舞伎座の觀劇會に移つたのであつた。

この夕はかの講演會に於ける來賓及會員に更らに數百の内外の貴婦人令孃を加へ、會場は一層の美觀を添へ、定刻に至れば場内の上下皆充滿し、陸軍戸山學校生徒音樂隊の奏樂裡に高木男爵の挨拶を以て始まり「義經千本櫻吉野山道行」、「夜討曾我」、「二人道成寺」と滿場恍惚の裡に幕は進み、最後に新橋藝妓連の手踊「國の華」を以てこの豪華な歡迎會は極めて好評裡にその幕を閉じたのであつたが、就中、この夕、その幕合に奏樂せられた陸軍戸山學校音樂隊のニーベルン

ゲンリードの一節ジーグフリードの婚儀行進曲及ワルキュールの騎馬曲及ジーグムンドの愛の曲等は八、八間にも多大の高評を博し、餘興委員としてその總務掛を擔當された先生にも多大の面目を施して、無事その任を果されたのであつた。

尙ほ又、この四十一年九月には、感化救濟事業講習會の臨時講話を内閣から囑託されると共にまた十二月には、東京市衞生會の主催にかゝはる東京市小學校々醫耳鼻咽喉科學講習會が開かれて、その講師に招聘され、市内小學校々醫八十二名に向つて講義される處があつたのである。

## 八、大日本耳鼻咽喉科會の發展と地方會の創設

これより先き、明治三十五年四月以來、東京帝國大學耳鼻咽喉科教室に移して以て先生の主宰するに至つた大日本耳鼻咽喉科會は、その後教室の發展並びに斯學の普及進歩に伴つて、僅々七八年の間に會員數は倍化し、約六百五十餘名の多きに達して長足の發達を遂げたのであつた。

而もその間、明治三十五年には淺井健吉氏京都醫科大學講師に赴任して、同大學に耳鼻咽喉科の成立をみるや初め、同四十年迄の數年間には、先生の同窓和辻泰次氏滯歐三年にして歸朝、京都醫科大學教授に任ぜられて耳鼻咽喉科學講座を開設せるあり、又先生の愛弟子久保猪之吉氏、同じく四十年に歸朝して福岡醫科大學教授となり、同じく耳鼻咽喉科學講座を擔任し、東京を初め我が國二帝大に夫々耳鼻咽喉科學講座の開設されるを初めとして、また同じく三十七年には高畑挺三氏並びに中村豐氏が前者は長崎醫學專門學校に、後者は愛知醫學專門學校に夫々教諭となつて、耳鼻咽喉科主任を命ぜられ、加藤亨氏また三十九年に大阪府立高等醫學校教諭に赴任し、同校醫院耳鼻咽喉科醫長を兼ね、四十二年には太平直治氏千葉醫學專門學校に初めて耳鼻咽喉科學の專任教諭となる等、また少し下つて四十四年には、赤松純一、和田德次郎の兩氏夫々、熊本醫專、仙台醫專に斯科を創設する等々、この近々十年間に於ける斯學の發展は、東京帝大の先生の教室を母胎として八方に擴がり、また官私の病院にても夫々斯科の新設、擴張を圖る處あつて、その發達には著大なるものがあり、またそれを背景とする學會も愈々向上發展の一途を辿つて　會員數の如きも、明治三十年、大日本耳鼻咽喉科會と改稱、改組後の百八十五名、及ひ同三十五年先生の會頭就任當時の三百二十名に對し、明治四十二年には六百五十一名の多きを算し、またその會計狀態の如きも引繼ぎ當時の約三倍餘に老大化してをり、またその集會の如きも、毎年一回の總會を開き、明治三十五年四月第一回日本聯合醫學會（第三回以後は單に日本醫學會と稱す）の開催をみるや、爾來之に參加して、その開會毎にその一部分科會を形成して總會を開き、その他、東京耳鼻咽喉科會時代には毎月二回の常會を開き、また大日本耳鼻咽喉科會と改稱せられてからも毎月二回乃至一回の例會を開いて、講話、演說、討論等を行つて、斯學の研鑽、向上發達に資して來たのであつたが、漸く回を重ぬるに從ひ愈々盛大に赴くと共に、東京、京都、福岡の各帝國大學を初め、各地方醫學專門學校に於ける斯科學の普及並びにその發達は、研究報告の質的深化と共に量的にも多きを加へて、その一集會に於てよく之を抱擁し得ざるに至ると共に獨り東京の地にのみ局限し得ざるの狀態となり、明治四十二年の春、四月三、四の兩日に開かれた第十三回總會の如きは、京都大學よりは例の如く和辻教授數名の門下生を率ひ來り、また大阪よりは淺井博士加藤學士等の東上するあつて、その揭げる演題の如き實に七十有餘に及ぶも、該會に於て演了せるは僅かその半ばの四十席にて閉會せざるを得ざる如き狀態に到り、爲めに遂に明治四十二年、學會の規則を一部增補改正して地方會の設立をみるに至つたのであつた。

これより先、明治四十二年二月十七日に開かれた例會閉會の後、親睦會を兼ねて催されたる評議員會の席上、關西支部より提議されたる地方會設立の件に就き委員を擧げて調査檢討することゝし、同廿七日、先生を初め、木村、池谷、佐藤（信）、榊田の五委員會合熟議の上調査案を作成、提出する處あつて、同四月三日の總會に於て地方會設立の件を報告決議し、同六月、大日本耳鼻咽喉科會東京地方會規則を制定して、その十五日東京帝國大學病理學教室に於て先づ東京地方會

第一集會を開催したのであつた。

開會に先立つて、先生は座長に推され、議事に移る前に本會の設立に就て、「當地方會設立は已に總會に決議せる所にして各地方に於ても亦東京地方會に繼て或は京都或福岡又名古屋其他に其設立を見るに至るは今日より推して知るべく之れ大日本耳鼻咽喉科會にとりては甚だ好都合の事にて會の隆盛は期して待つべく又東京地方會は其先驅者として會員一同充分の奮勵を祈る」とてその希望を會衆に告げ、地方會々則を議決されたのであつた。

その會則を參考までに掲げると次の如し。

**大日本耳鼻咽喉科會東京地方會規則**

**○名稱及處在**

第一條　本會は大日本耳鼻咽喉科會東京地方會と稱し其事務所を東京醫科大學耳鼻咽喉科醫局に置く

**○目的並に組織**

第二條　本會は大日本耳鼻咽喉科會の目的を十分に遂行する爲に組織し、東京府下及其近傍地方に於ける同會々員の會合よりなる團體なり

**○事業**

第三條　本會は毎年五回（二、六、八、十、十二月の各第三火曜日）集會を開き學術演說及其他の議事をなす、該當日の會合には當地方會々員は勿論大日本耳鼻咽喉科會々員は何れも來會出演するを得るものとす、

第四條　本會に於ける演說及議事は必ず原著又は抄錄或は雜報として之を大日本耳鼻咽喉科會々報を以て報告すべし從て獨立の會報を發行せず

第五條　本會は廣く大日本耳鼻咽喉科會の趣旨を紹介し該會に入會を勸誘する義務を有す

**○會員**

第六條　東京府下在住大日本耳鼻咽喉科會會員は總て東京地方會々員となし且つ東京近傍にして東京地方會集會に來會し得る範圍にあるものは之を勸誘して東京地方會々員となす



第七條　地方會々員たるものは必ず大日本耳鼻咽喉科會々員たる責任を有す

**○役員**

第八條　本會に會頭一名、理事二名、評議員及編輯員各若干名を置き會頭は會務を總括し理事は庶務會計を處理す

第九條　東京地方會は大日本耳鼻咽喉科會との連絡を計る爲め地方會の評議員及編輯員より各其五名宛を互撰により大日本耳鼻咽喉科會に出すものとす

第十條　役員の任期は一ヶ年とし凡て選擧による、但し多數會員の申出により指名あるときは之を採用することあるべし

**○會費**

第十一條　地方會の會計は獨立會計として大日本耳鼻咽喉科會の出費を受けず、從て本會の會計は會員の會費及有志の寄附金により之を支辨す

第十二條　本會々員は會費として年額金四拾錢を納附すべし

但し一時金四圓を納附するものは之を終身會員とす

**○附記**

本則は大日本耳鼻咽喉會々頭の承認を經たるものにして會員の半數以上の賛成あるに非ざれば變更するを得ず

以上

**明治四十二年六月**

**大日本耳鼻咽喉科會**

**東京地方會**

かうして、明治四十二年四月の大日本耳鼻咽喉科會の總會の決議により、同六月十五日東京地方會の成立をみるや、また同十月十七日には和辻博士の下に京都醫科大學耳鼻咽喉科教室に於て關西地方會開かれ、また九州地方會は同十九日福岡醫科大學耳鼻咽喉科教室に於て久保博士の靈力によつて成立し、各大學の所在地を中心に先づ三個の地方會の結成をみるに至つて、後ち、名古屋、北海道、東北等々と漸次全國に及ぼすの盛況をみるに至つたのである。

こゝに參考までに現在に於ける各大日本耳鼻咽喉科會地方會とその成立年月日並びに創始會長の氏名を掲げておかう。

| | | |
|---|---|---|
| 東京地方會 | 明治四十二年六月十五日 | 岡田和一郎 |
| 關西地方會 | 明治四十二年十月十七日 | 和辻春次 |
| 九洲地方會 | 明治四十二年十月十九日 | 久保猛之吉 |
| 新潟地方會 | 大正十一年五月十四日 | 鳥居惠二 |
| 名古屋地方會 | 大正十二年五月六日 | 八木澤文吾 |
| 中國地方會 | 大正十三年十一月三十日 | 田中文男 |
| 北海道地方會 | 大正十四年七月十一日 | 香宗我部壽 |
| 朝鮮地方會 | 大正十四年八月十五日 | 小林靜雄 |
| 東北地方會 | 大正十五年二月二十一日 | 和田德次郎 |
| 長崎地方會 | 昭和三年六月二十四月 | 笹木實 |
| 北陸地方會 | 昭和五年一月十九日 | 山川强四郎 |
| 大阪地方會 | 昭和五年二月九日 | 加藤亨 |
| 臺灣地方會 | 昭和五年五月二十五日 | 上村親一郎 |
| 滿洲地方會 | 昭和六年四月 | 松井太郎 |
| 熊本地方會 | 昭和四年 | 鰐淵源 |

このやうにして、その後は全國各地に、大學の所在地を中心としていづれも夫々の地方會の結成をみ、集會の開催をみて、各地競つて斯學の進歩發展の爲めに相互に研鑽し、斯學の發達に貢獻する處あつたのであるが、先生は終始その指導發展に力を致され、集會は從來通り大學内に開かれると共にまた大正九年には臨床集談會なるものを新に設けて、東京市内又はその近傍の學校、病院等に開催して、その設備、手術、症例等、臨床上の利便を圖られる處があり、昭和四年一月、金杉、賀古の兩先輩と共に顧問に推される迄二十年間その會長の任にあつて、その薨去　至る迄二十九年有餘の間、集會に又臨床集談會に出席、演說し、東京地方會の誘掖指導に盡瘁されたのであつた。

而してまこの明治四十二年の五月上旬には、長崎に第十五回九州沖繩聯合醫學會が開催され、この年初めて耳鼻咽喉科部會が獨立し、その一分科として第五部を成した。これ地方學會に於ける耳鼻咽喉科部の獨立の嚆矢であつて、先生も亦四月末之に赴き、その總會に於て「耳性腦髓外科ニ就テ」と題して講演せられる處があつた。

## 九、教室の移轉擴充

### ゼモンの來朝歡迎會とフレンケル追悼會

このやうに、大日本耳鼻咽喉科會は、先生の主宰されてより數年にして顯著な發展を遂げ、明治四十二年の地方會の成立を機に劃期的な擴充整備をみたのであつたが、翌四十三年、大阪に開催された第三回日本醫學會（日本聯合醫學會は第三回以後は聯合の二字を省いて單に日本醫學會と稱す）に於てはその第十一分科會として之に參加し、その總會を開いたのであるが、偶々當時、伯林のフレンケル、維納のキャリー、ボルドーのムール氏等と共に世界に於ける斯學の四大家を以て並稱せられる英京倫敦の喉頭病學者サー・フェリックス・ゼモン教授の來朝するに遭つて、同氏をこの第十一分科會に招請し、歡迎の意を表して一場の講演を乞ひしに、同氏は學會總會に於ては「喉頭癌腫ノ診斷及治療ニ關スル二三ノ注意」を、また分科會に於ては「肺炎重球菌性安穢那ニ就イテ」を夫々講演する處があり、後學會終了後上京するに及んで、その來朝歡迎會を東京に於て盛大に行つたのであるが、かゝる學會の盛大に赴くと共に、また教室の方も斯學の發達に伴ひ益々發展して、明治四十二年には先きの助手吉井丑三郎氏の二年の留學を終へて歸朝するあつて、東京醫科大學講師に就任入局する等、醫局も三十六年の移轉擴張後數年にして間もなくその狹隘と不備とを喞つに至つたのであつた。

かくて、四十三年三月十四日には、この年まで各科各所に散在してゐた外來患者診療所が一と纏めに綜合されて、南門（耳鼻科開設當時切通門と稱せる處）内の左側に凹字形に新設され、耳鼻咽喉科の外來診療所もその二階南側の中程に移され、諸般の設備大いに整つて面目一新したのであるが、またその九月九日には從來の時計臺が取り毀しになるので、教室は再び舊學生寄宿舍跡（今回は以前の西方）に移轉することゝなつたのであつた。

此度移轉した教室は、玄關を入つて左の階下全部を占め――今の綜合建築内科の非常階段邊りがその玄關であつた――病室は時計臺の時より狹く、僅かに十四床を置くにすぎず、また本建築までの一時的な假教室のことゝて、諸般の不備不便もあつたが、兎に角こゝに於て治療室、準備室、講師室、圖書室等が設けられ、また古物ながらに裏側には一棟の研究室が建てられて、本格的な研究も行はれるやうになり、教室の方も大いに擴充整備せられるに至つたのである。そして、本教室が爾來先生の退職まで、その本據となつて、先生の辭任後の大正十五年、現今の教室に移るまで十七年の長い間、本邦耳鼻咽喉科學發展の源泉地となつたのである。

こゝに、その移轉前後數年間に於ける教室内外の變遷を、例によつて、先生自身の筆によつて傳へよう。

四十年久保猪之吉氏ハフライブルグ大學ノキリヤン教授等ノ許ニテ三年有餘耳鼻咽喉科ノ研究ヲ終リ尙ホ維也那伯林等ノ修學ヲ了シテ昨三十九年十二月無事歸朝サレタルニ由リ此年一月福岡醫科大學教授ニ任ゼラレ同時ニ同大學耳鼻咽喉科講座擔任ヲ命ゼラレ次テ病室及外來診察處開始セラレ次ヅ臨床講義モ始マレリ、

東京臨床ニ於テハ新醫學士大平直治、樋田義衛、梶原龍彦三氏ヲ副手ニ採用シ、助手寺田豐作氏四月助手ヲ辭シ先ヅ横濱某私立病院ニ聘セラレ次テ東京赤坂ニ寺田耳鼻咽喉科醫院ヲ開キ實業ニ就キ又副手杉村可宗氏ハ職ヲ辭シテ本郷切通町ニ開業セリ由リテ副手千葉眞一氏助手トナレリ、阪井清氏ハ在學期滿チテ陸軍々醫ニ復歸シ大學院學生岩田一氏ハ大學院ヲ修了シテ軍々醫學校教官ニ補セラル於之同學校ハ初メテ專任教官ヲ置キテ醫官ニ斯學ヲ教授スルコトトナレリ、陸軍二等軍醫々學士志賀新氏ハ職時從軍ヲ終リ豫備トナリシニ由リ來リテ副手トナリ副手靜岡省三介補（當時樋口）小野寺文吾兩氏去リハ開業シ谷村鉦一郎氏介補トナレリ、副手梶原氏席ヲ福岡醫科大學ニ轉ジ久保教授ノ助手トナレリ

四十一年、此年一月新醫學士廣瀨涉、赤松純一、和田德次郎、細谷雄太ノ四氏東大臨床ノ副手ニ任命セラレ又加藤鍬作、野田泰兩氏介補ヲ命セラレ而シテ介補津田終吉氏職ヲ辭シ日本橋區久松町ニ開業シ、助手千葉眞一氏斯學研究ノ爲メ五月獨逸ニ向ツテ出發シタリシニ由リ副手大平直治氏助手ニ任セラレタリ、

此年淺井健吉氏ハ渡歐後主トシテバーゼル大學ジーベンマン教授示導ノ下ニテ耳科研究ニ從事シ二三有益ノ業蹟ヲ公ニシタル後チ無事歸朝サレ大阪市回生病院耳鼻咽喉科醫長ニ就任セリ、又東大選科卒業生本田雄五郎氏ハ二年前斯科研究ノ爲メ獨逸國ニ留學サレシガ主トシテエルランゲン大學デンケル教授ノ「クリニツク」ニ於テ研究ヲ遂ゲテ業蹟ヲ發表シタル後無事歸朝サレ東京日本橋病院耳鼻咽喉科醫長ニ就任セリ

四十二年、此年東大臨床ニ於テハ新醫學士田所喜久馬、尾曾越俊二、永野重業、光本天造ノ四氏ヲ副手ニ採用シ、助手木村彬氏職ヲ辭シテ本郷區金助町ニ開業シ又助手大平直治氏ハ千葉醫學專門學校教諭ニ任セラレ任ニ赴ケリ、同專門學校從來唯ダ同校出身者タル西山信光氏ニ耳鼻咽喉患者ノ診療ヲ囑托シ來リシガ於之初メテ專任教諭ヲ置キ學生ニ向ツテ斯科教授ヲ爲スコトトナレリ、

副手樋田義衛、同廣瀨涉兩氏前後相次テ助手トナリ、介補野田泰氏高知病院耳鼻咽喉科醫長ニ赴任シ又介補加藤鍬作及鈴木督兩氏斯科研究ノ爲メ獨逸ニ留學セリ。

此年一月吉井丑三郎氏バーゼル大學ジーベンマン氏教室ニテ研究一途ゲ然カモ價値アル論文數個ヲ公ニシタル後無事歸朝セシニ由リ直チニ東京醫科大學講師ニ任セラレ同時ニ當時開院シタリシ三井慈善病院ノ耳鼻咽喉科醫長ニ就任サレシガ爾來同氏ハ同病院ニ於テ實地醫家ニ向ツテ短期講習會ヲ催セシニ毎會入會者多ク大ニ成効セリ

此年海軍大軍醫醫學士林舜氏ハ軍省ヨリ大學院入學ヲ命ゼラレ副手トナリテ就職シ又大阪高等醫學校ヨリノ委托ニテ醫學士小山景治氏來リテ副手トナレリ、次テ助手樋田義衛氏高崎市林病院耳鼻科醫長ニ赴任セシニ由リ副手赤松純一氏助手トナレリ、

四十三年、此年新醫學士神尾友修、太田登志彦、下平軍平、伊藤晄ノ四氏副手ニ任ゼラレ代リテ助手廣瀨涉氏職ヲ辭シ横濱市ニ廣瀨耳鼻咽喉科醫院ヲ新築シテ開業セシニ由リ副手和田德次郎氏助手トナリ、前年横濱ニ開業セシ野原又三氏ハ下ノ關市ニ轉ジ業ヲ開ケリ。

此年我東大教室ニ二大變化アリ一ハ外來診療所ノ新築落成ノ爲メ外來臨床講義及ビ其診療ニ改良ヲ加ヘラレタルコト、二ハ從來教室ニ充テラレタル時計臺建物取毀チノ爲メ教室ハ再ビ舊寄宿舍跡ノ建物ニ移リタルコト是レナリ、而シテ新築外來診療所ハ全部七百坪總二階ノ大家屋ニシテ階下ニ内科、外科、婦人科、整形外科ノ診療所ガ設ケラレ階上ニ眼科、皮膚科、小兒科、齒科ト及ビ我科ノ診療所ガ設ケラル我科ノ診療所ハ其ノ西南側ニ在リテ總坪數百二十坪ヲ算シ初診室、再診室、學生豫診室、電氣用暗室、吸入室、手術室患者控室ノ八室ヨリナリ而シテ初診室ニハ二ケ所再診室ニハ十ケ所學生豫診室ニハ三ケ所ノ診察臺ヲ置キ各診察臺ニハ瓦斯燈、蒸氣消毒器及ビ診療用機械及ビ藥品臺ヲ供ヘ付ケ稍〻整頓スルヲ得タリ、反之教室ハ舊小兒科及齒科外來診察所ニ修繕ヲ加ヘテ之レニ充テタル者ナルヲ以テ病室ハ以前ヨリ却テ狹ク病牀僅ニ十四ヲ容ルヽノミ、加フルニ手術室ノ如キハ全ク其體ヲ爲サズ唯ダ研究室ト圖書室トガ少ク擴張サレタルノミ、是レ他日新築迄ノ一時的ノモノナレバ余ハ此縮小的ノ設備ニ堪ヘツヽアルモノナリ、

此年四月大阪市ニ於テ第三回日本醫學會ガ開催セラレ我耳鼻咽喉科ハ其第十一分科會ヲ組織シタルニ由リ大日本耳鼻咽喉科會總會ハ全部之レニ合併シテ大阪ニ於テ開クコトトナリ余ハ其分科會々長ヲ加藤亨氏分科會地方委員ヲ勤メタリ、此時京大、福大及東大各教室ヨリ新進氣鋭ノ學者皆一堂ニ會シ加フルニ大阪、愛知、岡山、京都等醫學專門學校ヨリノ出席者之ニ加ハリ大ニ盛況ヲ呈シ演說數六十三個ノ多キニ達 而テ玆ニ特筆スベキハ當時ロンドンノ鼻喉科ノ大家サー、フェリツキス、ゼモン氏來邦サレタルニ就キ同氏ノ喉頭癆帶麻痺ニ關シテゼモン、ローゼンバツハ氏定則ヲ立テタルニ由リ又喉病中央雜誌ノ主筆發行者タルニ由リ其名我邦ニモ亦嘖々タレバ直チニ同氏ノ學會臨席ヲ乞ヒシニ同氏ハ之ヲ快諾シテ直チニ令夫人ト共ニ之レニ臨ミ總會ニ於テハ「喉頭癌治療及豫後ニ就テ」ヲ述ベラレ我分科會ニ於テハ「肺癆菌喉頭侵入」ニ就テ報セラレ我醫界ハ爲メニ大ニ利益ヲ博セリ而シテ同氏ガ直チニ「日本ニ於ケル醫學會見聞錄」ヲ草シ伯林ヨリ發行ノ自家主筆ノ中央雜誌ニ揭ゲタルモノニテ余ハ深ク之ヲ謝セント欲スル者ナリ、

爾他杏雲堂平塚分院長小池重氏喉頭病專攻ノ爲獨逸國ニ留學シタルガ爲メ副手永野氏其後任ニ就キ又大阪高等醫學校教諭加藤亨氏校費ニテ獨逸國ニ留學ヲ命ゼラレ出發サレシニ由リ副手小山景治氏職ヲ辭シテ其後任ニ就ケリ

四十四年、此年東大臨床ハ新醫學士池田泰雄、渡邊舒、山口競、八木澤文吾ノ四氏ヲ副手ニ採用シ後チ池田泰雄氏病理學教室ニ轉ジ、又助手赤松純一氏ハ二月熊本醫學專門學校教諭ニ任ゼラレ縣立熊本病院耳鼻咽喉科醫長ニ就任セシニ由リ同醫學校モ亦玆 斯科臨床ノ新設ヲ決行シタリ、又助手和田德次郎氏ハ四月仙臺醫學專門學校教諭ニ任ゼラレ同時ニ宮城病院耳鼻咽喉科醫長ヲ命ゼラレ赴任セシニ由リ同醫學校ハ新醫學士池田泰雄、渡邊舒、山口競、八木澤文吾ノ四氏ヲ副手ニ採用シ次デ赤十字社病院外科助手タリシ醫學士小野鐵造氏ヲ副手ニ又故男爵松本順先生令嗣本松氏ヲ介補ニ採用シタリ、此年八月伯林ニ於テ開カレタル万國喉頭病學會ハ會頭ベ・フレンケル、幹事ローゼンベルグ氏等ヨリ特ニ余ノ出席ヲ促サレタレドモ余之レニ應ズルヲ得ザリシニ由リ當時維也那留學中ノ余ノ前ノ助手加藤亨氏ヲシテ余ニ代リ出席セシメテ大ニ優待サレタリ、又同會ニ於テ友人教授アレキサンデル氏ノ建議 テ万國「チツエナ」研究會組織ノ件可決セシニ由リ本邦モ亦之レニ贊同スルコトトナシヌ

四十五年、此年一月東大臨床ハ新醫學士原田三杉、山口靜雄、佐藤敏二、深瀧文雄ノ四氏ヲ副手ニ採用シ次デ副手下平軍平氏越後長岡病院耳鼻咽喉科醫長ニ赴任シ又助手細谷雄太氏ガ臺灣總督府醫學校教諭ニ任ゼラレ同醫院耳鼻咽喉科醫長ヲ命ゼラレ赴任セシハ前任者紺原省私氏前年留學ヲ命ゼラレ獨逸伯林ニ於テ種々ノ研究ヲ遂ゲタル後終ニ職ヲ辭シレタルニ由ル又副手伊藤晄氏ハ臺灣總督府臺南病院耳鼻咽喉科醫長ヲ命ゼラレ赴任シ、又副手神尾友修氏ハ耳鼻科專門根岸養生院々長ニ就職セリ、又陸軍省ハ最近ニ於テ二等軍醫々學士增田胤次氏ニ大學院入學ヲ命ジ余ノ教室ニ於テ研究ニ從事スルコトトナリ又千葉縣一氏ハ獨逸國ストラースブルグ大學ニ於テ主トシテマツセ教授ニ師事シ多數ノ業蹟ヲ公ニシタル後前年々末無事歸朝セシニ由リ此年順天堂醫院ニ耳鼻咽喉科ヲ新設セシメ其醫長ニ就任シ介補松本々松氏又々辭シテ千葉氏ト共ニ順天堂ニ就職セリ、

そして、この間に於て特筆すべきものは、前述のゼモンの來朝歡迎會と先生の恩師にして且つ世界的な鼻喉科學の泰斗フレンケル教授の四十四年十一月に於ける逝去及び翌四十五年四月の總會に於て行はれたるその追悼會であらう。

尙ほ、これより先、第三回日本醫學會に於ては四月三日、その第十三部會（衞生學、細菌學及傳染病學）に於て佐多愛彦博士の提議によつて、結核豫防會設立に關する動議が滿場一致を以て可決せられ、先生は、横手、佐多、柴山、遠山の四博士、山根、八木の兩代議士並びに川上元治郎、富士川ドクトルの八氏と共に同松下分科會長よりその調査委員に指名され、これに松下博士を加へた十名より成る調査委員中より、更らに先生は、佐多博士、川上元治郎の二氏と共に推されてその常務理事の任に就き、斯會を統率して社會の爲めに盡瘁されることゝなつたのである。が、この第三回日本醫學

會に偶々ゼモン教授の來朝するあつて、その臨席を乞ひ、一場い講演を囑して同學會に一層の光彩を添へたことは既述の如くであるが、これより先、同教授は、前四十二年七月公職を去つて自由の身となり、同九月三十日倫敦を發し、夫妻相携へて世界漫遊の途に上り、翌四十三年三月二十三日長崎に着き、同二十六日神戸に上陸して京阪地方を巡遊し、次で横濱いグランドホテルに投じて、こゝを根據に約六週間許り逗留の上各地を巡覽する豫定であつたのである。

何分同教授は一八七四年以來倫敦にあつて、ロンドン咽喉病院に、次いでは聖トーマス病院の喉頭病科長として大に手腕を振ひ、また倫敦喉頭病學會を起し、或は「喉頭病中央雜誌」(Centralblatt f. L) を率ひて、その盛名を世界の學界に馳せ、且つは英國王立醫會々員に推され、或は英國宮中顧問官に擧げられる等の榮譽少からず、而も岡田先生にあつても、先きの洋行留學中、歐洲の諸學會に於て昵懇を重ね、且つはその主宰せる該誌のミットアルバイターに推されたる緣故もあり、また金杉博士は過般の滞歐中特に親交を結ぶ等の關係もあつて、同教授夫妻の來朝は我が學會にとつては未曾有の歡喜ともいふべく、學會終了後、教授夫妻の上京せられるや、四月二十四日午後一時より金杉博士のゼモン教授招待會が日本橋倶樂部に於て盛大に行はれ、またその翌二十五日正午よりは佐藤、高木、岡、小池の四男爵、青山學長以下の各教授、中濱、北里、森、鈴木(重道)、金杉、鈴木(孝之助)の諸博士等二十七名の發企で、小石川の帝國大學植物園に於てその歡迎午餐會を催し、在京耳鼻咽喉科專門家多數も之に出席したのであつた。當日は陸軍々樂隊の奏樂裡に和やかに開宴し、宴酣にして大澤岳太郎博士の發聲にて英國皇帝陛下の萬歳を三唱し、次でゼモン氏我が　陛下の萬歳を唱へ、高木氏は英語で小此木氏は獨語で夫々歡迎の辭を述べ、ゼモン氏の之に答へる處あつて、宴後庭上にてゼモン氏夫妻を中心に記念撮影をなし、餘興としては獨樂の曲藝、太神樂、廣瀬畫伯の席畫等があり、その富士及び鯉の揮毫を同氏夫妻に記念品として贈り、四時半この盛大なる宴を閉じたのであつたが、當日集まる者は都下の醫師、學者等八十有餘名を算して頗るの盛況であり、我が朝野を擧げての歡迎裡に樂しき滞京の日々を送り、五月一日同夫妻は新橋を發し、退京したのであつた。

かうして、四十三年の春には、一方舊知の八重の汐路を越へ來つて忽然として訪ふあつて、之を迎へるの悅びに遭ふと共に、また翌四十四年の秋には、舊師の溘焉としてこの世を去り逝くの悲しみをも味はねばならなかつたのである。

即ちその十一月、先生は、恩師ベ・フレンケル教授永眠の悲報に接せられたのであつた。先生は早速同年十二月發行の大日本耳鼻咽喉科會々報の卷頭に寄せ筆を驅つて誄をなして曰く、

誄

ゲハイムラアト、プロフエツソル、ベルンハルド、フレンケル先生逝く吁悲哉。昨の夜半は飛電倏忽として來り。斯の悲報を傳ふ。浩嘆の至り痛悼の極み自失せんとせり。

曩にはアウグスト、ルウツエ先生を失ひ、今復たフレンケル先生の訃音に接す。斯科に棹す者帆は破れ檣の摧碎せられたる感なくんばあらざるなり。天地に俯仰して猶ほ及ぶべからず。嗚呼天道の是非疑はざるを得ざるなり。即ち明窓の下淨几に倚り先生の傳を錄せんとす。然かも剞劂切に期無きを告ぐ。因て其評傳は次號に割愛し今は只先生の逝去を報じ讀者と共に弔意を表さんとす。

日本　岡田和一郎謹白

かうして、また同十二月十九日の第十回東京地方會の開會に當つては、その劈頭に同先生の永眠を悼まれたのであつたが、その翌四十五年四月三、四兩日間東京帝國大學醫科大學に於て開催された總會に於ては、京都、福岡等を初め全國より同學の士の集まれるを機に、同三日午後一時、午前の總會演說終了後、大學内の山上會議所に於てフレンケル先生追悼會を行つたのである。

この山上御殿で催された故ゲハイムラート、ベー、フレンケル先生追悼會に於ては、その中央の壇上に、教室で復製したフレンケル先生の寫眞を掲げ、花輪及生花を之に供へ、また先生の遺著四十餘冊を陳列して、定刻に至るや先づ岡田先生立て開會の辭を述べ、次で岡田、金杉兩博士の追悼演說があつて、後ち別室で茶菓の饗應があり、在りし日の往時を偲ばれたのであるが、當時來會する者百餘名にして仲々の盛會であつた。

こゝに先生の追悼演說の大要を揭げると次の如くである。

## 追悼演說

醫學博士　岡田和一郎

故伯林大學耳鼻咽喉科教授ゲハイムラート、ベー、フレンケル先生ノ傳記ハ、既ニ諸君ノ熟知セラルルトコロナリ。余ハフレンケル先生ニハ最モ永ク親炙セシ一人ニシテ、曾テ先生ト再會ヲ約ス、シカモソノ期ヲ得ズシテ遂ニ先生ノ訃ヲ聽ク、余ノ深ク悲ムトコロナリ

先生ハ學者トシテ多大ノ業績ヲ有スル人ニアラズ、シカモ吾人ハ先生ヲ尊敬スルノ理由ヲ有ス、實ニ喉頭科ヲシテ獨立ノ學科ト爲シ、他ノ分科ヨリ獨立セシメタルハ、一ニ先生ノ功ニ歸セズンバアルベカラズ、先生ハ伯林大學ニ最初ニ喉頭科ヲ設ケラレタル人ニシテ且最初ノ主任タリ。四十餘種ノ業績アリ、其內容ハ解剖、生理、診斷等今日ノ喉頭科ハ先生ニ依リテ初メテ完成セラレシト謂フモ不可ナケン

又先生ハ喉頭內手術及ビ喉頭下部ニ於ケル手術ノ創成者タリソノ著「喉頭內手術及ビソノ効果」ハ當時醫學界ヲ聳動セシメタル論文ナリキ

結核ニ對シテモ多大ノ功績アリ、コレニ關スル十數種ノ業績ヲ公ニシ、「ツベルクリン」ニ對シテ非難アルノ時代ニ於テ、自ラ率先シテソノ効果ヲ稱賛セルガ如キ、結核ハ庶民病ナリト號呼シ、ライデン先生等ト共ニ、万國結核會ナルモノヲ設立シ、世界ノ學者及ビ富豪ヲ集メ、結核ニ關スル吾人ノ知識ヲ公開シ、遂ニハ伯林ニ結核患者收容所ヲ設置セルガ如キ、毎年伯林ニ於ケル結核患者ノ統計ヲ示シタルガ如キ枚擧ニ遑アラズ

從來耳科學者ト喉頭學者ハ分立セシヲ、耳科及ビ喉頭科ヲ合併セルモ先生ノ功績ニ屬ス

斯クノ如ク、先生ハ吾人ノ學科ニ對シテ多大ノ功績アルノミナラズ　先生ノ勇氣ト膽力ト思慮トハ吾人ノ稱賛シテ止マザルトコロナリ、實ニ今日吾々ノ耳鼻咽喉科ナルモノノ存在ハ、一ニ先生ノ功績ニ歸スベク、又吾人ノ忘ルベカラザル事ニ屬ス、聊カ以テ追悼ノ辭トス

思ふに、この四十四年には四月十七日にアウグスト・ルウツエ先生逝き、今また玆にベー・フレンケル先生の改葬せられるあり、また先きには三十九年ガルシヤ氏の逝くあるを初めとして、四十一年にはフリイドリツヒ・ベツオルド先生、四十三年にはエマヌエル・ツアウファル及びヘルマン・シユワルツエの兩氏等々、東の間に過去及び現在の耳鼻咽喉科の諸大家續々として永世に安息するあつて、先生曾遊の歐洲にある舊師、先輩知己の次ぎ〳〵と缺けゆくは、その身邊の轉



た荒涼たるの感あつて、先生の感慨も亦た一入のものがあつたことゝ思はれる。

## 十、後嗣清三郎氏を和子孃に迎ふ

明治四十四年十一月には、かうして一方に、その恩師にして、我が近代耳鼻咽喉科學の父ともいふべきベー・フレンケル先生を喪ふの悲しみもあつたが、また他方、岡田先生にとつては忘る可からざる、祝福すべき慶事が擧行されたのであつた。

卽ち、先生御夫妻の掌中の珠玉としてその鍾愛のまとゝなり、且又當時上流社交界の花として持て囃されてゐた愛孃和子さんに養嗣子横田清　郎氏を迎へる結婚の盛儀が同月廿一に日比谷大神宮に於て擧行されたのである。

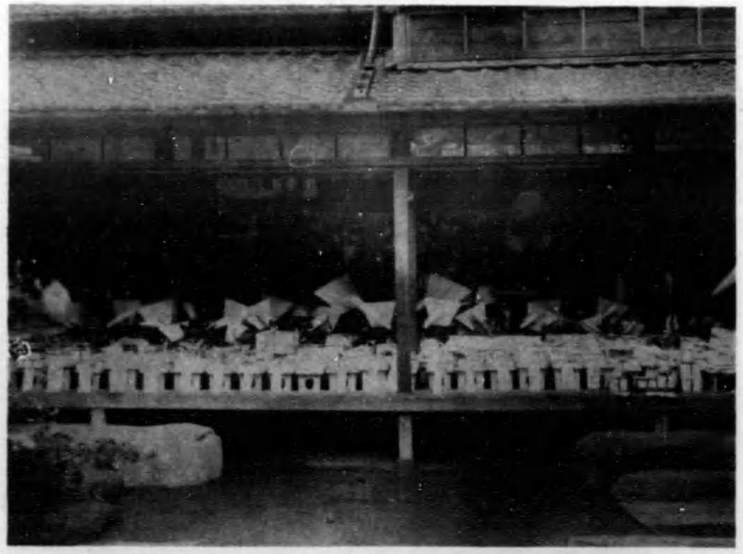
これより先、先生御夫妻の間にあつては、その結婚の翌々年、明治廿五年に長女和子さんの出產あつて以來、絕へてまた後嗣の出產なく、和子孃はその唯一の一粒種として、先生御夫妻の慈愛を一身に集めて育成されたのであつたが、何分、豪放俊英の先生の資に、理財に長け家事に遺憾なき賢夫人の譽れ高き令夫人の性を享け、學習院女學部專攻科の出身にして、明眸皓齒、語學に長じ、また音樂の素養深く、往くとして可ならざるなき才智に、御兩親讓りの華やかなる社交家として、當時の社交界並びにヂヤーナリズムの紙上にあつて、機會ある毎にその名を謳はれてゐた和子孃の芳紀も正に二十歲に垂んとして、之に迎ふべき養嗣子は當時社交界での噂の種であり、また先生御夫妻の間にあつても、百方手擴げて、その後嗣子を求めておられたのであつた、が、遂ひにその白羽の箭は、當時青山內科の秀才横田清三郎氏に立てられ、明治四十四年、清三郎氏が優等の成績を以て大學を卒業し、同時に當時の難關とせられてゐた青山內科に入局されると共に、こゝに十一月二十一日の黃道吉日を選んで、青山胤通博士の媒酌の下に、日比谷大神宮に於て華燭の典を擧げられるに至つたのである。

かうして、更らにその翌々日、十一月二十三日には上野精養軒に於てその豪華な結婚披露會が催されたのであるが、平素社會の各方面に知己の多い先生御夫妻のことゝて、その招客には殆んど朝野知名の人士を網羅し、大隈伯、寺内朝鮮總督、石本陸相、實吉子爵、石黒、佐藤の兩男爵、青山東大學長、大澤、緒方、小金井、佐藤の元老諸教授を始めとして、醫科大學の教授、助教授、及び他の分科各大學の教授諸氏、三宅秀博士、森軍醫總監、その他市内知名の醫家は殆んど餘す處なく、猶ほ又、福岡醫大の榊博士、名古屋の北川博士等、地方よりも族々として出京せられるもあつて、當日會せる紳士淑女の群れは實に八百數十名と註され、近來稀れなる盛會と謳はれたものであつた。

やがて開會の定刻午後一時ともなれば、近衛軍樂隊の奏樂裡に披露の會は華々しく開かれ、先づ餘興として庭前には當時有樂座で開演されてゐた吉備樂が、天津乙女と小楠公霞の魁梓弓を演じ、また杵屋伊十郎の長唄橋辨慶等があり、更に別室に於ては來賓としてその席にあつた、有名なる柴田環女史（後の三浦環女史）の獨唱數曲あつて之に興を添え、餘興終りて四時ともなれば、屋内に入つて、樓上の南北と樓下の三室に各々分れて立食の饗應があり、先づ樓上の南室に於ては青山學長媒酌人として簡單に新郎新婦を紹介し、次で岡田先生も女婿の眷顧を乞ふ旨の挨拶をなし、最後に寺内總督が挨拶に兼ねて一同と共に岡田家の萬歳を三唱し、次で北室に於ても、青山學長並びに岡田先生の形の如き挨拶があつて、こゝにては石本陸相來賓を代表して之に答へ、その發聲にて一同岡田家の萬歳を大唱し、階下の大廣間にては、岡田令夫人あつて、同樣の挨拶をなし、こゝに於ては大隈伯の音頭にて岡田家の萬歳を唱和し、かくて午後五時の交、目出度く散會を告げたのであつた。

時に新郎二十七才、新婦二十才の秋にして、先生御夫妻の慧眼よく證またず、新郎は溫厚にして篤實の資、訥々として内に大器を藏し、事に當りては明敏にして頴悟、その爲すあるや鋭利敏活、眞の學究と稱すべく、その後數年にして學位を得、またその間内科學研究の爲め歐米に留學せられ、歸りては東京帝國大學の講師となり、請はれてはまた千葉醫科大

新郎清三郎氏と和子嬢



明治四十四年十一月二十一日令嬢和子結婚の爲諸方よりの祝物

學の教授をも兼ね、更らに昭和五年愛知醫科大學教授に任ぜられ、同學の昇格に伴ひ名古屋醫科大學教授、名古屋帝國大學教授に任ぜられ、こゝに岡田內科教室を創設し、拮据經營よくその大を爲し、世界的の癌研究の權威として、學界の至寶と謳はれるに至つたのである。

## 十一、先生の諸業績と著述

これより先き、先生は歸朝以來、既述のやうに、一方に我が學界の先達となつて、諸般の學會の創設企劃に參與し、その發展助長に與つて力あると共に、また本邦耳鼻咽喉科學の創成發展の爲めに、その教室を主宰し、或は大日本耳鼻咽喉科會を統率して、その誘掖指導に盡瘁せられたのであつたが、その政治的經綸に加ふるに、また斯學の爲めには多くの研究業績を致して、その主宰せる大日本耳鼻咽喉科會の總會、または例會を初めとして、その他各學會に於て、機會ある毎に之を公開し、或は雜誌紙上に平素の蘊蓄體驗を披瀝發表して、後進の者の爲めに計る處があつたのである。が、先にも述べたやうに、獨逸留學中に於て爲されたものが多く「鼻茸ノ病理追加及粘液染色法ニ就テノ注意」「顳顬骨ノ耳科外科的解剖」等の如く主として基礎醫學的研究にあつたに對し、その歸朝以來は、當時の學的社會的要請に從つて、主としてその臨床醫學的方面に鋭意研究を遂げ、新手術の創意、手術法の改善等に幾多輝かしき業績を示されたのであつた。

かうして、歸朝以來は、「耳性顳顬葉膿瘍ノ診斷及手術」(三四年)「過去一年間耳的腦外科手術」(三五年)「脚氣ニ由來セル喉頭ポリープ」(三五年)「喉頭囊腫ノ內容ニ就テ」(〃)「聲帶ノ腺纖維腫」(〃)「急性耳性頸靜脈血栓靜脈炎治驗」(三六年)「耳性急性腦膜炎ノ手術治驗」(三六年)「耳性大腦顳顬葉膿瘍ノ手術ニ因リ治シタルモノ、「デモンストラチオン」(三七年)「耳性腦瘍論追加」(三八年)「耳性腦外科ニ就テ」(四二年)等々、明治四十五年の改元前後頃までにも、その主要なるもの、大日本耳鼻咽喉科會々報に於て、原著に十四、臨床講義並びに叢談に五、總會演說二十、例會演

說四十、地方會の演說二十三、その他、東京醫學會、日本外科學會、日本皮膚病學會、順天堂醫事研究會等々の各學會に於て十有餘回、また東京醫事新誌、中外醫事新報、醫事新聞等々に發表せるものを加ふると、その間に成れるもの實に百數十餘件の多きに達し、その精力の絶倫なるを思はしむるものがあると共に、又如何に先生が斯學の爲めに精勵せられたかゝ窺はれる筈である。

而して、この期間中に發表せられた主要なるもののみを明治四十四、五年の期間に、鼻科學、耳科學、咽喉氣管病の各科項別に夫々分つて、當時刊行中の南江堂發行の「近世醫學叢書」の中に夫々纂錄して出版されたのであつた。これは後の醫學博士羽太鋭治氏の編纂になるといふが、今、その內容目次にその發表時處を附して、當時に於ける業績の一端としてそれをこゝに揭げてみよう。

**近世醫學叢書　第四十五編**

**鼻科學纂錄**（明治四十四年九月十八日發行）

鼻咽腔內ニ於ケル巨大粘液性「ポリープ」ノ檢索及脫疽（中外醫事新報第四九五號）
鼻翼缺損ニ鼻翼ヲ移植シタル實驗（大日本耳鼻咽喉科會々報第十二卷第二、三號）
粘膜外科ニ於ケル第二ノ革新（大日本耳鼻咽喉科會々報第十卷第三號）
所謂鼻粘液息肉ノ病理補遺並ニ粘液着色ニ關スル二三ノ注意　中外醫事新報第四三六號）
ハイモール氏竇慢性蓄膿卽慢性上顎竇炎ニ就テ（大日本耳鼻咽喉科會々報第十二卷第一號）
鼻咽腔纖維腫（大日本耳鼻咽喉科會々報第十卷第一、二號）
眞性臭鼻（東京醫事新誌第一二九八號）
鼻咽腔腺增殖症ニ於ケル上顎骨畸形症ニ就テ（明治三五年第一回日本聯合醫學會誌）
血管神經性鼻炎ノ療法ニ就テ（大日本耳鼻咽喉科會々報第九卷第四號）
一二標本ノ「デモンストラチオン」（大日本耳鼻咽喉科會々報第十一卷第二、三號）
鼻翼成形術新案（大日本耳鼻咽喉科會々報第十二卷第二、三號）
鼻翼缺損ニ耳翼ヲ移植シタル實驗第二例（大日本耳鼻咽喉科會々報第十三卷第一、二、三號）
二三ノ患者ノ供覽（大日本耳鼻咽喉科會々報第十三卷第四號）
硬性鼻咽腔纖維腫ノ根治手術（大日本耳鼻咽喉科會々報第十四卷第六號）
鼻腔內矯正手術ニ就テ（大日本耳鼻咽喉科會々報第十五卷第一號）
鼻病ト社會トノ關係（國家醫學會雜誌第一六六號）
上顎癌患者二例ノ「デモンストラチオン」（大日本耳鼻咽喉科會々報第十五卷第五號）
上顎竇滿膿症（東京醫事新誌第三四三號）

**近世醫學叢書　第五十七編**

**耳科學纂錄**（明治四十五年三月七日發行）

純ナル根治的手術優劣論（大日本耳鼻咽喉科會々報第六卷第三、四號）
「ホルマリン」ノ耳科及外科ニ於ケル應用（大日本耳鼻咽喉科會々報第六卷第五、六、七號）
所謂ペツオルト氏乳嘴突起炎ニ就テ（東京耳鼻咽喉科會々報第九卷第三號）
耳性腦外科（一）急性漿液性腦膜炎ノ手術及治癒（大日本耳鼻咽喉科會々報第十一卷四、五、六號）
耳性腦外科（二）大腦顳顬葉膿瘍ノ手術ニ由リ治癒シタル一例（大日本耳鼻咽喉科會々報第十卷第四號）
巨大ナル聽器癌腫ノ治驗（大日本耳鼻咽喉科會々報第十卷第四號）
聾啞鑑定例（大日本耳鼻咽喉科會々報第十卷第四號）
耳性膿毒症ニ就テ（大日本耳鼻咽喉科會々報第十一卷第一號）
鼓膜ノ外傷性穿孔（東京醫事新誌第一二七六號）
外聽道內異物（東京醫事新誌第一三三九號）
乳嘴突起開鑿術ノ一新適應症ニ就キテ（第一回日本聯合醫學會誌）
耳性腦外科第二回報告（第五回日本外科學會誌）
外聽道骨部ノ「オクローゼ」及ビ其標本供覽
耳鼻咽喉ノ模型其他患者供覽

一二ノ「デモンストラチォン」（大日本耳鼻咽喉科會々報第十卷第一號）
一二ノ「デモンストラチオン」（大日本耳鼻咽喉科會々報第十卷第三號）
迷路ナクシテ聞キ得ル力（大日本耳鼻咽喉科會々報第十卷第三號）
中耳血管腫性纖維腫ニ就テ（大日本耳鼻咽喉科會々報第十卷第四號）
耳性大腦顳顬葉膿瘍ニ就テ（大日本耳鼻咽喉科會々報第十卷第五號）
附手術ニ由リ治癒シタル患者ノ「デモンストラチオン」
耳性腦膿瘍論追加（大日本耳鼻咽喉科會々報第十一卷第一號）
「マツサコン」ノ應用及供覽（大日本耳鼻咽喉科會々報第十一卷第二、三號）
中耳炎ニ對スル瞥血療法ニ就テ（大日本耳鼻咽喉科會々報第十三卷第一、二、三號）
先天性兩耳缺損及其聽力トノ關係（大日本耳鼻咽喉科會々報第十三卷第四、五號）
耳鼻咽喉科ニ於ケル不幸（大日本耳鼻咽喉科會々報第十四卷第一號）
慢性中耳炎根治手術ノ撰擇（大日本耳鼻咽喉科會々報第十四卷第五號）
急性落屑性外聽道炎ニ就テ（大日本耳鼻咽喉科會々報第十五卷第六號）
急性中耳炎ノ吸引療法（大日本耳鼻咽喉科會々報第十五卷第六號）
反射的嘔吐ニ就テ（胃腸病研究會々報第二卷第二冊）

## 近世醫學叢書　第六十二編

### 咽喉氣管病纂錄（明治四十五年五月一日）

脚氣ノ喉頭ニ及ボス影響（大日本耳鼻咽喉科會々報第八卷第四、五號）
上氣道癌腫ノ實驗報告（大日本耳鼻咽喉科會々報第十卷第一號）
喉頭腺癌腫（大日本耳鼻咽喉科會々報第十一卷第二、三號）
咽頭壁ニ發生シタル内被細胞腫（大日本耳鼻咽喉科會々報第十二卷第一號）
喉頭癌ノ診斷及療法ニ就テ（大日本耳鼻咽喉科會々報第十二卷第一號）
咽後甲狀腺腫（大日本耳鼻咽喉科會々報第十卷第五號）



喉頭「ポリーペン」ノ臨床學的及ビ病理學的研究（東京醫事新誌第一一八六號）
一二興味アリ懸壅垂ノ疾患ニ就テ（東京醫事新誌第一二三七號）
咽頭内ニ於ケル淋巴肉腫ニ就キテ（東京醫事新誌第一二三〇號）
喉頭癌ノ喉頭内抽出術ニ就テ（第三回日本外科學會誌）
珍奇ナル喉頭ノ良性腫瘍ニ就テ（大日本耳鼻咽喉科會々報第九卷第一、二號）
喉頭ノ腺腫及ビ癌腫（大日本耳鼻咽喉科會々報第十一卷第十二號）
喉頭肉腫ノ一例　附標本供覽（大日本耳鼻咽喉科會々報第十二卷第二、三號）
會厭軟骨惡性腫瘍ノ手術式ニ就テ（大日本耳鼻咽喉科會々報第十三卷第一、二、三號）
異狀ノ外觀ヲ呈シタル喉頭癌腫ノ一治驗並ニ該標本供覽（大日本耳鼻咽喉科會々報第十五卷第一號）
角化性咽頭炎（六日本耳鼻咽喉科會々報第十二卷第二號）
患者ノ「デモンストラチオン」（大日本耳鼻咽喉科會々報第十五卷第三、四號）
脚氣患者喉頭ノ臨床上ノ病變（大日本耳鼻咽喉科會々報第十五卷第三、四號）
咽頭癌患者ノ手術ニ就テ（大日本耳鼻咽喉科會々報第十五卷第六號）
安魏那ト急性傳麻質ノ關係ニ就テ（大日本耳鼻咽喉科會々報第九卷第四號）
氣管切開法ニ就テ（胃腸病研究會々報第二卷第三第四冊）
食道鏡ノ沿革及其使用方法

かうして、こゝに於ては、鼻科學に關するもの十八題、耳科學に關するもの二十八題、咽喉氣管病に關するもの二十二題にして、その纂錄せられたものゝみにても六十八件の多きに達し、既往十二三年來の研究業績の一集成をなしてゐるが、これがまた圖らずも先生の明治時代に於ける業績の一端としてのポイントを劃し、以て我が耳鼻咽喉科學の發達過程を代表せしめる一指標をなしてゐるのである。而して、それと共に又、偶然にも、この明治時代に結末を附くべき、我が耳鼻咽喉科學發達の歴史を總括すべき著作をも、この明治四十五年に先生は記錄編述せられたのであつた。

即ち、明治四十五年の三月は、先生がその學生時代に同志と相謀つて創立せる東京醫學會がその滿二十五年に相當し、その祝賀記念として、該學會の創立發展の歴史を初め、各教室を中心として、その各科學の發達史を編述し「東京醫學會創立廿五年祝賀論文」を發刊する企てがあり、先生はこの記念論文集に我が耳鼻咽喉科學の部門を執筆することゝなつて、「本邦ニ於ケル耳鼻咽喉科學發達史」（昭和十六年東亜公論社發行岡田和一郎著「黎明期の日本醫學」に再録）一篇を寄せられ、同年末、即ち改元後の大正元年十二月二十三日發行の該祝賀論文第三輯に發表せられたのであつた。

これは全篇を「發達史總論」と「學術ノ進歩」の二部に大別し、前者にあつては、之を三期に細分し、明治二十二年歐洲より歸りて耳科專門を標榜した賀古鶴所氏の歸朝迄を前驅期とし、またそれ以後、同三十三年先生の歸朝開講迄を第一期とし、大學に講座の設けられて以來を第二期として明治末年迄の斯學の發達の狀況を精細に說き、また後者にあつては、之を基礎醫學的業績と臨床醫學的業績とに大別し、更に又その間を解剖學、生理學、病理學等に部門分けにして、耳科、鼻科、喉科等に夫々細別して、その各期における業績々夫々揭げ、更らに精密なる文獻を附して以て明治時代に於ける我が耳鼻咽喉科學の發達の歴史を剩すなく記錄してをられるが、その精密なるは他科のそれに比すべくもなく、實に堂々菊版百頁を費ひやしてをられるのである。

これ實に明治時代に於ける我が耳鼻咽喉科學の發展史に結末を附したともいふべく、斯學發達の總決算をなし、大正時代への新なる展望を開く結果となつたのである。

## 十二、改元前後に於ける斯界の狀況と教室の歴史

かうして、先生に於かれては、この明治四十四、五年の交に圖らずも、明治時代に於ける自己の業績並びに專門とする斯學の總括、清算を果たされる結果となり、その筆を擱かれると同時に世も改まつて大正と改元せられたのであつた。

即ち、明治四十五年七月も二十日になると、遂に明治大帝の御不例が公表される處となり、この榮光に輝く新しき日本の礎を築かれた大帝の御病態は我が八千萬國民の一喜一憂の的となつて、我が同胞の赤誠は一つにかゝつて二重橋の彼方、雲の上の御動靜如何に注がれたのであつたが、遂ひに同三十日午前零時四十三分、寶算六十一歳を以て、大帝崩御し給ふによつて、全國諒闇の喪に伏し、慟哭の聲朝野に滿ちて世も大正と改まつたのであつた。

かうして、同九月十三日には全國民の哀惜の裡に御大喪の儀が取り行はせられたのであつたが、同九月廿四日午後四時より東京帝國大學構内山上會議所に開かれた東京地方會第十三回集會に於ても、明治天皇奉悼會が催され、先生は、次の如き奉悼の辭を述べ、集會演說に移つたのであつた。

### 奉悼ノ辭

座長　岡田博士

明治天皇ニハ夙ニ我國ノ爲メニ深ク御叡慮ヲ傾ケサセ給ヒテ或ハ文ニ或ハ武ニ盛ニ御奬勵遊サレタリ、サレバ先帝ニハ先ヅ維新ノ大業ヲ創成シ給ヒ内ニ仁政ヲ布キ外ニ國勢ヲ張ラセ給ヒ從テ國ハ益々隆盛文明ノ域ニ進ミ遂ニ今日ノ狀態トハナレリ、即チ先帝ノ御奬勵サレタルハ政事、文教、軍事、農業ト云ハズ商業、工藝百般ノ事擧ゲテ然ラザルハナシ、サレバ是等發達進歩ノ顯著ナルハ中外共ニ歎服シ且ツ万民皆御聖德ヲ頌スル所ナリ

就中軍事及ビ醫學ニ於テ然リトス、初メ先帝登極ノ當時ニアリテハ、多クハ漢法醫術ヲ用ヒラレタルニ、先帝ニハ御即位後直チニ文明醫術ヲ輸入スルノ御思召ヲ垂レ給ヒ、先ヅ大學ヲ置キテ醫學科ヲ設ケ給ヒ、更ニ侍醫局ヲ置キテ漢方醫ヲ廢シテ泰西ノ醫術ヲ御採用アラセラレ、益々醫術發達ニ大御心ヲ注ガセ給ヒ、遂ニ未ダ嘗テアラザルノ隆盛ヲ致シ、近世歐米ノ醫學界ニ比シ何等ノ遜色ナキニ至ラシメ給ヘル御鴻恩ハ、獨リ吾人ノミナラズ子々孫々百世千載ノ後迄決シテ忘ルベカラザル所ナリ

殊ニ我耳鼻咽喉科學ノ今日アルハ泰西醫學ノ進歩發達ニ伴フニ先帝ノ有難キ御聖慮即チ勅令ニ由リ明治三十三年大學ニ耳鼻咽喉科ノ講座ヲ制定シ同時ニ不肖ヲシテ其教授タラシメ給ヘルニ基クナリ、斯クテ京都、福岡ノ二大學設置ト共ニ亦該科ノ講座ヲ制定セラレ益々此科ノ發達ヲ御奬勵遊バサセ給ヘリ、斯クテ今ヤ大學ヨリ出ヅル此科專門家ノ增加ト共ニ此科ハ更ニ進歩發展ノ域ニ向ヒツヽアリ、是皆先帝ノ御仁慈ニ出デタルモノ決シテ忘ルベカラザル所ナリ、尙更ニ有難キハ明治三十七年ロンドンガルシアノ五十年祭ヲ執行スルニ當リテハ

此事イツシカ宮廷ノ御聞ニ達シ該會開會ニ際シ當時　皇后陛下ヨリ多額ノ御下賜金アリ加之同氏ノ爲ニ祝辭ヲサヘ同會頭タリシ不肖ニ下シ賜ハルニ遇フ斯ル事ハ實ニ有リ難キ極ミニシテ學會其數多シト雖モ未ダ此種ノ御恩命ヲ仰ギタルモノナシ、斯クノ如キハ實ニ、先帝ノ御思召ニ出タル所ニシテ從テ我耳鼻咽喉科今日ノ隆盛ヲ致セルハ實ニ　先帝ノ御鴻恩ニシテ、唯感泣スルノミナリ、然ルニ吾人不幸ニモ一朝先帝御不例ノ事ヲ拜承スルヤ朝夕其御快癒アラン事ヲ赤誠込メテ祈願シ所ニモ優リテ悲傷哀號マタ拱ク所ヲ知ラザルナリ、然リ　先帝ニハ既ニ人天相隔テ給フト雖ドモ必ズヤ御生前ノ御仁慈ヲ以テ今モ尚ホ我學會ノ進歩發達ヲ保護セラル、御事ト信ズ、サレバ吾人ハ益々奉公ノ志ヲ繫クシ其職ヲ勵ムト共ニ謹ミテ哀悼ノ意ヲ表サントス、神靈願クハ照鑒ヲ垂レ給ハラン事ヲ

されば、明治の末期、大正の初頃、改元前後に於ける斯界の發達狀況は如何であつたらうか、前述の先生の著述に依つてこれをみてみよう。

ソレ如斯狀況ヲ呈シツ、發達シタル我耳鼻咽喉科ノ現時ノ狀態ヲ如何ト云フニ最早他ノ學科ノソレト等ク稍ヤ複雜ノ境ニ入リテ之ヲ明細ニ記載スルコト極メテ困難事ニ屬スト雖ドモ今其大體ノ主要點ノミヲ擧グレバ左ノ如シ

(一) 三醫科大學ニ耳鼻咽喉科講座アリ皆正教授ヲ有シ且ツ試驗科目トス

(イ) 東京醫科大學耳鼻咽喉科

教授　醫學博士　岡田和一郎
講師　醫學博士　吉井丑三郎
助手　醫學士　田所喜久馬
同　醫學士　渡邊舒

(ロ) 京都醫科大學耳鼻咽喉科

教授　醫學博士　和辻春次
助手　醫學士　星野貞次

(ハ) 福岡醫科大學耳鼻咽喉科

教授　醫學博士　久保猪之吉(東大)
助手　醫學士　松井太郎

(二) 官立醫學專門學校ハ悉ク耳鼻咽喉科ノ教諭ヲ置キ學生ニ之ヲ教授セシム

(イ) 千葉醫學專門學校

主任教授　醫學士　大平直治(東大)

(ロ) 仙台醫學專門學校

主任教授　醫學士　和田徳次郎(東大)

(ハ) 岡山醫學專門學校

主任教授　醫學士　田中文男(京大)

(ニ) 長崎醫學專門學校

主任教授　醫學士　中村貞(京大)

(ホ) 金澤醫學專門學校

主任教授　醫學士　宮田篤郎(兼任外科)

(ヘ) 新潟醫學專門學校

主任教授　黑岩福三郎(京大)

(ト) 台灣總督府醫學校

主任教授　醫學士　細谷雄太(東大)

(三) 府縣立醫學專門學校モ亦タ多クハ斯科ヲ設ケタリ

(イ) 大阪高等醫學校

主任教授　醫學士　加藤亨(東大)
右留學中代理　醫學士　小山景治(東大)

(ロ) 京都醫學專門學校

主任教授　中村登(東大)

(ハ) 愛知醫學專門學校

主任教授　中村豐(東大)
右留學中代理　富田治郎(京大)

(ニ) 熊本醫學專門學校

主任教授　醫學士　赤松純一(東大)

(四) 陸海軍軍醫學校モ亦々專門教官ヲ置ケリ

(イ) 陸軍々醫學校

主任教官　二等軍醫正　醫學士　岩田一(東大)

(ロ) 海軍々醫學校

教官囑託　醫學博士　金杉英五郎
軍醫少監　醫學士　林舜(東大)

(五) 各知名ノ大病院ハ耳鼻咽喉科專門家ヲ聘シテ其診療所ヲ設ク

(イ) 東京日本赤十字社病院

主任醫長　ドクトル　山上榮輔(賀古)

(ロ) 順天堂病院

主任醫長　醫學士　千葉眞一(東大)

(ハ) 三井慈善病院

主任醫長　醫學博士　吉井丑三郎(東大)

(ニ) 東京市施療病院

囑託醫長　醫學博士　金杉英五郎
囑託醫長　醫學士　一太(金杉)

(ホ) 鐵道院常盤病院

囑託醫長　醫學博士　岸茂掃(岸)

(ヘ) 東京田代病院

主任醫長　ドクトル　笠部(岸)

(ト) 同生病院

主任醫長　中田弓吉(吉井)

(チ) 緒方病院

主任醫長　醫學博士　淺井健吉(東大)
主任醫長　醫學士　山本玄一(東大)

(リ) 大阪日本赤十字社病院
主任醫長　松本昇（京大）

(ヌ) 長野日本赤十字社病院
主任醫長　村山政之助（東大）

(ル) 和歌山日本赤十字社病院
主任醫長　醫學士　香曾我部壽（九大）

(オ) 朝鮮醫院
主任醫長　醫學士　阪井清（東大）

(ワ) 大連醫院
主任醫長　醫學士　外山理市（京大）

(カ) 其他各府縣公立病院等ハ多クハ主任醫長ヲ置ケドモ之ヲ略ス

(六) 耳鼻咽喉科專門病院ハ日ニ月ニ增加ノ傾キアリ今試ミニ東京ニ於ケル知名ノ者ヲ擧ゲレハ次ノ如シ

(イ) 東京耳鼻咽喉科醫院
院長　醫學博士　金杉英五郎

(ロ) 耳科院
院長　醫學士、陸軍々醫監　賀古鶴所

(ハ) 小此木耳科醫院
院長　ドクトル　小此木信六郎

(ニ) 根岸養生院
院長　醫學士　神尾友修（東大）

(ホ) 菊池耳鼻咽喉科醫院
院長　ドクトル　菊池循一（東大）

(ヘ) 木村耳鼻咽喉科醫院
院長　醫學士　木村彬（東大）

(ト) 寺田耳鼻咽喉科醫院
院長　醫學士　寺田豐作（東大）

(チ) 杉村耳鼻咽喉科醫院
院長　醫學士　杉村可宗（東大）

(リ) 柳田耳鼻咽喉科醫院
院長　醫學士　柳田義衛（東大）

(ヌ) 杉原耳鼻咽喉科醫院
院長　杉原正壽（東大）

(ル) 安井耳鼻咽喉科醫院
院長　安井祥四郎（東大）

(オ) 津田耳鼻咽喉科醫院
院長　津田修吉（東大）

(ワ) 岸耳鼻咽喉科醫院
院長　醫學博士　岸一太（金杉）

(カ) 佐藤耳鼻咽喉科醫院
院長　ドクトル　佐藤敏夫（金杉）

(ヨ) 西山耳鼻咽喉科醫院
院長　ドクトル　西山信光（金杉）

(タ) 佐藤耳鼻咽喉科醫院
院長　佐藤信郎（金杉）

(レ) 田中耳鼻咽喉科醫院
院長　ドクトル　田中達三郎（金杉）

(ソ) 葛目耳鼻咽喉科醫院
院長　葛目猪太郎（金杉）

(ツ) 川上耳鼻咽喉科醫院
院長　ドクトル　川上昌保

(ネ) 本田耳鼻咽喉科醫院
院長　ドクトル　本田雄五郎（東大）

(ナ) 坂口耳鼻咽喉科醫院
院長　坂口吉之進（東大）

其他尙ホ池谷盤吉（金杉）、原田貞夫（金杉）、原田正貞（東大）、仁志川淳一郎（東大）、和田昌訓（東大）、谷村彙一郎（東大）、塚原博次郎（東大）、中村致道（小此木）、長澤米藏（東大）、村松同次（東大）、黑澤源七（東大）、淀葉克義（金杉）、酒井醇（金杉）、橋田武（東大）、湯地貞醇（菊池）、宮地柳之助（東大）、神保宰（東大）、鈴木重治（金杉）等諸氏何レモ專門ヲ以テ開業セリ。

依是觀之ハ京ニ於テ斯科專門家ノ增加ハ實ニ驚クベキ程度ニ達シ今ヤ殆ンド多キニ失スルノ憂ナキニアラズト雖モ然レドモ是レ斯科勃興ノ一現象ニ過ギズト信ジ余ハ寧ロ之ヲ喜ブモノナリ、斯クテ專門家ハ互ニ自ラ戒メテ自家ノ責任ヲ明ニシテ學術ノ進歩ヲ自然良好ノ影響ヲ蒙ラン余ハ寧ロ之ヲ喜ブモノナリ

今マ現ニ耳鼻咽喉科專門家トシテ世ニ開業セル者已ニ四百人餘ニ達シ居ルコト事實ナラント信ズレ共余ノ關係セル大日本耳鼻咽喉科會會員名簿ノ上ニテ余ガ專門家ト認メタル者ノミヲ擧ゲテ府縣別ヲナセバ次ノ如シ

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 東京府下 | 六十二人 | 京都府下 | 十五人 | 大阪府下 | 二十三人 |
| 神奈川縣 | 六人 | 兵庫縣 | 十五人 | 新潟縣 | 七人 |
| 長崎縣 | 四人 | 福岡縣 | 三十二人 | 熊本縣 | 八人 |
| 佐賀縣 | 六人 | 鹿兒島縣 | 四人 | 大分縣 | 二人 |
| 山口縣 | 四人 | 廣島縣 | 十八人 | 岡山縣 | 四人 |
| 鳥取縣 | 二人 | 島根縣 | 二人 | 愛媛縣 | 十人 |
| 香川縣 | 二人 | 高知縣 | 二人 | 徳島縣 | 二人 |
| 奈良縣 | 一人 | 滋賀縣 | 二人 | 福井縣 | 三人 |
| 石川縣 | 五人 | 宮山縣 | 四人 | 埼玉縣 | 三人 |
| 群馬縣 | 三人 | 栃木縣 | 三人 | 茨城縣 | 一人 |
| 千葉縣 | 五人 | 宮城縣 | 七人 | 岩手縣 | 二人 |

| | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| 秋田縣 | 二人 | 愛知縣 | 十人 | 三重縣 | 二人 |
| 和歌山縣 | 六人 | 岐阜縣 | 二人 | 靜岡縣 | 四人 |
| 北海道 | 三人 | 臺灣 | 三人 | 朝鮮 | 六人 |

これに依つてみるも明かな通り、先生の歸朝開講以來僅々十二三年間に於て我が耳鼻咽喉科學は三醫科大學を初め、各官公立醫學專門學校に普及發達し、各病院また之を迎へて長足の發展を遂げ、明治の末には、斯科專門を標榜して世に立てるもの四百有餘名を算するの隆盛を致したのであつた。

かうして、こゝに圖らずも、明治時代に於ける先生の業績並に斯學の發達狀況を集約することゝなつたから、借せてこゝに、その源泉地ともいふべき大學に於ける先生の教室、醫局の歷史の一班をも既住に遡つて展望してみよう。

それに就ては、幸にも廣瀨涉氏の「三十年前の東大醫局素描—耳鼻咽喉科の卷」(昭和十二年四月醫界展望第一一一—一二一號)があるから、重複を厭はずそれをこゝに再錄しておくことにする。

## 三十年前の東大醫局素描

### ——耳鼻咽喉科の卷——

美美華閑人

### 本邦耳鼻咽喉科の歷史

抑も我が邦耳鼻咽喉科發達の歷史を繙いてみると、東京帝國大學に耳鼻咽喉科が開設されたのはその第二期に在る。卽ち之に先立つて第一期は民間及び軍陣醫學の方面に專門開設の曙光を認めるのである。申す迄もなく本邦耳鼻咽喉科の開祖としては賀古、金杉の兩氏を擧げねばならぬ。兩氏は明治二十一年同船で渡歐した。しかし賀古鶴所氏は軍醫で現職のまゝ山縣元帥に隨行したのであるから其年に歸朝し、陸軍々醫學校に耳鼻科を敎授し、傍ら日本赤十字社病院に耳鼻科の診療を開始したのである、實に日本に於ける專門の講義及び診療を行つた最初の人であつた。之に遲れて金杉英五郎氏は明治二十五年に歸朝して居る。そして金杉氏は耳科と鼻咽喉科とを合同し始めて耳鼻咽喉科なる名稱を設け、高木兼寬氏と握手して東京病院內に耳鼻咽喉科を設けたのであるから、此專門の名附けの親といふて良い。兎に角此の二人の專門家は又殆んど相前後して市內に開業した。卽ち賀古氏は神田小川町に金杉氏は日本橋濱町に互に門戶を開いたのである。申す迄もなく本邦耳鼻咽喉科の開祖としては賀古、金杉の兩氏を擧げねばならぬ。兩氏は明治二十一年同船で渡歐した。しかし賀古鶴所氏は軍醫で現職のまゝ山縣元帥に隨行したのであるから其年に歸朝し、陸軍々醫學校に耳鼻科を敎授し、傍ら日本赤十字社病院に耳鼻科の診療を開始したのである、實に日本に於ける專門の講義及び診療を行つた最初の人であつた。之に遲れて金杉英五郎氏は明治二十五年に歸朝して居る。そして金杉氏は耳科と鼻咽喉科とを合同し始めて耳鼻咽喉科なる名稱を設け、高木兼寬氏と握手して東京病院內に耳鼻咽喉科を設けたのであるから、此專門の名附けの親といふて良い。兎に角此の二人の專門家は又殆んど相前後して市內に開業した。卽ち賀古氏は神田小川町に金杉氏は日本橋濱町に互に門戶を開いたのである。筆者も子供心に「みゝ醫者賀古つるどころ」といふ名刺を親父から見せられたことも覺えて居るし、金杉氏が日本橋から駿河臺へ移轉した跡へ入澤先生が引き越されたことも漠々ながら覺えて居る。なほ玆に特筆すべきことは、金杉氏は明治二十六年十一月に專門の機關雜誌を發行し、同廿九年十月から慈惠醫院に於て耳鼻咽喉科講習會を開き、東京耳鼻咽喉科會を作り、今日の大日本耳鼻咽喉科會の下ごしらへをして斯道が學問的にも認められる途を拓かれたことである。

### 東都に於ける三羽烏

以上二人の他にもう一人我邦の耳鼻咽喉科界に異彩を放つた人物がある。それは小此木信六郎氏で同氏は明治十九年から獨逸に留學し、向ふで醫者になつて明治二十九年に耳鼻咽喉の專門を修得して歸朝開業し、傍ら當時有名であつた濟生學舍で講義を始められたのであるから、賀古金杉氏よりはおくれて門戶を開いたけれど、繁昌振は何れも劣らず大に隆盛を極め、東都に於ける三羽烏として其名を謳はれたのである。故に東京帝國大學の醫學部に耳鼻咽喉科が開設されたのはそれ等のライツによる反應現象と見ても差支ない。又岡田敎授も佐藤外科で幾年間も萬年助手を勤めて居た間に耳鼻咽喉科方面に趣味を持ち、外科醫として耳鼻咽喉科的の患者を取扱かつて居られたから、明治二十八年東京帝國大學に耳鼻咽喉科設置の件が決定した時玆に其人選に當り、佐藤先生の推薦によつて斯科を開拓する運命を獲られたのである。

### 外來診察の開始

斯くの如く官學に於て耳鼻咽喉科の開設せられたのは聊か立ちおくれの氣味は有つたが、明治三十二年十二月に岡田和一郎氏が歸朝したら矢も楯もたまらず、翌明治三十三年一月十九日に其頃丁度空家に成つたスクリバ先生の住居に宛てられた外國敎師館の建物を利用して兎に角外來診察を開始したのであつた。此建物は今日は取毀されて跡形もないが大正初年頃までの角帽連は御存じの筈である。所在地は現在の物療內科敎室の所で、筆者が學生時代には確か皮膚科の外來が有つて、土肥先生がポリクリをやられたやうに覺えて居る。

以上の次第であるから其の當時の敎室員としては其前年の暮に卒業した新學士は誰も入局するものがなかつた。然し玆に先見の明ある菊池循一氏は早速驅けつけて助手となり岡田助敎授を助け荊棘の道を開いたのである。故に菊池氏は今日猶ほ市井に在り岡田門下の第一人者として敬意を表せられるのも敢て偶然でない。此のほか當時介補として大谷則知氏の名が記されて居るが、今日其消息を知り得ないのは遺憾千萬である。そして外來は月水金に岡田助敎授が新來を診察し火木土に助手が再來を受持つた記錄がある。斯くして三ヶ月の後、同年三月敎室は初めて耳鼻咽喉科の發祥の地である時計臺に移され、此時に佐藤啓助、安井詳四郎の兩氏を迎へて陣容を整へ、學生に向つて外來クリニックを開始し、六月十八日から十五人の患者を收容することを許され、やつと開設以來約六ヶ月を以て敎室完成工作

が出來上つたのである。玆に云ふ安井祥四郎君は今日なほ日本橋に開業して盛名あり。花柳界藝人界には極めて信用厚く、先年かの有名なる澤田正二郎に引導を渡されたので猶ほ世人の記憶に殘つて居る筈である。

## 記憶すべき明治三十三年

斯くの如く**明治三十三年**は耳鼻咽喉科醫局の開設には忘るべからざる一年で、當時の岡田助教授は此の年醫學博士の學位を獲られたとは雖も市井に賀古、金杉、小池木の三先輩が堂々たる門戸を張つて居られるのに對抗して大學に在つては未だ同系の醫局員を得る能はず、孤軍奮鬪克く東大耳鼻の名を確立するに力められたのであつた。

**明治三十四年**には學士として小池作三、久保猪之吉、淺井健吉の三氏が入局し、介補には中村平輔氏が採用されてたやうな記錄が殘つて居る。しかしまだ之より慥かなのは此處に示した古い寫眞で、實に之は當時の醫局の全貌を物語るのである。この寫眞は東大醫局から借用した貴重なもので岡田、久保の兩名譽教授にお說明を伺つたら、これは明治三十四年の謝恩會の時の撮影であるとの事であつて、書類によるものより更に確實であらう。其氏名を錄してみると前列の中央に和服委の岡田助教授を挾み、其の右に小池作三、久保猪之吉、長野逸、左に川北辰吉、鶴田文、久保壽護の諸氏あり。後列は左から安井祥四郎、大谷則知、淺井健吉、齋藤清、杉原正壽、白木某及び逸名氏の七人がある。故に明治三十三年教室開設以來此當時までの異動を考察すると菊池循一及び中村平輔兩氏の顏が畫面に見えないのは菊池氏は渡歐し、中村氏は鄕里に歸り業を開かれたのに因るのであらう。そして其他の新顏の中には當時傍觀生として醫局に出入することを許されて後に介補に採用せられた方もある。仍て當時の先輩の其後の動靜を窺つてみると、大凡次の通りである。

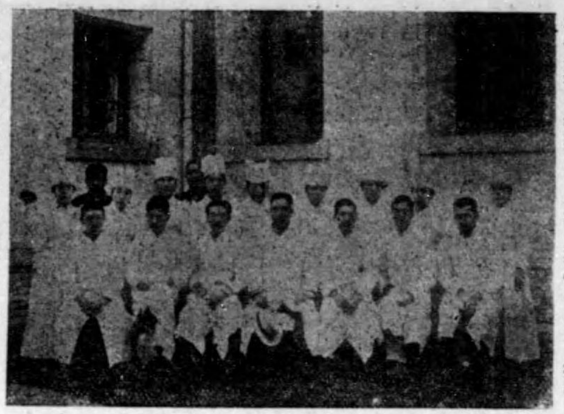
小池作三氏は明治二十五年の卒業生で當時の老書生らしかつたが、今日はその消息を知らず。久保猪之吉氏は玆に紹介するまでもない九州醫科大學の耳鼻咽喉科の開祖で、

後列（右より）逸名氏、白木某、杉原正壽、齋藤清、淺井健吉、大谷則知、安井祥四郎

前列（右より）長野逸、久保猪之吉、小池作三、岡田助教授、川北辰吉、鶴田文、久保壽護

明治三十四年（寫）

先年停年に達し功成り名遂げて職を後進に讓り目下東京に居を移し聖路加國際病院の顧問となり、月刊雜誌耳鼻咽喉科及び日本耳鼻咽喉科學全書を編纂して生涯を斯學のために捧げんとせられるのである。又淺井健吉氏は其の翌年京都帝國大學の講師として赴任し、玆に耳鼻咽喉科の開祖として大に盡されたが、明治三十八年和辻春次博士が歸朝して教授となりて就任せらるゝや席を讓つて大阪に業を開き先輩堀内謙吉氏と並びて覇を成し、今日猶讀書を廢せず學會の席上鰐々の追加討論や嶄新なる質問を發し少壯學者をして瞠着たらしむるの概あり、一言居士の本色を發揮し意氣益々盛んである。中村平輔氏は鄕里薩南鹿兒島に歸り、今日該地醫師會の重鎭として醫政に携はるの傍ササトリウムを開設して斯界に活躍せられつゝあり。



明治三十五年の醫局。（前列右より）飯田新、山本玄一、河野司馬造、岡田和一郎、淺井健吉、久保猪之吉、淺川健三

## 芽出度い年

**明治三十五年**は岡田博士が正教授に任命せられた目出度い年で、醫局には久保、淺井兩學士が助手として居殘り、山本玄一、河野司馬造の兩學士が副手として入局し、介補に平岡確一、川北辰吉の兩氏を採用した。其當時の寫眞を玆に揭げるが、此の寫眞は醫局員のみで撮つたものらしく前列の右端に飯田新氏、左端に淺川健三氏の顏が見える飯田新氏は間もなく豐橋に歸つて開業し、淺川氏は其翌年介補に採用せられて居る。

## 機關雜誌の移管

此年淺井健吉氏去つて京都に赴き、久保氏は獨り留まつて七月大日本耳鼻咽喉科會々報を大學に引受けることに成つたが、その經緯について見るに、金杉氏は斯くの如く帝大に於て研究機關の完備せる機會に際し學問上の主權は之を市井開業醫の隗齋すべきものにあらずとなし、明治三十年以來斡旋した大日本耳鼻咽喉科會の會頭を岡田教授に讓り、其機關雜誌の編纂發行を東大耳鼻の教室に一任せられたのであつた。普通の人ならたとひ會務を大學に一任しても從來自分が開拓した地盤にみれんを殘すべき筈であるのに金杉氏はポンと之を投出して聊かも干涉がましい事をせず、引き受けた人が働き易いやうにした所に金杉氏のえらい所があり、今日醫界に覇を作したのも全く此意氣が有つたからであるし、ポンと投出した大事業を一人で

背負つて立ち未だ經驗のない仕事を見事に繼承した久保氏の手腕も亦えらい。實に今日久保氏が業界文筆の王座を占め、その大をなした根柢は此所に在つたのであらう。

扨て此年入門せられた山本學士は後に大阪緒方病院に耳鼻咽喉科を開設し、今日は御影に開業して居られるし、河野司馬造氏は鶴岡に立派な門戸を張られた。

**明治三十六年**は醫局には小池重、吉井丑三郎、岩田一の三學士を迎へ、介補にも淺川健三、寒水守人、杉原正壽、齋藤傳六、久保壽護の諸氏が入つた。小池重氏は當時木村姓を名乘つて居られたが、後に小池と改め杏雲堂に入つて耳鼻と上氣道科を兼ねた一科を設けて呼吸器病科を起こし、現在は曼洞と號し醫科出身の漢詩人としても英名あり各種の會合には必ず氏の玲瓏玉の如き朗吟を拜聽するのである。吉井丑三郎氏の名は恐らく耳鼻咽喉科界に於ては誰一人知らぬものないであらう。氏は三年の醫局生活を終へ明治三十九年私費を以て留學しバーゼルに於てジーベンマン教授に就て研究、ナーゲルと共に所謂生體固定法を創案し迷路の組織學に關する新知見を發表し世界的に其名を知られ、明治四十二年歸朝して三井慈善病院耳鼻科長となり、大正三年七月助教授に任ぜられ、大正十三年七月教授に昇格せられて後辭して小石川に業を開き大に門戸を張られたのであつたが、昭和三年三月五十二歳膀胱癌にて逝去せられたのは惜しみて餘ありといふべきである。若し氏をして今日まで健在ならしむれば東大の重鎭として迷路に關する幾多の業績が出たことゝ思はれる。實に現慶應大學教授西端驥一博士や、現昭和醫專教授山本常市博士などは同氏の門より出でたのである。岩田一氏は軍籍に在りし關係上醫局生活は極めて短日月であつたけれど、耳の解剖に造詣あり。殊に鼓膜の外傷を研究して軍陣醫學に資したる所少なくない、後陸軍軍醫學校教授に任ぜられ、軍醫總監の榮職に就かれしも遂に上顎癌の犯す所となり天壽を終られたのは惜しみても餘りがある。此年菊池偕一氏は歸朝日本橋に業を開き本邦典型的の開業醫として成功せられ畏れ多くも宮中の御寵愛を忝うせらるゝは同業者一同羨望の極みである。又現在京城で開業せられる阪井清氏も當時軍醫として野津大將の眷顧を蒙り、大將の紹介で醫局に入り後京城醫學專門學校に赴任せられたのである。

### 明治三十六年の謝恩會

此の三十六年の寫眞も亦思ひ出が深い（寫眞參看）氏名の判つたの丈けを紹介すると、前列右から安井祥四郎氏、大谷則知氏、寒水守人氏（鄕里佐賀に開業）久保猛之吉氏、岡田和一郎氏、岩田一氏、飯田新氏、長野榮二氏、中列右から本田雄五郎氏、田島藤太郎氏、逸名、杉原正壽氏、齋藤清氏、二人逸名、藤陵成章氏、吉岡猛氏、（佐賀にて開業）、後列は右より二人逸名、三人目白木某氏（淺草に開業）又二人逸名左端淺川健三氏である。

この内で先に紹介した以外で筆者の記憶に殘つて居る方々の消息を尋ねてみると、本田雄五郎氏は現在京橋銀座に堂々と開業し東京府醫師會の重鎭とし、且つ昨年から活動を始めた京濱耳鼻咽喉科醫會の理事として岡田會長を輔佐し、之を全日本的に擴張し我が專門の氣勢を揚ぐべく大に活動して居られる、某日同氏に此寫眞を示したら無邪童顏の壯年時代を追憶して大に喜ばれた。其左隣の田島藤太郎氏は横濱の十全醫院から見學生として派遣せられ其年同院に耳鼻科を開き當時横濱市に於て金杉門下として門戸を張れる日渡盛能氏と相提携し、横濱市の耳鼻咽喉科界に貢獻せられし士なり、今は亡し。杉原正壽氏は目下健在麻布に開業せらる。藤陵成章氏も亦健在品川に開業門前市をなしつゝあり。長野榮三氏は字都宮に開業して成功せられた。其他の諸氏については筆者之を詳にせず、願はくは御健在御繁榮を祈る。猶は其消息あらば補遺として之を記さん。

明治三十六年　謝恩會　（於上野精養軒）

### ガルシアの百回誕辰と喉頭鏡の祭

**明治三十七年**は耳鼻咽喉科が社會的に活躍した年であつた。醫局には寺田豐作、加藤亨、田屋昌三郎の三學士、横井良次、中村豐、加納景成の三氏を加へた。此年は實に喉頭鏡發明者ガルシアの百歳と喉頭鏡發明五十年に當り、耳鼻咽喉科としては默々として看過し得ざるの時であつた。故に岡田教授は自ら東奔西走淺にガルシア百歳祝賀喉頭鏡發明五十年祭を十一月二十七日上野精養軒に開き、朝野の名士を集めて盛宴を張つた。實に　皇后陛下から金壹百圓の御下賜の金があつたのも決して偶然でない。扨て寺田學士は恐らく醫局出身者で東京市内に業を開いた第一人者であらう。赤坂見附外に堂々たる病院を建設したが、開業後間もなく夭折せられたのは痛惜の極である。加藤亨氏は大阪醫科大學の前身たる府立高等醫學校の教授として玆に新門戸を開き、猶口話法を以てする聾教育に半生を捧げられたが、昭和十一年十二月二十日狹心症を以て長逝せられたのは誠に哀悼の極である。この加藤氏餘技としての義太夫は全國的に有名で、先年文樂一座の弦を携へ東京歌舞伎座の舞臺に上られたのは北邙の土未だ乾き終らぬ昨今忘れ難い追憶である。田屋氏も早く鄕里大阪に歸りて業を開き加藤氏と共に太棹をたしなみ有名な呂昇は田屋氏を顧問として發聲の研究をなし、業界にかの大をなしたと云はれる程で、本邦に於ける隱れたる音聲學の先覺者である。次に此の年の見逃すべからざることは中村豐氏の愛知醫專赴任である。此頃

は耳鼻咽喉科が漸く世に認められ、市井で專門を標榜すれば直に門前市をなす故に各地の醫學專門學校や官公立病院で爭つて斯科を開設するやうになり、人物を要する事頻りであつたので、介補の秀才中村豐氏は入局の翌年匆々にして聘せられてその主任となつたのである。

**明治三十八年**の醫局には近藤千代吉、木村彬、杉村可宗、野原又三の四學士が入り、京都帝大では和辻春次氏が歸朝して學位を得、教授として耳鼻咽喉科を開講せられたから、耳鼻咽喉科は東西對立の有樣となつて益々隆盛となつた。從つて東大醫局の勤勉振りも亦著しきものあり、大に門戸を開放して大學卒業以外の横井良次、森川恭太郎、小林鐵五郎氏等を介補に採用したのである。

### 醫局の膨張

**明治三十九年**日露戰爭勝利の跡をうけ醫局は益々躍進した。此年は千葉眞一學士の他長沼安弘、賀來益友、櫻井十郎氏等が加はり、**明治四十年**には梶原龍彦、榊田義衞、大平直治の三學士と、介補に津田終吉、小野寺文吾、吉田忠、和田昌調、谷村銀一郎氏等の名が加はつた。此中で千葉眞一氏は驥足中の逸足で後に記す如く寺田豐作氏と共にパラフィン隆鼻術を創案し、後渡歐して學位を得て順天堂に入り、順天堂の外來を倍加した程の敏腕家であつて、病院の歸路を擁してまで面接を乞はるゝの餘り、妻門から輓俥にかくれて退出したといふ逸話を殘した程の手腕の持主であつた。今日では東都に於ける斯界の重鎭で東京に開かれる耳鼻咽喉科の學會では千葉先生の出陣ない限り來賓を遇する事が出來ないと云はれる程の辣腕家である、又同氏が幼き時より濱町河岸の眞サヤンとして、鍛へ上げた水府流の奥技は先年神宮プールに於て模範泳法として顯はれ衆人の拍手喝采を博したのは改めて紹介するに及ばぬが、それ故水泳と耳疾に關する研究に造詣の深いのも亦當然であらう、斯くの如く氏の水泳術に因つて得た日本繕神は遠くストラースブルグにまで傳はり氏が留學中の逸次に當時の獨墨國境線を散歩しながら吹奏した竹笛は稅關吏をして啞然たらしめたといふ話事もある、又津田終吉氏は帝大出身ではないが東京に於ける屈指の流行兒で、近く山村會長の跡を襲ひ日本橋區醫師會の長に推されるといふ噂の持主であつて、餘技としての美聲は亦吾人をして淘然たらしむるものあり、先に紹介した田屋氏を隱れたる音聲學者とすれば更に氏は隱れたる實演者であらう。大平直治氏は千葉醫學專門學校の教授に任命されたが、生來蒲柳の質で早世せられたのは惜しむのに餘りがある。

此の年の出來事として特に記すべき事は、久保博士が歐洲で第十五回の萬國醫學會や第二回ドイツ耳科學會總會に出演し「日本 Ino Kubo」の名を博して歸朝し福岡醫科大學の教授となられたことで、之で日本の三帝國大學に各々耳鼻咽喉科教室が出來上つたのである。此頃佐藤信郎氏も亦金杉博士の諒解の下に東大醫局に出入し熱心に實地の研究を進められた、其精勵が遂に令嗣同苗重一氏の惠惠醫大教授として報いられたのも偶然でなからう。

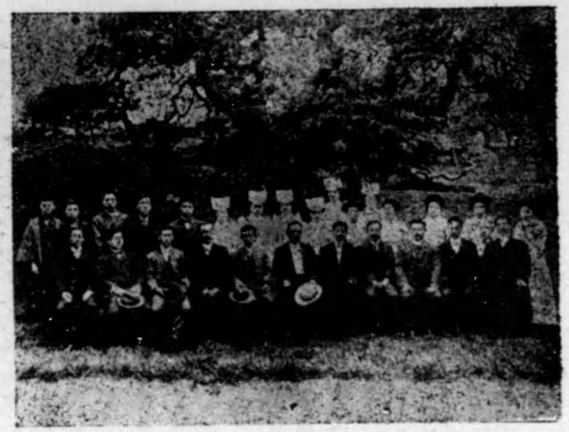
### 其頃の新聞種

以上が醫學史に顯はれた耳鼻咽喉科醫局創設時代の梗概であるが、新聞種になつて當時耳鼻咽喉科の名を廣めたのは外山文部大臣の耳性腦膿瘍事件と、パラフィン隆鼻術問題であらう。外山文部大臣が急性中耳炎から乳嚢突起炎を起し、遂に腦膿瘍に罹られたのを岡田教授が手術して不幸の轉歸を取つた丈けのことである。耳性腦膿瘍は岡田教授の最も得意とする所、ドイツ留學中其論文が幾多の雜誌社から引つ張り凧になり、遂に一千マルクで買ひ上げられたといふ程有名であるから、この不幸な轉歸は技術上から見て止むを得ないのであるが、何しろ相手は時の文相であるから世間がウルサク、岡田教授がそれに對して記述した申開きの文章に不穩の字句があつたとかどうとか云ふので、肝腎な文相の問題が脇線して、今で云ふと教授の思想問題でもあるかのやうな風に轉換し、日刊新聞からエラク攻擊されたやうに聞き及んだ。筆者はその實相は良く知らないが、此頃は大學教授のことが屢々新聞種となつた、斯の木下教授のガーゼ事件も其一例である。然し之が皆大學をバツタにしたから有利に轉換したのであらう。

話は横道に外れたが、その次に日刊新聞を賑やかしたのはパラフィン隆鼻術である。その隆鼻術は醫局の寺田豐作氏と千葉眞一氏とが互にプリオリテートを爭つたのを日刊新聞記者が聞き込んで、銘々の肩を持ち、提灯記事を揭げて物にしやうとしたのらしい。そのため隆鼻術を希望する患者が大學へ詰めかけて外來を賑はしたといふ話も聞いた。それより更らに日刊新聞を介して問題を起したのは當時の久保九大教授が上京の砌、下甲介の手術の際 Po.topeative Sinknase を起すことを警告するために、或る新聞の記者に話した事が誤り傳へられて「鼻は切るべからず」といふ標題で揭載せられたので、東京市内の專門家が大學教授たるものが斯かる失言をするのはケシカランとイキリ立つて一騒動持ち上らうとした、蓋し其頃は鼻性神經症といふ事が過信され鼻さへ切れば頭が良くなるかの樣に云ひふらされ我も我もと鼻の手術を受ける弊害に對し大學教授としては一場の警告をなすのは當然の事であらう、それをジヤアナリズムの種としたので飛んだ喜悲劇が持ち上つたのである。兎にも角にも三十年以上前の耳鼻咽喉科界の消息は斯の通りのものであつた。

### 四人組の醫局入

**明治四十一年**の一月に入局したのは四人ある、即ち赤松純一、和田德次郎、細谷雄太、廣瀨涉の所謂四人組である。その連中が入局當時岡田教授から受けた訓戒は次の樣であつた。即ち此頃は耳鼻咽喉科が俄然勃興した時代であるから患者の數は極めて多く、耳鼻咽喉科の看板さへ揭げれば門前市をなすといふので、所謂見學生として教室に出入するものが多く、其中には未熟の技術を以て患者にも接するものがあり、從つて自然患者を粗末に扱ふ弊害も有るから、先づアマリ多くの患者を扱ふな、患者を丁寧に診るべしといふのであつた。然し何といふても外來患者が一日に三百人も押しかけるのであるから、耳鼻科の廊下は人の波を押し分けねば通行が成らぬ位で、鼻の患者は所謂「三本療法」で五%のコカイン五千倍のアドレナリン、五%のプロタルゴールを鼻に塗られ、耳の患者はオキシフルで拭いて乾燥



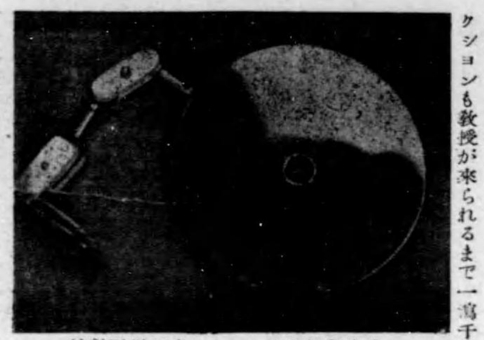
千葉眞一氏送別紀念
（御殿山にて明治四十一年寫）
後列（右より）看護婦等十一名、志波器械工加藤鍬作、吉馴軍醫、木村書記、逸名（使丁）
前列（右より）和田德次郎、廣濱涉、赤松純一、大平直治、千葉眞一、岡田教授、木村彬、志賀新、榊田義衞、細谷雄太、野田泰

ガーゼを込められ、咽の患者はプロタルゴールかクロールチンクの塗布又は注入をして歸され、手術は多く外來で行ひ扁桃腺切除下甲介切除などを受けたものは廊下の隅に在る板張りの腰かけに休息して歸宅させられたものであるから、當直は後出血で惱まされ、入局第一に教へられたのはペロツクのタンポンで今から考へるとゾーとする。それでも患者は滿足して半日位待たされ、此の迅速診察を受けて歸つた。その内少し手重いのはセレクションで教授の診察を受けるの光榮を有し、學生の前で教材となりつゝ治療を加へられ、或は午後廻しとなつて手術を受け或は收容せられて入院の恩典に浴したものであつた。

## 其頃の外來風景

斯の如き有樣で之丈けの患者の處理はどこで出來たかといふことを說明するに先立ち當時の教室の配置を一寸話す必要がある。時計臺の建物は現在は赤門入つた右側にその面影を存して居るが、今日と異なつた點は屋上に當時物珍らしかつた大時計が四面に取つけられたのであつた、元々此建物は醫科大學の本部に宛てられたのであるから、玄關は堂々たるもので露臺が有り之を入ると突き拔けの廊下で、その右側が耳鼻科の外來診察室、廊下の中央に十字形の廊下が有り右へ昇れば耳鼻科の病室、左へ昇れば眼科の外來であつた。それ故眼科といひ耳鼻科といひ何れも外來患者の多い科であるから、時計臺の廊下と來たら押すな〳〵の人の山であつたことは想像に餘りがある。

耳鼻科では此頃暗室を盛に利用した、といふのは當時の照明法が今日のやうに充分でなく、所謂マントル附の瓦斯燈が一番明るい照明裝置であつたから勢ひ精細な檢査は暗室でなければ出來ない。その暗室は階下で外來診察室と橋廊下を隔てた一室であつて、ここは黑いカーテンで窓を覆ひ暗室とし、外來の小手術は皆此處で行つたのである。其頃の外來診察場の風景を畫いてみると外來診察室の中央には大きなテーブルが一臺あり之に藥瓶架もあれば消毒器も載せて有る、ジュフイベルも其机に座る、看護婦も立つ、云はゞ一の圓卓會議とでも云ふ有樣で、教授はテーブルの一端卽ち鐵門に向つて左側に座り、患者は之と對座する、學生は其周圍を取り卷いて立つ。其他の外來患者は室の中の隨所に椅子を置いて診て貰ふのであつた。然し教授が外來ッリニックを始められるのは大概午前十一時頃であるから、再來も新來のセレクションも教授が來られるまで一寸千里でガチヤ！〳〵と片附けて仕舞はねばならぬ、其の多忙な事は恰も戰爭のやうで、小使は木製の外來札を一握にして患者の名前を呼び其呼んだ丈けの札をテーブルの上に並べ、呼ばれた順に並ぶ、若し呼ばれた時に居ない患者はヶミツトされて一番後廻しとなるか或は札を取り上げられて受診權を沒收される、斯かる取扱ひを受けても每日三百近い患者が集まるのであるから若し手加減をしないとすぐ殖える、それ故其内から本當の病人らしい患者が再來患者として殘された譯である。



先生製用のフレンルシ式口保反射鏡

## その頃の岡田先生

其頃の岡田先生は元氣潑剌であつた、二人曳の俥で勢よく玄關へ横着けになるとすぐ外來に出られ、小使は先生のカバンの中から反射鏡を出す、その反射鏡は口保式のもので――助手も皆同樣で有つたが――特に先生のは口にくわへる箇所が齒痕で凹んで居る、それを左側の齒列でくわへて診察を始められる、特に勇敢に見受けられたのは若い助手連中が逃げ廻る喉頭結核の患者でもマスクを掛けず反射鏡を口にくわへたまゝ應對せられるのであつて曰く「ワシには結核はタカラン」と平氣で取扱はれたが今日七十四歳にして猶矍鑠たる事は實にその體勞がB菌を征服し了たのであらう。斯くの如き勢であるから實に耳鼻咽喉科の外來は豪勢のもであつた。猶特に此時代を追憶せしめるのは、所謂耳鼻科の消毒釜である。病室の手術場にはシルコールランプで湯を沸し、診察器械を之で煮沸消毒したのであつて、患者が多く器械が澤山たまると湯の煮立つのが間に合はず時としてメルブツシの煮沸消毒器が有つたけれど、外來では其釜たるや徑三寸五分か四寸位の圓壔で高さ七―八寸中に之に相當する金網がありアは少し溫まつた位の器械を出して使つたことも有つたけれども、それで大した間違もなかつたらしい、今日から考へると隔世の感がある。

## 時計臺の二階

病室は階上に在つた。二階の東側が教授室、その隣に一人室が二つ、それで東側は一杯、夫は北側へ行つて六人位收容出來る男女室が

二つ、其隣りが醫局、醫局の中は衝立で仕切られ入口の方には執務テーブル一臺、其奥に宿直用のベット二臺、醫局から廊下を隔てゝ南側に看護婦室が有りこれを拔けると玄關上の露臺に出られる。其東隣が準備室で之に隣つて手術場が有つた。此の二階の西半分は眼科の外來で、耳鼻科の看護婦室と眼科の外來の間に細い通路が有つて此處から時計臺へ昇る階段が有り、此通路は一週間に一度時計屋がネヂを廻しに來る時に限つて開かれたのである、然し此通路には中々面白い話が有つたけれどそれは追つてお話をすることにする。

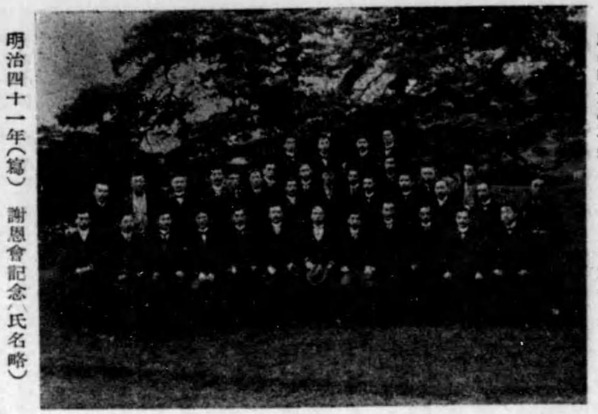
其頃の教授室は實にお氣の毒なものであつた、室の大さは二間に三間位と覺えて居るが、そこに先生のデスクと事務机が有り教室の總ての圖書標本も同居して居た、つまり圖書室といふものが無いのであるから本が見度ければ教授室で讀むか醫局の片隅で見る位であつた。病室の一人室も同じ大きさで二つあり、力士の八角が食道癌で狹窄を起して入院しそれが大動脈に破れて大喀血を起して頓死したのも其室であつた。又男の合部屋には教室開設以來標本的患者として病室の主となり、出血で當直の夢を破つた鼻咽腔纖維腫の患者が居たのも時計臺退想の種である。其頃の先輩教室員は四―五人あつた。大先輩は木村彬氏で榊田義衛氏と大平直治君が東大出身、其他に津田終吉氏や仁志川淳一郎氏などが介補として醫局に居られ、千葉眞一氏は醫局を辭して順天堂に勤務するので殆んど醫局では仕事をして居られなかつた。そこへ四十年組の四人が入局したので、俄然醫局員は倍加し二階の醫局が狹隘を來したので介補組は階下の外來診察場の隣りの小さな室に引き移つたのであつた。

## 鼻耳征伐

此頃多くやつた手術は下甲介切除と鼻茸征伐で、下甲介の手術は從來切り過ぎるといふ弊風が有つたから教授から餘計切つてはならぬと堅く戒められた。鼻茸の患者は非常に多かつた、今日は耳鼻咽喉科專門醫が澤山出來たので大學のクリニックでは鼻茸の材料にも困るといふ位に減少したが、其頃鼻閉塞を訴へる患者の多數はこの鼻茸で、征伐といふ字句を使つても決して不當でない、入局早々先づ許されるのは此鼻茸狩であつた。扁桃腺切除アデノトミーは無論やつたが、アデノイドにはベックマンの輪狀刀ばかりを使つた。此頃鼻中隔のクリスタやスピーナはドツペルマイセルで噛り取つて居た、そして彎曲症の粘膜下切除術を榊田氏が試みたので一寸感情の行違が生じ榊田氏がフクレて醫局を辭し米國へ渡つたのも當時の出來事である。下甲介の電氣燒灼も盛分やつた、それやこれやで二次的に鼻内癒着症を起し隨分非難を作つたものである。耳の手術は岡田教授が最も得意とせられたのであるから、教室員はよく要領を呑み込んだがエンピエームの手術は稍々京都系に鼻を明かされた態であつた。即ち當時はデンケルと別途に京大の和辻春次教授が上顎竇蓄膿症の犬齒窩手術を創案せられた直後であつたから東大教室で立ち後れ氣味になつたのは止むを得ない。即ち初めは手術を全身麻醉で行ひ犬齒窩の創孔から鋭匙で内部を掻爬してガーゼを込めるやうなやり方をして居たから其のため出血は劇しく手術の中途で何度も麻醉を追加したり可なり時間も要した。

## 備中の歌

此の頃大學卒業のものは無條件で醫局に入る事が出來たが、他校の出身者は教授の許可を得て介補に採用して貰ふのであるが、それも伸々骨が折れた。故に耳鼻科を習はうとすると所謂「傍觀生」といふ資格で見學させて貰ふのであつたが、其希望者も亦頗る多く、中にはヒヤカシ半分で來るものもあり、其れ等の選擇は一方ならぬ骨折りであつて、教授はこれに對し希望者は必ず大日本耳鼻咽喉科會の會員にならなければ許さない事に定められ、助手連中はその交渉の任に當るのであつた之が伸々面倒な仕事で、一寸教室に顔を出して鼻に藥位塗るのを覺へると何時の間にか來なくなつてそれで堂々と專門の標札を出して患者吸收の手段にしたのもあつたらしい、然しそれ等も耳鼻咽喉科の發展策として默認した教授の度量は廣いものであつた、又それ等の人から紹介して來るのもあつたから、結果に於ては斯科のために却て良かつたのであらう。左樣な次第で岡田教授を慕つて來る信者は盛分澤山あり、從つて當時の謝恩會は頗る盛大であつた。丁度玆に明治四十一年の謝恩會の寫眞が有るからお目に掛けるが、當時は謝恩會の日には必ず醫局に集まり大學構内で記念撮影をして會場に向ふのが例であつたが、先生は洋食より日本料理を愛され、お酒はあまり召し上がらなかつたけれど藝術がお好きで、義太夫常盤津長唄淸元何んでも御座れで歡迎され趣味も從つて豐富であつた。宴會ではいつも「自分は諸君から恩に對する禮を受ける資格は無いが、只この道については一日の長があるのである、故に諸君の協力一致勤勉そのものによらなければ我國の耳鼻咽喉科學の聲價を高め得られないと信ずるから、大に奮發して貰ひたい。今日は有り難く諸君の芳志をお受けする、なほ亦今日は諸君が一堂に會し舊交を溫める無上の好機會であるから互に胸襟を開いて無禮講として十二分に歡を盡されたい」と云はれるのが例で、先生は自ら宴席を必ず一巡し獻酬されるから、初めは裃をつけて居たものもハメを外し、飲めや謠への大酒盛となり、若い連中は陽氣に驅ぎ此日斗りは命の洗濯で、會衆が沈默して居ると「備中の家中が女中と途中で出合ひ……」とサノサ



明治四十一年(寫) 謝恩會記念(氏名略)

節で誘ひ出されるのが例であつた。又斯くして年々謝恩會に出席した連中は或は先生の自邸に或は紅葉館や星ヶ岡茶寮に、或は鮎狩に度々寵招を蒙り會費以上の應酬を受けるので、若い助手連中は身分不相應の豪遊を絲め、單獨では敷居さへ跨げない旗亭に上つて高等社會教育を受け、自ら發奮せざるを得ざるやうな特別の薫陶を受けたものであつた。

### 四人組の始末

そこで最後に此四人組の始末をつけねばならないが、赤松純一氏は明治四十四年二月に熊本醫專の教授として赴任し、更に熊本醫大教授に任ぜられて後職を鰐淵源氏に讓つて市内に開業して功成り名遂げて今は東京に出でて悠々自適、只業務を廢するのは生命を斷つに似たりと稱し、澁谷に居をトし名聲を聞いて來る患者丈け診て居る。和田德次郎氏は殆んど之と時を同うして仙臺醫學專門學校に赴き後母校の昇格と共に、東北帝大教授として羽を爲し昨年は在職二十五年の祝賀を受け益々精勵、まだ停年まで六年の餘裕を持し盛に門弟を指導して居られる。細谷雄太氏は臺灣醫學專門學校教授から千葉醫大教授に榮轉し、今は本所の同愛記念病院の耳鼻科に大を作して居る、餘技としての俳句は寧ろ醫界以外にまで有名で、書も亦異彩を放つ「入澤先生の論文と文章」の題字は誰人の筆蹟で有らう此の細谷雄太博士の墨痕であるのは敢て贅言を要しない。廣瀨涉氏は入局の翌年メモ代りにした草稿に新選耳鼻咽喉科指針なる名稱を附して出版して以來赤松和田兩氏の參加を求め名を新選耳鼻咽喉科學と改め續いて出版し、今日なほ町醫者として俗務に携るの傍、之亦生涯の事業と心得へ暇さへあれば筆を採つて居るが、時には手品使の眞似をして子供を喜ばせ獨り良い氣になつて居るから當分は閻魔の廳から招待狀の來る見込みもなさ相である、只戒むべきは毫端の惡戯で筆禍を蒙らぬやう吳々も注意を要する。

### 一級から六人の專門家

猶此クラスには以上四人の他、大阪の小山景治氏と仙臺の猪股昌輔氏の二人がある、共に耳鼻咽喉科專門を標榜して開業し、小山氏は卒業後直に加藤亨氏の助手として大阪高等醫學校に赴き、更に東大醫局に入つて研究せられ、先年ヂフテリアのホルモックチンを研究して學位を獲、現今にては大阪市醫師會副會長として醫政に盡力されて居る。猪股氏も本卒業後直に郷里仙臺に歸つて門戸を開き大に流行を絲め今は謠曲の大家として青葉城下に令名あり、東大醫局史には直接關係はないが此の時代に一級から六人の專門家を出したからクラスメートとして玆に紹介する次第である。

### 明治から大正へ

以上で丁度三十年前の醫局の梗概は盡きたが事の序に明治が大正になるまでのことを附記せねばならぬ。

**明治四十二年**には田所喜久馬、尾曾越俊三、永野重榮、光本天造の諸學士と介補に本城隆道、原三郎君が入局した。田所氏の物語りは長い、其殆んど半生を醫局の爲めに盡されたのである。即ち初めは副手として中には助手として、終りは講師として、且つ又同氏は別個の臨牀的手腕の持ち主である。即ち醫局長としての生活も相當に長く、此頃から入局した新人は「オヂサン」なる尊號を率つて敬意を表し反射鏡の使ひ方から教へて貰つたのであつた。又後に講師となつて三井慈善病院の主任となるや大に門戸を開放して廣く耳鼻咽喉科を修得せんと希望する特志家を指導し、其門下から多數の實地家を產み出した、然し同氏は自ら卑下して學位論文を提出しない、丁度内科で云ふと眞鍋教授の態度と相通じた所がある、即ち自分は臨牀家として立つのには何も學位を要しない、又自分の信ずる所を評價する人を見出すのに苦しむかの如き信念を持つて居られる、故に氏の人格を慕ふ患者は常にその門に集まり東都に於ける最高の臨牀家としての名聲を滿喫して居る。尾曾越氏と光本氏は共に廣島市の產、相隣して廣島市に業を開いて互に敬意を表し相犯さざるは恩師に忠なるも、であらう。永野重榮氏は小池重氏と並んで杏雲堂に入り現今は平塚分院長として結核病にも造詣が深い。本城隆道氏は郷里愛知縣安城町に業を開き、原三郎氏は信州松本に門戸を張つて居られるが、此原三郎氏の顔は耳鼻咽喉科會の總會と岡田博士の謝恩會には必ず見受ける、東京の地を離れて以來永年機會ある毎に恩師の面影を拜見に上京せられるのは實に感服の極である。

明治四十二年(篤)　吉井氏を迎へて(氏名略)

### 吉井博士の偉業と風采

此年は醫局員として再び忘れることの出來ない年であつた。即ち吉井丑三郎氏がパーセルで世界的のアルバイトを了して歸朝せられた年であつたからである。此時の醫局員は何れもまだ吉井氏の面影を知らない、然し教授からはそのアルバイトの事を聞かされて居て早く風貌に接し度いと願つて居たのである。氏の歸朝は二月であつた、吉井氏が歸朝するとすぐ三井慈善病院の主任となられたが、醫局にも時々顔を出された、それは生體固定法を醫局員に教へんがためであつた。手技の要領はモルモットを搏つて頸動脈を露出し之にカニューレーを挿入して生理食鹽水と固定液を注入して固定し、酸性アルコールで脱石灰を行ひ入念に水洗してツェロイヂンに埋めるのであるが仲々難かしい、筆者などはいつも御免を蒙つた一人で有つたが、又實際外來が多忙であつてやつて居られなかつた

のだ、今から考へれば失禮な事で有つたし又惜しい事をした。そして吉井氏の態度は其頃の所謂ハイカラさんであるからカイゼル鬚をピンとはね上げ威風堂々として居られたが、俗に言ふ「無くて七癖」で、いつも右の手にゲンコツを作つて鼻の穴を右から左りへこする、その態度が如何にもキザで、よく當時の惡童はその眞似をして鼻をこすつたものであつた。然し當時講師の室も無く斯かる大家も醫局に同居するの止むなき次第玉石混合といふ有樣であつたが、此ために親みを重ねる事が出來たのは光榮であつた。

### 外來診察場の新築

**明治四十三年**　春の頃、今年は外來診察場が出來るからその方へ移るのだといふので色々の用事が多かつた。その外來診察場は先年半燒になつた後又取毀されたが、現在の眞鍋内科と青山先生の銅像の間の空地になつて居る所に在つて、各科を綜合した大きな木造で當時は仲々立派であつた。其年の三月十四日から此處で診察が開始せられたのであるが、其處に移つてから時計臺の方では眼科　外來に使つた二階の西南隅が空いた。正式に事務へ交渉すると否定されるので、内證で元の醫局の机を持ち込んで云はゞ無斷占領したのであつた。廣さは前の倍位になるし、便所はついて居る―といふのは眼科で使つた暗室がそのまゝ輕便な水洗便所となつたのである。そこへ移つた時入局したのが、海軍から林舜氏といふ先輩の學士と、若手では神尾友修、大田登志彦、下平軍平といふ新學士、去年入局した猛者連と合流して大醫局を構成し豪華版が出來たのだ。であるから、夏はカンナを買ひ込んで氷水とシヤレ込み教授から大分賛澤をするとお小言を頂戴したが、何しろ教授室とは距離もあるし、先に云ふたやうに水洗便所は近いし、飲み手は揃つたし、獻上のビールは豐富になつた、それに近く病室が舊内科教室に移るといふので　引き越しの前には段々氣が大きくなつて、當直の夜などは暗室から廊下を通り越して時計臺の天邊まで上り、遙かに下谷邊のアークライト（此頃にはまだネオンは無かつた）を眺め時ならぬ雨を降らせたことも有つた、時に朦朧と疊へて居るのは誰か四人が時計臺から四方に向つて四方拜と稱し時ならぬ雨を降らせたとか云ふ噂のやうな噂もあつたし、磨棄したモルモットの肉をつけやきにしてビールの肴にしたとか云ふ昔噺も此頃の出來事だつたといふ。

### 病室の移轉

斯くして此醫局も九月九日に名殘を惜しんで内科舊教室に移された、其處は今の運動場の北端位の所に在つた昔の寄宿舍で、それさへは齒科の有つた跡である、いはゞ入澤内科と割棟長屋住居の態で、奥には整形外科が有り、その奥に内科の古い講堂、其奥が傳染病室であつた。耳鼻はその一番外側の階下全體を頂戴したが、何しろ小さい室斗りの連續であつたから、室割の具合は誠に不便で、殊に中央の廊下は各科の通路に當るから今までのやうに近所づき合の要らない別天地とは違ひ、教授から時々靜かにせにやならんと御注意を受けたことも有つた。ここへ引き越してから一番困つたのは風呂場で、今までは汚いながら獨占の浴場で有つたが、今度は三浦内科や青山内科の醫局の風呂を貰ひに行くので頗る氣がねをした、然し内科の諸先輩と親なじみになつたのも此浮世風呂のおかげであつた。

### 研究室の發展

此處に引き越してから良くなつたのは研究室で、吉井講師の指導の下に此處で始めて生體固定が本格的に出來たのであつた。扨て此頃の人物の思ひ出をしてみやう林學士は海軍から研究生として派遣されたのであつたが、すでに卒業後年代も經て居るので吾々のやうな坊つちやんでない、善につけ惡につけ社會學を大分仕込まれた、同氏は其後海軍を辭し今は小金井で悠々自適の生活をせられる由、神尾氏は醫局を辭してから根岸の養生院に勤め今は神田で堂々開業され京濱耳鼻咽喉科醫會の常任理事として活躍されて居る。太田氏は聊か變りもので大の飲平であつた、自分が乳嘴突起炎の手術を受けた時、自ら無痛療法を施すと稱し亘盃を傾けて繃帶交換をして貰つた事もあり、兎に角醫者の不攝生とでも云はうか、遂に櫛須賀に來て永眠されたのは惜しい事であつた。下平軍平氏は和田德次郎氏の留守居役として仙臺に赴き割合早く學位を得られ今は下谷に門戸を開いて居られる。

### 汗ダクの外來

此處で、一寸當時の新外來風景を記さう。新外來では耳鼻科は南棟の二階が當てがはれ蒸氣で沸すシンメルブツシの消毒器も備へつけられ、吸入室まで設けられた、室も今までと違つて廣くなり教授の外來診察室と醫局員の室とは別個になつたので、從來のポリクリとは違ひ別に新來再來が診られるから頗る樂になつた代りに、外來患者が著しく增し恐らく此頃が外來の最高レコード時代であつたらう。それゆへ暑中休暇と來ては一人で片附けなければならない事もあつたから暑い事此上なし、或る時或る先生は越中フンドシにシユルツエーといふスタイルで汗だくになつて診察をやつて居たのが物議の種となり、事務から風規上御遠慮願ひ度いと抗議を申し込まれたことも有つた、兎に角此頃の外來は物スゴかつた。此診察場はたしか昭和の初めまで有つたと思ふが其昭和時代の醫局の方には、こんな風景は眞實と思つて貰へないであらう。

### 二萬圓のラヂウム紛失事件

**明治四十四年**組には伊藤晄、池田泰雄、渡邊舒　八木澤交吾の四學士がある。伊藤晄氏は臺灣に渡り臺南病院に勤め、時の院長であつた入澤内科出身の某氏の頭をポカリとやつつげて肝を寒からしめ某氏を或る臓器製剤會社に轉向させて今では鵬を轉じて鷃と爲し、とうとう氏をホルモンの大家に仕上げたといふ珍聞奇談の持主である、其後氏も亦成功して上京せられたが間もなく病を得て急逝された、渡邊舒氏は寺田豐作氏が建てた赤坂見附の病院を讓り受け盛大に開業せられたが、何か祟りでも有つたものか之亦間もなく病のために早世せられた、或は方角でも惡るかつたのか、一軒の家から二人も耳鼻專門家の葬式を出したのは奇しき因緣である。池田泰雄氏は内科に轉じ

目下聖路加病院に勤務せられる。斯くして此の四人の内一人光つて居るのは名古屋の八木澤文吾博士であらう。氏は中村豐氏の跡を襲ふて愛知醫專から名古屋醫大の教授となり、後辭して開業したが、在勤中の精勵に報いられ開業當時には各古屋醫大の外來が火の消えたやうになつたといふ噂の主人公で、中京第一の流行兒となり今日では名古屋の骨董屋は一番のお客樣に數へて居るとは聞く丈けでも嬉しい。この八木澤氏の醫局長時代に二萬圓のラヂウム紛失事件が有り醫局員一同青くなつたが、岡田教授の英斷で其責を一人に負ひ醫局員は救はれたのは、今猶傳はる師弟の溫情厚き物語りであらう。

**増田教授の醫局入**

**明治四十五年**には山口鎧、小野鐵造、原田三杉、山口靜雄、深浦文雄、佐藤敏二の諸學士がある。山口鎧氏は長野の赤十字病院に赴いて後同市に開業、小野鐵造氏は駿河臺の聖橋畔に堂々門戸を張り原田三杉氏は嚴父の跡を繼いで牛込の新見附に業を開き、山口靜雄氏は靜岡市に堅い地盤を築き、佐藤敏二氏は相變らず順天堂醫院で男爵松本本松博士と協力して居られ、何れも各郡市に於て有數の地位を占めて居られる、唯一人深浦文雄君の早世せられたのは惜しむべきである。

此年の九月明治は大正と改まつた、其故を以て玆に明治時代の耳鼻咽喉科醫局史も亦一段落を告げざるを得ざれども大正組には實に現代の東大耳鼻咽喉科を支配する増田教授の名を見るのであるからそこまで延ばすことにする。

**大正元年**の十二月に卒業した組（大正二年入局）は橋本英輔、久保護躬、大野少輔、岩崎嚴、石井政吉の諸學士で、橋本氏は鹿兒島に於て東大醫局の先輩中村平輔を助けその病院長となり、久保護躬氏は九州に於て令兄猪之吉博士の直傳を受け默々として語らざるも千葉醫大の重鎭として眞正臭鼻症の外科的療法に就ては他人の追從を許さゝるアルバイトを出して居られる、大野少輔氏は亡く、岩崎嚴氏は淺草にて門戸を張り近く千葉醫大より學位を授けられる筈であるが、氏の落語は昨年の岡田先生謝恩會幹事の卽席餘興として來會者をアツと驚かせた、石井氏の消息は斷つたが鐵門倶樂部の名簿には上海に開業とあり、御健在を祈る。

**大正三年**入局には桑名龍太郎、増田胤次、堀野義丈、和田由常、村上隣固、篠原良雄、千田要治の諸氏がある。此内斷然異彩を放つのは現東大教授増田胤次氏であるが、氏は本來大正年代の卒業でなく明治四十三年に八木澤文吾氏と共に卒業したのであるが、身を軍籍に置いた關係で入局が遲れたのである。そして村上隣固氏は本郷に堀野義丈氏は濱松市に篠原良雄氏は甲府市に、千田要治氏は岡山市に開業し、和田由常氏は滿鐵を辭してから東京へ移られたが、和田千田の兩氏はすでに故人となられた。

**大　圖　圖**

以上で東大耳鼻醫局の開設から大正に移つて増田現教授の入局までのあらましを述べたが、大正十三年に到り岡田教授が停年に達して其の四月に増田教授が後任として就職せられるまでの間は、實に東大醫局の躍進時代で、まだ〳〵景氣の良い咄は山々あるが、標題が三十年以前の梗概といふのであるし、筆者も亦其後は段々母校とも疎遠になり、風聞はしたが眼の當り見た事實が足りないから、認識不足のため誤を傳へるのを恐れ玆に筆を擱かんとする時、大坂の淺井先輩から全國で醫師の着用する白い診察衣は東大耳鼻の醫局から始まつて廣く用ゐられたといふ快報を頂戴しかたら、此の由來を御披露して東大醫局がこの白衣の如く我が耳鼻咽喉科界に燦として光彩を放ち、益々向上發展されん事を祈るのである。

終りに臨み此間消息を傳へた各位に對し或は禮を失した場合があるやも保し難いが、然し之悉く昔の夢物語に等しいもので、何れも岡田門下として親しみを重ね、岡田先生の偉大なる人格を慕ふの餘り、其全貌を揭げた裏面史ともいふべき此全篇を岡田教授に捧げ先生の德を彰にし鴻恩に報いんとするのであるから宜しく御容赦を願ひ度い、多妄多謝。

## 十三、大正期に於ける先生とその初頭の活動

こゝに於て、既往明治時代に於ける先生を顧みるに、既に述べ來つた如く、渾身之れ努力力行の人として、その聰明頴悟の資に加ふるに刻苦勉勵よくその大を致し、内にあつてはその研鑽に新機軸を出し、外に出ては衆を率ひてよく幾多學會、社會諸團體の結成創立に與つて力を致したのであつて、實にその明治時代は、我が國諸制度の整備時代であると共にその諸科學、諸學會の發育成長の時期であり、先生自身にとつてもその向上發展の時代であつたのである。而してこれに續く大正時代は、先生も正に五十代の成熟期に達し、内には家を整へ、理財に長けし賢夫人あり、また後嗣夫妻も既に揃つて、後顧の憂ひは更になく、その學界に於て、また社會的地歩に於て既往の努力空しからず、確乎不拔の搖ぎなき基礎を築き上げて、またこゝに何らの憂ひなく、その身學究に出でゝ、そを蟬脫し、今やその存在は社會的名士の一員に數へられて漸くに成熟の境に入られたのであつた。

思へば、二十代より三十年間、その明治時代は多難にして波瀾に富む生涯であつたが、五十の聲を聞く大正時代に入つ

ては正に駘蕩たる春の海に船を掉す如き長閑な境涯を迎へられたのである。

それも大正十三年、滿六十歳の春を迎へ、停年に達して大學の職を辭せられるまで、その間約十年間には洋行を二回されるの外には、さしたる事件もなく、位階勳等のいやましに上り、その身またミリオネールの一人に數へられて、幾百に餘る門弟、後學に擁せられて、誠我が世の春を謳はれる幸福な生涯であつた。

かくて、大正五年、第二回の洋行までに數へらるべき、大正初頭の事件としては、內にあつては、大正三年四月の、後嗣夫妻の間に誕生せる愛孫壽々子さんの出生と同七月の後嗣清三郎氏の海外留學並びに翌四年一月廿日に於ける繼母とよ子刀自の逝去があり、大學に於ては、同大正三年、初めてその教室に助教授を置いて、講師吉丑三郎博士を之に拔擢し、また大學に醫學講々科を創始しては醫師の再教育に資し、或は出でゝは、東京大正博覽會の主任審査官を囑託され、また國際病院の設立に際しては日本國側の評議員に推されて、その創立に參劃される等が數へられるのであるが、以下こゝに大正初頭に於けるその活動の主なるものを記しておかう。

## 一　東京大正博覽會主任審査官囑託

このやうにして、功成り名を遂げられた先生は、平穩なる大正期を迎へられたのであつたが、その初頭に於ける大正三年は右に述べた如き頗る多事多端の年であつて、その春三月二十日には東京大正博覽會が上野忍ケ池畔に開催されると共に又それを機として四月第四回日本醫學會が東京に開かれたのであつた。

これより先き三月中旬には、當時文部省の普通學務局長田所美治氏より先生の許に次の如き親展書があつた。

拜啓　春暖之候益々御清穆奉賀候陳者小生此度東京大正博覽會教育學藝部審査方擔當ヲ囑セラレ之ニ就テハ是非貴豪ニ該部審査官トシテ御盡力相願ヒ度存候公私御繁劇之折柄御迷惑至極ト存候ヘ共何卒御承諾之上御援助被成下候ハバ幸甚ノ至リニ奉存候何レ追ヲ農商務大臣ヨリモ御照會ノ上御依囑之都合ニ相成事ト存候ヘ共豫メ小生ヨリ御內意拜承致置度候ニ付折返シ御都合御一報被成下度此段得貴意候

大正三年三月十四日

岡田和一郎殿　侍史

田所美治

かくて、同四月十五日付を以て先生は農商務省より該博覽會審査官を囑託されたのであつたが、同博覽會事業中の重要部分を占むる出品部類目錄の制定に當つては、これを十四部百八十類に分ち、末松謙澄子爵その審査總長に當り「教育及學藝部」はその第一部をなして、田所美治氏かその審査部長を擔任したのであつて、先生は、近藤次繁、土肥慶藏、木下正中、石原久、中泉行德、石原喜久太郎、羽田益吉、丹波敬三、栗本庸勝等の諸氏と共に該部の審査官として、その第十一類「醫學、藥學及調劑學、器械、器具、標本、圖畫、模型、藥品」の醫事衞生部門の審査を主宰されるに至つたのであつた。

當時、この部類への出品者並びに出品點數を擧げると、人員に於て百九十二人、點千數五百餘點の多きに上り、これを十一目に區分して、各目を三人の審査官に分掌せしめ、之れに各審査官の推薦したる若干名の審査囑託及び審査補助を參加せしめたのであつてその配置は次の如くであつた。

第十一類　主任審査官　岡田和一郎

第一目　外科　近藤審査官、木下〃、羽田〃、內藤(樂)審査官囑託、茂木(藏之助)審査補助
第二目　內科、小兒科　栗本審査官、岡田〃、羽田〃、廣瀨(益三)審査官囑託、岡田(清三郎)審査補助、佐藤彰〃
第三目　眼科　中泉審査官、近藤〃、石原(久)〃、坂原(愛治)審査補助
第四目　產婦人科　木下審査官、近藤〃、土肥〃、森永(友碩)審査官囑託
第五目　皮膚病梅毒科　土肥審査官　栗本〃、木下〃、梅津(小次郎)審査官囑託、峰(正寬)審査補助、佐藤彰〃
第六目　耳鼻咽喉科　岡田審査官、羽田〃、石原(久)〃、高橋(研三)審査官囑託、田所(喜久馬)審査補助

第七目　齒　科　石原(久)審査官、岡田〃、近藤〃　降幡(積)審査官囑託、　北村(一郎)審査補助
第八目　藥　品　科　丹波審査官、羽田〃、石原(喜)〃　服部(健三)審査補助
第九目　繃帶材料科　羽田審査官、丹波〃、近　藤〃　田口審査官囑託、　村田審査補助
第十目　衞生細菌科　石原(喜)審査官、中泉〃、栗本〃　石原審査官囑託
第十一目　解剖生理科　岡田審査官、土肥〃、近　藤〃　高橋審査官囑託、　田所審査補助

かうして、五月五日には、審査本部會議室に於て類總會を開き、審査上の方針を協議してその進行を計り、五月廿八日迄にその審査を終つて、名譽大賞牌一、金牌六、銀牌三十四、銅牌四十一、褒狀七十七、協議賞一の計百六十の褒賞を決定し、先生は第一部第十一類の審査報告を作成提出されたのであつた。――大正五年刊「東京大正博覽會審査報告」參照

これより先、また四月一日より第四回日本醫學會が開會され、その席上、次回大正七年東京に開かるべき第五回日本醫學會の役員の推薦があつて、會頭に緒方正規博士、副會頭に金杉英五郎博士が夫々決定され、先生またその準備委員長に推されて、次回開會の準備に盡力されることゝなつたのである。が、一方先生は、またこの第四回日本醫學會の開會に際し、大日本耳鼻咽喉科會第十八回總會を開催し、多數會員の入京を機として、同二日午後三時より麴町三番町の自邸に會員その他知友を招いて盛大なる園遊會を催し、實酣なるに先生先づ挨拶に兼ねて來賓一同の健康を祝し、次いで大阪の佐多博士の發聲で岡田家の萬歳を唱へて乾杯し、薄暮散會したのであるが、當日は在京、地方の博士、學士、開業醫の諸氏無慮百餘名參集し、頗るの盛會であり、また同四日、總會終了後には、例の如く、午後六時より芝紅葉館に於て懇親會を開催し、京都の和辻、九州の久保、大阪の淺井、その他吉井、岩田等の在京の各博士等を初めとして、大日本耳鼻咽喉科會の會員百餘名を招いて和氣藹々たる中に極めて盛會裡に散會したのであつたが、かゝる賑々しき多忙のさ中に、同四月十五日に、愛孃和子夫人にお目出度があつて、先生御夫妻には初孫壽々子孃の誕生をみるの慶事が打續いたのであつた。

## 二　東京帝國大學醫科大學醫學講習科の創設

かうした多忙續きの中に五月に入ると、長年の懸案であつた醫學講習會を東京帝國大學に於ても開催し、醫師の再教育に資することゝなり、先生又その理事となつて大に斡旋これ務められることゝなつたのである。

當時、京都醫科大學に於ては、二月に第六回醫學講習會が終り、また九州醫科大學に於ても同じく二月に第三回醫學講習會を終了したのであつたが、東京醫科大學の方では在來之を行はず、醫事ヂヤーナリズム方面でも兎角の問題となつてゐたものであるが、こゝに先生の盡力に依つて、東京帝國醫科大學醫學講習科としてその設置をみ、第一回を七月一日より向ふ一ケ月間、夏期休暇を利用して開講することゝなつたのである。

當時の規則書を掲げると次の如くである。

東京帝國大學醫科大學醫學講習科規則

第一條　醫學講習科ハ醫師ニ醫學ノ智識ヲ與フルヲ以テ目的トス
第二條　講習期間ハ四週間以内トシ毎年七月ニ於テ開講ス
第三條　講習科目及講師人名ハ毎年五月初旬之ヲ公告ス
第四條　講習志願者ハ醫師免許證ヲ有スル者ニ限ル
第五條　講習者ノ人員ハ一科五十名以下トス　但一科十名以下ノ時ハ開講セサルコトアルヘシ
第六條　講習者ニハ講習料トシテ一科ニ付金拾圓ヲ前納セシム　但開講セサル場合ノ外既納ノ講習料ハ還付セス
第七條　講習科修了者ニハ證明書ヲ付與ス

かうして、同六月三十日には午前十時より東講堂に於てその開講式を擧行し、講習生に次いで、學長、教授、講師諸氏の着席を終るや、先づ先生その開會の主旨を述べ、次で教授並に講師を代表して片山教授の祝辭があり、最後に青山學長の訓辭があつて同十一時半式を終つ、、翌七月一日より開講したのであるが、第一回の講習生は集るもの三百三十五名餘の頗るの盛況であり、先生はまた講師吉井丑三郎氏、助手田所喜久馬並に渡邊舒兩氏の教室員を率ひて耳鼻咽喉科學の講義

を分擔されたのであつた。當時の先生擔任の講習科目を示すと次の如し。

一、耳鼻咽喉科學（外來診察所及病室ニ於テ）

甲　耳鼻咽喉科手術學及直達鏡應用法「デモンストラチヤン」　一週三回　二時〔教授　岡田和一郎　助手　田所喜久馬〕

乙　耳鼻咽喉科實習　一週三回　二時〔講師　吉井逸丑三郎　助手　渡舒〕

かうして同講習科は、七月の三十一日に修學證書授與式を擧行し、青山學長の旅行缺席の爲め、先生が代つて、講習生總代に證書を授與し且つ講習終了の辭を述べ、次で田代教授の祝辭並びに講習生總代の答辭があつて式を終り、その第一回は成功裡に所期の目的を達し、日進醫學の進歩發展に疎き開業醫家の啓蒙に資する處尠からざるものがあつたのであるが、當時、これに參加せる教授は先生を初めとして、基礎醫學に於ては長與又郎、林春雄、臨床醫學に於ては磐瀬雄一、臭秀三、弘田長、土肥慶藏等の諸教授であり、助教授としては、三村領二郎、柿内三郎、三田定則、石原喜久太郎、鹽田廣重、中泉行徳、三宅鐵一、石原久等の諸氏にすぎなかつたが、漸次該講習科の趣旨とその重要性とが闡明になると共に、後ちには殆んど全學的な參加をみるに至つて、先生の努力と相俟つて逐年盛大に赴き、先生も亦、大學辭任後と雖も、その科外講義或は特別講義等に出講して、この醫家の再教育に大に盡力せられたのであつた。

因みに該講習科設置の主旨に就ては、その第二回醫學講習科謝恩會記錄部の編纂に成る記念アルバムの序文に先生自身述べられてをられるから、それをこゝに引いておかう。

時代ハ進轉シテ一刻モ止マズ日ニ新ニ月ニ又新ナリ、特ニ我醫學界ニ於テ然リトス、是レ醫科大學ニ醫學講習科ノ設置アル所以トス、今マ玆ニ我東京帝國醫科大學第二回醫學講習生諸氏カ其業ヲ了ヘ補修ノ目的ヲ遂シ將ニ歸鄉ノ途ニ上ラントスルニ臨ミ其在學當時ヲ紀念センカ爲メ一册ノ寫眞帖ヲ製シ敎ムルニ講師敎室及講習生諸氏ノ作業狀態等ヲ寫シタル者ヲ以テセリ、是レ蓋シ諸氏カ他日繁務餘暇折ニ觸レテ繙キ以テ在學當時ヲ追想シツヽ、又更ニ新事實ヲ追加スルノ念ヲ起スノ資トナリ又諸氏カ前ニ修メタル基礎醫學ヲ應用シテ更ニ進ンテ新事實ノ研究ニ從事スル基トナリ得ル者ナリ、然レバ是レ素ヨリ一編ノ小册子ニ過ギスト雖モ之ヲ善用セバ誠ニ溫古知新ノ一要具タリ又斯學輓推ノ一源泉タルヲ得ベキ者ナリ、諸氏寔クハ長ヘニ之ヲ愛寶シ又善用シテ以テ時代ニ遲ルヽノ嘆ナキヲ期セラレン事ヲ記シテ以テ序ト爲ス

大正四年八月十日　岡田和一郎

かうして、その創設になる醫學講習科も無事成功裡に終り、八月に入るや、先生の教室には助教授を置くことゝなつて、在來の講師吉井丑三郎博士が之に就任し、代つて、助手田所喜久馬氏が講師となり、併せて三井慈善病院耳鼻咽喉科醫長をも囑託されるに至つたのである。

これより先、またその御家庭内に於ては、同七月一日、かねて青山内科に於て研究中であつた後嗣子清三郎氏が向ふ三ケ年の豫定で、内科學研究の爲め單身、歐米留學の途に上られたのであつた。

## 三　聖路加國際病院の設立

かうして八月に入るや、果然バルカンの野に端を發した戰火は全歐に波及し、同四日獨佛先づ宣戰を布告し、次で英獨の國交また斷絶して、歐洲大戰の勃發をみるに至り、同廿四日には我が國また對獨宣戰を布告して青島に出兵することゝなつたのであるが、その廿二日、先生の許に時の内閣總理大臣大隈重信伯より一通の來翰あつて、かねて日米親善の爲めに築地聖路加病院を經營せるトイスラー氏の奔走に關はる國際病院設立の件に關し、日本國側の評議員にならむことを懇請せられたのであつた。

拜啓　時下炎暑之候ニ候處益御清祥之段奉慶賀候陳者別紙趣意書に相認置候國際病院設立の件に付客月一日永田町官舍に有志各位の御參集を願ひ該病院創立助成の目的を以て日本側の評議員會設置の件を御相談申上候處幸に出席各位の御賛同を辱うし執れも各評議員たるの御承諾を與へられ小生等一同多大の滿足を感じ候次第に御座候尙其節出席各位の評議により當日御出席無之方々に對しても出席者

同棲各評議員の任を御引受被下樣小生より御依頼を致すことゝ相決し申候
前述之次第に付御多用中處御迷惑之儀とは存候へとも國際病院創立助成の件御賛成の上評議員の一人に御加はり被下樣致度尙御返事之儀は内閣總理大臣官舍宛に御願申度先は此段御依頼迄如此に御座候

敬具

八月

國際病院日本評議員　伯爵　大隈重信

岡田和一郎殿

これより先、聖路加病院長トイスラー氏は、米國醫學の紹介、公衆衛生事業の普及、日米醫學の交換、醫學を通じての日米親善を目指して、明治三十三年、築地明石町に病院を開設し、本邦醫界に將又日米兩國の國交上に寄與する處あつたのであるが、更にその目的の擴充、完遂の爲めに、該聖路加病院を擴張して、一の國際病院たらしめんとのかねての計畫を具體化さん爲め、トイスラー氏は再三歸國し、北米合衆國の官民に之を謀りたる結果、殊に大統領ウヰルソン夫人の熱心なる賛助に依り二十五萬圓の醵金をも得たので、更に本邦官民の援助を乞はんが爲め、時の平和協會長たる大隈伯に說く所があつたのである。かうして大隈伯は同七月一日午後二時より首相官邸に各方面の有力者を招待して協議會を催し、席上伯は這般の病院が國交に及ぼす影響より觀光客を誘致するを得べきこと並にトイスラー氏多年の功に酬ゆる所以なる旨を述べ、次で阪谷市長の賛成演說、トイスラー氏の詳細なる說明があつて、澁澤男が一同を代表して賛意を述べ、當日の出席者はいづれもその評議員たることを承諾し、同病院の敷地として約五千坪若くはそれに相當する醵金を助成することに協定したのであつたが、當日は先生は缺席したので、右の如き書狀に接せられたのであつたが、先生にをかれても、かねて親交淺からぬトイスラー氏の宿志達成のことではあり、またその下には自己の推薦に關はる、同鄕の後輩久保德太郎氏が同病院の副院長として之を補佐してゐる關係もあり、且つは又同仁會以來の同志的結合にある他ならぬ大隈伯の申出であれば、その日本側の評議員たることを快諾して、この國際病院設立の事業に參劃して、大に爲す處あられたのであつた。

因にかの七月一日、首相官邸への出席者並にその席上決定をみた役員は左の如くであつた。

國際病院日本評議員會

會長　大隈重信
副會長　澁澤榮一　後藤新平　阪谷芳郎

評議員

一木喜德郎　服部金太郎　早川千吉郎　新渡邊稻造
豐川良平　尾崎行雄　高田慎藏　國田孝吉
根津嘉一郎　中野武營　井上準之助　井上友一
野村龍太郎　大橋新太郎　增田增藏　福原有信
近藤廉平　後藤新平　青山胤通　佐竹作太郎
阪谷芳郎　阪井德太郎　澁澤榮一　志立鐵次郎
茂木惣兵衛

實行委員

新渡邊稻造　中川望　井上友一　大橋新太郎
阪井德太郎

かうしてトイスラー氏の主唱に係る國際病院の創設に關しては、日本評議員會に於ては、各評議員の互選により阪谷東京市長が之れの斡旋に主として力を入れることゝなり、最初の計畫通り、米國より來る可き五十萬圓を病院の建築費に充て、その敷地は本邦に於ける寄附金を以て購入する方針を採ることゝしたのであるが、十月に入ると、敷地は聖路加病院附近の築地明石町の地所を購入して之れを擴張することに決定をみ、更らに十一月に入ると米國より同病院設立委員長の

資格を以てベンコース氏夫妻が來朝し、それを機會に同氏夫妻を主賓として波多野、加藤、尾崎の各大臣、ガスリー米國大使夫妻を初め、澁澤會長、阪谷、後藤の兩副會長以下設立委員約四十名を十一月九日正午首相官邸に招待して午餐會を催し、後引續き創立總會を開いて、愈々その創立事業に着手することゝなつたのであつた。而して又一方、このことが叡聞に達しては御内帑金五萬圓御下賜の御沙汰があり、又米國よりも建設費として約百萬圓を提供することゝなり、今日の聖路加國際病院設立の基礎は着々として成つたのである。

かうして、同病院の成るや、先生は爾來同病院の評議員とし、またトイスラー氏の親友の一人として、その事業經營に力を致して、その發展に資せられる處があると共に又その耳鼻咽喉科のコンソルタントとなつて、直接間接に同病院を援助され、更らには日米醫學交通委員會が組織されるや、先生は又その委員の一人となつて多大の援助を與へ、且つロックフエラー財團のフエローシップの推薦に當つてはその指名協議會の一員として公平なる意見を發表して、その人選に關與せられる等、その經營發展には多大の助力を寄せられたのであつた。

こゝに明治三十六年、大學卒業と同時に先生の推輓によりスクリバ氏の助手となり、それを機緣に聖路加病院に關係し、爾來トイスラー氏の下にあつて、よく之を助け、トイスラー氏亡き後は、その遺業を引繼ぎ同病院長として内外に重きをなした久保德太郎氏の「岡田和一郎先生を弔ふ」なる一文があるから、こゝに同病院に關係せる部分を抄錄しておかう。

（岡田）先生は確かに立志傳中に記載さるべき人であります。意志堅固の性格を有せられ、所謂精神一到何事不成哉てふ意志の人であります。（中略）次に述べんとする事は私自身に關係することでありますが、スクリツバ先生へ私を紹介せられ、其の助手として推薦されたのは先生であります。爾來ドクトル・トイスラーと相識るの機會を得られ遂に本院の耳鼻咽喉科のコンソルタントとなつて、直接間接に本院を援助されたと同時に、先生の名聲も外人間に Prof. Oiada として廣く知らるゝに到つたのであります。先生の專門とせらるゝ學問の領域に於て International の業績が發表されたことは周知の事實でありますが、臨床家としても亦 International の名聲を博するに到られたのは、聖路加病院のコンソルタントとなられしに由るものと信じます。

更に日米醫學交通委員會の組織さるゝや、先生は其委員として多大の援助を與へられ、且つロックフエラー財團の Fellowship を推薦するに當りては Nomination Committee の一人として其の人選に關與して公平なる意見を發表せられ、前後四十餘人の少壯醫學者が名譽ある Fellowship を得て米國留學をなし歸朝後官公私の病院又は學校に於て、夫々有力なる活動をして居るのである。全く此の機關によつて日米の醫學が諒解され、此の國境なき醫學によりて、自ら兩國民の親交が增進されて居るものと考へる。而して先生は則ち此機關を運用せる一人として重任を果されたものであります。眞に公私繁劇なる裡に在つて國際的事業にも其の勞を吝まず盡瘁されたことは、先生の最後を益々大にした所以であります。（醫事公論昭和十三年七月廿三日第一千三百五十七號）

## 四　陞敍高等官一等、大學教授のミリオネア

その他、大正三年の十二月には、文部省の主催に係はる第一回學校衞生講習會が開かれ、爾來每年、先生は該講習會の講師として出講し、兒童の保健衞生の向上に資する處あられたのであつた。かうして大正三年が多事多端の中に慌しく暮れゆくと、明くれば四年一月には、その廿六日國許にある纖每とよ子刀自が享年六十二歲を以て逝去され、凶報一度び來たつて歸鄕せられる等の不幸もあつたが、さしたることもなく大正四年が過ぎ、大正五年を迎へられると、その四月には高等官一等に陞敍せられると共に又その七月には、かねて時事新報社にて調査發表中の全國「五拾萬圓以上資產家」の東京府（東京市）麴町區の部に、醫科大學教授として、當時の富豪連と肩を並べて先生の寫眞並に略歷が同紙上に大きく揭げられ、當時の醫界にセンセーションを起したものであつた。こゝに、その記事を揭げておかう。

**五十万圓　岡田和一郎（大學教授）　三番町三六**

▲略歷　氏は亡喜惣太の長男にして元治元年正月を以て生れ、明治十六年十二月家督を相續す同二十二年醫科大學を卒業して醫學士の稱號を得同大學助手となり同二十八年大學助教授に進み同年獨國へ留學を命ぜられ在留三年同三十二年歸朝翌年醫學博士を受領し同三十五年同大學教授に進み現に其職にあり傍ら根岸養生院を經營す從四位勳三等たり

蓋し、當時醫界に於て長者番附に載るものとては本鄕順天堂の佐藤氏、神田杏雲堂の佐々木氏、整骨の名倉氏位のもの

であつたからして、當時のこの先生の出現が驚異の的となり、センセーションを惹起したのも敢て不思議ではなかつたであらう。

かうした世人の驚嘆と羨望の裡に、同三十一日には、先生は令孃和子さんと相携へて、同じく東大教授の田代義徳博士、工學博士斯波忠三郎、文學博士芳賀矢一、農學博士稲垣乙丙氏等の四教授と共に華々しく第二回目の洋行の途に上られたのであつた。

## 十四、第二回の洋行

これより先き、大正五年六月八日、先生は歐米各國へ視察出張を被仰付られ、それと同時に醫學部より、田代義徳教授、農學部より稲垣乙丙教授、文學部より芳賀矢一教授、工學部より斯波忠三郎教授の四博士が共に歐米出張を命ぜられたのであつたが、先生はこの機會に先きに大正三年七月渡歐せる後嗣清三郎氏が大戰の爲め獨逸留學斷念の止むなきに至り、倫敦のスターリング教室にあつて滿二ヶ年間の研鑽を終へ、歸途紐育のコロンビア大學に在つて近く歸朝の豫定なりしを迎へ旁々、令孃和子夫人を同伴することゝなり、同七月三十一日同僚の四博士と共に東京を出發し、横濱より天洋丸にて米國に向はれたのであつた。當時この行は、五博士の洋行として世に騒がれ、就中、令孃和子夫人の存在は紅一點として人氣の焦點となつたものである。

當時都下の各紙はいづれも「五博士の出發」と題して、寫眞を掲げ、且つ東京驛頭の未曾有の雜踏ぶりを大々的に報じ、又美しい和子夫人の存在を謳つてゐるが、こゝにその一つを掲げて、出發當時の盛況を傳へてみよう。

### 人波に揉れ乍ら別れの挨拶

五博士の横濱出發紅一點の和子夫人

學術視察研究の爲め歐米各國へ出張を命ぜられた東京帝大醫科大學教授岡田和一郎、田代義徳、文科大學教授芳賀矢一、同工科大學教授斯波忠三郎、同農科大學教授稲垣乙丙氏等の五博士は、卅一日零時卅五分東京驛發列車で出發の途に就いた、此日正午には既に見送りの人々二千名近くが東京驛に溢れて立錐の地もない程、時の迫るにつれて五博士は思ひ々々に知己朋友との挨拶や握手に忙しい、父君の岡田博士に伴はれて米國に留學中の夫君を訪問すべく渡米する令孃の和子夫人(二十五)はクリーム色の洋裝に同じ色の帽子を戴き、美しい花束を携へた優しい姿が、殊に人眼を惹いた、寫眞班のマグネシアが其處此處でパッパッと火花を散らす、軈て定刻になると五博士及び各夫人令息令孃親戚親友等は、機關車から三輛目の一等車へ乘込んだが、見送り人中の高田文相、古川鐵道院總裁、山川帝大總長等は車窓から首を出してゐる諸博士と盛んに談話を交換して居るその中に汽笛と共に列車が搖ぎ出すと見送り人が一齊に萬歳を三唱した、和子夫人と見送りの若い婦人達とは迫が女性の何時迄も名殘りが盡きぬのか互ひに影の見えなくなる迄ハンカチーフを振り合つて居た、この時刻に東京驛で發賣した入場券が千三百餘枚、横濱行一、二等乘車券が百四十六枚であつたとの事であるが、驛前の廣場は、見送り人の馬車自動車人力車で埋まつて居た。

斯くて横濱に着いた一行は多くの見送り人に迎へられて萬國橋通りの蓬萊座に少憩の後波止場に赴いたが此所には卓子を据へて名刺受けが設けてある、此日横濱から乘り込んだ船客は二百七十四人で一人に付三人平均の見送り人としても八百二十三人の多きに上つた、而も角帽の多いのは流石に博士の出發でなければ見られない光景である、實際近來ない混雜で當の博士は何處に居るやら皆目分らず、二時半見送り人の下船を促す銅羅の音も一向に頓着なく只わい〳〵騒いでゐる聽て一同が下船すると天洋丸は徐ろに搖ぎ出した百三十五號の船室を占めた岡田和子夫人は父博士と共に中甲板に出で手巾を振つては見送人に應へて居る、見送人の一人が「五博士萬歳」と叫ぶと一同が之れに和して海も破れるやうな大騒ぎ斯くて船影は何時しか波頭に隱れた。

尚ほ、この行には、和子夫人の他に、先生の許には、その教室に於ての門弟、順天堂耳鼻科の松本本松男、また松本男と同時代に教室に在りし根本虎雄氏並びに泌尿科專門の下田德三郎氏等の一行も之れに加はり、仲々に賑やかな門出であつたが、又同船者の中には、高峰讓吉博士の次男エベン氏夫妻、三井物産ダラス支店長福島喜三次氏夫妻、桑島桑港領事

官補夫人、倫敦領事官補二見甚郷氏、撞球世界選手權獲得者山田浩二氏、三共製藥の田口一太氏、桑港在住の實業家犬飼久太郎氏、ロスアンゼルス領事館書記生貴船氏夫人、日本晝夜銀行の橋本梅太郎氏等々、邦人客約六十名、外人客百五十名といふ賑やかさで、また暹羅國皇弟ノンクラ・ナカリン殿下も留學渡米の途にあつて同船され、船上には皇族旗を揭げて花々しき航海をつゞけたのであつた。當時の賑々しき渡航氣分は、同行の松本男爵の思出の中にヴィヴィッドに描出されてゐるから、それを次に抄錄しておかう。

大正五年（西暦一九一六年）と言へば廿五年前の事である。……恰も其頃は所謂第一次世界大戰の最中であつて、其戰も已に二年目になつて居たのである。獨墺聯合軍に對して英、伊、佛、露の國家群が一かたまりとなつてぶつかつて戰爭は愈々はげしくなつて來た。……ソンナ狀態なので毎年々々多數の醫學者（他の學科も同樣）が獨墺に留學して居つたのに、茲二年ばかり行く先きが失はれてしまつて居つた。世界中見廻しても何處へも行く國は無く只亞米利加合衆國丈けが觀察乃至留學する唯一の國として殘されて居た。そんな時に何も無理に行く事はないと言ふかも知れぬが……アメリカを見て居る內に戰爭もすむであらうし、歸りがけに歐洲を見物し、戰爭の後を見て來るのも一策、こんな時序にアメリカも見て來ようと言つた樣な心理狀態で半ば遊山氣分で渡米した連中が多かつた。

岡田先生は第一次留學の時アメリカを通過せられ、紐育では大氣焰をはかれた曾遊の國であられたので、アメリカを見直して置くのも絕好の機會であり、西から見始めて東を見終る頃には英國も佛國も獨墺にも多分行かれるであらうから歸途は露國に入りシベリアを經てまだ見ぬ國に新しい見聞も擴めたいと考へて居られたらしく、同行の田代義德先生はアメリカの整形外科を一通り早手廻しに見て、急いで歐洲に渡つて此度の戰爭で必ず新發達をしたであらう處の獨逸の新智識を誰よりも先きに土產にしたいと考へて居られた樣である。

有名なメーヨのクリニック、クッシングの外科、エールのメンデル、ニューヨークのデンチ、ロックフェラーの野口等々見て置く價値のあるものも決して少なく無いアメリカだつたのである。其上に天然の風景、物質的機械文明の新興國アメリカはヨセミテバレー、グランドカニオン、ナイヤガラホール、レーキ・オンタリオ、紐育の摩天樓等々旅人の好奇心をひく多くのものを持つてゐる。其上にオペラ界にはカルーソー、フアラー、ガリクルチ等の他に嘗て岡田先生の患者であつた三浦環氏が日本人の爲めに氣を吐き、熊谷はテニス界に、山田浩二は撞球界に夫々人氣を集めて居たのも日本人にとつては心持のよい時であつた。其上に高峯さんは岡田先生の舊知の一人であつたりした。然も偶然其中の山田が同船、高峯さんの子息夫妻も同船と云ふ譯けで間違つてアメリカ丈けで歸つても損のない時でもあつた。殊に岡田先生は御一人子の和子さん御同伴で、其夫君清三郎氏は歐洲から脫出して今アメリカに居られ、御近親の佐藤彰氏も米國留學中、敎へ子の多數も各地に散在する當時のアメリカであつたのである。

そして和子さん御同行の爲め先生の其時の御旅行は純然たる學問旅行でなく大になごやかな、觀光旅行味が充滿して居られたのである。

時は大正五年の七月三十一日眞夏の陽ざしの强い快晴日、既述した帝大敎授打ち揃つての渡米と云ふので已に東京出發から大變な見送り人の波、橫濱棧橋橫付の當時の巨船見物半分の見送りはすさまじひ光景であつた。見送人退船の合圖のベルが響いて後は棧橋の人波は又一入。打振るハンケチ。五色のテープ。何處も同樣の初旅の賑やかさ。此時の日本人客はケビン・パッセンヂャーのみで五十六名と云ふ壓倒的の多數……馬鹿々々しひ程の御祭騷ぎ。

金華山沖で黑潮を橫切る時から（半日ばかり）多少大搖れを食つた以外は名の如き太平洋、每日の快晴、疊の上を滑るが如き理想的の航海。船の中の樣子も御想像がつくであらう程の日本人、輻一杯の吾物顏。東洋汽船會社では此船と姉妹船の春洋と地洋とを持ち、然も同行の斯波敎授（工科、男爵）は造船界の耆宿。然も亦此船の設計にも携はられた御方。船內の見物見學に一層の便宜を得て大はしやぎ、船に乘つたる連中の內先生の弟子は根本虎雄君と小生、醫者は其外に日本橋の開業醫下田君、是れに岡田、田代兩先生を加へてメめて五人、醫者の勢力も亦壓倒的でしかも、和子さんが居られると云ふ次第。先生の愛孫として養育を受けられ學習院出身、語學で御座れ、音樂で御座れ至れり盡せり、然も日本人として脊も高く洋裝も似合つて忽ち船內の人氣の焦點と云ふ譯。こんな船の內で勉强する氣なぞ藥にしたくも起らぬ筈。然も遊ぶ事にかけては天才の私、遊山の旅だか、留學の途次だか、すつかり忘れてはしやぎ廻つて居て、來る日も來る日も遊んで暮して居た。

岡田先生は百%の御健康、船にも至つて御强く、社交は御上手、然も和子さんが御一緒なので、先生もあまり御勉强はして居られなかつた樣だ。……百八十度の經度通過の日が恰も日曜日、御承知の通り西から東へ越す時は同日か二日繰返さるゝので、日曜日が二日續くと云つた珍現象に假裝會、船員の芝居、船客交々のお話等、夜も日も仕事のない船の中、流石に岡田先生もすつかり寬がれて若い者に取り圍れて平常の御活動を打忘れての船旅氣分に日を暮して居られた。

太平洋は後の經驗の印度洋航路の樣に船に逢ふ事も少く、鳥影も見ず、あけても暮れても水又水。此無聊を慰めんが爲めか、日本人が多い爲めか、每日々々の船の退屈凌ぎの催しの數々に有頂天になつて居る內に十日間の日が過ぎて布哇着。何處でも見る光景だが、初めてのホノルル港の投錢拾ひ、程なく檢閲も濟んで久し振りに蹈む大地の觸覺の心持よさ。一行船を捨てゝ一晩上陸、其夜は滯留同胞、殊に

醫者連中の岡田、田代二教授歡迎會、私も宴の末席を汚して初めて知る先生の御供の有難さ。翌日は島内見物、案内任せの呑氣な一日。ヌアヌパリ山上の絶壁から東北遙かに平野を見渡す大パノラマ風景。その翌日は名物の五彩、えも美しき首かけを澤山首にかけて貰つて又船上の人となる、布哇を出てからは流石に船客も遊山氣分から正氣をとり戻してソロ〳〵上陸の心構へ、四日の後金門を滑り込んで目的地桑港着。行きづりの同行別離を惜しみ愈々北米合衆國への第一歩。

岡田先生一行、田代先生と共に日本旅館に行李を解く、斯波先生はフェーヤモントホテル、稲垣先生と芳賀先生に御別れし其後あまり御目に懸る機會を失ふ。約一週間ばかり經て私等留學生（下田、根本、松本三人）は先生御一行に御別れして紐育でお待ちしますと御挨拶を述べて三人しか知らぬ赤毛布の大陸横斷旅行……

かうして、先生等一行は、七月三十一日横濱を出帆し、八月九日ホノルル着、同十六日、目指す桑港に無事上陸せられたのであつたが、その間の二週間餘は、連日編成せられたプログラムによる餘興會續きで、毎日ひつくり返る樣な陽氣な馬鹿騒ぎの、極めて愉快な船旅を續けられ、またアメリカ大陸にその歩を移して以來も、各地で多大の歡迎を受け、在米邦人の歡迎會、またアメリカ醫界、學界の、或は彼地の碩學大家連の歡迎・厚遇に攻め立てられつゝ、愉快な見學視察の旅をつゞけて、桑港、ロスアンゼルス、シカゴ、セントルイス、クリーブランド、ニューヨーク、バルチモア、ワシントン、フィラデルフィア、ピッツバーグ、ニューヘブン、ボストン等と合衆國の各地を巡つて、カナダに歩を移されたのであつた。が、先生の大陸に歩を一歩移さるゝや、またその精勵恪勤の資は各地の大學、病院はもとより、各都市の公衆衛生施設、醫學、醫界の進歩狀況等迄も緻密に視察し、また各公共施設の發達を廣く參觀して、後日の活用に資せんことを心掛けてをられたものゝ如く、その間の視察の行程を細密に日記に記されてをるが、今こゝにその行を共にされた和子夫人の手に成る、その日記よりの行程事項の拔粹を次に掲げておくことゝしよう。

大正五年七月第二回洋行出立時玄關前にて撮影
左より令夫人、令孃（清三郎氏夫人）和子、令孫すゞ子、先生

大正五年第二回洋行の途次ナイヤガラ瀑布にて
撮影、左より先生、令孃和子夫人、清三郎博士

## 第二回洋行ニ於テ訪問、參觀、出席セル專門的方面

| 大正五年 | | | |
|---|---|---|---|
| 8月 | 9日 | ホノルル | 市醫師團招待會，宴會後市主催講演會ヘ出席（田代，岡田）聽衆千五百人。 |
| 〃 | 19 | バークレー市 Berkley（桑港ノ對岸） | カリフオルニア（Ca ifornia）大學。衛生　細菌，病理生理ノ各教室及ビ實驗參觀 |
| | | | 夜在桑港日本人有志ヨリ晩餐ニ招待サレ，後桑港佛教會講演會ニ出席 |
| | | | 〃在日本勞働者間ノ結核豫防ノ必要〃ニ付講演 |
| 〃 | 21 | 〃 | カリフオルニア大學新入學生入學式ニ列席 |
| | | | 午後同市聾啞學校參觀 |
| 〃 | 22 | 〃 | カリフオルニア大學病院（University Hosiptal）整形耳鼻ノ各教室參觀 |
| | | | Dr. Terry（テリー）ニ面會，後隣接ノ人類學博物館參觀 |
| 〃 | 23 | 〃 | カリフオルニア大學外科教授 Dr. Terry，手術及ビ細菌學教室參觀 |
| | | 桑　港 | 午後桑港結核試驗場參觀 |
| 〃 | 24 | 〃 | 洲立病院（County Hospital）市廳　警視廳內諸設備參觀 |
| 〃 | 25 | 〃 | スタンフオード大學臨床科（Stanford University Clinic）ニテ（米國ノ諸大學ハ通例醫學部ダケハ獨立シ別ノ處ニアリテ附屬病院ヲ有ス）Prof. Graham（グラハム）ノ手術及ビ圖書館參觀 |
| 8 | 28 | 桑　港 | サナトリユウム |
| | | | 市廳內發火，消火裝置，水道上水下水視察 |
| 〃 | 29 | 〃 | County Hospital, Dr. Horn ノ案內ニテ手術參觀，午後ハ同氏ノ茶會（和子同伴） |
| | | | 夜ハ大學倶樂部ノ晩餐會ニテ Dr. Heuston, Dr. Graham, Dr. Horn 等六人ノ專門家出席 Dr. Horn ノ挨拶ニ對シ獨逸語ニテ答禮ス |
| 〃 | 30 | 〃 | サナリウムニテ Dr. Graham ノ手術及ビ Dr. Horn, Policlinic 參觀 |
| 9 | 1 | パロアルト (Palo Arto) | Stanford 大學動物　生理，解剖教室參觀 |
| 〃 | 2 | 桑　港 | Dr. Graham ノ手術（County Hospital）獨逸病院參觀 |
| | | バークレー | 午後四時學生倶樂部ノ招待（學生ノ手料理）食後田代 |

| 月 | 日 | | |
|---|---|---|---|
| | | | Friedberg ノ手術 (County Hospital) |
| 9 | 27 | シカゴ | Chicago 大學ヲ柿内三郎氏，(現東京帝國大學生化學教授當時同所ニテ研究中)ノ 案内ニテ訪問，總長 Dr. Jadasson (ヤダッソン) ニ面會<br>校内諸設備參觀，一般ニ建築，娯樂，運動，圖書館，食堂等ノ諸設備ノ完備セル割合ニ學問上ノ設備ヤヤ不十分ナリ |
| 〃 | 28 | 〃 | Dr. Stein 及ビ Dr. Beck ノ處ヘ禮ニ行キ，セントルイス大學ノ Prof. Dr. Loeb ヘノ招介狀ヲモラウ |
| 〃 | 29 | セントルイス (St. Louis) | 當市外科大家 Dr. Bertnett ニ St. Louis Hospital ニテ迎ヘラレ手術供覽，次デ Joseph (ヨゼフ) 病院參觀<br>Medical School of Washington University ニテ Dr. Loeb ニ面會，同氏ハ同校ノ學長ナリ，同氏ハ病理ノ專門ニテ癌ニ付キテ意見ヲカハシ，次デ圖書館ヘ案内サレシ所 O ノ部ニ Okada ノ醫制論ガアリタリ，後下町ノ同氏ノ office ヲ訪ヒ，次デ Dr. Goldstein ヲ訪フ，(耳科醫ト聾啞教育家ト連合シテ聾啞教育ニ當ルコトヲ初メタル熱心家) |
| 〃 | 30 | 〃 | Jewish Hospital ニテ Dr. Loeb ノ手術參觀，晝 Dr. Loeb ノ案内ニテ Jewish Club ノ晝餐會，ワシントン大學咽喉科教授 Prof. Sluder初メ市内專門家六人出席 (清三郎同席) Dr. Loeb ハ日本ノ爲ニ，我ハ米國ノ爲ニ杯ヲ擧ゲ，終了後再ビ Dr. Loeb ト同乘 St. Louis University Medical School ニ到ル，同氏學長ノ爲メ目下同校入學學生資格檢査中ニテ其ノ模樣ヲ參觀ス，中ニ日本人ノ齒科入學者二名アリ，後 Hospital of Washington University 及ビ大學本部參觀 |
| 10 | 2 | シカゴ | 再ビ North Chicago Hospital ニ Dr. Beck ヲ尋ネ終日手術ニ，回診ニ同氏ト行ヲ共ニス |
| 〃 | 4 | クリーブランド Cleavland | Dr. Stoffer ヲ office ニ尋ネ後四哩ヲ隔テタル大學ニ大學總長ヲ訪フ，同氏ノ案内ニテ Lake Side Hospital ニ行キ院長ニ紹介サレ，次デ兼ネテヨリ，トイスラー氏及ビ Beck 氏ヨリ紹介狀ヲ與ヘラレ居タル外科大家 Dr. Cryle (クライル) ニ面會ス |
| 〃 | 5 | 〃 | Dr. Linker ノ手術 (St, Lukes Hospital)<br>Dr. Cryle ノ手術 (Lake Side Hospital) 夜 Cryle 邸 |



| 月 | 日 | | |
|---|---|---|---|
| | | | 斯波，岡田講演， |
| 8 | 4 | 桑港 | Dr. Graham, Dr Heuston, Dr. Horn ヘ告別挨拶 |
| 〃 | 6 | ロスアンゼルス (Los Angels) | 在住日本醫師 (伊藤 藤森 宮田，田中，唐木，古澤) 團ノ歡迎會 (八重園)<br>商業會議所會長 (President Los Angels of Commerce) ミッチエル氏，(Ino, S, Michell) ノ來訪ヲ受ク |
| 9 | 11 | ロスアンゼルス | Columbia 大學院長及ビ耳鼻咽喉教授 Dr. D. S. Kyle (カイル) ニ面會，同氏手術及ビ院内視察<br>County Hospital (郡立病院ニテ醫科大學附屬) Dr. Hugo Kiefer, Dr. Kyle 兩氏ノ手術參觀<br>南加大學，解剖學教授 Dr, White ニ面會 |
| 〃 | 12 | 〃 | Hospital of Good Samaritan (一宗教家ノ看護婦養成ヲ目的トシテ建テラレタル建築等ノ設備完全ナル一特長アル病院ニテ此處モ耳鼻科ハ Dr. Kyle ナリ) 參觀<br>結核病院 (郊外三十哩) 參觀<br>夜日本學士會員歡迎會 (和子同伴) 幹事ノ歡迎ノ辭後〃羅府ノ前途ノ有望ナルヲ以テ邦人奮勵努力ヲ望ム〃旨ヲ述ブ |
| 〃 | 20 | シカゴ (Chicago) | Dr. Beck ヲ office ニ Dr. Otto Stein (スタイン) ヲ Post Gaduate Hospital ニ訪ヒ，同氏ノ手術ヲ見ル市 |
| 〃 | 21 | 〃 | 衛生設備參觀，來栖總領事及ビ市衛生課員 Dr. Muray (ムライ) ノ案内ニテ ミシガン湖畔水道水壓所，水源池，(地下ヘエレベーターニテ約四十フイート下降) 夏期公衆水泳場等ヲ參觀 |
| 〃 | 21 | シカゴ | 公衆浴場，公衆洗濯場，傳染病室，囚人矯正所，行路屍體檢案所，視察 |
| 〃 | 22 | | Dr. Beck (North Chicago Hospital) ノ手術參觀 |
| | | ハモンド (Hammond Ill) | Betz 醫療器械及ビ製藥工場視察<br>(シカゴ南方約八十哩，イリノイス洲ハモンド市ニアリ，來栖總領事及ビベツツ氏工場長案内，清三郎 和子同行) |
| | | シカゴ | 夜 Dr. Stein 自宅晩餐會，同氏夫妻外產婦人科教授夫妻及ビ和子同席 |
| 〃 | 24 | 〃 | 市衛生課ノ案内ニテ郡立病院及ビ結核病院參觀 (來栖總領事夫人及ビ和子同伴) |
| 〃 | 25 | 〃 | Dr. Beck ノ手術 (North Chicago Hospital) Dr. |

| 月 | 日 | | |
|---|---|---|---|
| 10 | 20 | ニューヨーク | Dr. Coacley ノ自宅診察，終テ同家ニテ晝食ノ馳走ヲ受ケ午後ハ共ニ Columbia ノ外來ニ趣キ後市立ノ大病院 Bellview Hospital ニ行ク |
| 〃 | 21 | 〃 | Dr. Mac. Kernon 及ビ Dr. Dench（デンチ）ヲ自宅ニ訪フ |
| 〃 | 23 | 〃 | New York Post Graduate Hospital ニ Dr. Mac. Kernon ヲ訪ネ院内視察，同氏ハ學長ナリ。 |
| 〃 | 24 | 〃 | Dr. Dench ヲ自宅ニ訪フ |
| 〃 | 25 | 〃 | Dr. Emil Mayer ヲ自宅ニ訪フ |
| 〃 | 26 | 〃 | Dr. Dench ノ手術（St. Luke's Hospital）<br>夜 Academy of Medicin N. Y. ニ開會ノ Meeting of Laryngology（鼻咽喉學會）ニ出席．當日ノ Chairman（座長）Henry. L. Lynah 氏ト並ビ座長席ニ着キ演題終了後種々討論アリ，我モ獨逸語ニテ，ウェントロスコピーニ對シテ賛成ヲ博ス， |
| 〃 | 27 | 〃 | Dr. Myles（鼻喉專門家）ヲ自宅 office ニ訪フ |
| 〃 | 29 | 〃 | 野口博士來訪 |
| 〃 | 30 | 〃 | ニューヨーク耳，眼病院ニ Dr. Dench ノ手術ヲ見ル |
| 〃 | 31 | 〃 | Manhattan 耳鼻咽喉病院參觀 |
| 11 | 1 | 〃 | コロンビア大學法科，工科教室，圖書館參觀（斯波，芳賀兩博士同行） |
| 〃 | 2 | 〃 | 高峰博士ヲ office ニ訪フ |
| 〃 | 5 | 〃 | 野口博士邸晩餐會（清三郎，和子，山川章太郎同席） |
| 〃 | 6 | 〃 | Post Graduate Hospital ニ Dr. Mac. Kernon ノ手術ヲ見ル |
| 〃 | 8 | 〃 | Dr. Einhorn 及ビ野口博士宅ヘ告別訪問 |
| 〃 | 10 | ボルチモア Baltimore | Dr. Welch ヲ自宅ニ訪ヒシモ不在ニテ午後同氏來訪，案内サレテ新築ノ John's Hopkins（ジョンスホプキンス）大學法，文，工，醫科教室，圖書館等參觀，後郊外 Country Club ニテ茶菓ヲ受ク，總長 F. J. Goodnow 氏ヲ訪ヒシモ不在ニテ名刺ヲ置ク |
| 〃 | 11 | 〃 | Prof. Dr. Kelly ヲ自宅ニ訪フ<br>ジョンスホプキンス大學ニ行キ院長ニ面會，同氏學内參觀ノプランヲ立テ書記 Dr. Hurd ヲシテ外科 耳鼻科 内科，小兒科，精神科ヲ見セシム，内科教授ノ臨床講義ノ模様ヲモ見ル，外科ノ教授ニハ他日ヲ約ス |



| 月 | 日 | | |
|---|---|---|---|
| | | | ノ晩餐會（清三郎，和子同行） |
| 10 | 8 | ニューヨーク New York | 宿ヘ野口（英世）博士來訪 |
| 〃 | 9 | | 高峰讓吉博士來訪，次デ當方ヨリモ訪問， |
| 〃 | 10 | 〃 | 高峰博士來訪 |
| 〃 | 11 | 〃 | Rockfeller Institute（ロックフェラー研究所）訪問（清三郎，和子同伴）<br>先ヅ同所デ研究中ノ山川章太郎氏（故東北帝大教授）出デ來リ野口博士ニ來意ヲ通ズ，氏大ニ歡迎シ自ラ各教室，病室ヲ案内シ學者ニモ紹介シ晝食ハ下ノ料理店 Ritz Carton ニテ饗セラレ午後モ引キ續キ案内シ Dr. Flexiner（フレキシナー）ニモ面會ス |
| 〃 | 13 | 〃 | コロンビア大學訪問（清三郎 佐藤彰、和子同伴）（松本 下田兩氏此處ノ細菌學教室ニ研究中ナリ）同教室ヲ初メ生理，耳鼻ノ各教室ヲ參觀ス<br>夜野口博士自邸晩餐會（清三郎，和子同行） |
| 〃 | 16 | 〃 | Presbyterian Hospital ノ Dr. Brewer ノ手術參觀<br>Columbia College ニ生理學教授 Dr. Pike 氏ヲ訪フ |
| 〃 | 17 | 〃 | 午前 Dr. Smith ノ手術ヲ見ル，夜高峰博士ハ市内知名ノ咽喉專門家十名ヲ招待シ岡田紹介ノ晩餐會ヲ催サル，出席者，Dr. Emil Mayer, Dr. Coakley, Dr. Mac. Kenzy, Dr. Smith, Dr. Harris, Dr. Myles, Dr. Einhorn Dr. Lynus, Dr. Brill, Dr. Hurd. 日本人側ハ岡田，芳賀，斯波，松本，根本，八田，下田，清三郎ヲ客トシ主人側トシテ高峰博士，野口博士，高見ドクター，田丸氏。食後高峰博士ノ挨拶ノ後 Dr. Mayer トースマスタートナリ先ヅ岡田ヲ紹介ス，此處ニ於テ日本耳鼻咽喉科ノ發達ヲ序シ將來米國ト提携スルノ必要ヲ說キ次デ（獨乙語デ）米國耳鼻咽喉會幹事スミス氏 高見，ハリス，斯波，野口，マツケンヂー，芳賀 コークレー，田丸，ノ順ニ何レモ日本ノ耳鼻咽喉科ノ發達ヲ稱シ將來日米ノ親愛的提携ヲ述ベテ盛會ニ終ハル |
| 〃 | 18 | 〃 | Dr. Emil Mayer ヲ病院ニ訪ヒ手術ヲ見ル |
| 〃 | 19 | 〃 | コロンビア大學生理學教室，Dr. Pike ノ手術，Manhattan 病院耳鼻專門醫ノ手術，Dr. Mac. Kenzy ノ手術等參觀．夜 Dr. Einhorn 自邸晩餐會（清三郎，和子同席） |

| 月 | 日 | | |
|---|---|---|---|
| 11 | 23 | フィラデルフィア Philadelphia | 午前蒸氣器械製造會社參觀(前田侯爵　斯波博士同行) |
| 〃 | 24 | 〃 | Pe silv nia (ペンシルバニア) 大學ニ行キ畑井氏ニ面會，同大學耳科教授 Dr. Randall (ランダル) ヲ自宅ニ訪ヒ面會　後同氏ノ紹介ニテ耳鼻科教授 Grayson (グレーソン) ヲ自宅ニ訪ヒ面會 |
| 〃 | 27 | 〃 | ペンシルバニア醫科大學病院ニ到リ，外科教授 Dr. Frazier (フラチーア) ノ手術，鼻喉科 Grayson (グレーソン) 氏ノ手術　耳科 Randall 氏ノ手術ヲ見　學長ピーパー氏ヲ訪ヒ面會ス |
| 〃 | 28 | 〃 | 大學ニ行キ學長ピーパー氏自ラ學内ヲ案内ス，當大學ニテ Prof. of Research Medicin, Re ard Milles Pe arce (化學的　病理的　細菌的方面ノ研究ニ從事) 及ビ，Assistant Prof of Surgi al Researc'i, Dr. Edwin Sweet ハ有名ナリ，我ガ松波醫學士及ビ五斗鉄吾氏此處ニテ研究中ナリ，夕七時外科教授マルチン氏ノ晩餐會ニ招カレ歡待ノ後同氏自動車ニテスウイフト氏實驗室ニ行キ學生ニ犬ニ就テ手術セシメルヲ見ル |
| 〃 | 29 | 〃 | 郊外 Mulp'ur 血清製造所見學，午後再ビランダル教授案内ニテ解剖學博物館ヲ見ル |
| 12 | 1 | 〃 | 午前大學光線科レントゲン室參觀 |
| 〃 | 2 | 〃 | 午後外科 Frazier 氏ニ面會後癌研究所參觀 |
| 〃 | 3 | 〃 | 外科 Frazier 氏ノ腦外科手術ヲ見，後獨乙病院ノゲーパー氏ノ手術ヲ見ル |
| 〃 | 4 | 〃 | 大學博物館及ビ大學圖書館見物 |
| 〃 | 6 | ニューヨーク | マルチン，ゲーパー，フラチア，ランダル，ピーパーノ諸氏ヲ告別訪問シ後 Jefferson 大學ヲ參觀　後 College of Physi ian ニ行テ所長ノ案内ニテ參觀 (此處ハ大學トハ何等關係ナク市内醫師ノ會員ニテナレル所ナリ) |
| 〃 | 8 | 〃 | University Medical School ヲ參觀ス |
| 〃 | 9 | 〃 | Post Graduate Hospital ニ Dr. Einhorn ヲ訪ヒ不在ノ爲メ助教授ノ Clinik ヲ聞キ，後醫療器械店ニテ大學ノ爲メエーテル麻醉器及ビ血液吸引器ヲ求メ，日本ヘ發送ヲ命ズ |
| 〃 | 9 | 〃 | Post Graduate Hospital ニ Douglas 氏ヲ尋ネシモ不在ノ爲メ助教授ノ手術ヲ見ル |



| 月 | 日 | | |
|---|---|---|---|
| 11 | 14 | ワシントン Washington D. C | 當地第一ノ專門家 Dr. Boyan (ボアイアン) ヲ自宅ニ訪ヒ，午後 Epistipal 耳鼻咽喉科病院ニテ同氏ノ手術ヲ見，次デ野口博士ノ紹介ニテ陸軍省及ビ陸軍博物館ニ行キ軍陣外科的各種標本器械ヲ見ル， |
| 〃 | 15 | 〃 | コロンビア州立啞學校ニ行キ校長ニ面會校内各教室，及ビ教授法ヲ參觀 |
| 〃 | 16 | 〃 | カーネギー研究所 (Carnegie Institute) 訪問，所長不在ニテ書記長ノ案内ニテ諸設備參觀 |
| 〃 | 17 | ボルチモア | 朝 Prof. Kolly 來訪午後ノ茶ニ招カル<br>ジョンス・ホプキンス大學病院ニ到リ Dr. Young ノ手術　後耳鼻科ノ若キ助教授 Dr. Crow ニ面會，手術ヲ見ル<br>午後 Kelly 氏宅ノ茶會，後同氏經營ノサナトリウムヲ參觀 |
| 〃 | 18 | 〃 | Dr. Kelly 來訪火曜日ノ午餐ニ案内ス |
| 〃 | 19 | 〃 | Kelly 氏ノサナトリウムニ行キ，ラヂウム使用法ヲ見ル，同氏ハラヂウム 5 瓦ヲ所有ス<br>ジョンスホプキンス大學耳鼻科 Dr. Crow ノ手術，後午後四時ヨリ，ジョンスホプキンス大學月曜日病理會ニ出席<br>(同會ハ毎週月曜日ニ前週間ニ解剖シタル屍體ニツキ病理學者，臨床家ガ各方面ヨリノ研究，報告ヲナス會ナリ)<br>夜八時半ヨリジョンスホプキンス大學醫學會ニ出席 |
| 〃 | 20 | 〃 | 午前解剖學教室ニ Mall (モール) 教授ヲ訪ヒ教室ヲ參觀，晝ハ Kelly 氏ノ晝餐會ニテ Crow (耳) 外婦人科醫四人出席，午後ハ市設所ヲ訪ヒ市衛生設備ヲ見ル，當市ノ淨水設備ハ世界一ノ評アリ |
| 〃 | 21 | 〃 | 朝 Presbyterian 耳鼻咽喉病院，主任醫 Dr. Casperri ノ手術ヲ見<br>Maryland (メーリーランド) 醫科大學附屬市立病院ヲ參觀<br>午後四時 Kelly 氏宅茶會 |
| 〃 | 22 | 〃 | 洲立メーリーランド大學參觀　解剖學教授自ラ案内ス次デ Baltimore 耳鼻咽喉科病院參觀 |

| 月 | 日 | | |
|---|---|---|---|
| 12 | 26 | ニューヨーク | ハ同今日ヨリ米國科學醫學者聯合大會開催サル，初會第一回ヲ博物館參集所ニ開ク<br>午前 Post Graduate ニ Douglas 氏ヲ尋ヌ |
| 〃 | 28 | 〃 | 聯合醫學大會第二日，會場 Cornell 大學。生物化學的ノ演題多ク出席者非常ニ多シ，Dr. Flexner 座長ヲツトム<br>午後 Post Graduate ヘ行キ Dr. Douglas ノ甲狀腺手術ヲ見ル |
| 〃 | 29 | 〃 | 博物館ニ於ケル癌報告會ニ出席 |
| 〃 | 30 | 〃 | 小兒麻痺症討論アリ，Flexner ニ反對ノストレプトコツケン說出デ，Flexner，野口兩氏等續々反對シテ大ニ討論ス |
| 大正六年<br>1 | 3 | 〃 | 夜野口氏ノ在紐育醫師團招待會（日本人クラブ） |
| 〃 | 5 | 〃 | Manhattan 耳鼻咽喉病院ニテ St. Louis ノ Dr. Loeb ニ會ヒ又シユミツト氏ニモ會ヒ，ハート氏ノ案内ニテ Dr. Coru ノ手術ヲ見ル |
| 〃 | 8 | 〃 | 醫書籍店及ビ醫療器械店ニテ種々注文ス |
| 〃 | 9 | 〃 | Post Graduate ニ Dr. Douglas ヲ訪ヒシモ不在ノ爲メ助教授ノ手術ヲ見，次デ耳科ノクリニークニ行キ教授法ヲ見ル，歸途 Wappler electric Co. ニ立寄リ鼻咽喉鏡其ノ他ノ器械ヲ求ム |
| 〃 | 11 | ニューヘブン<br>New Heaven | Yale（エール）大學．室内各種運動場．純正化學教室．數學教室（當時我ガ天文台　平山清治博士同教室ニアリ，同日同氏案内セラル）及ビ圖書館參觀　日本書籍ヲ多ク藏セルコト米國第一ナリ<br>午後 二丁ヲヘダツル醫科大學ニ行ク．生理，病理教室ヲ見ル |
| 〃 | 12 | 〃 | 午前メンデル氏ノ生理學教室ニ行ク，佐伯氏ノ居リシ處ニテ當時栗山（現東京帝大小兒科教授）及ビ山川（健次郎男令息）アリ，メンデル氏自ラノ導キニテ實驗室，動物室等ヲ參觀ス，次デ醫科大學病院ヲ一巡セルモ特記スベキモノナシ，動物學教室ガ新築ニテ建物大ナリ，概シテ此ノ大學ハ運動方面ノ設備ノ方ガ學問方面ニ比シ遙カニ秀レタリ |
| 〃 | 15 | ボストン<br>Boston | Beter Bent Brigham Hospital ニ Dr. Cussing（クシング）ヲ訪ヒシニ大ニ優待サル，早速此ノ朝已ニ豫定 |



| 月 | 日 | | |
|---|---|---|---|
| 12 | 11 | ニューヨーク | Post Graduate Hospital ニテ Dr. Jackson ニ會ヒ次デコロンビア大學附屬 Roosevelt Hospital ヲ參觀シ後ニユーヨーク耳鼻咽喉科病院ニテ Dr. Dench ノ手術ヲ見ル |
| 〃 | 12 | 〃 | Post Graduate Hospital ニ Dr. Douglas ヲ尋ネ再會ヲ喜ビ午後同氏ノ臨床講義ヘ出ル |
| 〃 | 13 | 〃 | 獨逸病院（German Hospital）ニ行キ院長ニ面會，午前中ハ各教室參觀，午後ハ化學ノ實驗及ビ耳鼻ノ Dr. Coru ニ會ヒ手術ヲ見ル |
| 〃 | 14 | 〃 | 聖路加病院ノ Dr. Dench ヲタヅネ助手ノ手術ヲ見ル<br>夜 Dr. Douglas ノ晩餐會（和子同伴） |
| 〃 | 15 | 〃 | Dr. Einhorn ノ講義ヲ Post Graduate ニ聞ク<br>Roosvelt Hospital ニテ外科ノ胃癌ニ接腸術ヲ見ル |
| 〃 | 18 | 〃 | ニユーヨーク耳鼻咽喉病院ニ Dr. Dench ヲ訪問　不在ノ爲教授 Dr. Tompson ノ根治手術ヲ見ル |
| 〃 | 19 | 〃 | Post Graduate ニ Dr. Douglas ヲ訪ヒ手術ヲ見，新患者ニ付キ互ニ意見ヲ述ベ來週火曜日ニ手術ニ列席ヲ約ス |
| 〃 | 22 | ピツツバーグ<br>Pitzburg | Pitzburg 大學ニマツカーニヒ總長ヲタヅネ駐日大使ガスリー氏ノ紹介狀ヲ出セシ處大ニ喜ビ歡迎シ當時居リタル化學，哲學，佛文學，獨文學等ノ各教授ニ紹介シ他日ノブランチ立テヽ別カル，次デ Jackson 氏ノ病院ニ到ル同氏待チ受ケテ居テ手術室ニ入ル，右終リテ地下ノ研究室ヲ見．後同氏ト共ニ醫科大學ニ行キ病理教授ニ面會，更ニ共同病院ニ行キ最近新築ノ病理．細菌等ノ諸設備ヲ見ル．後 Jackson ノ office ニ行キ四卷ヨリ成ル X 光線ノ寫眞帖ヲ見ル |
| 〃 | 23 | 〃 | 大學總長ノ使トシテ一青年來リ化學研究所及ビ Carnegie Institute ニ案内シ，一時總長マツクカーチー氏醫科大學長ノ Chancellor Mac. Cormicks 其ノ他病理及ビ產婦人科教授ト共ニ University Club ニテ晩餐會ヲ催サレ，二時新設ノラヂウム製造會社社長　支配人迎ニ來リ郊外五十哩ノ同工場ヲ見ル，夜大學總長自身ホテルヘ迎ニ來リ同氏自宅晩餐會ニ招待シ夫人．令嬢　令息モ同席ス |
| 〃 | 24 | 〃 | 總長，學長．Jackson 氏ヘ告別訪問シテ歸紐 |

サレタル腦髓外科ノ手術ヲ參觀ス

午後ハトイスラー氏 紹介ノDr. ピボディー氏（內科助教授ニテ Cussing 氏ト同ジ病院ニアリ）ヲ訪ヒ各病室，內外科研究室 病症日誌室 x光線室等案內セラレ更ニ同氏ノ紹介ニテ榮養化學所ニ到リ二三ノ部長ニ面會ス，此處ハ新陳代謝室，神經系統ト眼．知覺 腱反射等ノ精密ナル檢査裝置完備シ，高尙ナル研究所ナルモ Carnegie 研究所ト同一系ニテ他ヨリノ研究者容易ニ入ルコトヲ得ズ

| 月 | 日 | | |
|---|---|---|---|
| 〃 | 16 | ボストン | 午前九時 Cussing 教室ニ行ク，特ニ用意セラレタル手術二三ヲ供覽セラル。夜八時半ヨリ Cussing 氏ノ病院ニテ學術會アリ清三郎，和子，本田氏同伴出席，小兒麻痺原因菌ストレプトコッケンニ關スル報告，ニューヨーク內科教授ロングコープ氏ノ患者供覽等アリ此ノ日クッシング氏ハ耳鼻科教授クリーゾ氏ヘ紹介狀ヲ與レ，ピボディ氏ハ明後木曜日ニ學長ヨリ晝餐會ヲ催シ與レル旨傳ヘラル |
| 〃 | 17 | 〃 | 午前九時 Mass. General Hospital ニ Dr. Coolidge（クリーゾ）ヲ訪フ，同氏ハ當時ボストン第一ノ耳鼻咽喉科教授ニテ已ニクッシング氏ヨリ紹介シ有リタル爲メ直ニ自ラ各病室ヲ案內シタリ，特筆スベキモノ無ケレドモ只此ノ病院ハ特ニ Industrial Dept. アリテ職工傷病治療ヲ區別セリ，午後 Cancer Hospital ニポーボディ氏ヲ訪ヒラヂウム療法成績七八例ヲ示サレ同氏ノ案內ニテ醫科大學長ノ許ニ行キ面會，同氏自ラ案內シテ本部樓上ノ博物館ヲ見ル |
| 〃 | 18 | 〃 | 午前十時ブリガム病院ノクッシング氏ノ許ニ行キ腦水腫ノ手術アリシモ出血ノ爲メ中止ス，十二時ピーボディー教授ノ許ニ行キ共ニ Harvard Club ニ行キ，學長，生理教授等アリテ晝餐ノ饗ヲ受ケ，食後大學ニ行キ病理學教室ニテチッシャー教授ニ面會シ，實驗物理，細菌檢査 寄生虫標本ヲ示サレ，次デ比較病理研究室，電氣的實驗室．ラヂウム實驗室（組織細胞ニ對スルラヂウム研究）等ヲ見．衞生學教室ヲ見テ歸宿．折柄 Dr. Packard（パッカード）夫妻ノ來訪ヲ受ケテ土曜日ニ教授ハ我ヲ，夫人ハ和子ヲ案內スベキ旨マタ夕方ヨリ |

第二回洋行當時の
部一の記日の生先

（影撮士博山栗）てにンブヘーユニ
平授教譽名大東 士博一信本松授教大京リヨ左
氏郎五雄田本 人夫子和鎭令 生先 士博治清山
氏郎三清

| 月 | 日 | | |
|---|---|---|---|
| | | | 氏邸ニ晩餐ニ招待スベキ旨ヲ告ゲユカル。 |
| 1 | 19 | ボストン | 午前中マサチューセッツ，ジェネラル病院ニクーリッヂ氏ヲ訪ヒ院內參觀ス，耳ト眼トハ別々ノ建物ニナリテ，此ノ病院ニ米國ニ於テ初メテエーテル麻醉ニテ手術タシル紀念的手術場アリ |
| 〃 | 20 | 〃 | 午前九時パッカード教授迎ニ來リボストン醫師協會ノ設立ニカヽル醫學圖書館，小兒齒科治療所（醫員，看護婦ヲ小學校ニ派遣シテ惡齒ヲ有スル者ハ直ニ連レ來リテ治療シ，咽喉科醫ヲモ屆ヒ入レテ扁桃腺ノ手術ヲナス）ボストン大學醫科病院ホメチパチック病院ノ產婦人科，外科 耳鼻科ハーバート大學圖書館，運動場 學生集會場，博物館等ヲ參觀ス<br>夜ハパッカード教授自宅晩餐會（和子同席）氏夫妻ハ有名ナル親日家ニテ常ニ日本人ノ來遊ヲ聞ケバ自ラ進ミテ案內ノ勞ヲ取リ歡待スル由ナリ |
| | | Canada トロント | トロン大學 特筆スベキコト無ク米國ノ完備セル建築 設備ヲ見學シタル目ニハ凡テ見オトリス。 |
| | | クベック | クベック市大學，同樣。 |

**これを觀れば先生の非凡なる活動振りの一端が判るであらうが、尙ほ當時に於ける先生の視察、見學の態度觀點といふものが、醫海時報社々長田中義一氏宛の書翰に明かされてゐるからそれを次に揭げておかう。**

渡米後時々御通信致す筈であつたが、桑港着以來、其處に一週彼處に二週と轉々旅行をのみ續けて居つたので、乍思も御無音に打過ぎました、御海容を願ひます。偖て小生は爾來桑港、「ロサンセルス」、「サンヂエゴー」「サクラメント」、市俄古、紐路易、「クリーブランド」「ピツツブルグ」、「ヒラデルヒヤ」、「ボルチモア」、「ワシントン」紐育等の都市を歷問して、第一に專門家として各知名の專門家を訪ひ又た專門病院を視察して斯學の進步狀況を調査したるは無論のことであるけれども、其外にも第二に醫師の一人としては右各地方の一般醫況及一般醫學の進步等をも調査し、又第三に日本敎育界の一人者としては各大學、專門學校特に聾啞學校、圖書館、博物館をも參觀し、又第四に一東京市住民としては他日に資せん爲め上水下水の設備、消火法の組織、其他種々慈善事業の發達等をも研究せんと心掛けて出來得る限り活動した積りであるが、恥かしいことであるが英語の不十分なると各方面何れも餘りに複雜なるとに由りて未だ完全に豫期の目的を達し得たと申上げ兼ぬるを遺憾とする。併し着米以降朝夕暇を盜んで修得した英語を覺束なくも實際に應用したり又數ば獨逸語を十分に使用し得るの好機に投ずることが出來たが爲め從來に於ても已に多少は得る所ありと信じて居る。それ故に今此等の事項を詳述して御報告致せば必ず御參考に資するならんと確信するけれども、今兩三日を經れば(「ニューヘブン」「ボストン」方面に出掛け、本月中に米國の視察を終りて二月上旬を期して渡英することに決定した(田代博士本田雄五郎氏同行の筈)から、今は所詮之を記する暇がない。由て此機會に於ては唯だ次の調査事項やら余の本邦醫界に對する希望やら更に判明せない一項を附記して御參考に供し度く思ふのみである。米國に於ける各醫科大學及各大病院を觀るに資金の多きに任して徒らに建築を高壯にしたり設備を美麗にしたりするの弊ありしは已に過去の歷史に屬すべき者にて、今では新築の資金を得れば結構なれども之を得ること困難なれば既存建築物の地下室でも天井裏でも何所かに空所あれば其所に研究室を設置し多くの研究者を常置して而して各大學或は各病院或は各研究所を冠したる藥績の益す多く世に發表するに至らんことを期するを以て本旨と爲せる樣である。中には研究費の不足を充さん爲め入院患者を全廢して外來診察のみを事とする所もある。又去る十二月二十六日より五日間當紐育市に於て開催したる第一回科學及近接社會學者米國大會(The American Association for the Advancement of science and affiliated national societies)の狀況を見たが醫學領域では解剖學、人類學、生理學、藥物學、生物化學、實驗生物學、實驗病理學、細菌學、內科學等の各學會之れに參與し其他の學科にては天文學、植物學、動物學、化學、物理學、電氣化學、昆蟲學、器械學、顯微鏡學、心理學、敎育學、經濟學、農藝學、數學、地理學等の既成學會之れに加はりコロンビア大學、コーネル大學及紐育大學の各講堂にて或は合同的に或は分科的に開催したのであるから此期間に全米國の學者の紐育に集り來りし者數千の多きに達したのである。而して其演說の多きこと又其內容の研究的にして眞面目なること所詮我日本醫學會の遠く及ばざる所である。而して小生が總會に臨んでは今や世界特に歐洲は一段に戰雲に蔽はれたり學術上の進步は之を毫も彼れに頼むに足らず、之を計るは獨り米國學者の努力に待つのみとの言明を聽きたり又如斯聯合大會を本年度に開催すに至りたる動機を探りて此千歲一遇の好機に乘じて學界の覇權を獨逸より奪ひ去らんとするの下心あるに歸すべく小生をして感ぜしめたるに至りては何としても米國人士の意氣の壯なるに敬服せずに居られなかつた、而して米國に於ける如斯狀況を見るに付けても轉た寒心に堪へないのは本邦醫界の現況である、大事の前の小事だ、邦家永久の利益の爲め舉國一致の努力を要する時が來たなら互に感情の奴隷にならぬ樣に注意して私には幾ら爭ふても宜いが公事特に醫學の進步國家の利益と云ふ樣な事に關しては皆な眞面目に且つ學者らしい體面を保ちつゝ一致して努力して貰いたい者である、唯だ徒らに朋黨を作りて多くの陣笠連を使ふて虛勢の擴張にのみ腐心したり又た學界の事項特に治病上の事を公報するに俗新聞を利用したり、他人の報告事項を批評するに匿名或は變名を用ゐたり、又た自ら實驗研究することなくして唯だ常識的に判斷して他人の缺點而已を指摘して年中爭鬪を以て始終したりする如きは大害ありて毫も益なきものである、國家の將來を思ひ衷心より本邦學術の進步に懸念するの國士は苟も世に大害ありと思ふたならば多少自分に快心であり又利益でありても之れを敢て爲さない者である。又少々自分に不利益でも世の爲に利益ありと見たれば自分を犧牲にして世利の爲めに努力すべきである、由來本邦醫學は先輩諸氏の努力に由りて世界に於て稍や高き位置に達して居るのである而して醫學者にて素養もあり腦力も發達して居りてその上に近時に至りては世の資本家は續々學者の研究に向つて資金を投ずるの氣運をも造りつゝあるのであるから此世界の大戰と云ふ千歲一遇の好機に際會したる本邦醫學者たる者は皆一致提携眞面目にして親和的に協同的に努力する樣になつたら此米國醫界人士の勝氣なる大企圖に打過ぎて終に世界に於ける學界の覇權を掌握し得るに至るやも知れないのである、由し如斯巨大的慾望は近き將來に於て容易に遂げ得ないものとするも其本邦學術の進步に好影響を與へることは現時の如く一般に不眞面目にして猫も杓子も曾同的に論議するを是れ能事とするの時に比して蓋し莫大であろうと思ふのである。兎に角小生は本邦に於ては此好機を逸することなく一面に於ては學界の德義心の涵養を計ると同時に大局に處しては私情を離れて親和協同的に協力奮勵して貰ひたい者であると考へるのである。

右一項而已にして御送り申上候間御一考被下度候

大正六年一月一日

田中義一

於紐育岡田和一郎